風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 27

史跡出雲国府跡

— 11 —

2023

島根県教育委員会

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 27

史跡出雲国府跡

－ 11 －

2023

島根県教育委員会

題字：勝部　昭

T70 全景（南東から）

巻頭図版 2

35 号建物（南東から）

36 号建物（南東から）

37 号建物（南東から）

96 号溝出土礎石

六所脇地区出土陶硯

72 ～ 74 号土坑出土　土師器甕

序

史跡出雲国府跡は、昭和 43 ～ 45（1968 ～ 1970）年の松江市教育委員会による発掘調査で所在地が確定されました。昭和 46（1971）年 12 月 13 日には約 42 万㎡におよぶ広大な範囲が国史跡に指定され、令和３（2021）年には国史跡指定 50 周年を迎えました。この一部が史跡公園として整備され、今日まで市民の憩いの場として親しまれています。また、出雲国府跡のある意宇平野には条里制を残した美しい水田地帯が広がっており、古代・中世から現代まで、ひとびとの営みの中で残されてきた全国的にも貴重な景観といえます。

島根県教育委員会では、この史跡出雲国府跡を保存・活用するため、平成 11（1999）年度から継続的に発掘調査を実施しています。

平成 27（2015）年度からは、出雲国府の中心部である政庁周辺の発掘調査を実施しています。本書はこのうち平成 30 ～令和２（2018 ～ 2020）年度に実施した発掘調査の成果を取りまとめたものです。

調査では、政庁域を構成する東脇殿や前殿などの主要な建物を確認し、政庁域の建物配置や変遷などを検討するうえで貴重な成果が得られました。また、土師器甕や小札を用いた地鎮などの祭祀を行っていたことを確認するなど、新たな発見もありました。こうした成果を積み上げていくことで、政庁の実態が徐々に明らかになっていくものと考えています。

本書が、今後の出雲国府跡に関する研究はもとより、当地域の歴史像を解明するうえでその一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって多大な御支援と御協力を賜りました地元の皆様をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げます。

令和５（2023）年３月

島根県教育委員会
教育長　野津　建二

例 言

1　本書は島根県教育委員会が 2018（平成 30）年度から 2020（令和２）年度に国庫補助事業として実施した風土記の丘地内発掘調査事業の報告書である。

2　本報告書の発掘調査対象遺跡及び事業年度は下記のとおりである。
史跡出雲国府跡　松江市大草町 501 番地ほか
2018（平成 30）年度　第 69 トレンチ　375㎡
《2015（平成 27）年度　第 59・60 トレンチを含む》
2019（令和元）年度　第 70 トレンチ　450㎡
《2015（平成 27）年度　第 59･60 トレンチ､2018（平成 30）年度　第 69 トレンチを含む》
2020（令和２）年度　第 71 トレンチ　400㎡
《2015（平成 27）年度　第 59・60 トレンチ、2018（平成 30）年度　第 69 トレンチ、2019 年度　第 70 トレンチを含む》
2021（令和３）年度　整理等作業・報告書作成

3　発掘調査は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、間野大丞、岩橋孝典、吉松優希が担当した。

4　本調査に伴う自然科学分析は、次の方々、機関に委託･依頼し、その成果は第４章に掲載した。
自然科学分析（粉末Ｘ線回折、AMS 年代測定、礫種分析）　文化財調査コンサルタント株式会社
自然科学分析（蛍光Ｘ線分析）　上山晶子（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター会計年度任用職員）

5　本報告書に掲載した写真は、遺構は吉松優希、間野大丞が撮影し、遺物は吉松優希が撮影した。遺構・遺物の実測図の作成は調査員・会計年度職員調査補助員が行い、遺構・遺物実測図の浄書は会計年度職員整理作業員が行った。

6　本報告書の執筆は、第１～３章、第５・６章を吉松優希が行い、第４章１・２節は渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）、３・４節を上山晶子（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター会計年度任用職員）、５節は奥中亮太（文化財調査コンサルタント株式会社）･高須　晃（島根大学名誉教授）が行った。編集は吉松優希が行った。

7　本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町 33 番地）で保管している。

8　本書の編集にあたっては、DTP 方式を採用した。

凡 例

1　挿図中のＸ・Ｙ座標は平面直角座標第Ⅲ系（世界測地系）により、挿図中の北は座標北を示す。

2　挿図中のレベルは海抜高を示す。

3　本報告書に掲載した第３図と第５図は国土地理院発行の 1:25,000（松江）を使用した。第２図は島根県教育委員会で作製した風土記の丘地内の 1:1,000 地形図をもとに作成した。

4　自然科学分析は文化財調査コンサルタント株式会社に委託したほか、埋蔵文化財調査センターで実施し、その成果は第４章に掲載した。

5　本報告書に記載する土層と土器の色調は、『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に従って表記した。

6　遺構名は、1968 ～ 1970（昭和 43 ～ 45）年度の調査で検出された遺構は下記の略号を付した通し番号とし、1999（平成 11）年度以降の調査で検出された遺構は略号を使用せず新たな通し番号とした。

　SA：柵列　SB：建物　SD：溝

7　本書で使用した挿図の縮尺は以下のとおりである。

建物：1/120、1/80　溝：1/60、1/80　土坑：1/40、1/20　土器・陶磁器・土製品：1/3
瓦：1/4　石・石製品：1/2、1/10　鉄製品：1/2　製鉄関連遺物：1/3

8　本書で用いた土器の分類及び年代観は『出雲国府跡９- 総括編 -』（島根県教育委員会 2013）の編年案に従った。また、この編年案に記載されていない遺物は下記の論文･報告書を参考とした。

（弥生土器）松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社
（土師器）　松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相 - 大東式の再検討 -」『島根考古学会誌』第８集　島根考古学会
（須恵器）　大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会
大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳』平田市教育委員会
（瓦）　島根県教育委員会 2009『史跡出雲国府跡６』
（陶磁器）　太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ』
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

9　註は各節ごとに連番を振り節末にまとめて示した。参考文献は各章末にまとめて示した。
写真、挿図、表の番号は全体の通し番号により表示した。

10　遺物実測図で須恵器は断面を黒塗り、陶磁器は断面をグレー、瓦は断面をグレーにして示した。

11　遺物実測図で底部回転糸切り調整の遺物には挿図番号の横に◎印を付した。

12　本書で使用した遺物の表現は以下による。

凡例

漆　墨痕　煤　研磨範囲　朱墨

調査組織

史跡出雲国府跡発掘調査指導委員会

金田章裕（京都大学名誉教授・京都府公立大学法人理事長）、井上寛司（島根大学名誉教授）、大谷晃二（島根県立三刀屋高等学校教諭：2021（令和３）年７月から）、大橋泰夫（島根大学法文学部教授）、勝部　昭（元島根県文化財保護審議会委員：2021（令和３）年６月まで）、佐藤　信（東京大学名誉教授・横浜市歴史博物館館長・熊本県立くまもと文学・歴史館館長）、箱崎和久（奈良文化財研究所都城調査部部長）、花谷　浩（出雲弥生の森博物館館長）

指導助言

2018（平成30）年度　藤井幸司（文化庁文化財部文化財第二課　文化財調査官）

2019（令和元）年度　川畑　純（文化庁文化財部文化財第二課　文部科学技官）

2021（令和３）年度　斎藤慶吏（文化庁文化財部文化財第二課　文化財調査官）

事務局

2018（平成30）年度　萩　雅人（同文化財課長）、池淵俊一（同調整監）、勝部智明（同主幹）、渡部麻生（同主任主事）、椿　真治（教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、守岡正司（同管理課長）、間野大丞（同調査第三課長）

2019（令和元）年度　萩　雅人（同文化財課長）、池淵俊一（同調整監）、仁木　聡（同企画員）、渡部麻生（同主任主事）、椿　真治（教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、守岡正司（同管理課長）、間野大丞（同調査第三課長）

2020（令和２）年度　（教育庁参事）、萩　雅人（同文化財課長）、池淵俊一（同調整監）、仁木　聡（同企画員）、稲田陽介（同文化財保護主任）、椿　真治（教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、守岡正司（同管理課長）、岩橋孝典（同調査第二課長）

2021（令和３）年度　中島正顕（同文化財課長）、池淵俊一（同調整監）、田原　淳（同企画幹）、稲田陽介（同企画員）、椿　真治（教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、深田　浩（同管理課長）、岩橋孝典（同調査第二課長）

調査員

2018（平成 30）年度

【報告書作成】是田　敦（教育庁埋蔵文化財調査センター調査第四係長）、岩橋康子（同補助員）

【発掘調査】吉松優希（教育庁埋蔵文化財調査センター主任主事）、樋野千晴（同補助員）

2019（令和元）年度　吉松優希（教育庁埋蔵文化財調査センター主任主事）、岩橋康子（同補助員）、樋野千晴（同補助員）

2020（令和２）年度　吉松優希（教育庁埋蔵文化財調査センター主任主事）、角森玲子（同会計年度任用職員）、樋野千晴（同会計年度任用職員）

2021（令和３）年度　吉松優希（教育庁埋蔵文化財調査センター主任主事）、樋野千晴（同会計年度任用職員）

調査指導、協力機関、協力者（所蔵等は当時）

文化庁、奈良文化財研究所、松江市まちづくり文化財課、松江市大庭公民館、松江市竹矢公民館、六所神社、小野健吉（和歌山大学観光学部教授）、久住猛雄（福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課）、塚本敏夫（公益財団法人元興寺文化財研究所）、初村武寛（公益財団法人元興寺文化財研究所）、内山敏行（財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財　センター）、津野　仁（財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター）

既報告一覧

松江市教育委員会 1971『出雲国庁跡発掘調査概報』
島根県教育委員会 2003『史跡出雲国府跡』 1
島根県教育委員会 2004『史跡出雲国府跡』 2
島根県教育委員会 2005『史跡出雲国府跡』 3
島根県教育委員会 2006『史跡出雲国府跡』 4
島根県教育委員会 2008『史跡出雲国府跡』 5
島根県教育委員会 2009『史跡出雲国府跡』 6
島根県教育委員会 2011『史跡出雲国府跡』 7
島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡』 8
島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡』 9　総括編
島根県教育委員会 2019『史跡出雲国府跡』10

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 3

第2章　位置と環境
第1節　出雲国府跡の位置 …… 7
第2節　地理的環境 …… 8
第３節　出雲国府周辺の歴史的環境 …… 9

第３章　平成 30 ～令和2年度の発掘調査
第1節　調査の方法 …… 13
第2節　基本層序 …… 15
第3節　調査区の概要 …… 20
第4節　遺構と遺物 …… 24

第４章　自然科学分析
第１節　出雲国府跡 96 号溝・第１整地層の AMS 年代測定 …… 85
第２節　出雲国府跡 36 号建物抜き取り穴埋土の X 線回折 …… 89
第３節　出雲国府跡 35・36 号建物抜き取り穴埋土の蛍光 X 線分析 …… 94
第４節　出雲国府跡出土須恵器・平瓦付着赤色顔料の蛍光 X 線分析 …… 100
第５節　史跡出雲国府跡 2020 年度調査に伴う 1 号石敷遺構出土礫の礫種について …… 110

第５章　総括
第１節　遺構の変遷 …… 115
第２節　遺構の評価と出雲国府跡政庁域について …… 121
第３節　土器・陶磁器 …… 125
第４節　墨書土器 …… 131
第５節　硯 …… 131
第６節　瓦 …… 135
第７節　鉄製品 …… 138
第8節　出雲国府の中での政庁域 …… 141

第６章　結語
第1節　出雲国府跡政庁域について …… 145
第2節　今後の課題 …… 145

挿図目次

第 1 図　史跡出雲国府跡の位置（S=1/500,000）…… 1
第 2 図　史跡出雲国府跡の史跡範囲と調査区配置図（S=1/6,000）…… 2
第 3 図　出雲国府跡の立地（S=1/25,000）…… 7
第 4 図　意宇平野周辺の地質図（S=1/30,000　成瀬 1975 一部加筆・改変）…… 8
第 5 図　史跡出雲国府跡周辺の遺跡位置図（S=1/50,000）…… 9
第 6 図　2018～2020（平成30～令和２）年度調査区配置図（S=1/600）…… 14
第 7 図　T69・T70・T71 平面図（S=1/200）…… 16
第 8 図　T69・T70・T71　１区北壁土層図（S=1/80）…… 17
第 9 図　T69・T70　２区北壁土層図（S=1/80）…… 17
第10図　T69・T70　３区北壁土層図（S=1/80）… 18
第11図　T71　西壁土層図（S=1/80）…… 18
第12図　T70西区　西壁土層図（S=1/80）…… 18
第13図　T70東区　西壁土層図（S=1/80）…… 19
第14図　T69西区　西壁土層図（S=1/80）…… 19
第15図　T69・T70・T71遺構配置図（S=1/300）… 21
第16図　T59実測図・出土遺物 …… 22
第17図　T60実測図・出土遺物 …… 22
第18図　昭和調査区（I区）再発掘箇所実測図（S=1:60）…… 23
第19図　35・36号建物平面図（S=1/120）…… 25
第20図　35号建物Ａ実測図（S=1/80）…… 26
第21図　35号建物Ｂ実測図（S=1/80）…… 27
第22図　35号建物Ｃ実測図（S=1/80）…… 28
第23図　35号建物土層図（S=1/60）…… 29
第24図　35号建物出土遺物…… 30
第25図　36号建物Ａ実測図（S=1/80）…… 32
第26図　36号建物Ｂ実測図（S=1/80）…… 33
第27図　36号建物Ｃ実測図（S=1/80）…… 34
第28図　36号建物土層図（S=1/60）…… 35
第29図　37号建物実測図・出土遺物…… 36
第30図　96号溝実測図（S=1/80）…… 38
第31図　96号溝上層出土遺物（１）…… 39
第32図　96号溝上層出土遺物（２）…… 40
第33図　96号溝下層出土遺物（１）…… 41
第34図　96号溝下層出土遺物（２）…… 42
第35図　96号溝下層出土遺物（３）…… 43
第36図　96号溝下層出土遺物（４）…… 44
第37図　96号溝下層出土遺物（５）…… 45
第38図　96号溝下層出土遺物（６）…… 46
第39図　97号溝実測図・出土遺物…… 47
第40図　98号溝実測図・出土遺物…… 48
第41図　69号土坑実測図（S=1/40）…… 49
第42図　69号土坑出土遺物…… 50
第43図　71号土坑実測図・出土遺物…… 51
第44図　72～77号土坑配置図（S=1/60）…… 53
第45図　72号土坑実測図・出土遺物…… 54
第46図　73号土坑実測図（S=1/20）…… 55
第47図　73号土坑出土遺物…… 56
第48図　74号土坑実測図・出土遺物…… 57
第49図　１号石敷遺構実測図（S=1/80）…… 59
第50図　１号石敷遺構出土遺物 …… 60
第51図　17号井戸実測図・出土遺物…… 60
第52図　SD055出土遺物 …… 61
第53図　70号土坑実測図・出土遺物…… 61
第54図　T69東２区P1実測図・出土遺物 …… 62
第55図　T69西１区Ｐ１実測図・出土遺物…… 62
第56図　T70東１区Ｐ１実測図・出土遺物…… 63
第57図　T70東１区Ｐ２実測図・出土遺物…… 63
第58図　T70東２区Ｐ１実測図・出土遺物…… 63
第59図　T70西１区Ｐ１実測図・出土遺物…… 64
第60図　T71-１区Ｐ１実測図・出土遺物 …… 64
第61図　T69・T70Pit出土遺物…… 64
第62図　T69暗褐色土出土遺物（１）…… 66
第63図　T69暗褐色土出土遺物（２）…… 67
第64図　T69暗褐色土出土遺物（３）…… 68
第65図　T69暗褐色土出土遺物（４）…… 69
第66図　T69暗褐色土出土遺物（５）…… 70
第67図　T69黒褐色土出土遺物 …… 71
第68図　T69遺構検出面出土遺物 …… 72
第69図　T69拡張区出土遺物 …… 73
第70図　T69撹乱層出土遺物 …… 73
第71図　T70暗褐色土出土遺物（１）…… 74

第72図　T70暗褐色土出土遺物（2）…… 75
第73図　T70暗褐色土出土遺物（3）…… 76
第74図　T70暗褐色土出土遺物（4）…… 77
第75図　T70遺構検出面出土遺物 …… 78
第76図　第1整地層出土遺物 …… 79
第77図　T70撹乱層出土遺物（1）…… 80
第78図　T70撹乱層出土遺物（2）…… 81
第79図　T71暗褐色土出土遺物 …… 82
第80図　T69・T70埋め戻し土出土遺物 …… 82
第81図　昭和調査区（I区）埋め戻し土出土遺物 … 83
第82図　調査区の配置（試料採取地点）…… 85
第83図　昭和の調査区（I区）平面図及び南壁土層図 …… 86
第84図　暦年較正結果 …… 87
第85図　暦年較正結果の分布 …… 88
第86図　調査区の配置（試料採取地点）…… 89
第87図　粉末X線回折二次検索シート …… 90
第88図　砂粒顕微鏡写真（1）…… 92
第89図　砂粒顕微鏡写真（2）…… 93
第90図　試料採取位置図 …… 94
第91図　試料№1蛍光X線スペクトルデータ（フィルタoff・Crフィルタ）…… 97
第92図　試料№1蛍光X線スペクトルデータ（Pbフィルタ・Cdフィルタ）…… 97
第93図　試料№2蛍光X線スペクトルデータ（フィルタoff・Crフィルタ）…… 97
第94図　試料№2蛍光X線スペクトルデータ（Pbフィルタ・Cdフィルタ）…… 97
第95図　試料№3蛍光X線スペクトルデータ（フィルタoff・Crフィルタ）…… 98
第96図　試料№3蛍光X線スペクトルデータ（Pbフィルタ・Cdフィルタ）…… 98
第97図　試料A蛍光X線スペクトルデータ（フィルタoff・Crフィルタ）…… 98
第98図　試料A蛍光X線スペクトルデータ（Pbフィルタ・Cdフィルタ）…… 98
第99図　試料B蛍光X線スペクトルデータ（フィルタoff・Crフィルタ）…… 99
第100図　試料B蛍光X線スペクトルデータ（Pbフィルタ・Cdフィルタ）…… 99
第101図　試料C蛍光X線スペクトルデータ（フィルタoff・Crフィルタ）…… 99
第102図　試料C蛍光X線スペクトルデータ（Pbフィルタ・Cdフィルタ）…… 99
第103図　赤色顔料測定箇所・胎土部分測定箇所 103
第104図　出雲国府跡第62図-6蛍光X線スペクトルデータ …… 105
第105図　出雲国府跡第33図-20蛍光X線スペクトルデータ …… 105
第106図　出雲国府跡第62図-5蛍光X線スペクトルデータ …… 105
第107図　出雲国府跡第31図-10蛍光X線スペクトルデータ …… 105
第108図　出雲国府跡第24図-8蛍光X線スペクトルデータ …… 106
第109図　出雲国府跡第71図-3蛍光X線スペクトルデータ …… 106
第110図　出雲国府跡第33図-5蛍光X線スペクトルデータ …… 106
第111図　出雲国府跡第63図-2蛍光X線スペクトルデータ …… 106
第112図　出雲国府跡第57図-1蛍光X線スペクトルデータ …… 107
第113図　『出雲国府跡1』65図-1蛍光X線スペクトルデータ …… 107
第114図　『出雲国府跡2』15図-44蛍光X線スペクトルデータ …… 107
第115図　『出雲国府跡6』72図-8蛍光X線スペクトルデータ …… 108
第116図　『青木遺跡II』113図-Z65蛍光X線スペクトルデータ …… 108
第117図　『青木遺跡II』113図-Z67蛍光X線スペクトルデータ …… 108
第118図　『御堂谷遺跡』72図-19蛍光X線スペクトルデータ …… 108
第119図　『御堂谷遺跡』74図-20蛍光X線スペクトルデータ …… 109
第120図　『石見国府跡推定地II』5図-3蛍光X線スペクトルデータ …… 109
第121図　調査区の配置 …… 110
第122図　試料採取範囲（検出トレンチ拡大）…… 110
第123図　図版 試料観察面 …… 114
第124図　遺構変遷図【古墳時代】…… 116
第125図　遺構変遷図【出雲国府I期】…… 116
第126図　遺構変遷図【出雲国府II-1期】 …… 117
第127図　遺構変遷図【出雲国府II-2期】 …… 117
第128図　遺構変遷図【出雲国府III-1期】 …… 118

第129図　遺構変遷図【出雲国府Ⅲ-２期】 …… 118
第130図　遺構変遷図【出雲国府Ⅳ期】 …… 119
第131図　遺構変遷図【出雲国府Ⅴ期】 …… 119
第132図　遺構変遷図【出雲国府Ⅵ期】 …… 120
第133図　政庁推定復元模式図（S=1:500） …… 123
第134図　各地の国府政庁と郡庁 …… 124
第135図　出雲国府蓋坏Ｃ蓋端部形態の変遷 …… 125
第136図　出雲国府跡蓋坏Ｃ蓋・高坏Ｂ変遷図 …126
第137図　出雲国府跡土師器甕変遷図 …… 127
第138図　六所脇地区出土墨書土器 …… 132
第139図　六所脇地区調査区別出土硯割合 …… 133
第140図　六所脇地区器種別出土硯割合 …… 133
第141図　出雲国府跡出土小札 …… 140
第142図　出雲国府跡遺構配置図（Ⅲ-１期） …… 142

表目次

第 1 表　文化財保護法にもとづく提出書類 …… 4
第 2 表　史跡出雲国府跡発掘調査年表 …… 6
第 3 表　年代測定結果Ｘ線回折測定条件 …… 87
第 4 表　年代測定結果Ｘ線回折測定条件 …… 89
第 5 表　Ｘ線回折ピークの強度と比 …… 90
第 6 表　分析試料の詳細 …… 94
第 7 表　試料№1～3・A～Cの半定量分析結果（Wt％） …… 95
第 8 表　出雲国府跡出土須恵器・平瓦付着赤色顔料の蛍光線分析結果 …… 104
第 9 表　出雲国府跡ほか須恵器・土師器付着赤色顔料の蛍光Ｘ線分析結果（参考資料） …… 104
第10表　試料の状況写真・鑑定結果 …… 111
第11表　出雲国府跡遺構変遷一覧表（『史跡出雲国府跡』10第17表を改変） …… 115
第12表　T69・T70・T71出土緑釉陶器一覧表 …129
第13表　T69・T70・T71出土灰釉陶器・山茶碗一覧表 …… 130
第14表　T69・T70・T71出土越州窯産陶磁器一覧表 …… 130
第15表　T69・T70・T71出土白磁一覧表 …… 130
第16表　T69・T70・T71出土青磁一覧表 …… 131
第17表　T69・T70・T71出土中国青花一覧表 …131
第18表　六所脇地区出土墨書土器（須恵器）一覧表 132
第19表　T69・T70・T71硯一覧表１ …… 134
第20表　T69・T70・T71硯一覧表２ …… 135
第21表　出土瓦類集計表 …… 136
第22表　T69・T70・T71の丸瓦・平瓦の比率 …137
第23表　六所脇地区の瓦変遷 …… 137
第24表　六所脇地区の瓦変遷（既往の調査分含む） 137
第25表　出雲国府跡小札の分類 …… 139
第26表　出雲国府跡出土土器・陶磁器観察表 …145
第27表　出雲国府跡出土瓦観察表 ……153
第28表　出雲国府跡出土石・石製品観察表 156
第29表　出雲国府跡出土鉄製品 ……156
第30表　出雲国府跡出土製鉄関連遺物観察表 …156

写真図版目次

巻頭図版 1　T70 全景（南東から）
巻頭図版 2　35 号建物（南東から）
36 号建物（南東から）
巻頭図版 3　37 号建物（南東から）
96 号溝出土礎石
巻頭図版 4　六所脇地区出土陶硯
72 ～ 74 号土坑出土　土師器甕
図版 1　T70　全景（南東から）
図版 2　T71　全景・37 号建物検出状況（南東から）
図版 3　T59　段下げ状況（西から）
T60　段下げ状況（西から）
T59　大型掘方検出状況（北から）
T60　17 号井戸検出状況（南から）
図版 4　T69　全景（北から）
T70　全景（北から）
図版 5　T71　全景（南から）
T69　拡張区全景（北から）
図版 6　35 号建物（南東から）
36 号建物（南東から）
図版 7　35 号建物　P6（南から）
35 号建物　P9（北から）
35 号建物　P10（南東から）
35 号建物　P10 遺物出土状況（東から）
35 号建物　P8 調査状況（南から）
35 号建物　P8 土層断面（南から）
35 号建物　P8 攪乱内土層断面（南から）
図版 8　35 号建物　P5（北から）
35 号建物　P5 調査状況（北から）
35 号建物　P5 土層断面（北から）
35 号建物　P5 土層断面（北東から）
35 号建物　P5 土層断面（北西から）
36 号建物　P5（南から）
36 号建物　P9（南から）
図版 9　36 号建物　P1（南から）
36 号建物　P1 掘削状況（南から）
36 号建物　P1 攪乱内土層断面（南西から）
36 号建物　P4（南から）
36 号建物　P4 掘削状況（南から）
36 号建物　P4 土層断面（南から）
36 号建物　P4 土層断面（西から）
図版 10　37 号建物検出状況（北から）
37 号建物（南東から）
図版 11　37 号建物　P1（南から）
37 号建物　P2（南から）
37 号建物　P3（南から）
37 号建物　P4（南から）
37 号建物　P5（西から）
37 号建物　P6（東から）
37 号建物　P7（南東から）
図版 12　38 号建物・SD055（北東から）
38 号建物　P1（北から）
38 号建物　P2（北から）
38 号建物　P2（北西から）
38 号建物　P3（北から）
図版 13　96 号溝検出状況（北から）
96 号溝調査状況（北から）
図版 14　96 号溝調査状況（南から）
96 号溝土層断面（T69 東 2 区）（南から）
96 号溝土層断面（T69 東 1 区）（南から）
96 号溝礎石出土状況（南東から）
97 号溝調査状況（東から）
図版 15　98 号溝調査状況（西から）
98 号溝検出状況（南東から）
98 号溝遺物出土状況（西から）
98 号溝土層断面（東から）（1）
98 号溝土層断面（東から）（2）
図版 16　72 号土坑検出状況（南から）
72 号土坑調査状況（南から）
図版 17　T70 東 2 区　土坑群検出状況（西から）
T70 東 2 区　土坑群検出状況（北から）
図版 18　73 号土坑土師器検出状況（南から）
73 号土坑土師器調査状況（北から）
図版 19　73 号土坑西側土師器掘削状況（北から）
73 号土坑西側土師器掘削状況（石除去後・北から）
73 号土坑東側土師器掘削状況

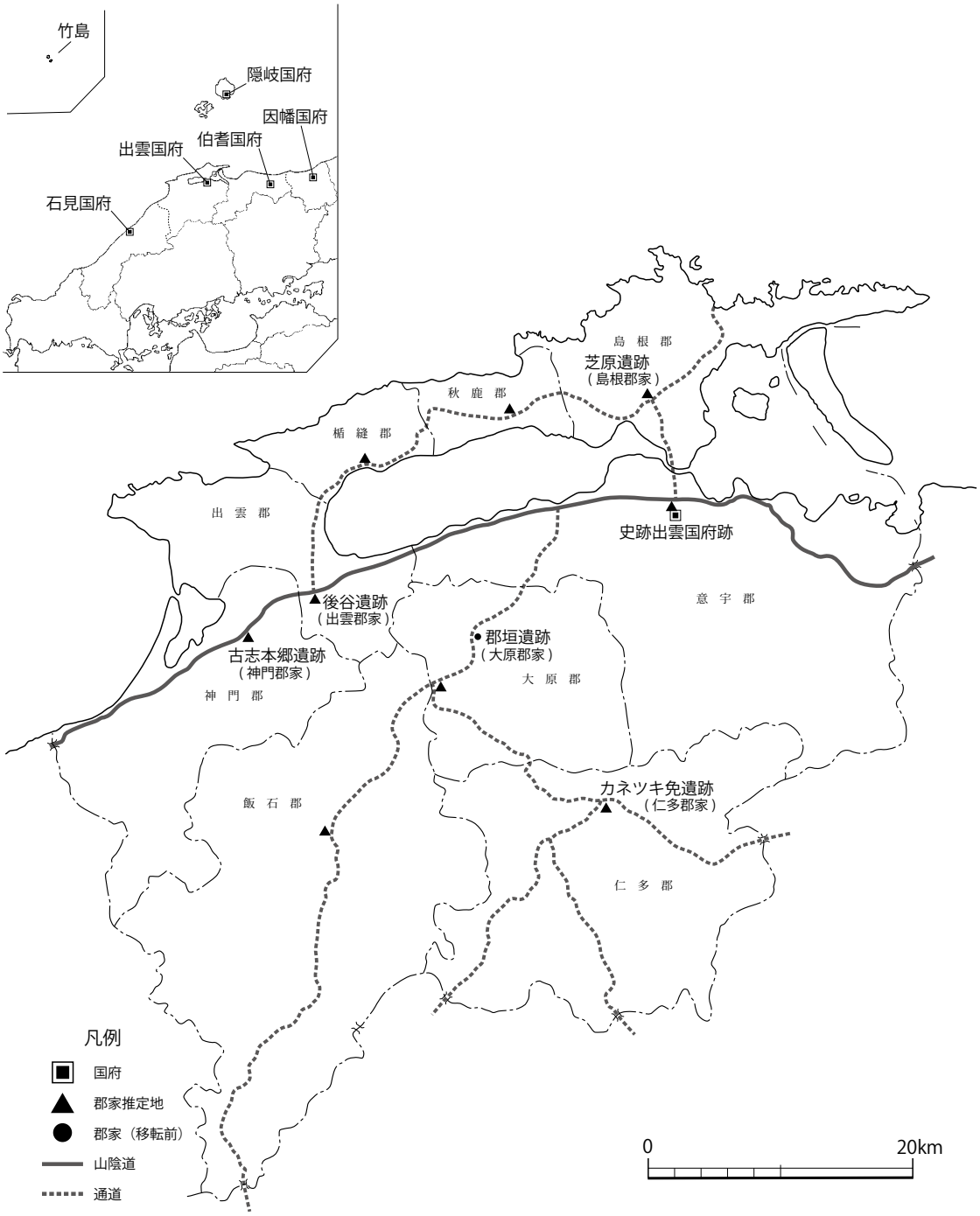
73 号土坑土層断面
75 号土坑（北西から）
76 号土坑（北から）
76 号土坑（西から）
71 号土坑（南から）
図版 20　74 号土坑検出状況（南から）
74 号土坑南側土師器掘削状況（南から）
74 号土坑南側土師器掘削状況（西から）
74 号土坑北側土師器掘削状況（南から）
74 号土坑北側土師器掘削状況（東から）
図版 21　1 号石敷遺構検出状況（南から）
1 号石敷遺構検出状況土層断面（南東から）
1 号石敷遺構石検出状況（1）
1 号石敷遺構石検出状況（2）
図版 22 ～ 53　出土遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

出雲国府跡の所在地は、『出雲国風土記』などの記載から意宇郡にあることは判明していたが、その正確な場所はわかっていなかった。そのため、所在地をめぐって古くから論争が繰り広げられていた。

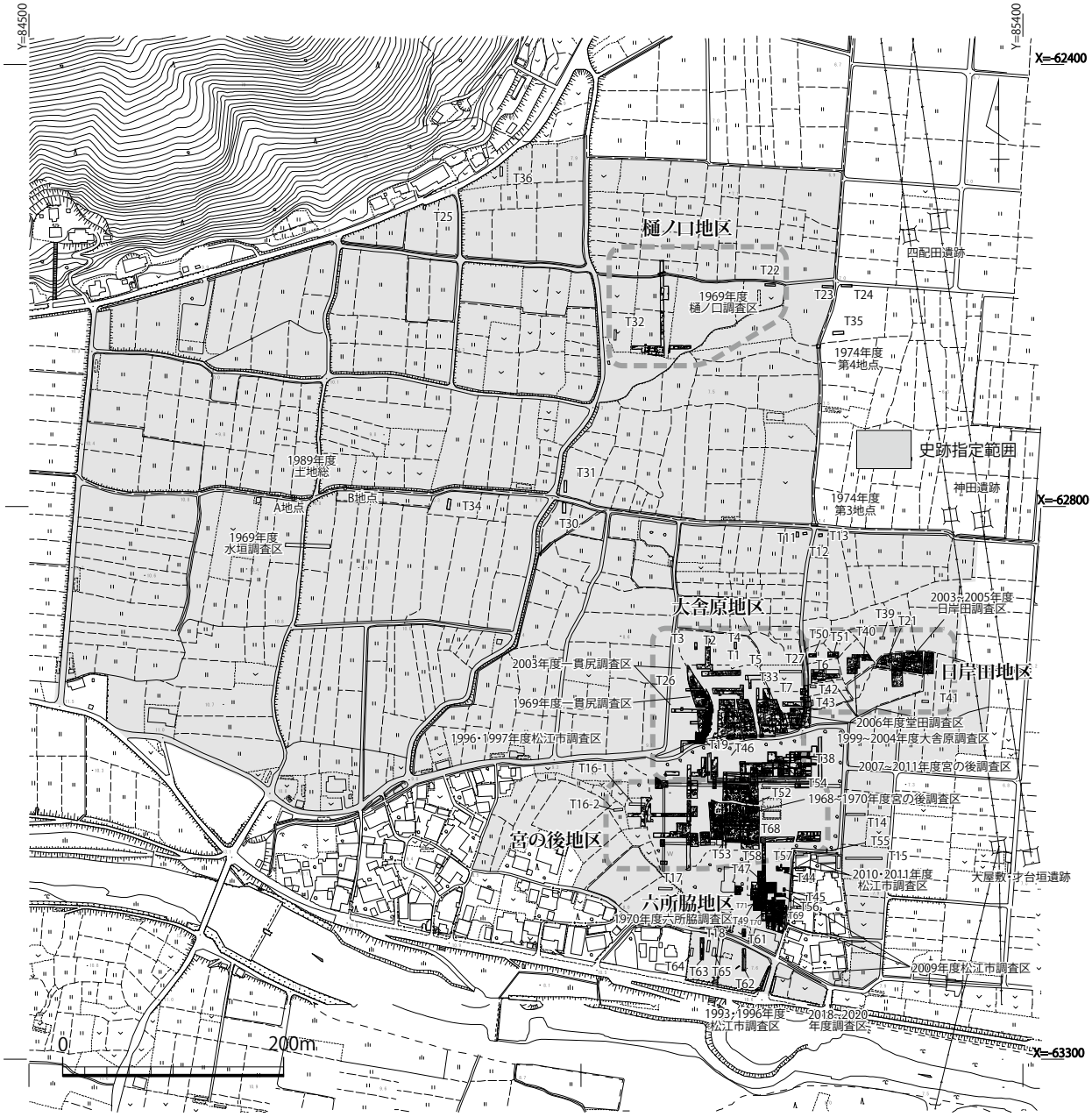
昭和40年代になると高度経済成長にともなう土地開発の波が意宇平野にも押し寄せ、平野部の様相を変えようとしていた。これを憂慮した松江市教育委員会と島根県教育委員会は、出雲国府跡



第１図　史跡出雲国府跡の位置（S=1/500,000）

の有力候補地である大草町の遺跡や消滅しつつある条里遺構の実態を明らかにし、適切な保存を図る目的で発掘調査を実施することとなった。松江市教育委員会が国庫補助事業で1968（昭和43）～1970（昭和45）年に行われた３ヵ年の調査（第１期調査）で整然と並んだ建物群や文書行政を行ったことを示す木簡や硯など、多数の遺物が出土した。これらを根拠に当地が出雲国府跡と特定され、1971（昭和46）年12月13日付け文部省告示第213号で約420,000㎡が国史跡に指定された。1972（昭和47）年には公有地化された10,480㎡を対象に３ヵ年にわたる環境整備事業が実施された。1973（昭和48）年にSD005、SD004の復元工事中にまとまった量の遺物が採取され、1974（昭和49）年は工事と並行して発掘調査が実施された。史跡出雲国府跡史跡公園は1974年に完成し、八雲立つ風土記の丘の中核施設としての活用が図られた。

環境整備後は、史跡の現状変更にともなう小規模な発掘調査が断続的に行われた。1974年に島根県文化財愛護協会による水道管埋設工事にともなう発掘調査、1985（昭和60）～1990（平成２）年にかけて行われた土地改良総合整備事業にともなう発掘調査、松江市教育委員会による1993（平



第２図　史跡出雲国府跡の史跡範囲と調査区配置図（S=1/6,000）

成５）、1996（平成8）年の道路拡幅、1996（平成８）、1997（平成９）年の個人住宅改築などが行われている。

島根県は1991（平成３）年に「八雲立つ風土記の丘整備構想」、1997（平成９）年に「古代文化の郷“出雲”整備構想」を策定した。いずれも八雲立つ風土記の丘を中核とした遺跡整備の必要性を唱えている。1997（平成９）年には風土記の丘資料館で「古代出雲文化展」が開催されたほか、史跡山代二子塚古墳の復元整備などが行われ、風土記の丘地内の史跡整備が進んだ。こうした中で史跡出雲国府跡の再整備も計画に盛り込まれ、1999（平成11）年より発掘調査が再開された（第２期調査）。2001（平成13）年には「八雲立つ風土記の丘整備基本計画」により出雲国府跡の整備案が示された。第２期調査の成果は、2013（平成25）年に『史跡出雲国府跡９- 総括編 -』（以下、『総括報告書』）としてまとめられた。第２期調査では、国司館の発見や付属する工房での玉、漆、金属製品等の生産関係遺物が多数出土するなどの成果が得られている。

『総括報告書』では、1968 ～ 2011（昭和43 ～平成23）年までの発掘調査について整理され、遺構や出土遺物の検討から総括的な編年、出雲国府跡の全体像が示された。その中で今後の課題として、六所脇地区や宮の後地区、樋ノ口地区などの昭和調査の再検討、『出雲国風土記』に記載された諸施設の探索、中世出雲府中とその終焉についての分析などがあげられている。さらに大半が未指定となっている政庁域南側について実態の解明と保存活用の重要性が示されている。

この未指定部分については文化庁や松江市教育委員会、地元関係者との協議が進み、2014 ～ 2017（平成26 ～ 28）年にかけて史跡指定と公有地化が進み、2017年に家屋等の移転が完了した。このことにより政庁域の発掘調査が可能となる諸条件の整備が整い、2015（平成27）年から、史跡出雲国府跡の活用（史跡整備リニューアル）のための基礎資料を得ること、『総括報告書』における課題の解決を目的に第３期調査を開始した。

2015 ～ 2017（平成27 ～平成29）年度に実施された発掘調査では、政庁正殿と考えられる四面廂建物の礎石化や１号池状施設の検出などの成果があった。これにより不明な点の多かった政庁域の様相が徐々に明らかになりつつある。また、この調査で得られた成果は2019（平成30）年度に刊行された『史跡出雲国府跡10』に詳しい。

第２節　調査の経過

１　2018（平成 30）年度

2018（平成30）年度の調査は、政庁正殿の南側の発掘調査を実施した。2015（平成27）年度に調査を実施した第59トレンチ（以下T59）において、古代に帰属すると考えられる大型の方形掘方を検出している。これが東脇殿の柱掘方になるものと推定し、東脇殿検出を主目的とし、第69トレンチ（以下T69）を設定した。

掘削は、2015（平成27）年度に調査を実施したT59、第60トレンチ（以下T60）で表土直下より時期不明の根石が確認されていることから、表土より人力掘削を行った。埋め戻しは遺構面に真砂土を５～10cm敷き、その上に調査区の掘削土を埋め戻した。遺構は検出後、段下げを行い記録した。記録の後、９世紀以降の遺構の一部について完掘して記録した。

６月６日に第28回発掘調査指導委員会を開催し、平成29年度の調査成果の報告と平成30年度

第１表　文化財保護法にもとづく提出書類

現状変更申請

文書番号日付	遺跡名	調査期間	面積	提出者	提出先
島教文財第 13 号 H30.04.13	史跡出雲国府跡	H30.06.01 ～ H31.03.29	375㎡	島根県教育委員会教育長	文化庁
島教文財第３号の２ H31.04.02	史跡出雲国府跡	H31.06.01 ～ H32.03.31	400㎡	島根県教育委員会教育長	文化庁
島教文財第 24 号 R2.04.10	史跡出雲国府跡	R2.07.01 ～ R3.03.31	450㎡	島根県教育委員会教育長	文化庁

現状変更申請（許可）

文書番号日付	遺跡名	調査期間	面積	提出者	提出先
30 受庁財第４号の 60 H30.05.18	史跡出雲国府跡	H30.06.01 ～ H31.03.29	375㎡	文化庁	島根県教育委員会教育長
31 受文庁財第４号 66 H31.05.17	史跡出雲国府跡	H31.06.01 ～ H32.03.31	400㎡	文化庁	島根県教育委員会教育長
２受文庁財第４号の 41 R2.06.19	史跡出雲国府跡	R2.07.01 ～ R3.03.31	450㎡	文化庁	島根県教育委員会教育長

現状変更完了

文書番号日付	遺跡名	調査期間	面積	提出者	提出先
島教文財第 13 号の 162 H31.02.08	史跡出雲国府跡	H30.07.04 ～ H31.01.25	375㎡	島根県教育委員会教育長	文化庁
島教文財第３号の 173 R2.01.23	史跡出雲国府跡	R1.06.10 ～ R2.01.11	400㎡	島根県教育委員会教育長	文化庁
島教文財第 24 号の 222 R3.01.18	史跡出雲国府跡	R2.07.27 ～ R2.12.25	450㎡	島根県教育委員会教育長	文化庁

埋蔵文化財の発見通知（法第 100 条の第２項）

文書番号日付	遺跡名	物件名	出土地	発見者	土地所有者	保管場所
島教文財第 274 号の 16 H31.01.18	史跡出雲国府跡	土師器、須恵器、瓦、陶磁器、石器、木器　計 95 箱	松江市大草町 498 ほか	島根県教育委員会教育長	島根県	島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター
島教文財第 2274 号の 14 R2.01.28	史跡出雲国府跡	土師器、須恵器、瓦、陶器・陶磁器、石器　計 43 箱	松江市大草町 498 ほか	島根県教育委員会教育長	島根県	島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター
島教文財第 114 号の 21 R3.01.06	史跡出雲国府跡	土師器、須恵器、瓦、陶器・陶磁器、石器　計 66 箱	松江市大草町 498 ほか	島根県教育委員会教育長	島根県	島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター

の調査計画について指導を受けた。７月４日より現地調査を開始し、９月18日に花谷委員、勝部委員、小野健吉教授（和歌山大学）、９月21日に大橋委員から調査指導を受けた。10月３日に第29回発掘調査指導委員会を開催し、調査成果の報告と令和元年度の調査計画について指導を受けた。11月７日に文化庁藤井調査官の指導を受けた。12月10日に大橋委員、花谷委員から調査指導を受けた。12月27日に現地調査を終了し、1月15日から埋め戻し作業を開始、1月25日に埋め戻し作業が終了した。

発掘調査現場の一般公開は10月21日に開催された「国府まつり」と11月23日に現地説明会で実施し、現地説明会では霰が降る中ではあったが82名の参加者があった。また、2019（平成31）年３月23日～５月12日まで、島根県立八雲立つ風土記の丘展示学習館で発掘調査成果の速報展示を開催した。発掘調査のほか、2015 ～ 2018（平成27 ～平成29）年度の調査成果をまとめた報告書『史跡出雲国府跡10』を刊行した。

２　2019（令和元）年度

2019（令和元）年度の調査は、政庁正殿の南側の発掘調査を実施した。2018（平成30）年度に検出した大型柱掘方列に対応する柱掘方を確認するため、T69の再発掘を含め、第70トレンチ（以下T70）を設定した。

掘削は、公園造成土とT69埋め戻し土はバックホーで行い、旧耕作土以下は人力で行った。埋め戻しは遺構面に真砂土を５～ 10cm 敷き、その上に調査区の掘削土を埋め戻した。遺構は検出後、段下げを行い記録した。記録の後、９世紀以降の遺構の一部について完掘して記録した。

６月５日に第30回発掘調査指導委員会を開催し、平成30年度の調査成果の報告と令和元年度の調査計画について指導を受けた。６月10日より現地調査を開始した。10月２日に文化庁川畑技官の指導を受けた。10月23日に大橋、花谷両委員から調査指導を受けた。10月31日と11月１日に第31回発掘調査指導委員会を開催し、調査成果の報告と令和２年度調査計画について指導を受けた。12月12日に花谷委員、12月16日に大橋委員から調査指導を受けた。12月17日に現地調査を終了し、12月16日から埋め戻し作業を開始、1月11日に埋め戻し作業が終了した。

発掘調査現場の一般公開は11月16日に現地説明会を実施し、70名の参加者があった。また、2020（令和２）年３月28日～５月11日まで、島根県立八雲立つ風土記の丘展示学習館で発掘調査成果の速報展示を開催したが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、臨時休館を余儀なくされた。

３　2020（令和２）年度

2020（令和２）年度の調査は、政庁正殿の南側の発掘調査を実施した。東脇殿と考えられる35・36号建物の詳細な調査と正殿南側の空間利用の把握のため、T69・T70、昭和調査区Ｉ区の再発掘を含め、第71トレンチ（以下T71）を設定した。またT71の西端は、政庁推定中軸線に沿うように設定した。

掘削は、公園造成土とT69･T70埋め戻し土はバックホーで行い、旧耕作土以下は人力で行った。昭和調査区Ｉ区は公園造成土下で調査区上面を検出したのち、人力で掘削した。埋め戻しは遺構面に真砂土を５～10cm敷き、その上に調査区の掘削土を埋め戻した。遺構は検出後、段下げを行い記録した。記録の後、９世紀以降の遺構の一部について完掘して記録した。

発掘調査は７月27日から現地調査を行った。10月９日に大橋、花谷両委員から調査指導を受けた。10月19日に第32回発掘調査指導委員会で令和元年度と令和２年度の発掘調査成果について報告し、令和３年度の調査計画について指導を受けた。12月２日に花谷委員、３日に大橋委員の調査指導を受けた。12月18日に現地調査を終了し、12月21日から埋め戻し作業を開始、12月25日に埋め戻し作業が終了した。

発掘調査現場の一般公開は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から11月14日に地元向けに現地説明会を実施し、34名の参加者があった。2021（令和３）年３月27日～５月10日に島根県立八雲立つ風土記の丘展示学習館で「風土記の丘地内令和２年度速報展」を開催した。

４　2021（令和３）年度

2021（令和３）年度は、2018～2020年度までの調査成果の報告書作成を行った。６月７日、９月16日に大橋委員、花谷委員、９月21日に佐藤委員の調査指導を受けた。９月21日の佐藤委員の調査指導は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、オンラインによる指導を実施した。10月６日に第33回発掘調査指導委員会を開催し、令和２年度の調査成果と報告書の内容について報告し、令和４年度の計画について指導を受けた。11月29日に大橋委員、花谷委員から遺構の変遷や遺物の評価などについて調査指導を受けた。

2022年（令和４）年１月29日～２月28日に島根県立八雲立つ風土記の丘展示学習館で小札や土師器甕など、政庁域の祭祀に用いられた遺物を展示する速報展を開催した。

第 2 表　史跡出雲国府跡発掘調査年表

調査年度		調査主体	調査目的	主な調査区	主な調査成果	報告書
昭和 43 年	1968 年	松江市教育委員会	学術調査	宮の後	大型の建物や溝 (SD004、SD005) を検出	松江市教育委員会 1971 島根県教育委員会 2008、2009
昭和 44 年	1969 年	松江市教育委員会	学術調査	宮の後・一貫尻・水垣・樋ノ口	宮の後で建物や溝 (SD010)、一貫尻で石敷遺構を検出	松江市教育委員会 1971 島根県教育委員会 2008、2009
昭和 45 年	1970 年	松江市教育委員会	学術調査	六所脇・宮の後	六所脇で政庁後殿と推定される四面廂建物 (SB020) を検出	松江市教育委員会 1971 島根県教育委員会 2008、2009
昭和 49 年	1974 年	島根県教育委員会	史跡整備	宮の後		島根県教育委員会 1975、2009
昭和 49 年	1974 年	島根県文化財愛護協会	水道管埋設		第 1 ～第 4 地点。推定十字街・枉北道	島根県教育委員会 2009
昭和 60 年	1985 年	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業			島根県教育委員会 1988
昭和 61 年	1986 年	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業			島根県教育委員会 1988
昭和 62 年	1987 年	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業		21 号水路。推定枉北道	島根県教育委員会 1988
平成元年	1989 年	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業	水垣・横枕	A 地点・B 地点。推定真西道	島根県教育委員会 2009
平成 2 年	1990 年	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業	松葉田他		島根県教育委員会 2009
平成 5 年	1993 年	松江市教育委員会	道路拡幅	六所前	橋脚の可能性の柱列を検出	
平成 8 年	1996 年	松江市教育委員会	個人住宅改築	前川原		
平成 8 年	1996 年	松江市教育委員会	道路拡幅	六所前		
平成 9 年	1997 年	松江市教育委員会	個人住宅改築	前川原		
平成 11 年	1999 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	大舎原	範囲確認調査	島根県教育委員会 2003
平成 12 年	2000 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	大舎原	廂付きの建物跡 (1 号建物跡) を検出	島根県教育委員会 2003
平成 13 年	2001 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	大舎原	国司館と推定される建物群を検出	島根県教育委員会 2003
平成 14 年	2002 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	大舎原	八脚門の可能性のある建物 (9 号建物跡) を検出	島根県教育委員会 2004
平成 15 年	2003 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	大舎原・一貫尻・日岸田	一貫尻で石敷遺構・護岸状施設を検出	島根県教育委員会 2004、2005
平成 16 年	2004 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	大舎原・日岸田	大舎原の 56 号溝より橋の部材と思われる木製品が出土	島根県教育委員会 2005、2006
平成 17 年	2005 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	日岸田	多量の漆関係遺物が出土	島根県教育委員会 2006
平成 18 年	2006 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	六所脇・宮の後・堂田	中世の国庁進入路の可能性がある硬化面を検出	島根県教育委員会 2008、2009
平成 19 年	2007 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	六所脇・宮の後・堂田	井桁状遺構を検出	島根県教育委員会 2009
平成 20 年	2008 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	宮の後	73 号溝を検出	島根県教育委員会 2010
平成 21 年	2009 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	宮の後	40 号土坑より漆紙文書を検出	島根県教育委員会 2010
平成 21 年	2009 年	松江市教育委員会	下水道工事	六所脇		
平成 22 年	2010 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	宮の後	井桁状遺構を検出	島根県教育委員会 2013
平成 22 年	2010 年	松江市教育委員会	個人住宅建設	六所脇		
平成 23 年	2011 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	宮の後	74 号・75 号溝を検出	島根県教育委員会 2013
平成 23 年	2011 年	松江市教育委員会	個人住宅建設	六所脇	中世の南北溝を検出	
平成 27 年	2015 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	六所脇・宮の後	80 号溝、1 号池状施設、1 号石組遺構などを検出	島根県教育委員会 2019
平成 28 年	2016 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	六所脇	SB019、26 号建物、27 号建物、29 号建物跡などを検出	島根県教育委員会 2019
平成 29 年	2017 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	六所脇・宮の後	SB020、28 号建物跡、95 号溝、1 号池状施設などを検出	島根県教育委員会 2019
平成 30 年	2018 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	六所脇	96 号溝などを検出	本報告書
令和元年	2019 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	六所脇	35・36 号建物、石敷遺構などを検出	本報告書
令和 2 年	2020 年	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	六所脇	37 号建物などを検出	本報告書

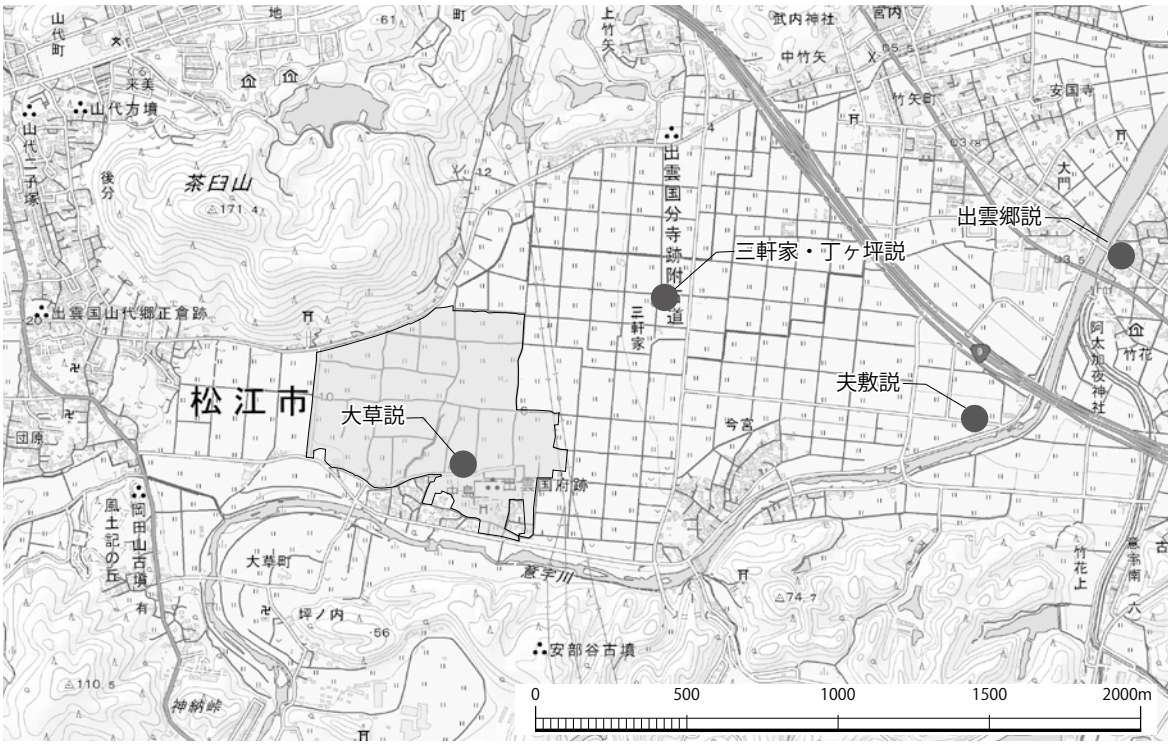
第２章　位置と環境

第１節　出雲国府跡の位置

史跡出雲国府跡は島根県松江市大草町・山代町地内に所在する。律令時代においては出雲国東端の意宇郡に属しており、中でも大草郷および山代郷に位置する（第３図）。『出雲国風土記』によれば、出雲国府は山陰道（正西道）と枉北道の交点である十字街より南へ下った位置にあったとされ、近傍には意宇郡家も所在していたと考えられる。

近世以降、出雲国府跡の所在地をめぐる論争があった。代表的なものに出雲郷説（岸崎時照）や夫敷説（野津左馬之介）、三軒家・丁ヶ坪説（石田茂作）、大草説（朝山皓、中澤四郎、加藤義成、恩田清）などがある。いずれも意宇平野内に所在していた可能性が指摘されている。その中で恩田清氏による元禄４（1691）年の『大草村検地帳』に「こくてふ」の文字を発見したことで松江市大草町が有力視されるようになった。

現在の出雲国府跡は松江市南東部にある意宇平野南端の微高地上に立地し、約10,480㎡が史跡公園として整備されている。公園南側には出雲国総社である六所神社が鎮座している。さらにその南には大草丘陵に沿うように蛇行し、意宇川が流れる。北側では精美な条里を残す水田地帯が広がる。さらに北側には標高171mの茶臼山がそびえ、『出雲国風土記』に「神名樋野」と記載される。茶臼山を越えると宍道湖と中海、それらを結ぶ大橋川が流れる。東側では、条里の向こうに中海が見え、大山を仰ぐことができる。

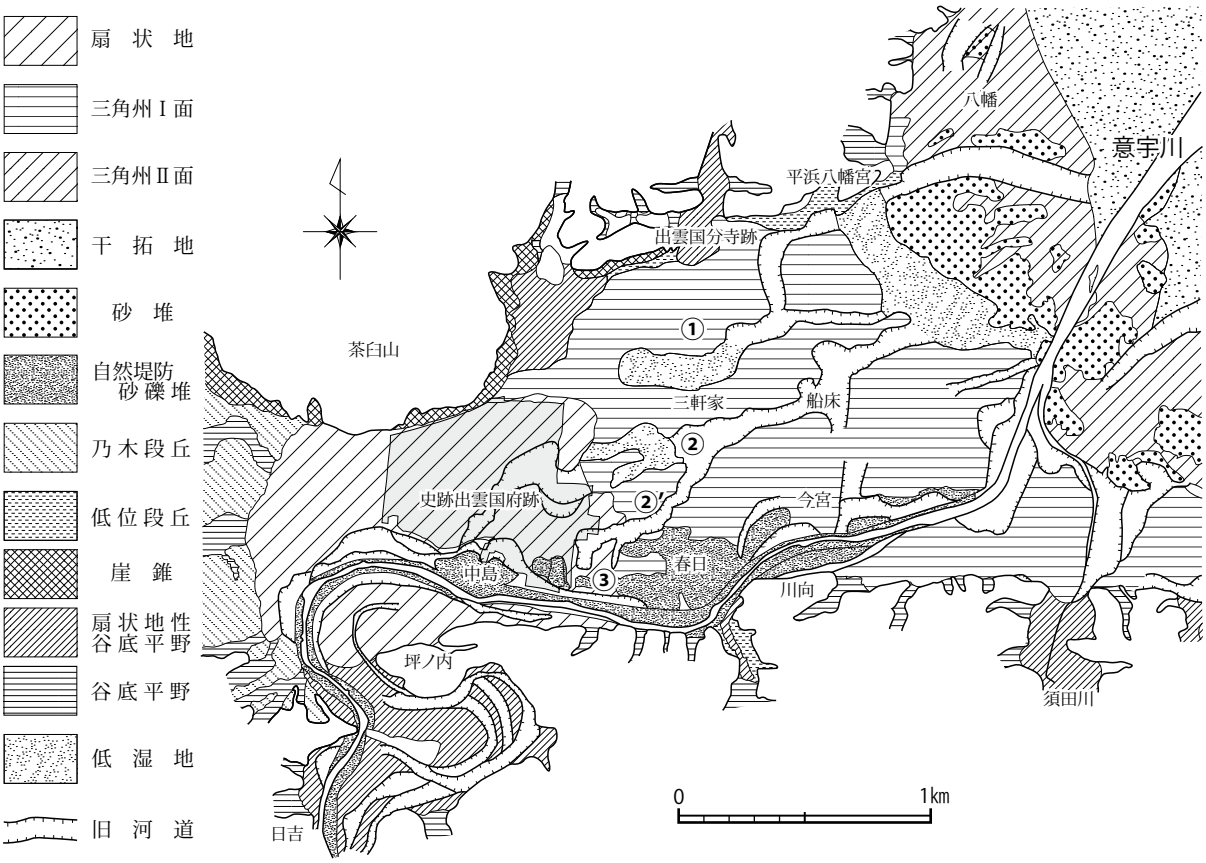


第３図　出雲国府跡の立地（S=1/25,000）

第２節　地理的環境

出雲国府跡が所在する意宇平野は、意宇川の下流に発達する小規模な沖積平野である。平野の西半分は意宇川の扇状地緩斜面で、中海沿岸では沿岸砂州として形成された砂堆が微高地を形成する。扇状地と砂堆の間は三角州面が広がり、平野の西側の山代周辺では乃木段丘が南北に延びている。平野面には意宇川旧河道にともなう小崖や自然堤防列が認められる。中でも出雲国府跡は、中島の扇状地の末端部の微高地上に位置している。南には松江市八雲町熊野の山間部から、意宇川が東流し中海へと注いでいる。

意宇平野には３つの旧河道が認められる。もっとも北側で見られる旧河道（旧河道①）は、三角州Ⅰ面上に認められるものの、西側の扇状地での連続性は判然としない。水田の区割りにも影響を与えておらず、小河川流路の可能性がある。平野中央に見られる旧河道（旧河道②）は、攻撃面にあたる小崖が現地形に残り、水田の区画に影響を与えている。中島付近から北東に延びる様子が明瞭である。南側の旧河道（旧河道③）は、ほぼ現在の河道に沿っている。この旧河道が３つのうち最も新しいもので、平野の最も高い位置を通過する。河川改修により、直線的流路にしたものが、現在の河道とみられる。出雲国府跡は、この旧河道によって、南西端、南端を削られている。



第４図　意宇平野周辺の地質図（S=1/30,000　成瀬 1975 一部加筆・改変）

第３節　出雲国府周辺の歴史的環境

出雲国府跡周辺の歴史は、旧石器時代に遡る。意宇平野内で良好な旧石器時代の遺跡は知られていないが、(40)下黒田遺跡(島根県教委会1989a)で玉髄製剥片のブロックが検出されているほか、(68)山代郷北新造院(来美廃寺)(島根県教委会2004)の造成土中から玉髄製ナイフ形石器が出土している。縄文時代の遺跡も少なく、(22) 才塚遺跡 (島根県教委会1968) で縄文時代後期中葉の土器と石斧類、(89) 法華寺前遺跡 (島根県教委会1968) で前期と思われる土器が採集されている。

弥生時代になると、遺跡数が急増する。(21) 上小紋遺跡 (島根県教委会1987) では建築部材と考えられる木製品が多数出土し、(93)夫敷遺跡(島根県教委会1989b)では水田跡が検出されている。また、意宇川の南に位置する大草丘陵では、四隅突出型墳丘墓である (３) 東百塚山20号墓 (島根県教委会2018) が所在する。

1. (国)出雲国府跡　2. (県)西百塚山古墳群　3. (県)東百塚山古墳群　4. (県)古天神古墳　5. (県)大草岩船古墳　6. 天満谷遺跡　7.(国)安部谷古墳　8. 湯田横穴墓群
9. 湯谷横穴墓群　10. 大円寺上古墳群　11. 才光寺古墳群　12. 大屋敷･才台垣遺跡　13. 神田遺跡　14. 四配田遺跡　15. 大坪遺跡　16. 真名井遺跡
17. 大谷横穴墓群　18. 聖岩遺跡　19. 大谷遺跡　20. 向小紋遺跡　21. 上小紋遺跡　22. 才塚遺跡　23. 大平遺跡　24. 間内遺跡　25. 上竹矢古墳群　26. 廻田古墳群
27. 茶臼山城跡　28. 小谷横穴墓群　29. (県)御崎山古墳　30. 上立遺跡　31. (県)岩屋後古墳　32. (国)岡田山古墳　33. 団原Ⅱ遺跡　34. 団原古墳　35. 小無田遺跡
36. (県)小無田Ⅱ遺跡　37. 寺の前遺跡　38. (県)山代郷南新造院跡(四王寺跡)　39. 黒田館跡　40. 下黒田遺跡　41. 団原遺跡　42. 団原Ⅲ遺跡　43. 黒田畦遺跡
44. 下黒田Ⅱ遺跡　45.川原宮Ⅲ遺跡　46.川原宮Ⅱ遺跡　47. 川原宮遺跡　48. (国)山代郷正倉跡　49.神魂神社参道遺跡　50. 出雲国造館跡　51. 中西遺跡　52. 大石古墳群
53. 大石横穴墓群　54.平古墳群　55.東淵寺古墳　56.外屋敷遺跡　57. 大庭小学校校庭遺跡　58. 向山１号墳　59. 茶臼遺跡　60.柳堀遺跡　61. (国)大庭鶏塚古墳
62. (国)山代二子塚古墳　63.(国)山代方墳　64. 山代原古墳(永久宅後古墳)　65.狐谷古墳･横穴墓群　66. 来美南遺跡　67. 井出平山古墳群
68. (国)山代郷北新造院跡(来美廃寺)　69.来美墳墓　70.(県)十王免横穴墓群　71. 平所遺跡　72. 南外古墳群　73. 東光台古墳　74. (国)石屋古墳　75. 荒神畑古墳
76. 官道下遺跡　77. 灘遺跡　78.井ノ奥1号墳　79. 井ノ奥4号墳　80.間内越墳墓群　81. 手間古墳　82. 竹矢岩舟古墳　83.才ノ峠遺跡　84. 灘山古墳　85. 観音寺古墳群
86.的場遺跡　87. 原ノ前遺跡　88.出雲国分尼寺跡　89.法華寺前遺跡　90.中竹矢遺跡　91. (国)出雲国分寺跡　92. 布田遺跡　93. 夫敷遺跡　94.大木権現山古墳群
95.島田遺跡　96. 寺床遺跡　97.島田池遺跡　98.岸尾遺跡　99. 古城山遺跡　100. 古城山古墳群　101. 古城山横穴墓群　102. 古城山城跡　103. 鳥越寺院跡　104. 鳥越古墳
105.姫津遺跡　106. 姫津古墳群　107.姫津谷横穴墓群　108.三反田A古墳群　109. 神子谷古墳　110. 天王横穴　111. 春日城跡　112. 魚見塚古墳　113. キコロジ遺跡
114. 朝酌岩屋古墳　115. 朝酌小学校前古墳　116. 朝酌小学校校庭古墳　117. 廻原1号墳　118. 観音山2号墳　119. 観音山1号墳　120. 廟所古墳　121. 勝田谷窯跡
122. 岩穴平遺跡　123. 明曽窯跡　124.イガラビ古墳群　125.池ノ奥窯跡群　126. 山津窯跡群　127. 寺尾窯跡　128. 後平横穴墓群　129.廻谷窯跡　130.山巻古墳
131. ハバタケ窯跡　132. 岩汐窯跡　133. 魚見塚遺跡　134. 朝酌菖蒲谷遺跡　135. 朝酌矢田Ⅱ遺跡　136. 若宮谷遺跡　137.シコノ谷遺跡

第５図　史跡出雲国府跡周辺の遺跡位置図（S=1/50,000）

意宇平野の古墳時代の遺跡は、夫敷遺跡や（１）出雲国府跡下層遺構群（島根県教委会2003、2013、角田2008）などが知られている。夫敷遺跡では自然河道が検出されているほか、古墳時代前期～中期後葉にかけての多数の土師器や韓式土器が出土している。このほか、(13) 神田遺跡や (14) 四配田遺跡などでは古墳時代中期の灌漑水路が検出されている。出雲国府跡下層では、首長居館状の方形区画遺構が確認されている。また、大量の渡来系遺物も出土している点は注目される。

古墳に目を向けると、古墳時代前期後葉に茶臼山東麓に大和北部型と呼ばれる出雲最古の埴輪を備える（26）廻田１号墳（島根県古代文化センターほか2004）や（25）上竹矢７号墳（島根県教委会2018）が築造される。出雲国府跡下層で方形区画遺構が設けられるのとほぼ同時期に大橋川沿岸では、(120) 廟所古墳（島根県古代文化センターほか2012）や (74) 石屋古墳（松江市教委会1985）などの大型方墳が累代的に築造される。出雲国府跡の南に位置する大草丘陵では、古墳時代中期に造墓活動が活発になり、10m 前後の方墳を中心とした古墳群である（３）東百塚山古墳群（島根県教委会1975・2018、大谷・吉松2022）や（２）西百塚山古墳群（島根県教委会1975、吉松・守岡2021、大谷・吉松2022）が形成される。古墳時代後期になると首長墳は墓域を茶臼山西麓へ移す。６世紀後葉には (62) 山代二子塚古墳（島根県教委会2001）が築造され、出雲地域の古墳時代社会を考える上で重要な画期となる。周辺には (55) 東淵寺古墳（島根県教委会2016）や中小首長と目される (32) 岡田山古墳（島根県教委会1987）、(29) 御崎山古墳（島根県立八雲立つ風土記の丘1996）、（４）古天神古墳（島根県教委会2018、岩本ほか2018）、(31) 岩屋後古墳（島根県教委会1978）などが築造される。山代二子塚古墳以後の最高首長は (58) 向山１号墳（松江市教委会1998）、(63) 山代方墳、(64) 山代原古墳（永久宅後古墳）（島根県教委会2022）へと推移する。

意宇平野周辺の古代の遺跡は、官衙、寺院、窯跡、古道などがある。官衙では、出雲国府跡のほか、(48) 山代郷正倉跡（島根県教委会1981）や下黒田遺跡（松江市教委会1984）、(39) 黒田館跡（松江市教委会1988）などがある。山代郷正倉では、整然と配置された総柱建物群とともに大量の炭化米が検出されている。下黒田遺跡と黒田館では、掘立柱建物や大溝などが検出され、一体の官衙遺跡と想定される。

寺院では、(91) 出雲国分寺（島根県教委会1975、松江市教委会1995・2009・2011）や (88) 出雲国分尼寺（島根県教委会1976）、『出雲国風土記』に日置君目烈が建立したと記載される山代郷北新造院（来美廃寺）（島根県教委会2002・2007）と出雲臣弟山が建立したと記載される (38) 山代郷南新造院（四王寺跡）（島根県教委会1985・1988・1994・2011）がある。このほか、これらの寺院に瓦を供給した窯跡も見つかっている。(36) 山代郷南新造院瓦窯跡（小無田Ⅱ遺跡）（松江市教委会1997）は山代郷南新造院の瓦の製作を行っており、３基の瓦窯が検出されている。出雲国分寺瓦窯跡（岡崎1979）では瓦窯２基、(90) 中竹矢遺跡（島根県教委会1992）では平窯１基が確認されている。

このほか、居館や集落、墳墓、古代道路などがある。(51) 中西遺跡（島根県古代文化センター2009）では、２間×２間の総柱建物や大型方形掘方で構成された廂付建物などが検出されており、出雲国造家との関連が指摘されている。一般集落では、中竹矢遺跡、(83) 才ノ峠遺跡（島根県教委会1993b）、(98) 岸尾遺跡（島根県教委会1997a）、(95) 島田遺跡（島根県教委会1997a）、渋山池遺跡（島根県教委会1997b）、(87) 原ノ前遺跡（島根県教委会1997b）があり、それぞれ掘立柱建物や加工段などが検出されている。墳墓関係の遺跡は少ないものの、(90) 社日古墳群（島根県教委会1998）で火葬骨壺が検出されている。この火葬骨壺には八稜鏡が納められていた。

古代道路としては、出雲国府跡堂田地区（島根県教委会2008）で確認された平安時代の硬化面があり、現在の市道と平行して南北に走り、推定十字街から国庁への進入路と推定される。このほか、上ノ免・水垣地区、石ヶ坪・横枕地区（島根県教委会2009）では時期不明の東西溝が検出され、山陰道（正西道）の可能性が想定される。（15）大坪遺跡（松江市教委会2002）では、山陰道（正西道）の検出が期待されたが、遺構は検出されず、木簡の出土に留まる。（56）外屋敷遺跡（松江市教委会2016）では溝の心々距離6.6m、幅員４m最終的な道路としては幅員5.4mの道路遺構が検出されている。この遺構は規模から山陰道に並走する準幹線路と想定されている。意宇平野以外では、松本古墳群（島根県教委会1997c）、杉沢遺跡（出雲市教委会2016）、長原遺跡（出雲市教委会2017）、（133）魚見塚遺跡（松江市教委会2018）などで道路遺構が確認されており、古代山陰道や枉北道を復元する重要な手がかりとなっている。また、近年の発掘調査で大橋川北岸の（135）朝酌矢田Ⅱ遺跡（島根県教委会2022）で、８世紀代に造成された船着き場あるいは船揚場と想定される礫敷遺構が検出された。『出雲国風土記』にみられる「朝酌渡」との関連が注目され、古代交通を考える上で重要な遺跡である。

中世以降の遺跡では、意宇川南岸に位置する（６）天満谷遺跡（島根県教委会1987）がある。天満谷遺跡では谷を造成して建てられた掘立柱建物が検出されているほか、古代末から中世の土器や陶磁器が出土している。中竹矢遺跡でも白磁を伴う集落の調査が行われている。意宇川河口に近い鷽貫遺跡（島根県教委会1997d）では少量の陶磁器が出土し、付近に中世の有力施設が存在したことが想定される。黒田館跡（松江市教委会1984）では掘立柱建物や井戸、溝などが検出されている。遺物では白磁、青磁のほか、朝鮮半島の陶器である粉青沙器が出土している。

参考文献

出雲市教育委員会 2016『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』
出雲市教育委員会 2017『出雲国古代山陰道発掘調査報告書―出雲市三井Ⅱ・杉沢・長原遺跡の調査―』
岩本　崇（編）2018『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会
大谷晃二・吉松優希 2022「大草丘陵古墳群出土遺物について」『古代文化研究』30 島根県古代文化センター
角田徳幸 2008「出雲国府跡下層の古墳時代集落」『島根考古学会誌』第 25 集 島根考古学会
島根県教育委員会 1968『島根県文化財調査報告書』第５集
島根県教育委員会 1975『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』
島根県教育委員会 1976『出雲国分尼寺第３次発掘調査概報』
島根県教育委員会 1978『岩屋後古墳発掘調査概報』
島根県教育委員会 1981『史跡出雲国山代郷正倉跡』
島根県教育委員会 1985『風土記の丘地内遺跡発掘報告書』Ⅳ
島根県教育委員会 1987a『出雲岡田山古墳』
島根県教育委員会 1987b『北松江幹線新設工事松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
島根県教育委員会 1988『風土記の丘地内遺跡発掘報告書』Ⅴ
島根県教育委員会 1989a『風土記の丘地内遺跡発掘報告書』Ⅵ
島根県教育委員会 1989b『国道９号松江道路建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅵ
島根県教育委員会 1992『一般国道９号松江道路建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅹ
島根県教育委員会 1993a『風土記の丘地内遺跡発掘報告書』Ⅸ
島根県教育委員会 1993b『一般国道９号松江道路建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅺ
島根県教育委員会 1994『風土記の丘地内遺跡発掘報告書』Ⅹ
島根県教育委員会 1997a『岸尾遺跡・島田遺跡』
島根県教育委員会 1997b『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』
島根県教育委員会 1997c『松本古墳群・大角山遺跡・すべりざこ古墳群』

島根県教育委員会 1997d『島田池遺跡・鷂貫遺跡』
島根県教育委員会 1998『社日古墳群』
島根県教育委員会 2001『山代二子塚古墳整備事業報告書』
島根県教育委員会 2002『来美廃寺「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書』
島根県教育委員会 2003『史跡出雲国府跡』 1
島根県教育委員会 2007『山代郷北新造院跡』
島根県教育委員会 2008『史跡出雲国府跡』 5
島根県教育委員会 2009『史跡出雲国府跡』 6
島根県教育委員会 2013『島根県教育委員会』 9総括編
島根県教育委員会 2016『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書』
島根県教育委員会 2018『上竹矢 7 号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳群調査報告書』
島根県教育委員会 2022『山代原古墳』
島根県教育委員会 2022『朝酌矢田Ⅱ遺跡（A ～ D 区）』
島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘 1996『御崎山古墳の研究』
島根県古代文化センター 2009『出雲国府周辺の復元研究―古代八雲立つ風土記の丘復元の記録―』
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 2012『廟所古墳発掘調査報告書』
成瀬敏郎 1975「意宇平野―その形成について―」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会
松江北高校歴史愛好会 2017「西百塚山 19 号墳―意宇平野に生きた豪族の証―」『季刊文化財』139 島根県文化財愛護協会
松江市教育委員会 1984『黒田館跡』
松江市教育委員会 1985『史跡石屋古墳』
松江市教育委員会 1988『下黒田遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 1995『出雲国分寺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 1997『小無田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 1998『向山古墳群発掘調査報告書』
松江市教育委員会 2002『市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 2009『出雲国分寺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 2011『出雲国分寺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 2015『史跡出雲国分寺跡発掘調査報告書』総括編
松江市教育委員会 2016『外屋敷遺跡』
松江市教育委員会 2018『魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡』
吉松優希・守岡正司 2021「西百塚山 19 号墳発掘調査報告―大草丘陵古墳群の調査（1）―」『古代文化研究』29
　島根県古代文化センター

第３章　平成 30 ～令和２年度の発掘調査

第１節　調査の方法

１　調査区の設定

2018（平成30）年度は、東脇殿の確認を調査目的として、375㎡の調査を実施した。調査区の名称はT69とし、2015（平成27）年度に設定したT59で切り合う大型の柱掘方を検出しておりT59、T60の再発掘も実施した。調査区は東西に２分し、南北それぞれ３分割し、設定した。東側を東区、西側を西区とし、それぞれ北から１区、２区、3区とした。調査区は調査対象域の制約を受けてない限り、各辺が世界測地系第３系の正方位に平行するように設定した。

2019（令和元）年度は、東脇殿の確認を調査目的とし、400㎡の調査を実施した。調査区の名称はT70とした。また東脇殿の全貌を確認するため、T59、T60、T69西区の再発掘も実施した。調査区はT69北端に拡張した部分をT69拡張区、T70はT69と同様に東西２分、南北それぞれ２ないし３分割し設定した。東側を東区、西側を西区とし、それぞれ北から１区、２区、3区とした。調査区は各辺が世界測地系第３系の正方位に平行するように設定した。

2020（令和２）年度は、東脇殿の確認、石敷遺構の範囲確認を目的として、450㎡の調査を実施した。調査区の名称はT71とした。またT59、T60、T69西区、T70、昭和調査区Ｉ区の再発掘も実施した。調査区はT71を南北に２分し、北を１区、南を２区とした。調査区は各辺が世界測地系第３系の正方位に平行するように設定した。

２　表土と遺構の掘削

2018年度T69の掘削は人力のみで行った。T70、T71、再発掘は表土のみバックホーで掘削し、それ以外は人力で掘削した。また、昭和調査区Ｉ区は、調査範囲が狭かったことから、T71-１区で調査区上端を検出した後、人力で埋め戻し土の掘削を行った。検出遺構については、いずれも９世紀中葉以降と考えられる遺構は段下げの後、半裁した。９世紀前葉以前と考えられる遺構は段下げの後、一部掘削を行った。

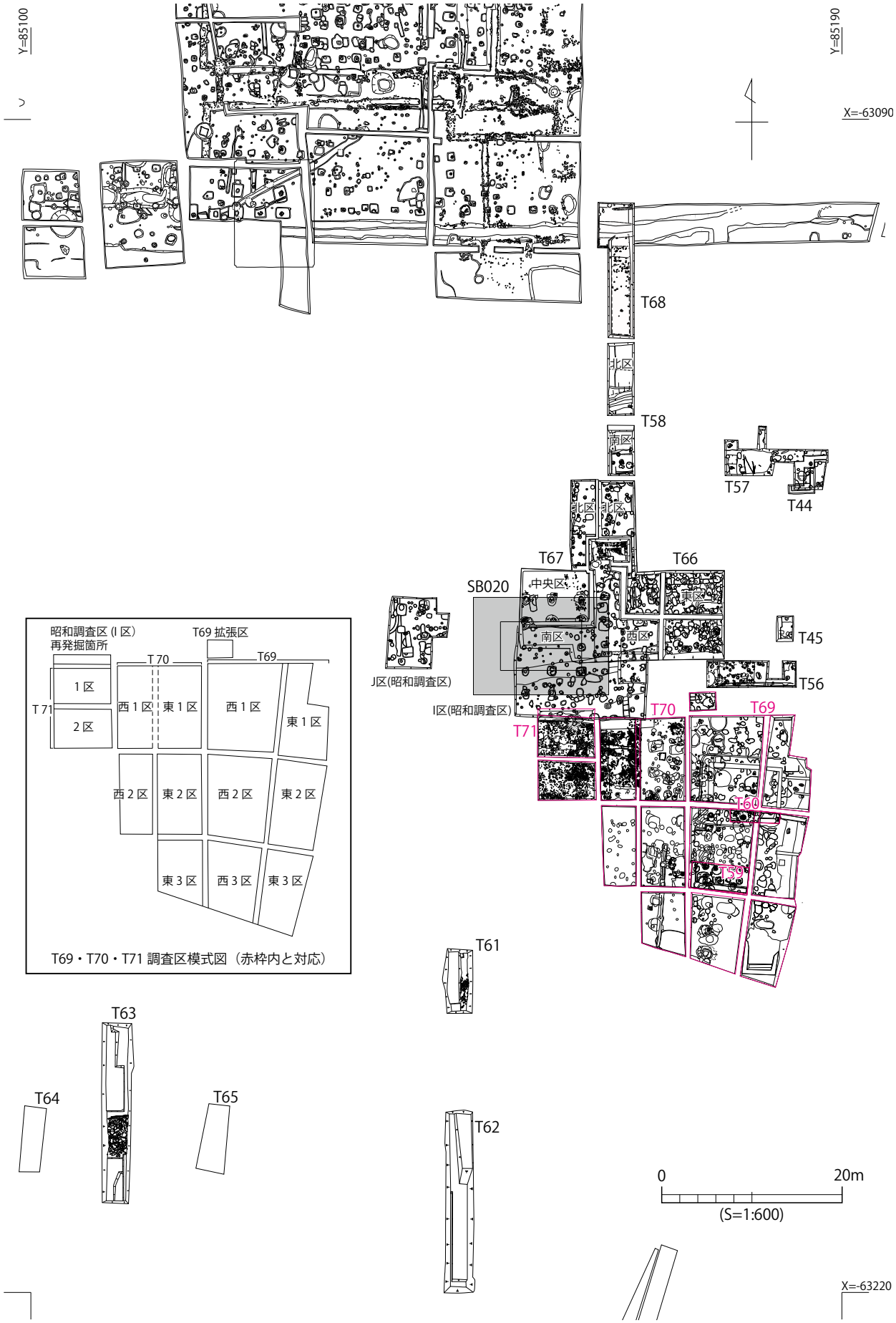
調査区の埋め戻しは、遺構面に真砂土を５～10㎝敷き、掘削土をトレンチに埋め戻した。

３　記録の作成

遺構の平面図は、2018～2020年度のいずれもコンピュータ・システム株式会社の遺構調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。石敷や遺物出土状況などは必要に応じて手測りで平面図等を作成した。また、報告書掲載が見込まれる遺物等は遺跡調査システムで出土位置を記録した後に取り上げを行った。遺構の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは６×７版フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）による撮影を行い、それ以外はフルサイズ一眼レフのデジタルカメラで撮影した。

４　整理作業

検出遺構は内容を検討し、遺構の種類ごとに現地での仮番号から出雲国府跡での通し番号に変更



第6図　2018 ～ 2020（平成30 ～令和 2）年度調査区配置図（S=1/600）

した。ただし、出雲国府跡では遺構の表記について、第 1 期調査では SB 等の略号を使用し、第 2 期調査では略号を使用していない。その上でそれぞれが通し番号を付けている。指導委員会で、再度の総括報告書を刊行するまでは第 1 期調査で既に確認されていた遺構については第 1 期調査での名称のまま使用し、新たに検出した遺構については略号を使用せず、第 2 期調査からの通し番号を付けることに決定した。

出土遺物については、遺構から出土したものを優先して選択し、実測と撮影を実施した。遺物包含層から出土したものについては、土層の時期を示すものや特殊な遺物などを選択し、実測と撮影を実施した。また、瓦については全点の分類作業を行った上で重量と破片数を記録し、軒瓦や道具瓦などを優先して実測および撮影を実施した。

５　自然科学分析

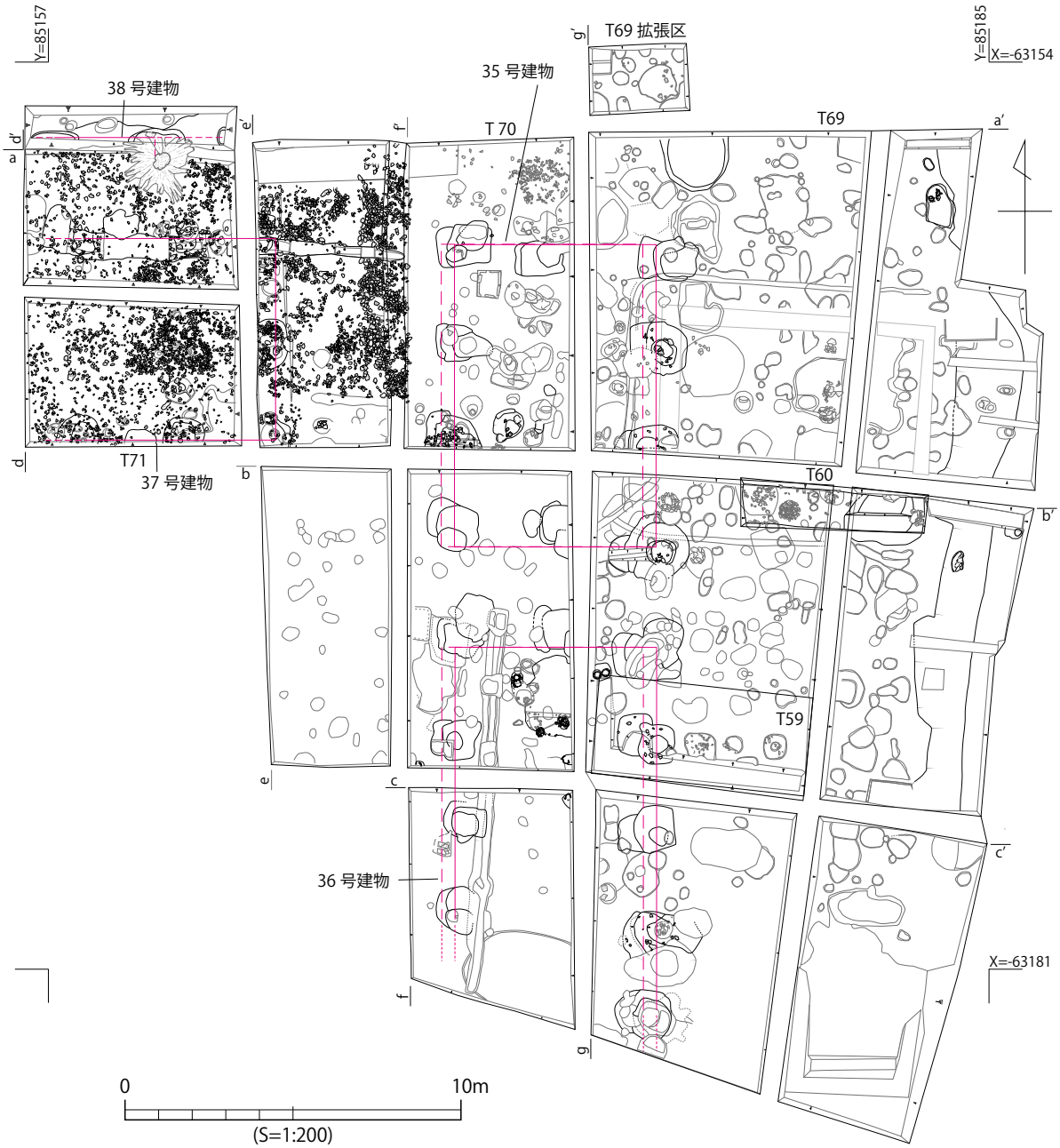
自然科学分析のうち36号建物跡抜取穴埋土の粉末 X 線回折と蛍光 X 線分析については、委託業者・分析担当者と現地で協議した上で採取作業を含め、委託・依頼した。それ以外の資料については発掘作業終了後に委託業者・分析担当者と協議した上で作業を委託・依頼した。

第２節　基本層序

基本層序は、T69、T70、T71（第 6 図）ともに基本的な部分では同様であるが、T70、T71のいずれも 1 区で他の調査区と層序が異なる。

T69の 1 区では、地表より、史跡公園造成土、近現代の造成土または旧耕作土（暗褐色土・黒褐色土）、暗灰黄色土の順に堆積する（第 8 図）。T70、T71の 1 区では、地表より、史跡公園造成土、近現代の造成土または旧耕作土（暗褐色土）、にぶい黄褐色土、暗灰黄色土の順に堆積する（第 8 図、第12図）。

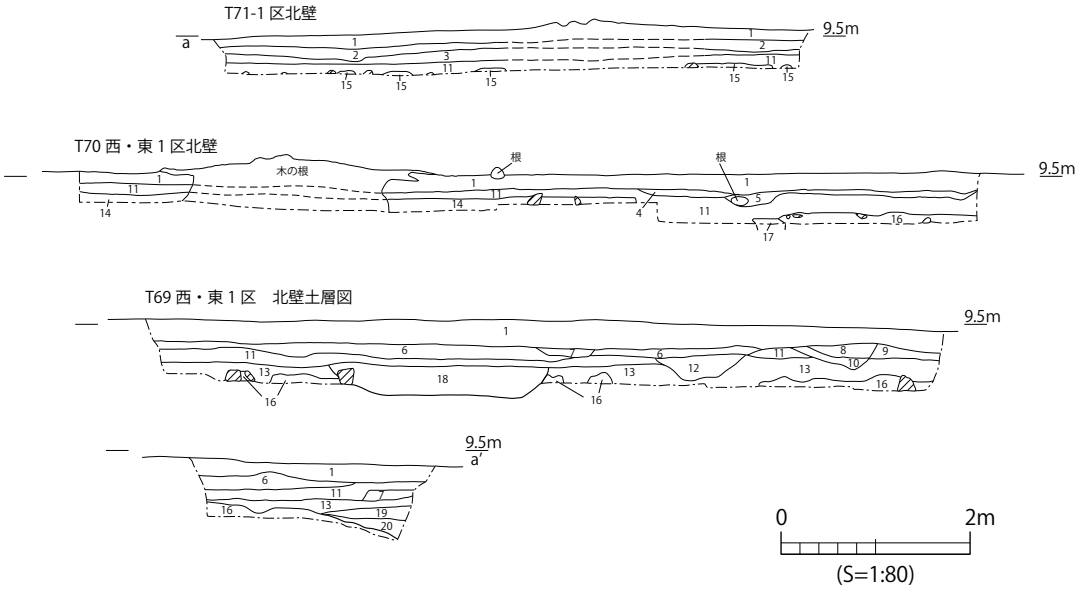
T69 ～ T71では、宮の後地区や六所脇地区北側で確認されている13世紀の洪水による礫層は確認できず、この周辺は洪水の直接的な被害は受けなかったと考えられる。にぶい黄褐色土は南にいくにつれ徐々に薄くなり、T70の 1 区南で後世の住宅による撹乱で確認できなくなっている。くわえて東にいくにつれても明瞭な堆積状況を確認できておらず、東にむかっても徐々に薄くなっている、もしくは後世の住宅による撹乱で確認できなくなっている可能性がある。にぶい黄褐色土の形成時期は今回の調査では不明な点が多いが、出雲国分寺補修期の平瓦が含まれていることから、８ 世紀後半以降に形成された可能性が高い。このほか、越州窯産磁器蓋の可能性がある小片が出土しているが、器種も含め時期の特定は難しい。また、遺構検出中には第 6 ～ 7 型式の土師器無高台坏が出土しているが、上層からの紛れ込みの可能性も否定できない。にぶい黄褐色土層については、六所脇地区南側でも地点によって層中に含まれる遺物の年代に差異があり、この層の形成時期が異なると報告されている（島根県教委会2019）。すなわち T66東区（第 6 図）では第 6 型式までの遺物が含まれているのに対し、T67中央区（第 6 図）では第10型式までの遺物が含まれている。T70・T71では、この層の上面で 1 号石敷遺構や 9 世紀以降の遺構を検出した。にぶい黄褐色土の下層に堆積する、暗灰黄色土中は 7 世紀中葉までの須恵器を含み、この層の上面で 8 世紀以降の遺構を検出した。



第７図　T69・T70・T71 平面図（S=1/200）

２区・３区では、地表から近現代の造成土（暗褐色土）、暗灰黄色土あるいはにぶい黄褐色土の順に堆積する（第９図、第10図、第13図、第14図）。にぶい黄褐色土はおもに３区でみられるが、１区のものとは検出された標高や出土遺物から形成時期が異なる。T70、T71の１区と同様に、暗灰黄色土中には７世紀中葉までの須恵器が含まれており、この層の上面で８世紀以降の遺構を検出したほか、９世紀以降の遺構も同一遺構面で検出した。

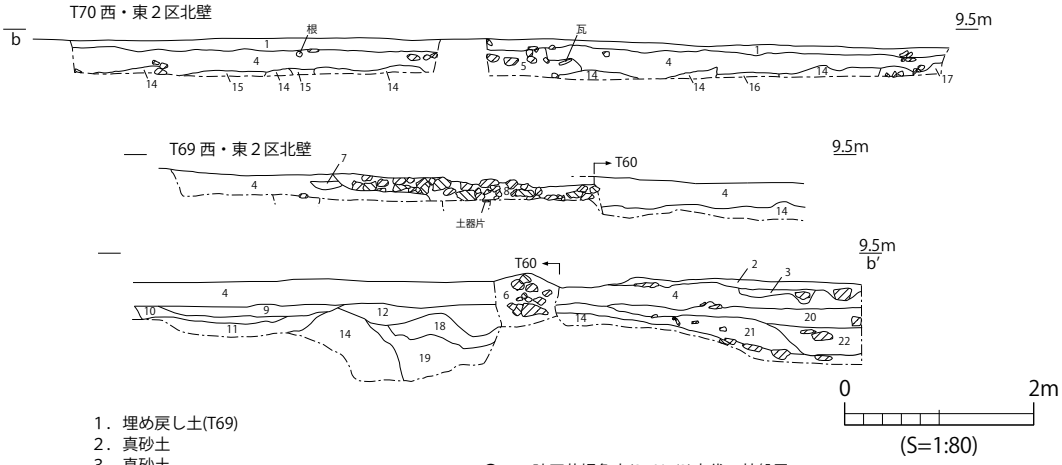
以上、T70、T71の１区では近現代の造成土または旧耕作土下に、９世紀以降の基盤層（にぶい黄褐色土）、７世紀後葉以降の基盤層（暗灰黄色土）の順で堆積している。このほかの調査区（T69、T70２～３区）では近現代の造成土または旧耕作土下に、７世紀後葉以降の基盤層（暗灰黄色土）が堆積している。以下、本書ではT70西１区で確認したにぶい黄褐色土を「第１整地層」（第12図）、暗灰黄色土（T69東３区ではにぶい黄褐色土）を「第２整地層」と呼称する。



1．公園造成土 , 表土
2．公園造成土
3．灰黄色土 (2.5Y4/2) 耕作土？
4．褐灰色土 (10YR5/1) 攪乱
5．根攪乱
6．褐灰色土(10YR4/1)
7．褐灰色土(10YR4/1)
8．暗褐色土 (10YR3/3) 攪乱層
9．暗褐色土(10YR3/3)攪乱層
10．暗褐色土(10YR3/3)
●11．暗褐色土(10YR3/3)
12．褐灰色土(10YR5/1)
●13．黒褐色土(10YR3/1)
14．暗灰黄褐色土 (2.5Y5/2) 昭和調査の埋め戻し
15．明黄褐色土 (10YR6/6) 第 1 整地層
西では灰黄褐色土 (10YR6/2) になる
●16．暗灰黄褐色土 (2.5Y4/2) 古代の基盤層
17．黒色土 (10YR2/1)Pit 埋土 , 中世か
18．71号土坑埋土
19．黒褐色土(96号溝上層埋土）
20．褐灰色土(96号溝下層埋土）

※掲載遺物出土層に●をつけた

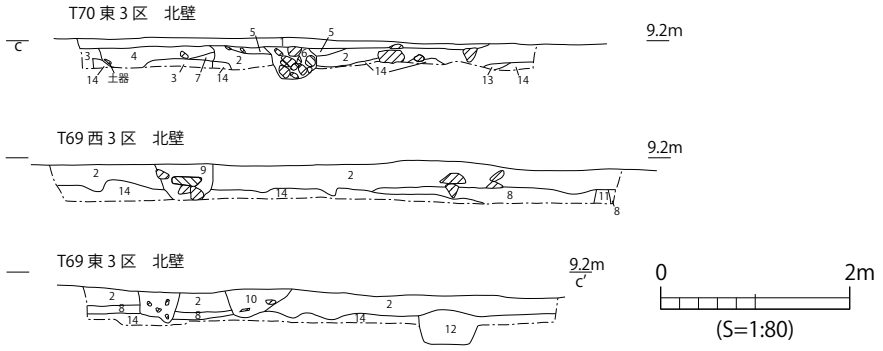
第８図　T69・T70・T71　 1 区北壁土層図 (S=1/80)



1．埋め戻し土(T69)
2．真砂土
3．真砂土
4．暗褐色土(10YR3/3)近現代の造成土
5．褐灰色土 (10YR5/1) 攪乱層
6．暗褐色土,攪乱層
7．灰色土(5YR4/1)攪乱層
8．礫層
9．黒色土
10．黒褐色土
11．灰黄褐色土
12．暗褐色土,炭化物
13．暗灰黄色粘質土(2.5YR5/2)
●14．暗灰黄褐色土(2.5Y4/2)古代の基盤層
15．褐灰色土 (10YR4/1)
16．黒色土 (10YR2/1)Pit 埋土 , 中世か , 土師器含む
17．黒褐色土 (7.5YR3/1) 攪乱
18．黒褐色土, 9 C後半の緑釉陶器が出土,16号号井戸
19．黒褐色土,16 号井戸
20．黒褐色土(10YR3/1)96号溝上層埋土
21．褐灰色土(10YR5/1)96号溝下層埋土
22．褐灰色土(10YR4/1)96号溝下層埋土

※掲載遺物出土層に●をつけた

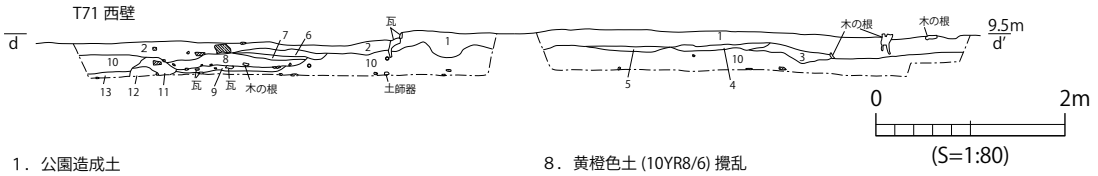
第９図　T69・T70　 2 区北壁土層図 (S=1/80)



１．埋め戻し土 (T69)
●２．暗褐色土 (10YR3/3) 近現代の造成土
３．暗灰色土 (10YR5/1)
４．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
５．黄橙色土 (7.5YR7/8) 撹乱
６．礫層 , 家の基礎
７．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
８．黒褐色土 , 撹乱層
９．暗褐色土(10YR3/3)撹乱層
10．暗褐色土(10YR3/3)撹乱層
11．暗褐色土(10YR3/3)
12．褐灰色土(10YR４/1)遺構埋土, 中近世か
13．褐灰色土 (10YR4/1)
●14．にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 古代の基盤層

※掲載遺物出土層に●をつけた

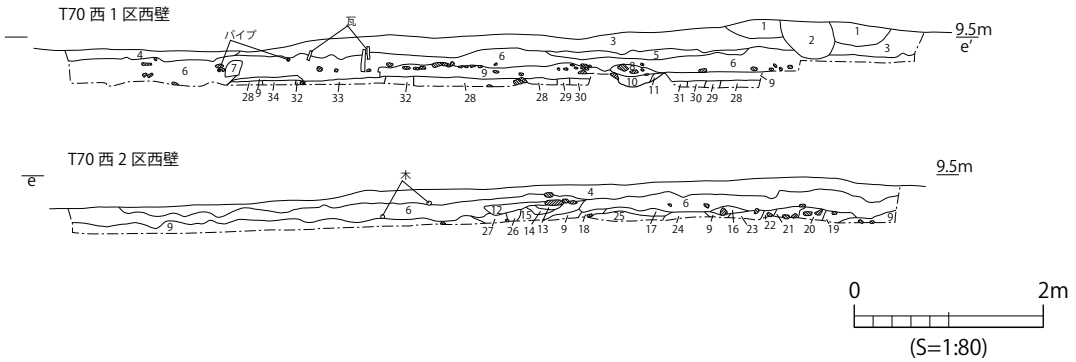
第10図　T69・T70　３区北壁土層図 (S=1/80)



１．公園造成土
２．埋戻し土 , 表土
３．明黄褐色土 (10YR7/6) 砂利層
４．暗褐色土 (10YR3/2) 砂利層
５．黄橙色土 (10YR7/8) 砂利層 (粗真砂)
６．暗褐色土 (10YR3/2) 撹乱層
７．黄橙色土 (10YR7/8) 砂利層 (粗真砂)
８．黄橙色土 (10YR8/6) 撹乱
９．暗褐色土 (7.5YR3/3) 撹乱層
●10．暗褐色土 (10YR3/3)
11．暗褐色土 (7.5YR3/3) 撹乱層
12．黒褐色土 (10YR3/1) 中世ピット
13．暗灰黄色土 (2.5YR5/2) 古代の基盤層か？

※掲載遺物出土層に●をつけた

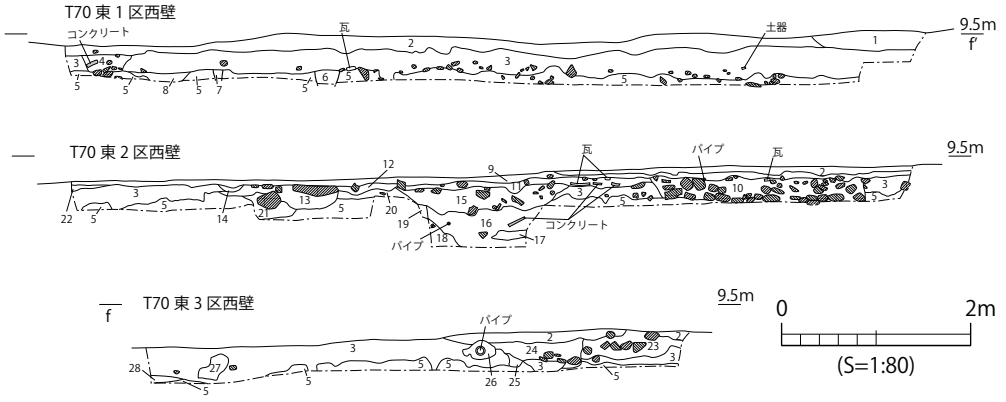
第11図　T71　西壁土層図 (S=1/80)



１．公園造成土
２．公園造成土
３．表土
４．埋め戻し土
５．褐灰色土 (10YR4/1) 撹乱層？
●６．暗褐色土 (10YR3/3) 近現代の造成
７．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱
８．暗褐色土 (10YR3/3)97 号溝埋土
９．にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 第１整地層
10．暗褐色土 (10YR4/3)97 号溝埋土
11．暗褐色土 (10YR4/3)97 号溝埋土
12．褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
13．褐灰色土 (10YR4/1) 撹乱層
14．褐灰色土 (10YR4/1) 撹乱層
15．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
16．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
17．橙色土 (7.5YR6/8) 撹乱層
18．明黄褐色土 (10YR6/6) 撹乱層
19．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
20．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
21．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
22．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
23．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
24．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
25．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
26．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
27．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
28．灰黄褐色土 (10YR5/2) 奈良時代の遺構面
29．にぶい黄褐色土 (10YR5/3)37 号建物掘方
30．灰黄褐色土 (10YR6/2)37 号建物抜き取り
31．にぶい黄橙色土 (10YR6/4)37 号建物据え付け穴？
石なしのため抜き取りか
32．にぶい黄褐色土 (10YR5/4)37 号建物掘方
33．灰黄褐色土 (10YR6/2)37 号建物抜き取り
34．にぶい黄橙色土 (10YR7/3)Pit か？

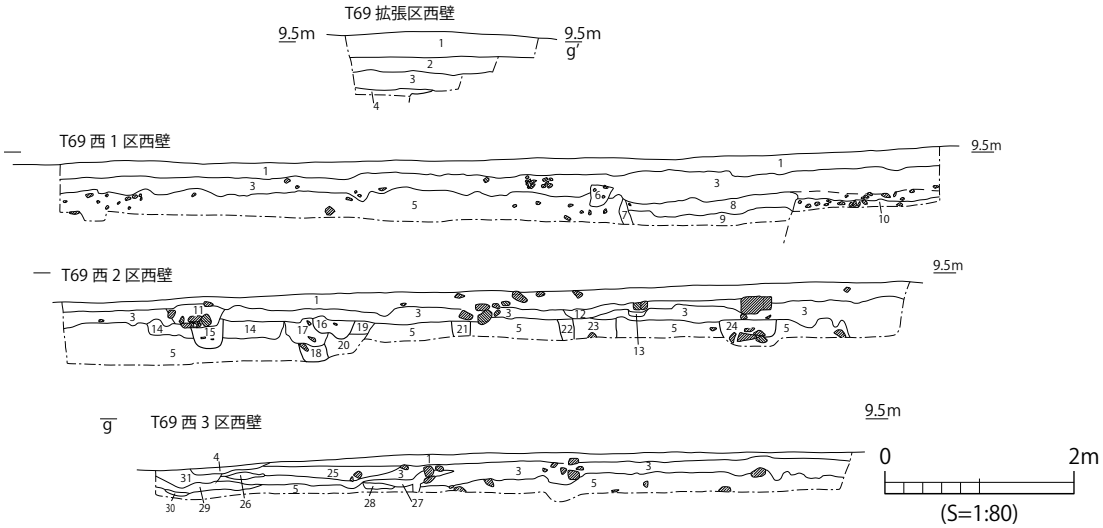
※掲載遺物出土層に●をつけた

第12図　T70西区　西壁土層図 (S=1/80)



1．公園造成土
2．表土(H30 残土)
● 3．暗褐色土 (10YR3/3) 近代の造成土 , 炭化物・遺物 (古墳～現代) 含む
4．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
● 5．暗灰黄褐色土 (2.5Y4/2) 第 1 整地層 ,3 区ではにぶい黄褐色土 (10YR5/4)
6．黒褐色土 (10YR3/1)Pit 埋土 , 中世～近世
7．灰黄褐色土 (10YR4/2) ～暗褐色土 (10YR3/3)Pit ？埋土 (近世)
8．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
9．暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
10. 暗褐色土 (10YR3/3) 住宅関係の撹乱
11. 暗褐色土 (10YR3/3) 住宅関係撹乱
12. 暗褐色土 (10YR3/3) 住宅関係撹乱
13. 暗褐色土 (10YR3/3) 住宅関係撹乱
14. 暗褐色土 (10YR3/3)
15. 暗褐色土 (10YR 3 / 3) 住宅関係撹乱
16. 暗褐色土 (10YR3/3) 住宅関係撹乱
17. 暗灰黄褐色土 (2.5Y4/2) 撹乱で混ざったか
18. 黒褐色土 (10YR3/2) 撹乱層
19. 黒褐色土 (10YR3/2) 撹乱層
20. 暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
21. 褐灰色土
23. 暗褐色土 (10YR3/3) 住宅関係撹乱
24. 暗褐色土 (10YR3/3) 住宅関係撹乱
25. 黄褐色土 (10YR5/6) 撹乱層
26. 暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱層
27. 根撹乱
28. 黒褐色土 (10YR3/2)　※掲載遺物出土層に●をつけた

第13図　T70東区　西壁土層図（S=1/80）



1 . 公園造成土
2 . 褐灰色土 (10YR4/1) 耕作土 , 黒褐色土混じる
● 3 . 暗褐色土 (10YR3/3)
4 . 黒褐色土 (10YR3/1)Pit 埋土
● 5 . 灰黄褐色土 (10YR5/2) 奈良時代の基盤層
6 . 暗褐色土 (10YR3/3) パイプ埋設の撹乱
7 . にぶい黄橙色土 (10YR6/4)
灰黄褐色土 (10YR5/2) 撹乱層 , 近代～現代の井戸か？
8 . 明黄褐色土 (10YR7/6)
灰黄褐色土 (10YR5/2) 撹乱層 , 近代～現代の井戸か？
9 . 黄褐色土 (10YR5/6) 近代～現代の井戸か？
10. にぶい黄橙色土 (10YR7/2)
灰黄褐色土 (10YR5/2) を含む , 奈良時代の整地層か遺構
11. 暗褐色土 (10YR3/3) 撹乱
12. 黄橙色土 (10YR8/3) 撹乱
13. 褐灰色土 (10YR5/1) 撹乱
14. にぶい黄橙色土 (10YR7/3)73 号土坑埋土
15. 灰黄褐色土 (10YR6/2)Pit 埋土
16. 黒褐色土 (10YR3/1)Pit 埋土 , 中世？
17. にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
18. 灰黄褐色土 (10YR6/2)Pit 埋土 20 を切る
19. にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
20. にぶい黄橙色土 (10YR7/3)72 号土坑
21. 黒褐色土 (10YR3/2)Pit 埋土
22. 黒褐色土 (10YR3/2)Pit 埋土
23. にぶい黄褐色土 (10YR5/3)Pit 埋土 ,15 に切られる
24. 褐灰色土 (10YR5/1) 石を含む溝状遺構の埋土
25. 撹乱層
26. 明黄褐色土 (10YR6/6) 撹乱層
27. 黄褐色土 (10YR5/6) 撹乱層
28. 褐灰色土 (10YR5/1) 撹乱層
29. にぶい黄橙色土 (10YR7/3) 撹乱層
30. にぶい黄橙色土 (10YR6/4) 撹乱層
31. 橙色土 (7.5YR6/6) 撹乱層　※掲載遺物出土層に●をつけた

第14図　T69西区　西壁土層図（S=1/80）

第３節　調査区の概要

１　T69

東脇殿の検出を目的に設定した調査区である（第６図）。この調査区内には2015（平成27）年度に設定されたT59、T60を含んでいる。これらを含む調査面積は375㎡である。調査区は東西、南北に土層観察用の畦を設定し、中央の畔から東側を東区、西側を西区とした。また北から１区とし、３区まで設定した。このほか西１区の北側に35号建物桁行の検討のために、幅３m、長さ２mの拡張区を設けた。調査中に35号建物の規模が確定したことから、この部分については第１整地層中の遺構検出を行うにとどめた。

基本層序は前述のとおりであるが、１区では地表から公園造成土、近現代の造成土（暗褐色土・黒褐色土）、第２整地層（暗灰黄色土）の順で堆積している（第８図、第14図）。拡張区を含めた遺構は、複数のピットと溝１条、土坑４基を確認したが、検出のみを行い掘削を行っていない遺構が多数あるほか、近現代の住宅による攪乱が著しい。主な遺構に96号溝、69号土坑、70号土坑、71号土坑、72号土坑などがあるほか、35・36号建物がT70にまたがって検出されている（第７図、第15図）。

遺物は近現代の造成土中から古墳時代から近世以降の遺物が出土した。９世紀中葉～ 12世紀後半の土師器が多く出土している。

このほか、T59内では複数のピットを確認している。またT60内では井戸１基や複数のピットを確認しており、これらの調査区と出土遺物の概要について以下で述べたい。

（１）T59

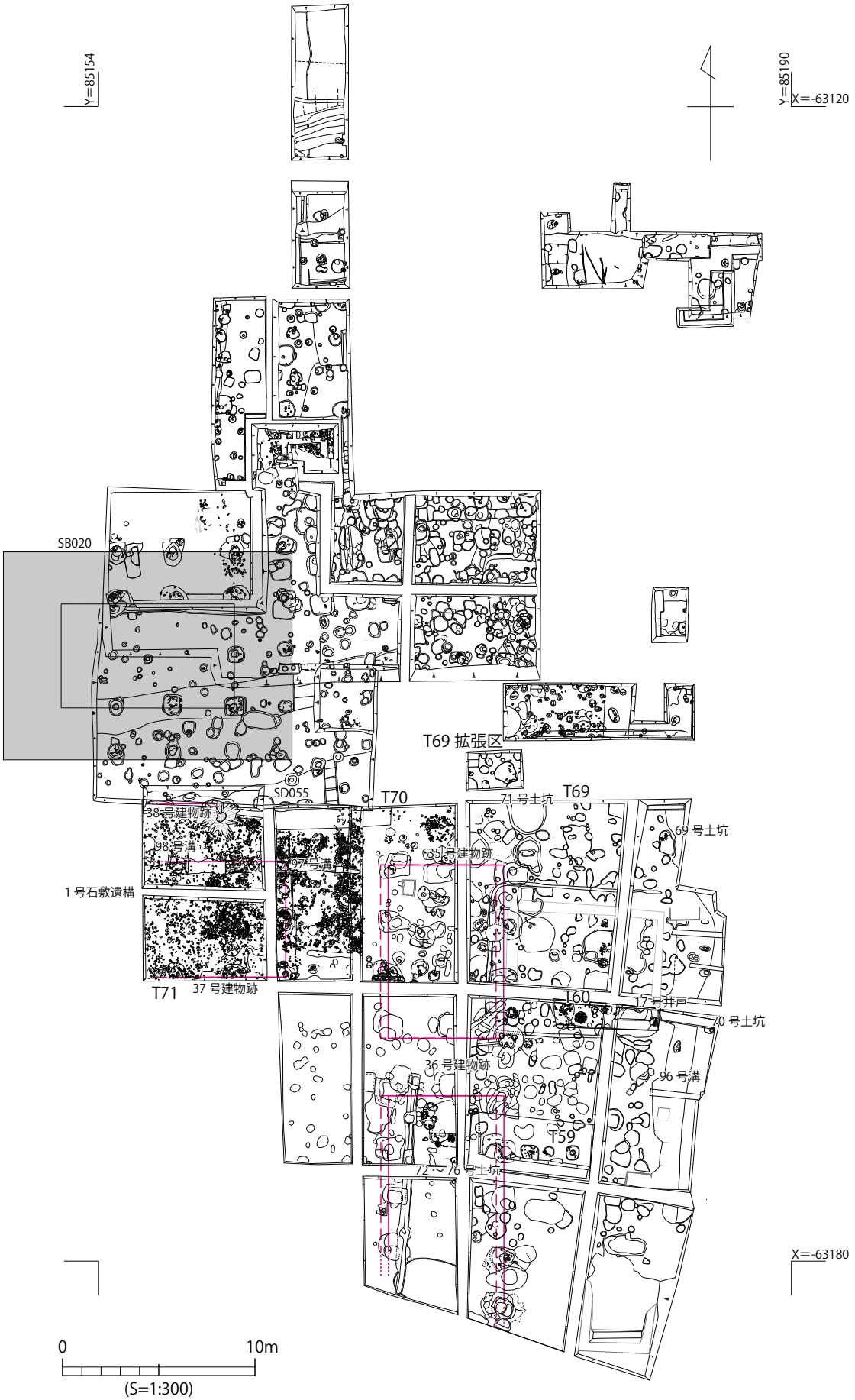
東脇殿の確認を目的に設定した幅３m、長さ６mのトレンチである（第16図）。基本層序は地表から近現代の造成土（暗褐色土）、暗灰黄色土（第２整地層）である。遺構は複数のピットを確認している。中でも重複関係のある一辺１m以上の大型の掘方を検出しており、東脇殿にかかわる柱穴の可能性がある（35号建物P10）。このほか、古代に帰属すると考えられる方形の掘方を検出しているが、どのような建物になるかは不明である。

出土遺物は暗褐色土中より、古墳時代～現代までの様々な遺物が出土しているほか、暗灰黄色土からは小片ではあるものの６世紀後半の須恵器や土師器が出土した。１は暗褐色土から出土した皿である。六所神社参拝記念の銘が内面にある。２は暗褐色土から出土した丸瓦である。

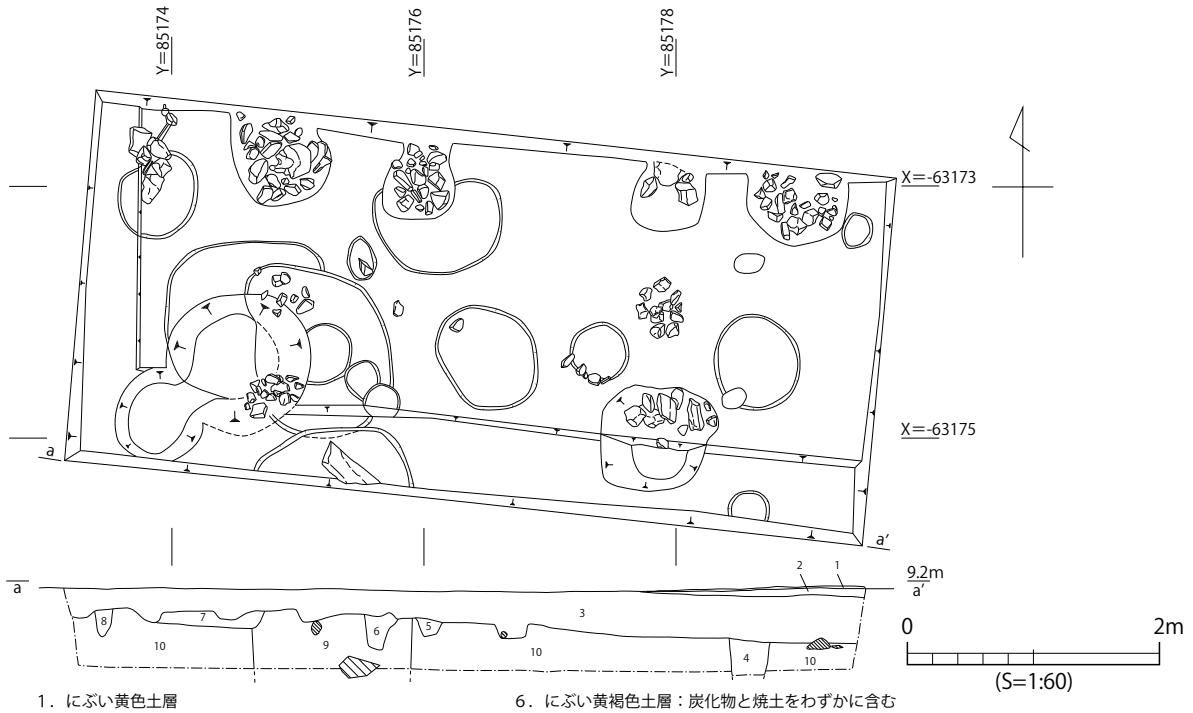
（２）T60

東脇殿の確認を目的に設定した幅1.5m、長さ5.5mのトレンチである（第17図）。基本層序は地表から近現代の造成土（暗褐色土）、暗灰黄色土（第２整地層）である。遺構は複数のピットと井戸１基を検出した。ピットの多くは埋土が黒色土であることから中世以降の遺構と考えられる。

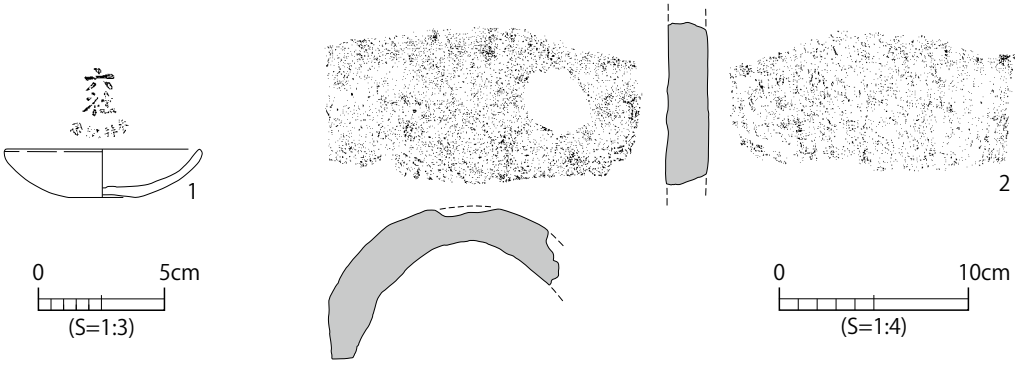
井戸からは土師器や緑釉陶器が出土したほか、T60の埋め戻し土中からではあるが肥前系陶器が出土している。１は肥前系陶器の輪花皿である。帆柱窯産で1580 ～ 1594年の年代が想定される。この時期、当地は六所神社の社地であることが想定され、この陶器の受容者を想起させる。



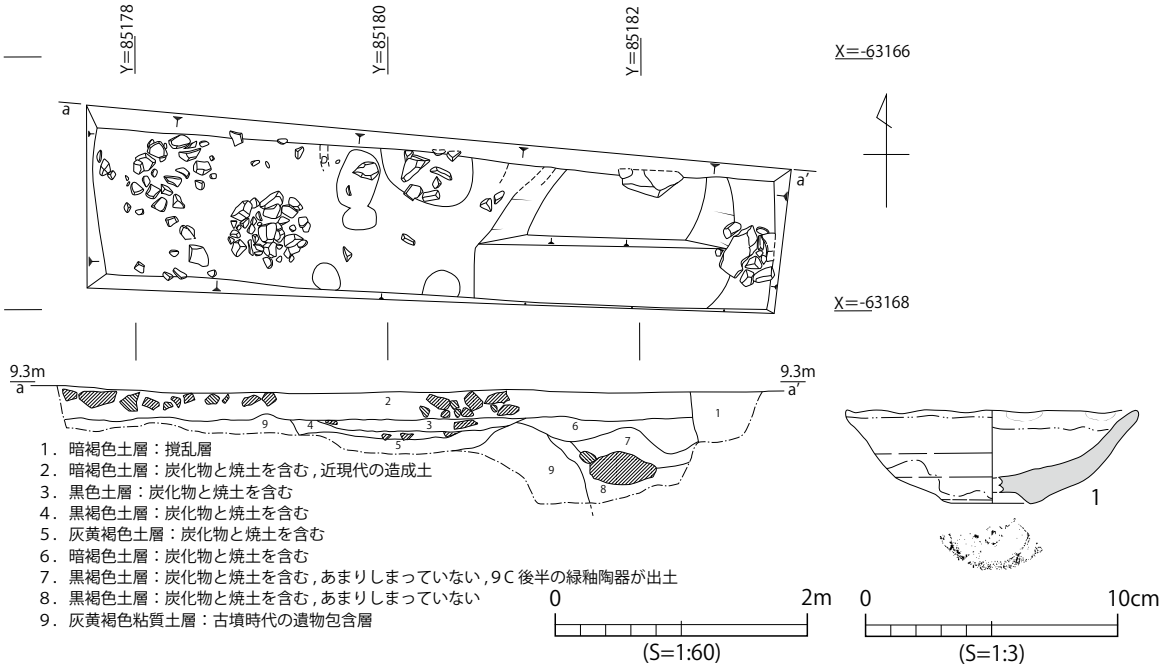
第15図　T69・T70・T71遺構配置図（S=1/300）



1．にぶい黄色土層
●2．暗褐色土層 : 炭化物と焼土を含む ,5 ㎝以下の礫を少し含む
3．にぶい黄褐色土層：やや砂質 ,3 ㎝以下の礫をわずかに含む
4．黒褐色土層：にぶい黄褐色土がブロック状に混じる
5．黒褐色土層
6．にぶい黄褐色土層：炭化物と焼土をわずかに含む
7．黒褐色土層：炭化物と焼土をわずかに含む
8．にぶい黄褐色土層：明褐色土がブロック状に混じる
9．暗灰黄色粘質土層
※掲載遺物出土層に●をつけた

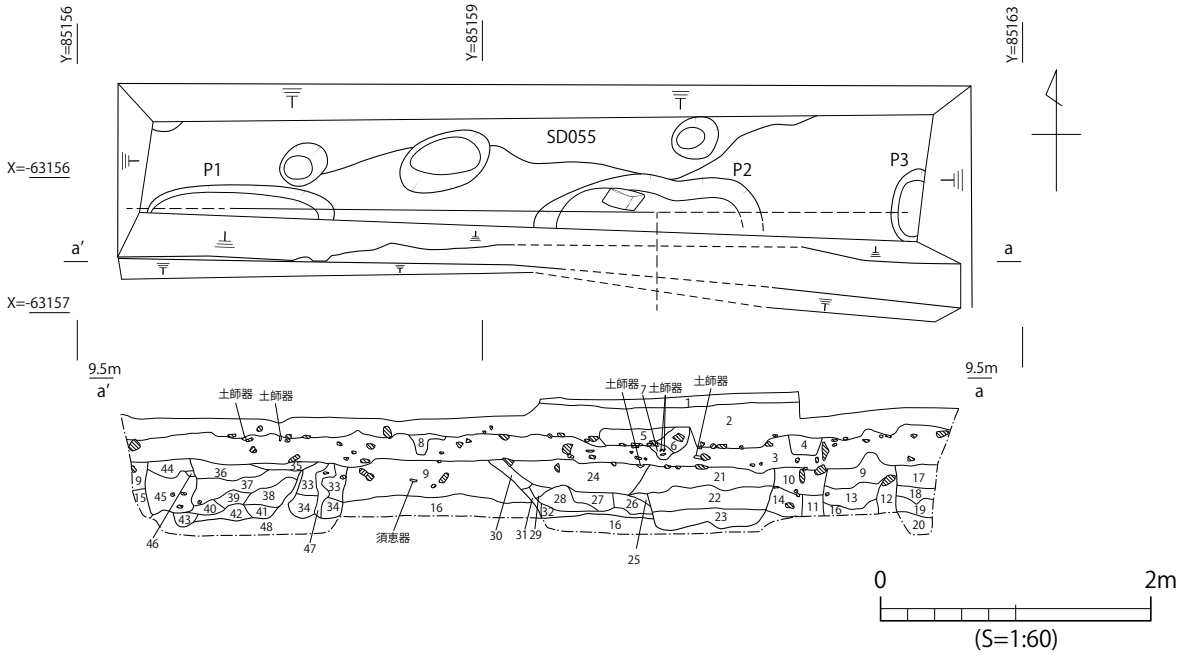


第16図　T59実測図・出土遺物



1．暗褐色土層：攪乱層
2．暗褐色土層：炭化物と焼土を含む , 近現代の造成土
3．黒色土層：炭化物と焼土を含む
4．黒褐色土層：炭化物と焼土を含む
5．灰黄褐色土層：炭化物と焼土を含む
6．暗褐色土層：炭化物と焼土を含む
7．黒褐色土層：炭化物と焼土を含む , あまりしまっていない , 9Ｃ後半の緑釉陶器が出土
8．黒褐色土層：炭化物と焼土を含む , あまりしまっていない
9．灰黄褐色粘質土層：古墳時代の遺物包含層

第17図　T60実測図・出土遺物



1　公園造成土
2　暗褐色土（10YR3/3）
3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）第１整地層 , やや砂質
4　黒褐色土（10YR3/2）Pit 埋土 , 炭化物 , 土師器含む , 中世？
5　明黄褐色土（10YR6/6）攪乱？ 2 の土を多く含む
6　暗褐色土（10YR2/4）5 の土を含む ,Pit 埋土
7　暗褐色土（10YR3/4）土師器含む ,Pit 埋土？ 6 と一連？
8　黒褐色土（10YR3/2）Pit 埋土 , 炭化物 , 土師器含む , 中世？
9　灰黄褐色土（10YR5/2）奈良時代の遺構面
10　灰黄褐色土（10YR5/2）奈良時代の遺構面 ,9 よりもやや明るい
11　灰黄褐色土（10YR5/2）奈良時代の遺構面
　10 よりも灰色の土が多く混じる
12　褐灰色土（10YR5/1）炭化物少量含む , 奈良時代の遺構面か遺構？
　平面形がおえず不明
13　褐灰色土（10YR5/1）炭化物多く含む , 奈良時代の遺構面か遺構？
　平面形がおえず不明
14　褐灰色土（10YR5/1）炭化物多く含む , 奈良時代の遺構面か遺構？
　平面形がおえず不明
15　黄褐色土（10YR5/6）SD055 埋土か？平面形がおえないため不明
16　にぶい黄褐色土（10YR4/3）SD055 埋土 , 炭化物 , 土師器含む
17　灰黄褐色土（10YR4/2）Pit 埋土 , 炭化物含む
18　にぶい黄褐色土（10YR4/3）Pit 埋土 , 斜め方位か正方位？
　SB020 より前
19　黄褐色土（10YR5/6）Pit 埋土 , 斜め方位か正方位？ SB020 より前
20　明黄褐色土（10YR6/6）Pit 埋土 , 斜め方位か正方位？ SB020 より前
21　黄褐色土（10YR5/6）Pit 掘方
22　にぶい黄褐色土（10YR5/4）Pit 掘方
23　にぶい黄褐色土（10YR4/3）Pit 掘方
24　にぶい黄橙色土（10YR6/4）Pit 抜き取り
25　にぶい黄橙色土（10YR6/3）Pit 抜き取り
26　にぶい黄褐色土（10YR5/3）
　にぶい黄橙色 (10YR7/3) の土が少量混じる ,Pit 抜き取り
27　にぶい黄褐色土（10YR5/3）
　にぶい黄橙色 (10YR7/3) の土が多く混じる ,Pit 抜き取り
28　にぶい黄褐色土（10YR5/3）Pit 抜き取り
29　明黄褐色土（10YR7/6）Pit 抜き取り
30　にぶい黄橙色土（10YR7/4）Pit 抜き取り
31　灰黄褐色土（10YR6/2）Pit 抜き取り
32　灰黄褐色土（10YR4/2）やや金気ある , 褐色強い ,Pit 抜き取り
33　にぶい黄褐色土（10YR4/3）炭化物含む ,Pit 掘方
34　灰黄褐色土（10YR4/2）Pit 掘方
35　にぶい黄橙色土（10YR6/4）Pit 抜き取り
36　にぶい黄褐色土（10YR5/3）Pit 抜き取り
37　灰黄褐色土（10YR5/2）Pit 抜き取り
38　灰黄褐色土（10YR4/2）Pit 抜き取り
39　褐灰色土（10YR5/1）Pit 抜き取り
40　褐灰色土（10YR6/1）37 の土を含む ,Pit 抜き取り
41　にぶい褐色土（7.5YR5/4）Pit 抜き取り
42　明褐色土（7.5YR5/6）　Pit 抜き取り
43　橙色土（7.5YR6/6）　Pit 抜き取り
44　灰黄渇色土（10YR6/2）褐色の土を含む ,Pit 掘方
45　にぶい褐色土（10YR4/3）Pit 掘方
46　明黄褐色土（10YR6/6）Pit 掘方
47　灰黄褐色土（10YR6/2）Pit 掘方
48　褐灰色土（10YR6/1）古墳時代の基盤層？

第18図　昭和調査区（Ⅰ区）再発掘箇所実測図（S=1:60）

2　T70

東脇殿の検出と正殿南側の状況を確認するため T69 の西に設定した調査区である（第 6 図）。T69 と同様に調査区は東西、南北に土層観察用の畦を設定し、中央の畔から東側を東区、西側を西区とした。また北から 1 区とし、東 3 区、西 2 区まで設定した。2 区・3 区は近現代の攪乱の影響を受けている。基本層序は 1 区では地表から近現代の造成土（暗褐色土）、第 1 整地層（にぶい黄褐色土）、第 2 整地層（暗灰黄色土）である（第 8 図、第12図）。2・3 区では地表から近現代の造成土（暗褐色土）、暗灰黄色土（第 2 整地層）である（第 9 図、第10図、第12図、第13図）。

遺構は多数のピットのほか、溝 1 条、土坑 5 基、石敷遺構を検出した。主な遺構に97号溝、73号土坑、74号土坑、75号土坑、76号土坑、77号土坑などがあるほか、35・36号建物が T70 にまたがって検出されている。37号建物と 1 号石敷遺構についても T71 にまたがって検出されている（第 7 図、第15図）。

遺物は近現代の造成土中から古墳時代から近世以降の遺物が出土した。９世紀中葉～ 12世紀後半の土師器が多く出土している。

３　T71

正殿南側の状況と昭和調査区（Ⅰ区）の再発掘を目的に設定した調査区である（第６図）。南北２つの調査区を設け、北を１区、南を２区とした。基本層序は１区では地表から近現代の造成土（暗褐色土）、第１整地層（にぶい黄褐色土）、第２整地層（暗灰黄色土）である（第11図）。２区では、後世の改変により地表から近現代の造成土（暗褐色土）、第２整地層（暗灰黄色土）の順で堆積している（第11図）。

遺構は複数のピット、溝１条、石敷遺構を確認した。主な遺構に98号溝があるほか、37号建物と１号石敷遺構は、T71にまたがって検出されている（第７図、第15図）。昭和調査区（Ⅰ区）の再発掘部分では、複数のピットと溝１条を再検出した。主な遺構に38号建物とSD055がある（第18図）。

遺物は近現代の造成土中から古墳時代から近世以降の遺物が出土した。９世紀中葉～ 12世紀後半の土師器が多く出土している。

第４節　遺構と遺物

１　奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構は建物４棟、溝３条、土坑８基、石敷遺構、井戸１基を検出した。

（１）建物

35 号建物（第 19 図、第 20 ～ 23 図）

T69西１・２区からT70東１・２区にかけて検出した建物である。桁行３間×梁行２間で柱間はいずれも３m（10尺）である。柱掘方の重複関係から、２度の建て替えが行われ、掘立柱建物から礎石建物へ建て替えられたことが確認された。それぞれ35号建物Ａ（掘立柱建物）、35号建物Ｂ（掘立柱建物）、35号建物Ｃ（礎石建物）と呼称する。いずれの地点でも西側に古い掘方、東側に新しい掘方という順に重複している。いずれの掘方も一辺約１～ 1.5m の規模である。

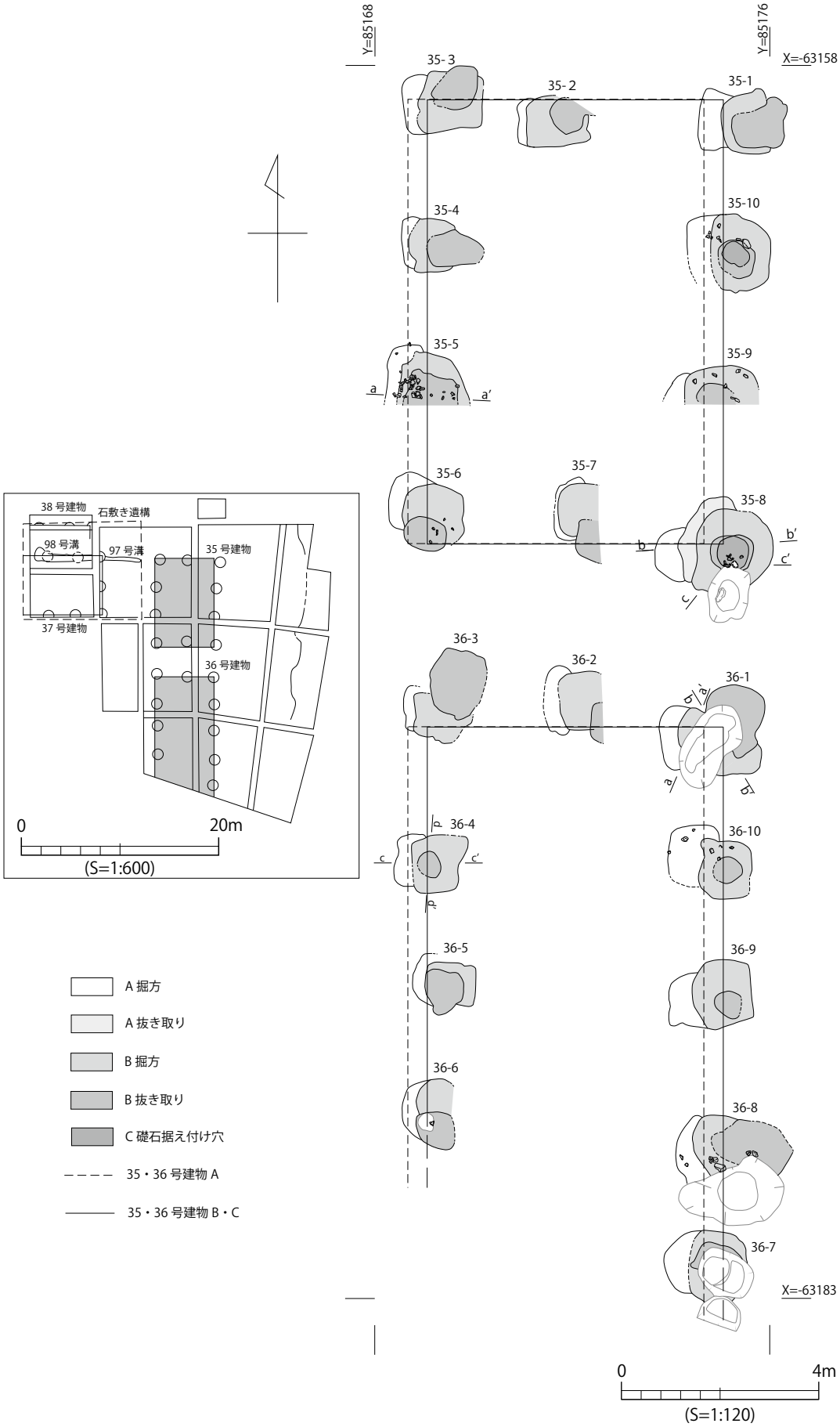
検出した遺構のうち、Ｐ５とＰ８の断ち割りを行った。Ｐ５では、底面標高8.28m、Ｐ８では底面標高8.08m であり、隅柱であるＰ８の方が底面標高が低い。いずれの底面標高も後述する36号建物の底面標高よりも低い。出土遺物は断ち割りのほか、遺構検出中や段下げの際に出土したものである。

35 号建物Ａ

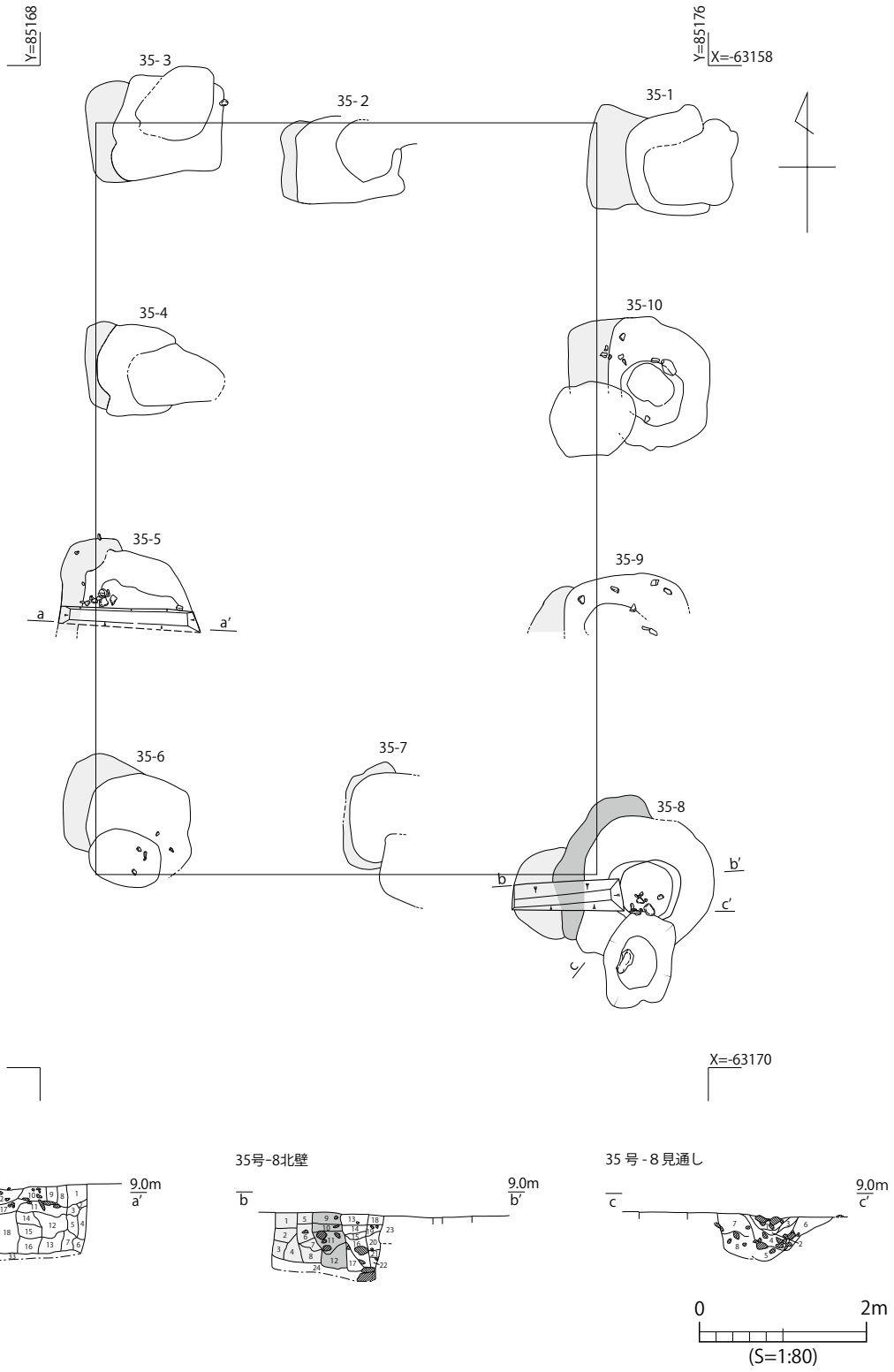
掘立柱建物で、桁行３間×梁行２間で柱間はいずれも３m（10尺）である。柱掘方の一部を確認できた。抜取穴や柱痕などは建て替えの際の新しい掘方などの削平により確認できなかった。唯一Ｐ８において、抜取穴を検出できたが、大部分は建て替えの際の新しい掘方により削平されている。

35 号建物Ｂ

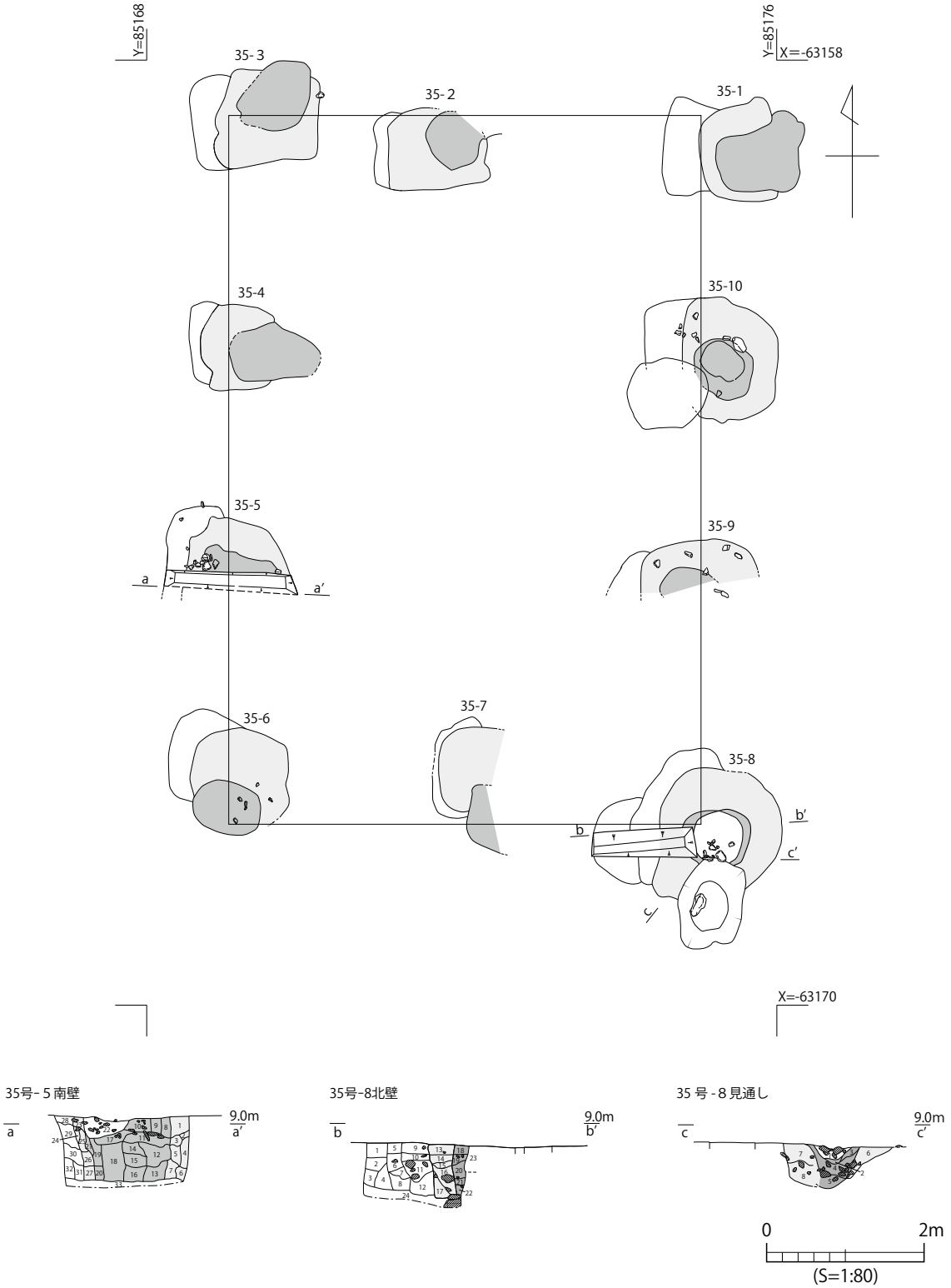
掘立柱建物で、桁行３間×梁行２間で柱間はいずれも３m（10尺）である。35号建物Ａよりも



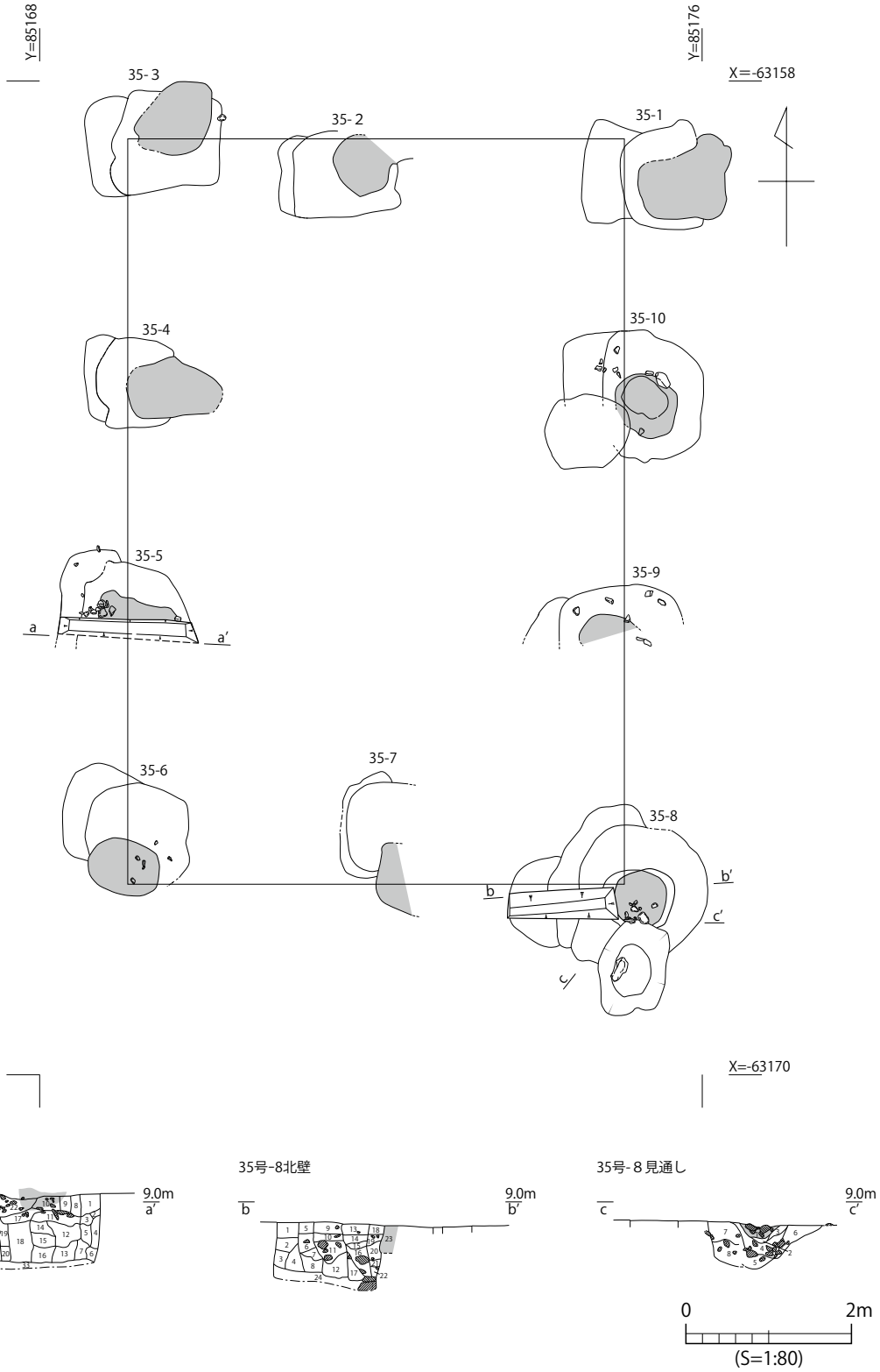
第19図　35・36号建物平面図（S=1/120）



第20図　35 号建物 A 実測図（S=1/80）

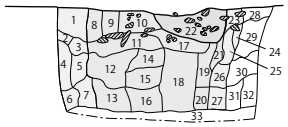


第21図　35号建物Ｂ実測図（S=1/80）



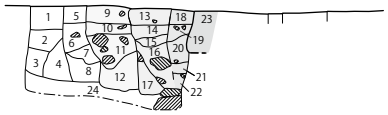
第22図　35号建物Ｃ実測図（S=1/80）

35号-５南壁



1．にぶい黄橙色(10YR7/3)B掘方
2．明黄褐色(10YR7/6)B掘方
3．明黄褐色(10YR7/6)B掘方
4．にぶい黄褐色土(10YR5/4)B掘方
5．にぶい黄褐色土(10YR7/4)B掘方
6．にぶい黄褐色土(10YR5/3)B掘方
7．にぶい黄褐色土(10YR5/3)B掘方
8．にぶい黄褐色土(10YR7/2)B抜き取り
9．黒褐色土(10YR3/1)Pit埋土,中世？
10. にぶい黄橙色土(10YR6/4)B抜き取り
11. 黄橙色土(10YR7/8)B抜き取り
12. にぶい黄橙色土(10YR6/4)B抜き取り
13. にぶい黄橙色土(10YR6/3)B抜き取り
14. にぶい黄橙色土(10YR6/3)B抜き取り
15. にぶい黄橙色土(10YR6/3)B抜き取り
16. 灰黄褐色土(10YR5/2)B抜き取り
17. 灰黄褐色土(10YR6/2)B抜き取り
18. にぶい黄褐色土(10YR5/3)柱跡痕状に残る,B抜き取り
19. にぶい黄橙色土(10YR6/3)B抜き取り
20. にぶい黄褐色土(10YR5/4)B抜き取り
21. にぶい黄橙色土(10YR6/3)B抜き取り
22. にぶい黄褐色土(10YR7/2)C礎石据え付け穴
23. 灰黄褐色土(10YR5/2)B掘方
24. 灰黄褐色土(10YR6/2)B掘方
25. にぶい黄褐色土(10YR5/3)B掘方
26. にぶい黄褐色土(10YR5/4)B掘方
27. にぶい黄褐色土(10YR4/3)B掘方
28. にぶい黄橙色土(10YR7/3)A掘方
29. にぶい黄橙色土(10YR6/4)A掘方
30. にぶい黄橙色土(10YR5/4)A掘方
31. にぶい黄橙色土(10YR4/3)A掘方
32. にぶい黄橙色土(10YR4/3)A掘方
33. にぶい黄橙色土(10YR7/2)基盤層

35号-8北壁



1．明黄褐色土(10YR6/6)A掘方
2．にぶい黄橙色(10YR6/4)A掘方
3．にぶい黄褐色土(10YR5/4)A掘方
4．灰黄褐色土(10YR5/2)A掘方
5．にぶい黄褐色土(10YR5/3)A掘方
6．にぶい黄褐色土(10YR5/3)A掘方
7．黄褐色土(10YR5/6)A掘方
8．褐灰色土(10YR5/1)A掘方
9．黄褐色土(10YR5/6)A抜き取り
10. 褐色土(10YR4/4)A抜き取り
11. 灰黄褐色土(10YR5/2)A抜き取り
12. 褐灰色土(10YR4/1)A抜き取り
13. にぶい黄褐色土(10YR5/3)B掘方
14. にぶい黄褐色土(10YR4/3)B掘方
15. 灰黄褐色土(10YR4/2)B掘方
16. 灰黄褐色土(10YR6/2)B掘方
17. 灰黄褐色土(10YR6/2)B掘方
18. にぶい黄橙色土(10YR6/4)B抜き取り
19. 黄褐色土(10YR5/6)B抜き取り
20. 褐灰色土(10YR6/1)B抜き取り
21. 褐灰色土(10YR6/1)B抜き取り
22. 褐灰色土(10YR5/1)B抜き取り
23. 灰色土(10YR8/1)C礎石据え付け穴
24. 灰黄色土(2.5YR6/2)基盤層

35号-８見通し

1．35号 -８C礎石据え付け穴
2．灰黄褐色土(10YR4/2)B抜き取り
3．にぶい黄褐色土(10YR5/3)B抜き取り
4．灰黄褐色土(10YR5/2)B抜き取り
5．にぶい黄橙色土(10YR6/3)B抜き取り
6．にぶい黄褐色土(10YR5/4)B掘方
7．灰黄褐色(10YR6/2)B掘方
8．褐灰色土(10YR5/1)B掘方,A抜き取り

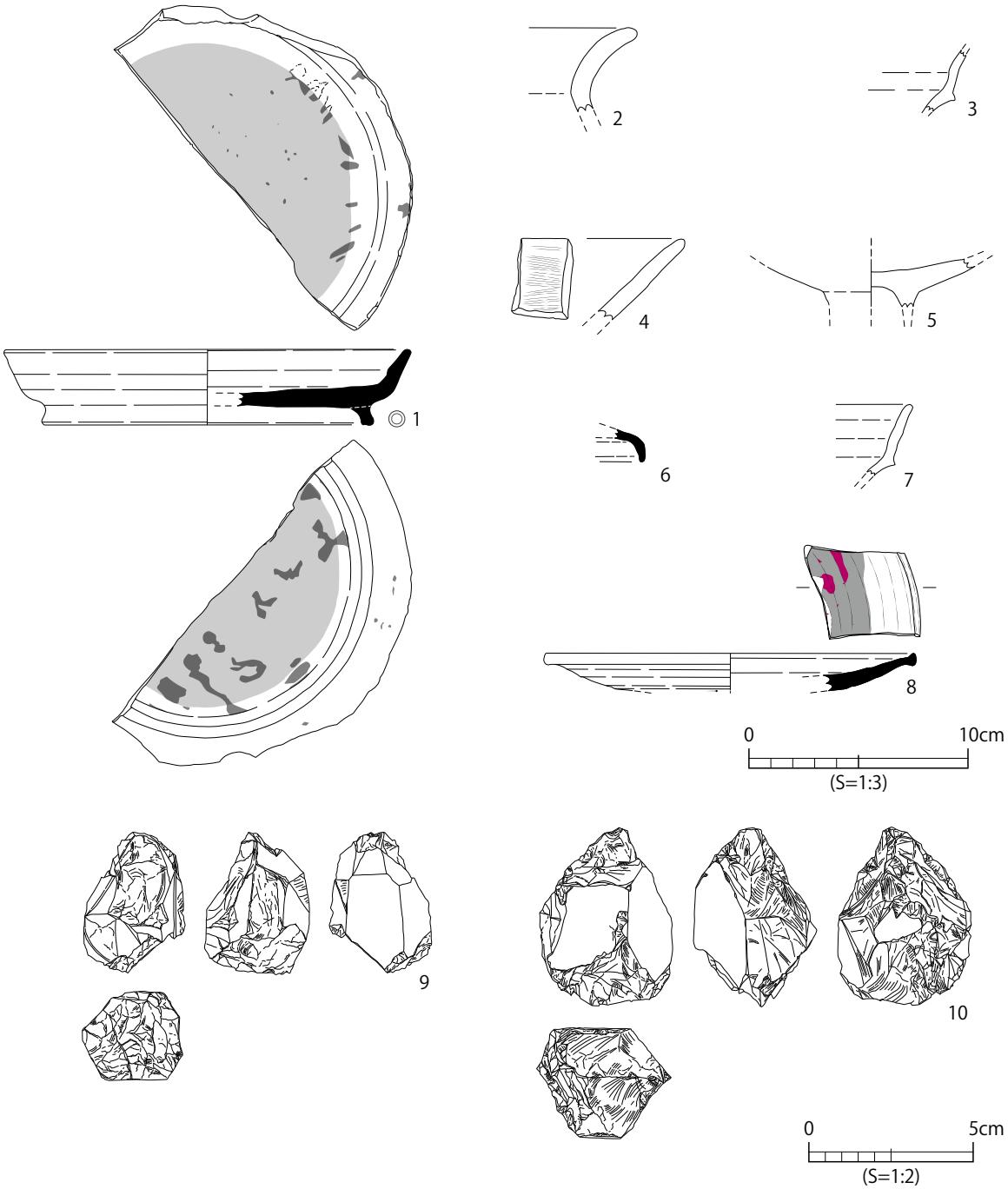
A 掘方
A 抜き取り
B 掘方
B 抜き取り
C 礎石据え付け穴

0　2m
(S=1:60)

第23図　35号建物土層図（S=1/60）

やや東側で建て替えが行われている。柱掘方と抜取穴を検出した。抜き取り穴の埋土には白色土が入っている箇所もある。これらは土間や基壇の化粧土の可能性があるが、実際にそれらの痕跡は確認できていない。

いずれの抜取穴も建物の外側に向かって抜取穴の範囲を検出したことから、建物の外に向かって柱を抜き取っていたものと考えられる。P10は柱痕状に抜取痕跡が検出されており、P10では柱を



第24図　35号建物出土遺物

切抜した可能性がある。P10の抜取痕跡の規模は約0.5m 程度でおおよその柱の太さが想定できる。また、抜取穴埋土からは、須恵器高坏が 1 点出土した。

35 号建物 C

礎石建物で、桁行 3 間×梁行 2 間で柱間はいずれも 3 m（10尺）である。35 号建物 B とほぼ位置を変えず、建て替えが行われている。部分的ではあるが、35 号建物 B の柱抜取穴を掘り込んでいる礎石据付穴とそれに伴う根石を検出した。根石はいずれも拳大である。礎石そのものは確認できなかった。

出土遺物

第24図１はＰ１Ｂ抜き取り穴から出土した須恵器高台付皿である。内外面ともに研磨痕と墨痕が残る転用硯である。出雲国府第４型式である。２はＰ５Ｂ抜き取り穴から出土した土師器甕である。３はＰ８Ａ掘方から出土した土師器甕、４・５は高坏である。６はＰ８Ａ抜き取り穴から出土した須恵器蓋、７は土師器甕である。８はP10B抜き取り穴から出土した須恵器高坏である。内面に研磨痕があり、一部に墨痕と朱墨（ベンガラ）が付着する転用硯である。出雲国府第４～５型式と考えられる。９・10はP10から出土した水晶である。

36号建物（第19図、第25～28図）

T69西２・３区からT70東２・３区にかけて検出した建物である。桁行４間以上×梁行２間で柱間は東西3m（10尺）、南北2.7m（9尺）である。建物の南端は調査区外のため、検出できていない。35号建物跡と同様に柱掘方の重複関係から、２度の建て替えが行われ、掘立柱建物から礎石建物へ建て替えられたことが確認された。それぞれ36号建物Ａ（掘立柱建物）、36号建物Ｂ（掘立柱建物）、36号建物Ｃ（礎石建物）と呼称する。35号建物と同様にいずれの地点でも西側に古い掘方、東側に新しい掘方という順に重複している。いずれの掘方も一辺約１～1.5mの規模である。検出した遺構のうち、Ｐ１とＰ４の断ち割りを行った。Ｐ１では底面標高8.24m、Ｐ４では底面標高8.36mで、35号建物と同様に隅柱であるＰ１の方が底面標高が低い。断ち割りのほか、遺構検出中や段下げの際に遺物は出土したが、図化可能な破片は出土していない。

36号建物Ａ

掘立柱建物で桁行４間以上×梁行２間で柱間は東西3m（10尺）、南北2.7m（9尺）である。柱掘方を確認できた。抜取穴や柱痕などは建て替えの際の掘方などの削平により、確認できなかった。

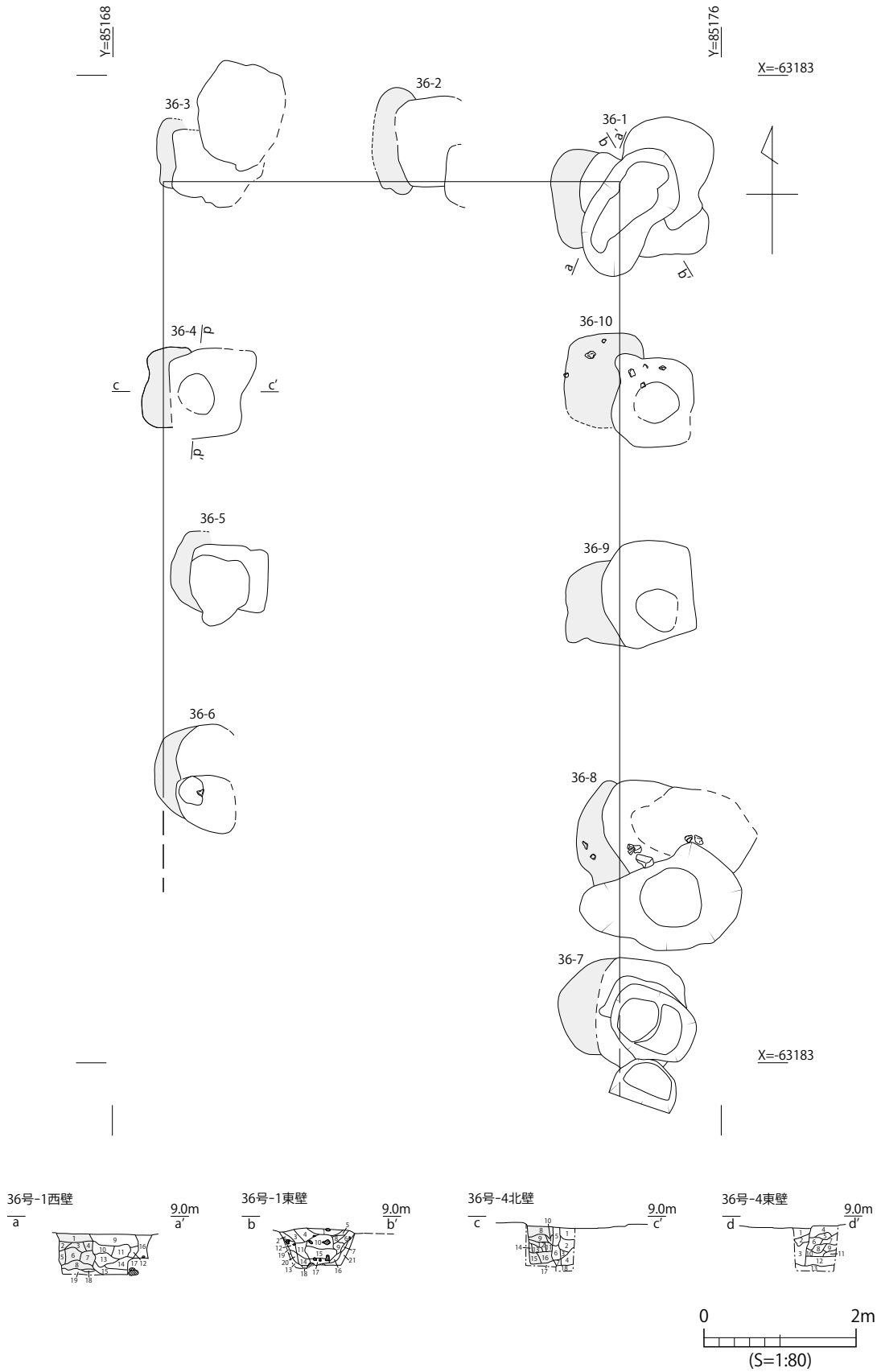
36号建物Ｂ

掘立柱建物で桁行４間以上×梁行２間で柱間は東西3m（10尺）、南北2.7m（9尺）である。柱掘方と抜取穴を検出した。36号建物Ａよりもやや東側で建て替えが行われている。35号建物Ｂと同様に抜取穴の埋土が白色土である箇所が見られる。これらは土間や基壇の化粧土の可能性があるが、実際にそれらの痕跡は確認できていない。火山灰に由来するものである可能性があることから自然科学分析を実施したが、火山ガラスなどはほとんど確認できなかった。石英や長石などを多く含んでいることから白色を呈していると考えられ、近傍を流れる意宇川の川砂などが用いられた可能性がある。

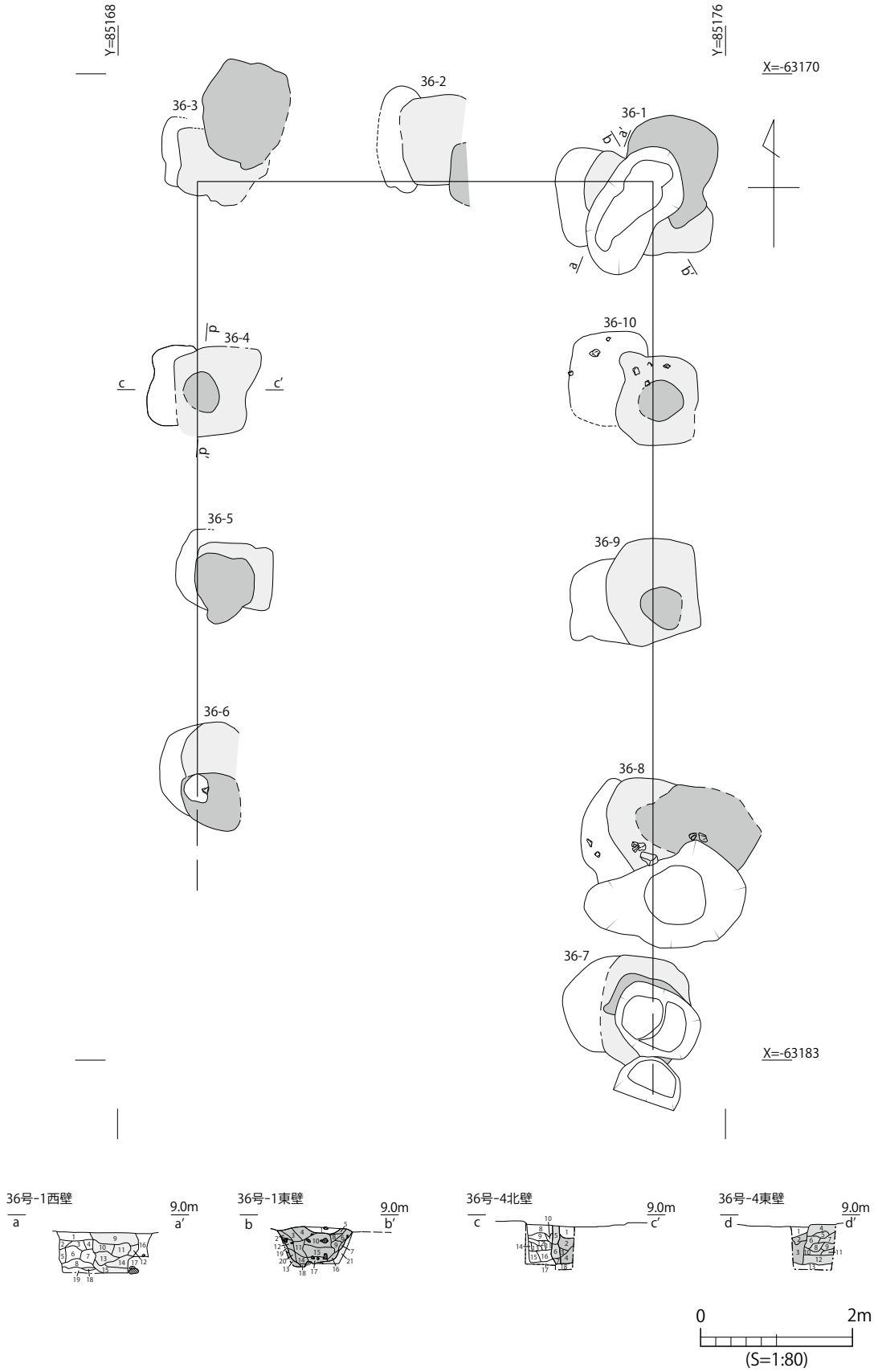
35号建物と同様にいずれの抜取穴も建物の外側に向かって抜取穴の範囲を検出したことから、建物の外に向かって柱を抜き取っていたものと考えられる。このうちＰ４、Ｐ９、P10で柱痕状に抜取痕跡が検出されており、Ｐ４、Ｐ９、P10は柱を切抜した可能性がある。いずれも抜取痕跡の規模は約0.5m程度で、おおよその柱の太さが想定できる。

36号建物Ｃ

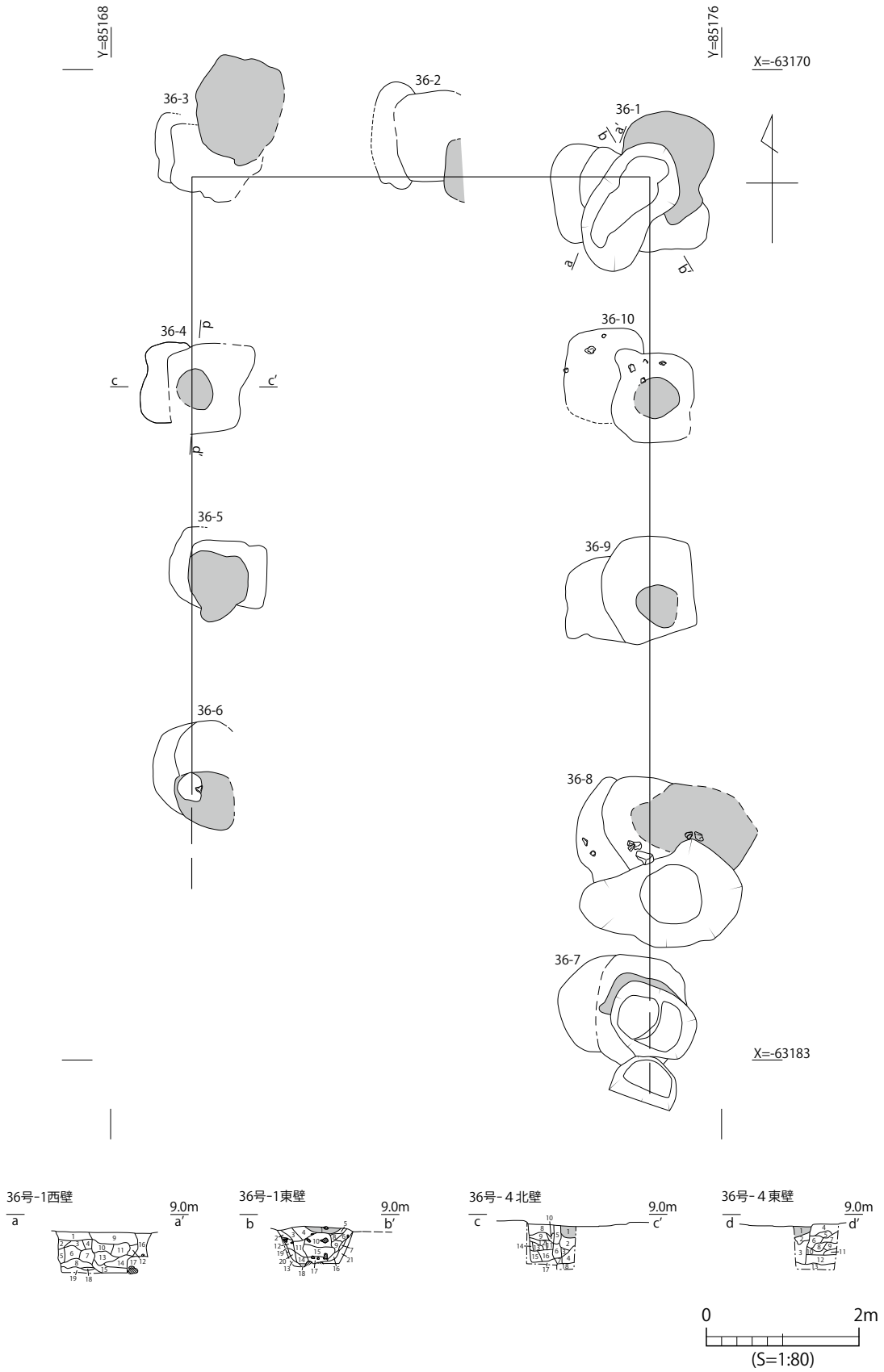
掘立柱建物で桁行４間以上×梁行２間で柱間は東西3m（10尺）、南北2.7m（9尺）である。



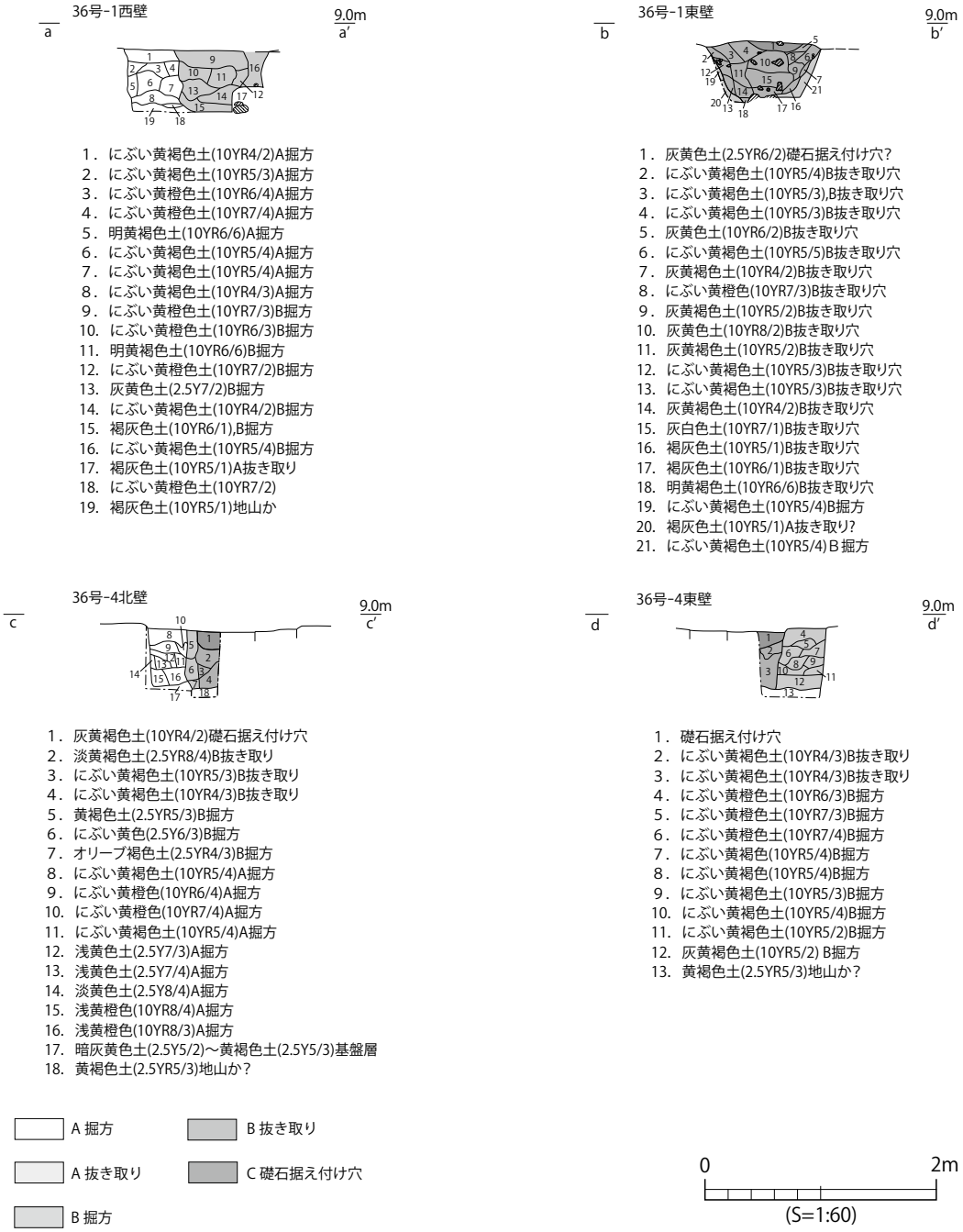
第25図　36号建物 A 実測図（S=1/80）



第26図　36号建物 B 実測図（S=1/80）



第27図　36号建物 C 実測図（S=1/80）

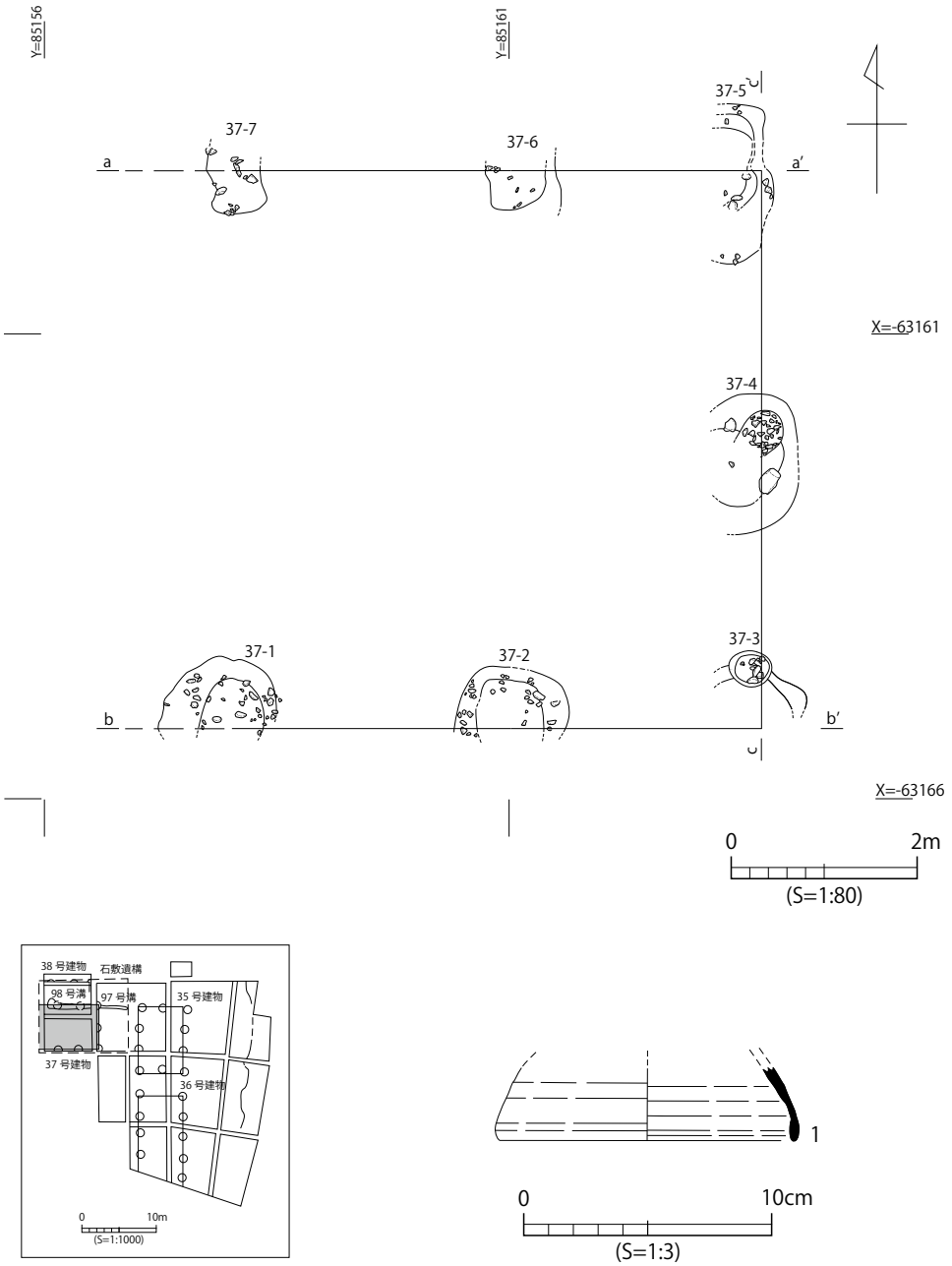


第28図　36号建物土層図（S=1/60）

36号建物Ｂとほぼ位置を変えず、建て替えが行われている。部分的ではあるが、36号建物Ｂの柱抜取穴の上面で礎石据付穴とそれに伴う根石を検出した。

37号建物（第29図）

T70西１区からT71にかけて検出した掘立柱建物である。桁行２間以上×梁行２間で、西側調査区外へさらに広がる可能性がある。柱間は東端を除き、いずれも3m（10尺）である。東端のみ2.7m（９尺）で、SB020の身舎・廂の柱筋と対応するほか、35号建物跡の柱筋とも対応する。柱掘方と抜取穴を検出したことから建て替えはなく、１時期のみの掘立柱建物と考えられる。ただしＰ４



第29図　37号建物実測図・出土遺物

で礎石据付穴と根石の可能性がある穴を検出したが、他の柱掘方周辺でこのような状況は確認できておらず、礎石建物への建て替えについては検討が必要である[1]。１はＰ４抜取穴から出土した須恵器蓋の小片である。

38 号建物（第 18 図）

昭和調査区Ｉ区南端で検出した建物である。３つの大型掘方を検出したほか、そのうちの２つで重複する抜取穴を確認した。Ｐ１とＰ２は柱間３m(10尺)である。Ｐ３は全体を未検出ではあるが、

Ｐ２とＰ３の柱間は2.4～2.7m（８～９尺）程度になると想定される。Ｐ１～Ｐ３は柱間が違うものＰ３が廂となり一連の建物になる可能性がある一方、Ｐ３のみともなわない可能性も想定される。今後の検討が必要である。また、建物北側では、これらにともなう掘方等は検出されていないことから、建物全体は南（石敷遺構下層）に広がるものと考えられる。さらにSB020や37号建物との位置関係から、38号建物はSB020や37号建物に先行する建物と考えられる。

（２）溝

96号溝（第30図）

T69東１・２区にかけて検出した溝である。T69東３区では検出できず、南端は不明であるものの東側に曲がる、もしくは東２区のなかで収まるものと思われる。北端も不明であり、遺構の全体は調査区外へ広がると考えられる。溝の西側肩は確認できたものの、東側の肩は調査区内で確認できておらず、調査区外へと広がる。現状、確認できた規模は、長さ19.8m以上、幅３m以上、深さ0.5mである。主軸は北東に傾く。T69東１区では69号土坑に切られている。

埋土は上層と下層の２層に分かれ、上層からは第８～９型式、下層からは10世紀初め頃までの遺物が多量に出土した。上層、下層とも埋土はそれぞれ別の土が多く混ざり、人為的に埋められたような堆積状況である。また、埋土中の炭化物についてAMS年代測定を実施し、706-882年の年代が得られている。

第31図、第32図は上層出土遺物である。第31図１～４は須恵器無高台坏で、３は内面の底に×印の刻書がある。５は須恵器高台付皿で、口縁が焼け歪んでいる。６は須恵器高台付坏、７は須恵器高坏脚部、８は須恵器壺胴部である。９は須恵器甕口縁で一本描きの波状文が施される。10は須恵器甕の胴部片である。内面全体が研磨され、墨痕と朱墨（ベンガラ）が付着する転用硯である。11は円形硯である。内面が全体に研磨されている。

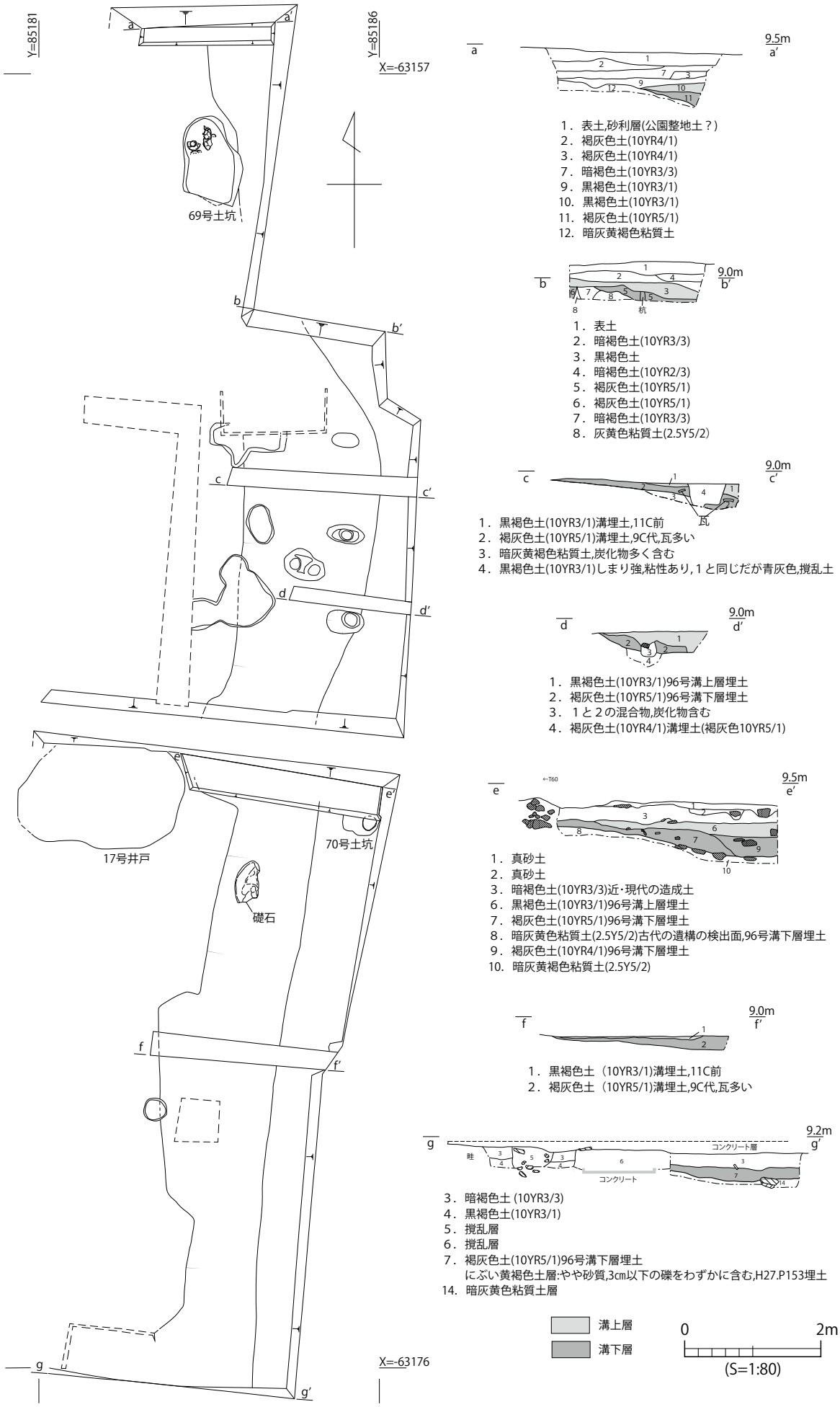
12～14は土師器無高台坏、15は土師器高台付坏、16～18は土師器足高高台付坏である。19・20は土師器甕、21は製塩土器である。

22～24は緑釉陶器である。22は口縁端部を押圧する輪花碗である。

25・26は灰釉陶器で、25は削り出し高台である。いずれも形態的な特徴からK14号窯式の可能性がある。27は山茶碗である。湖西産の可能性がある。28は白磁皿で大宰府Ｃ期に位置づけられる。

第32図１～４は軒丸瓦である。１・２は瓦当部で、１は国分寺２類、２は国分寺３類である。３・４は丸瓦部で、３は焼成軟質、４は焼成硬質である。６は焼成硬質の丸瓦、７・８は熨斗瓦である。いずれも切り割り熨斗で、７は焼成硬質である。９は土錘、10は坩堝である。坩堝は内面に金属が付着しており、その部分について蛍光Ｘ線分析を実施した。その結果からは銅に高いピークがみられる。このことから青銅製品、あるいは銅製品の製作にかかわって使用された可能性がある。

第33～38図は下層出土遺物である。第33図１～５は須恵器蓋である。２・４・５は内面に研磨痕のある転用硯である。５は一部に墨痕、朱墨痕が付着する。６～９は須恵器無高台坏である。７は底部回転ヘラ切りを施す。８は底部内面に刻書がある。また、内面が全体に研磨されている。転用硯である。９は底部内面に漆が付着する。10は須恵器無高台皿で、内面に研磨痕のある転用硯である。11～14は須恵器高台付坏である。13は内面に研磨痕のある転用硯である。15・16は



１．表土,砂利層(公園整地土？)
２．褐灰色土(10YR4/1)
３．褐灰色土(10YR4/1)
７．暗褐色土(10YR3/3)
９．黒褐色土(10YR3/1)
10．黒褐色土(10YR3/1)
11．褐灰色土(10YR5/1)
12．暗灰黄褐色粘質土

１．表土
２．暗褐色土(10YR3/3)
３．黒褐色土
４．暗褐色土(10YR2/3)
５．褐灰色土(10YR5/1)
６．褐灰色土(10YR5/1)
７．暗褐色土(10YR3/3)
８．灰黄色粘質土(2.5Y5/2)

１．黒褐色土(10YR3/1)溝埋土,11C前
２．褐灰色土(10YR5/1)溝埋土,9C代,瓦多い
３．暗灰黄褐色粘質土,炭化物多く含む
４．黒褐色土(10YR3/1)しまり強,粘性あり,１と同じだが青灰色,撹乱土

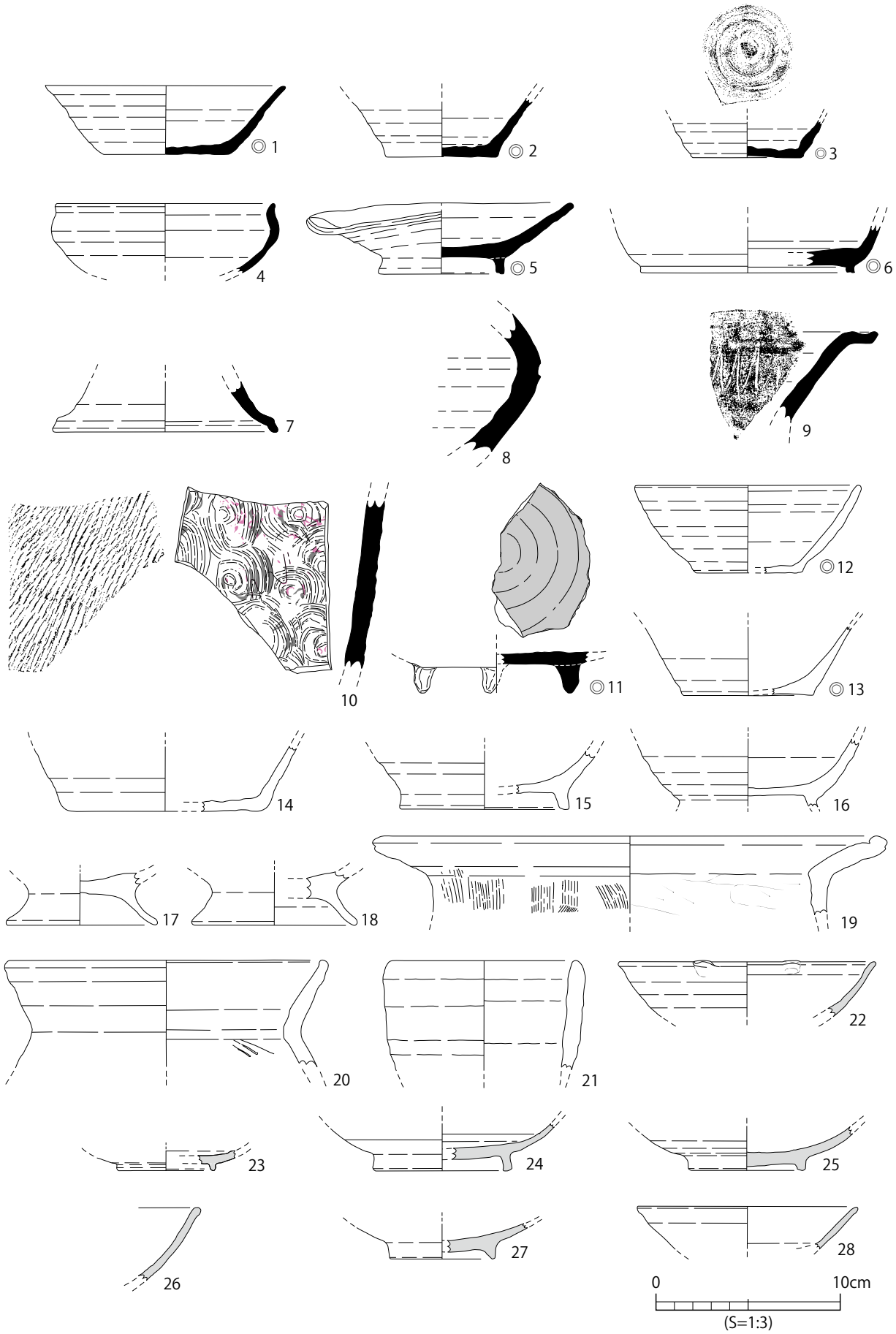
１．黒褐色土(10YR3/1)96号溝上層埋土
２．褐灰色土(10YR5/1)96号溝下層埋土
３．１と２の混合物,炭化物含む
４．褐灰色土(10YR4/1)溝埋土(褐灰色10YR5/1)

１．真砂土
２．真砂土
３．暗褐色土(10YR3/3)近･現代の造成土
６．黒褐色土(10YR3/1)96号溝上層埋土
７．褐灰色土(10YR5/1)96号溝下層埋土
８．暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)古代の遺構の検出面,96号溝下層埋土
９．褐灰色土(10YR4/1)96号溝下層埋土
10．暗灰黄褐色粘質土(2.5Y5/2)

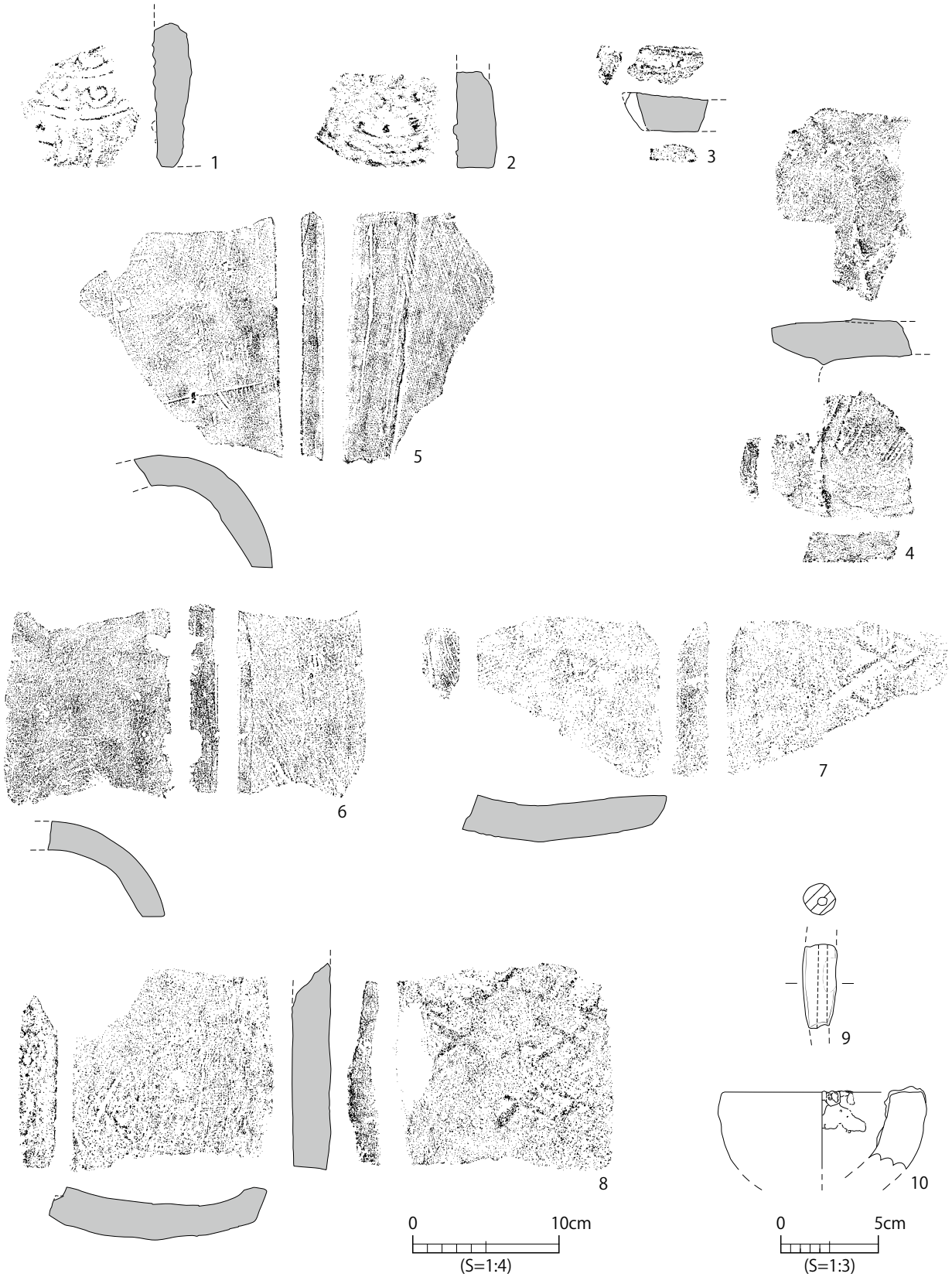
１．黒褐色土（10YR3/1)溝埋土,11C前
２．褐灰色土（10YR5/1)溝埋土,9C代,瓦多い

３．暗褐色土 (10YR3/3)
４．黒褐色土(10YR3/1)
５．撹乱層
６．撹乱層
７．褐灰色土(10YR5/1)96号溝下層埋土
にぶい黄褐色土層:やや砂質,3cm以下の礫をわずかに含む,H27.P153埋土
14．暗灰黄色粘質土層

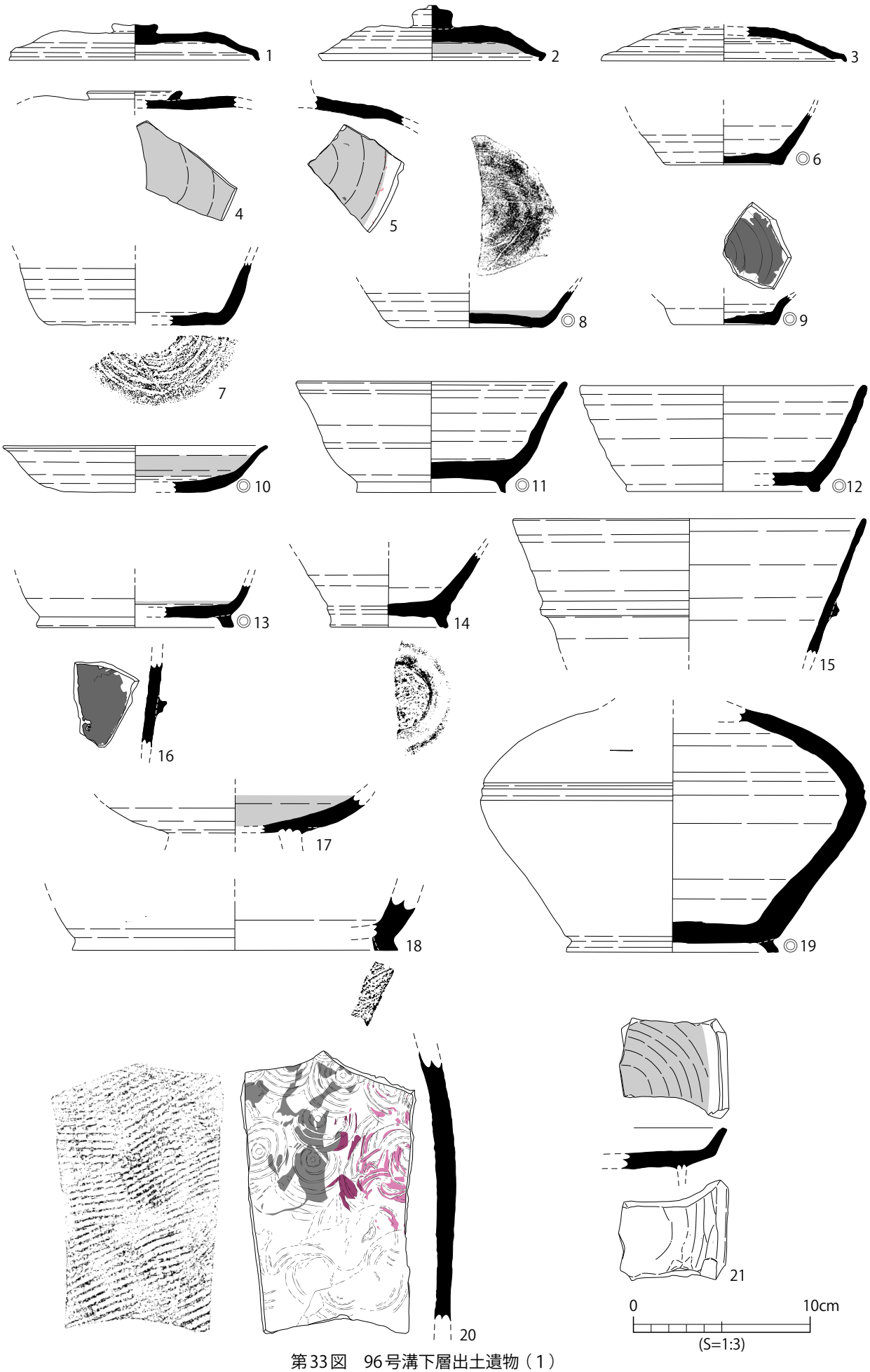
第30図　96号溝実測図（S=1/80）



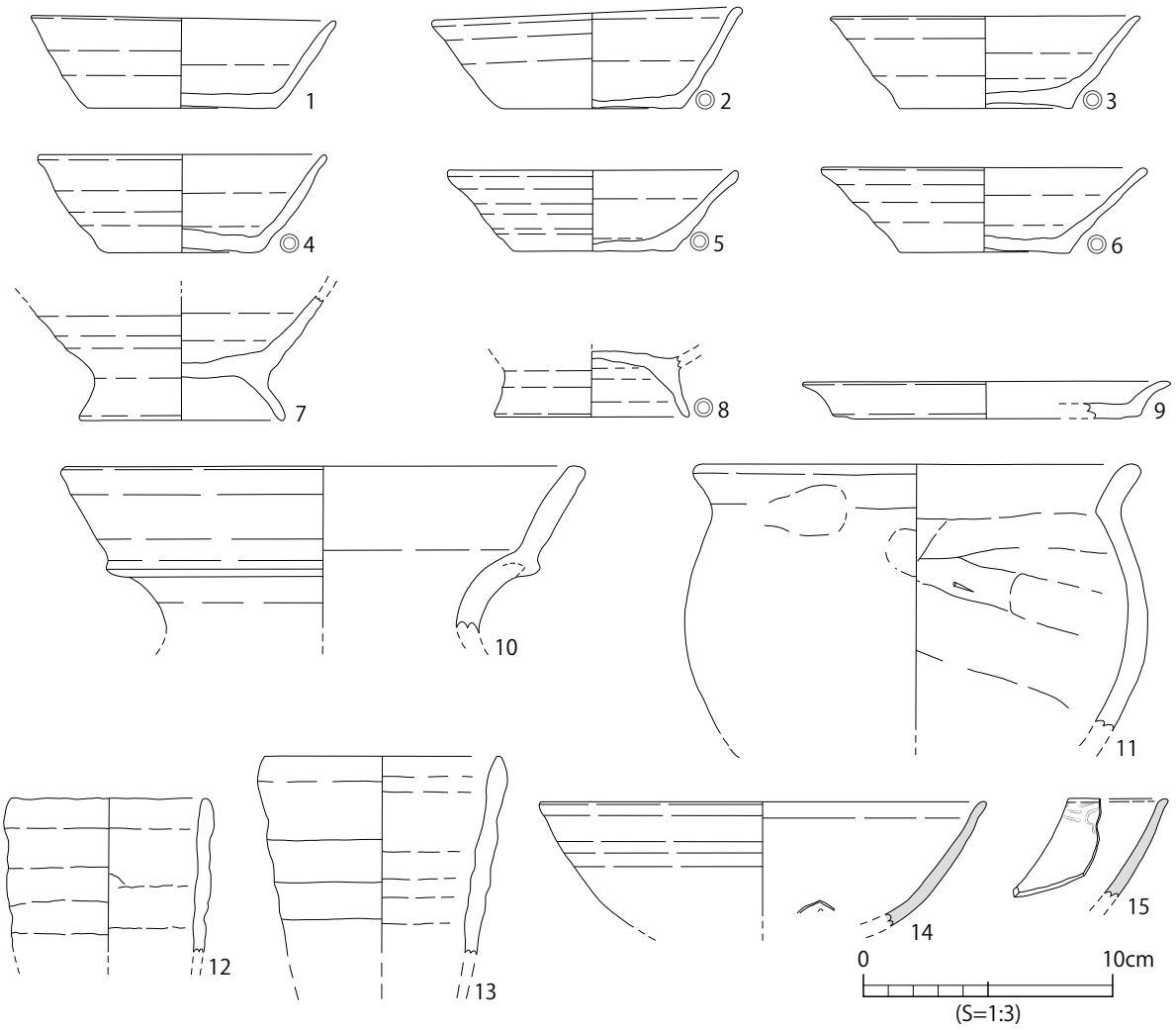
第31図　96号溝上層出土遺物（１）



第32図　96号溝上層出土遺物（２）



第33図　96号溝下層出土遺物（１）

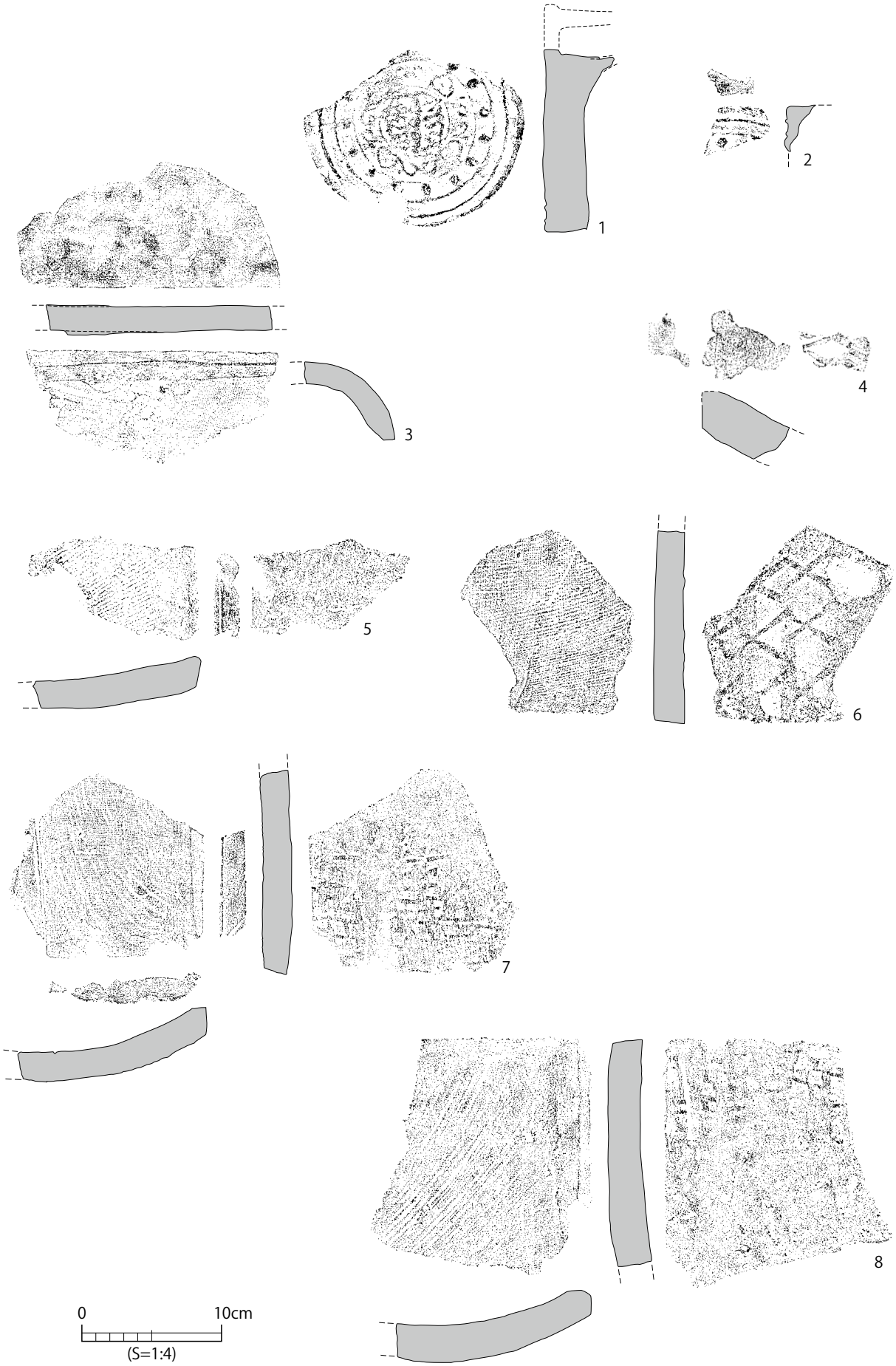


第34図　96号溝下層出土遺物（２）

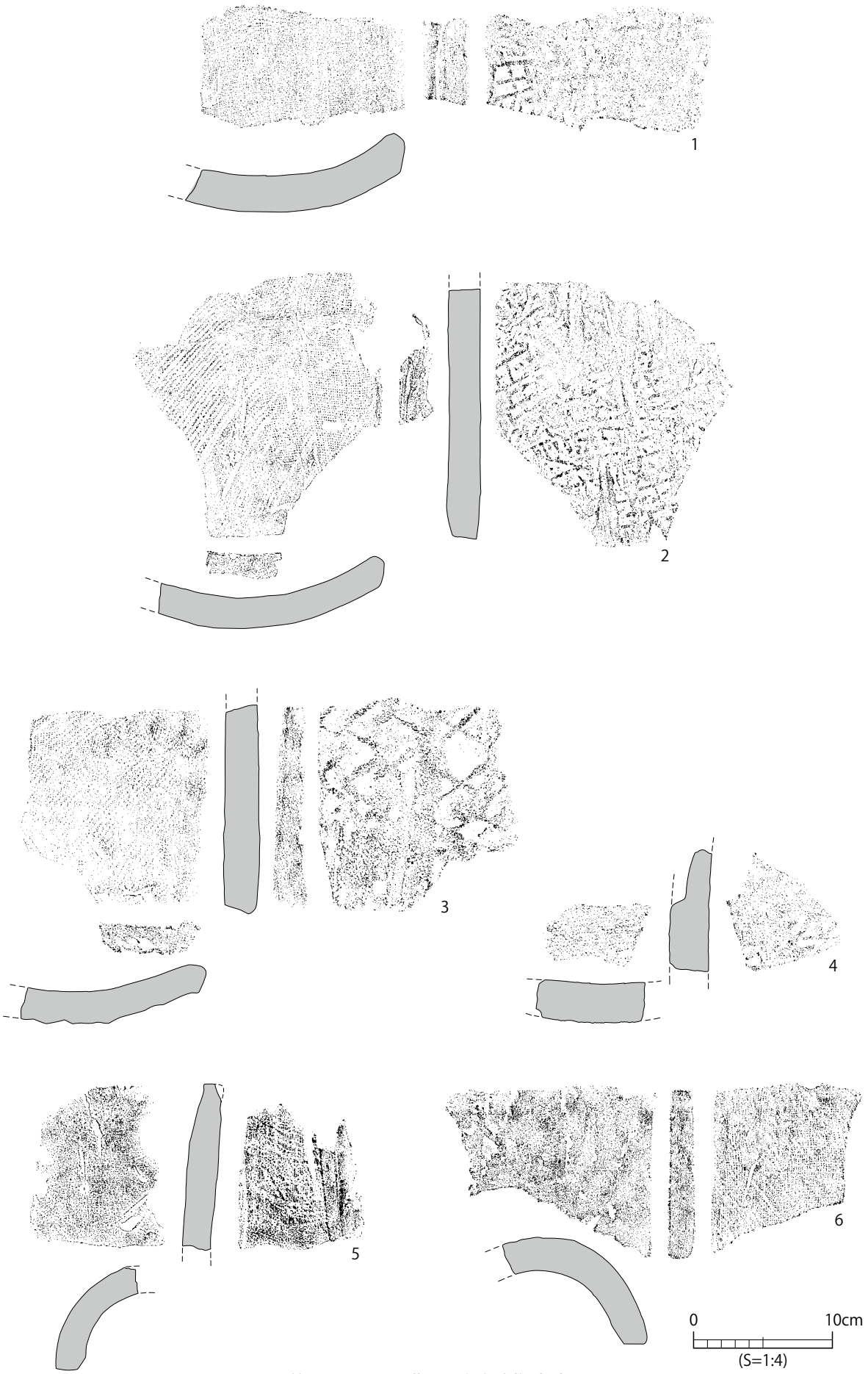
須恵器坏で、胴部に突帯がつく。第５型式頃と考えられる。16は内面に漆が付着している。17は須恵器高坏で、内面に研磨痕のある転用硯である。18は須恵器壺、19は須恵器長頸壺である。20は須恵器甕である。研磨痕はないものの、内面に墨痕と朱墨痕が付着している。21は円形硯である。内面に研磨痕があり、外面には脚の痕跡がある。

第34図１～６は土師器無高台坏である。７・８は土師器足高高台付坏である。９は土師器皿で内外面に赤彩が残る。10は土師器壺である。複合口縁壺で、小谷３新～４（布留Ⅱ併行）に位置づけられる。11は土師器甕である。12・13は製塩土器である。14・15は緑釉陶器碗で、14は内面底部付近に陰刻花文、15は口縁部内面に陰刻花文が施される。いずれも濃緑色を呈する。同一個体の可能性がある。

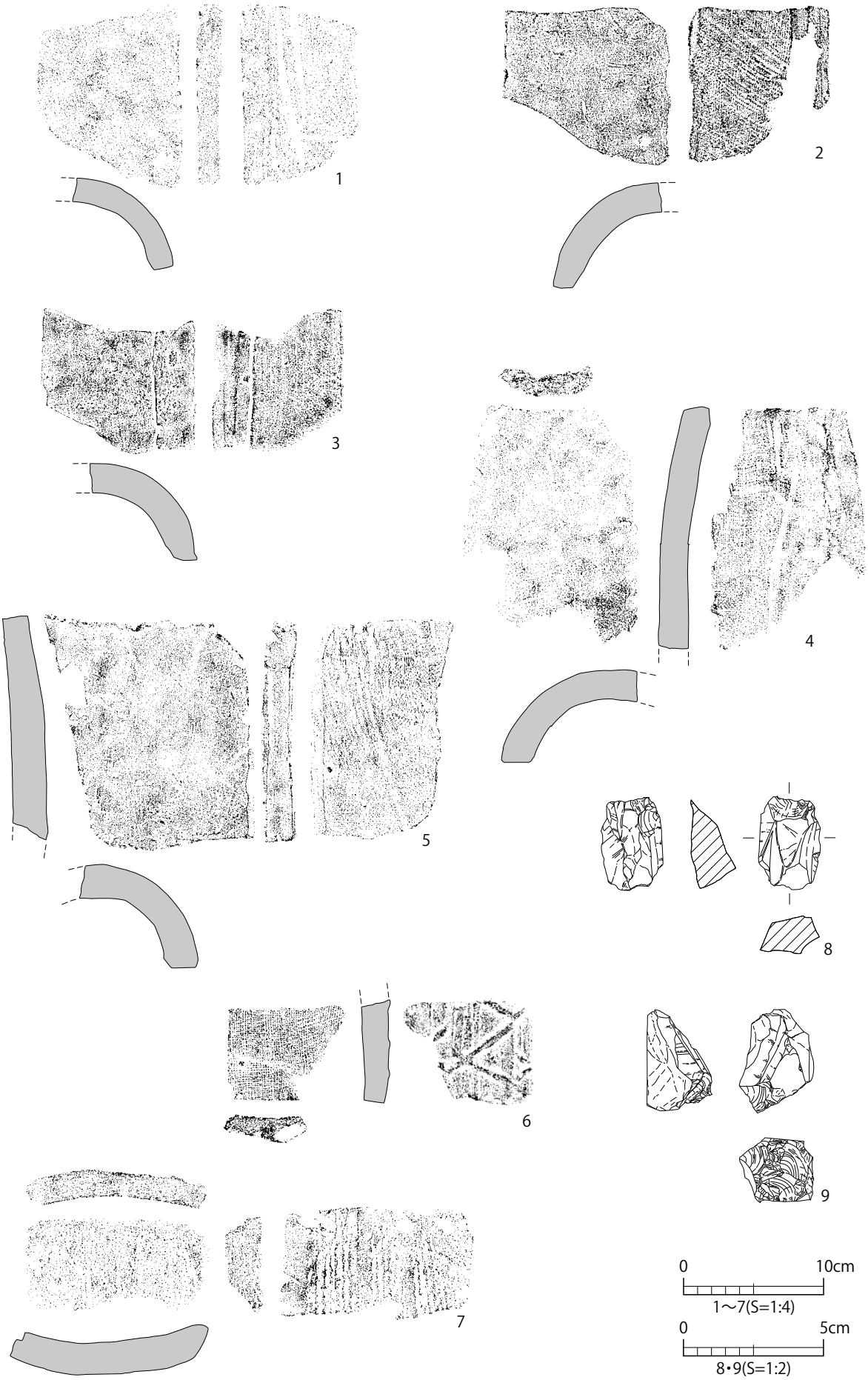
第35図１・２は軒丸瓦瓦当部である。いずれも国分寺３類である。３は軒丸瓦丸瓦部、４は軒平瓦平瓦部である。５～８、第36図１～４は平瓦である。いずれも格子タタキである。５・６、第37図１～５は丸瓦である。第37図４・５は無段式丸瓦である。５は狭端部が隅落とし調整される。そのほかは有段式か無段式か特定できない。６・７は熨斗瓦で、いずれも切り割り熨斗である。



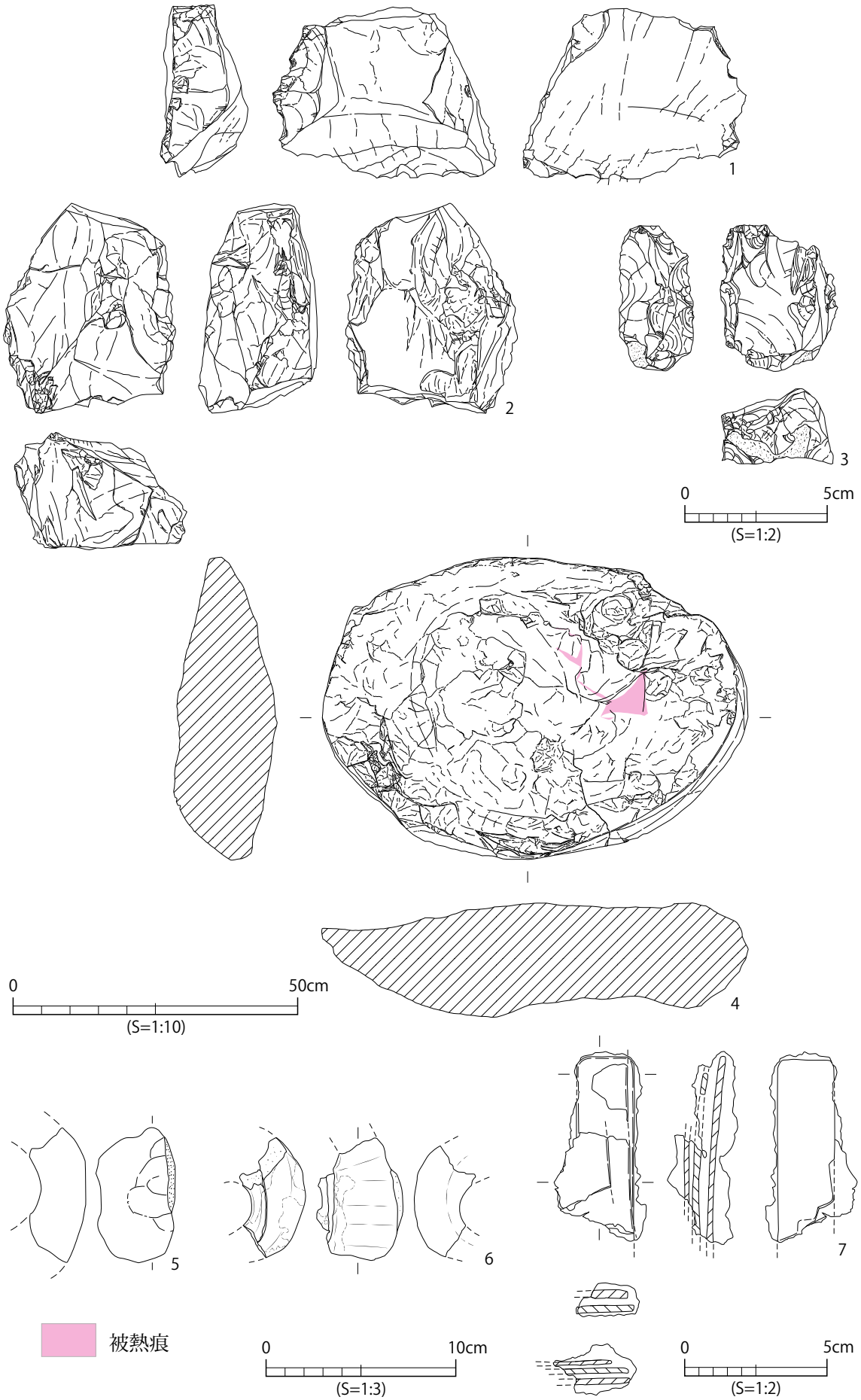
第35図　96号溝下層出土遺物（３）



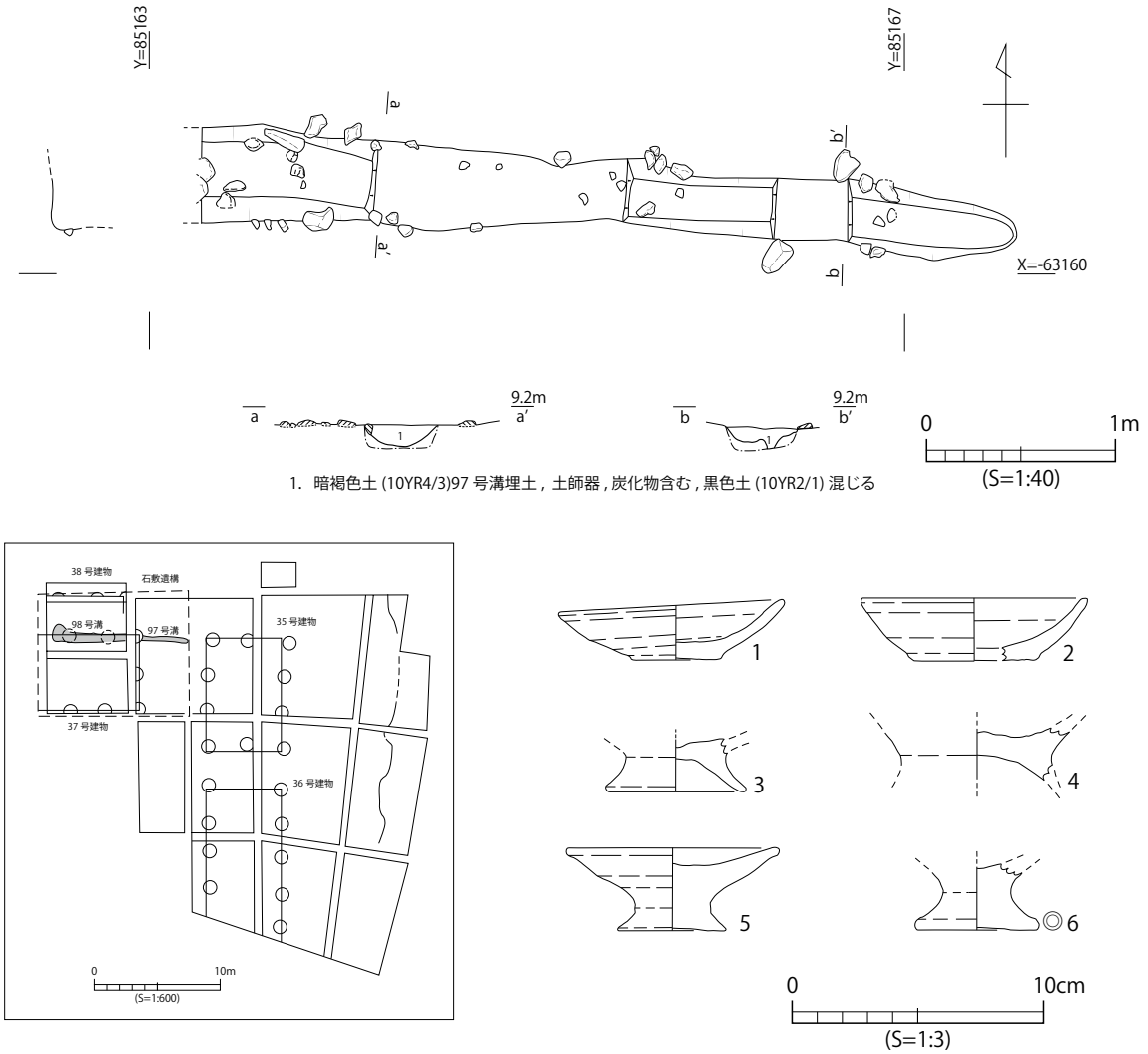
第36図　96号溝下層出土遺物（４）



第37図　96号溝下層出土遺物（５）



第38図　96号溝下層出土遺物（６）



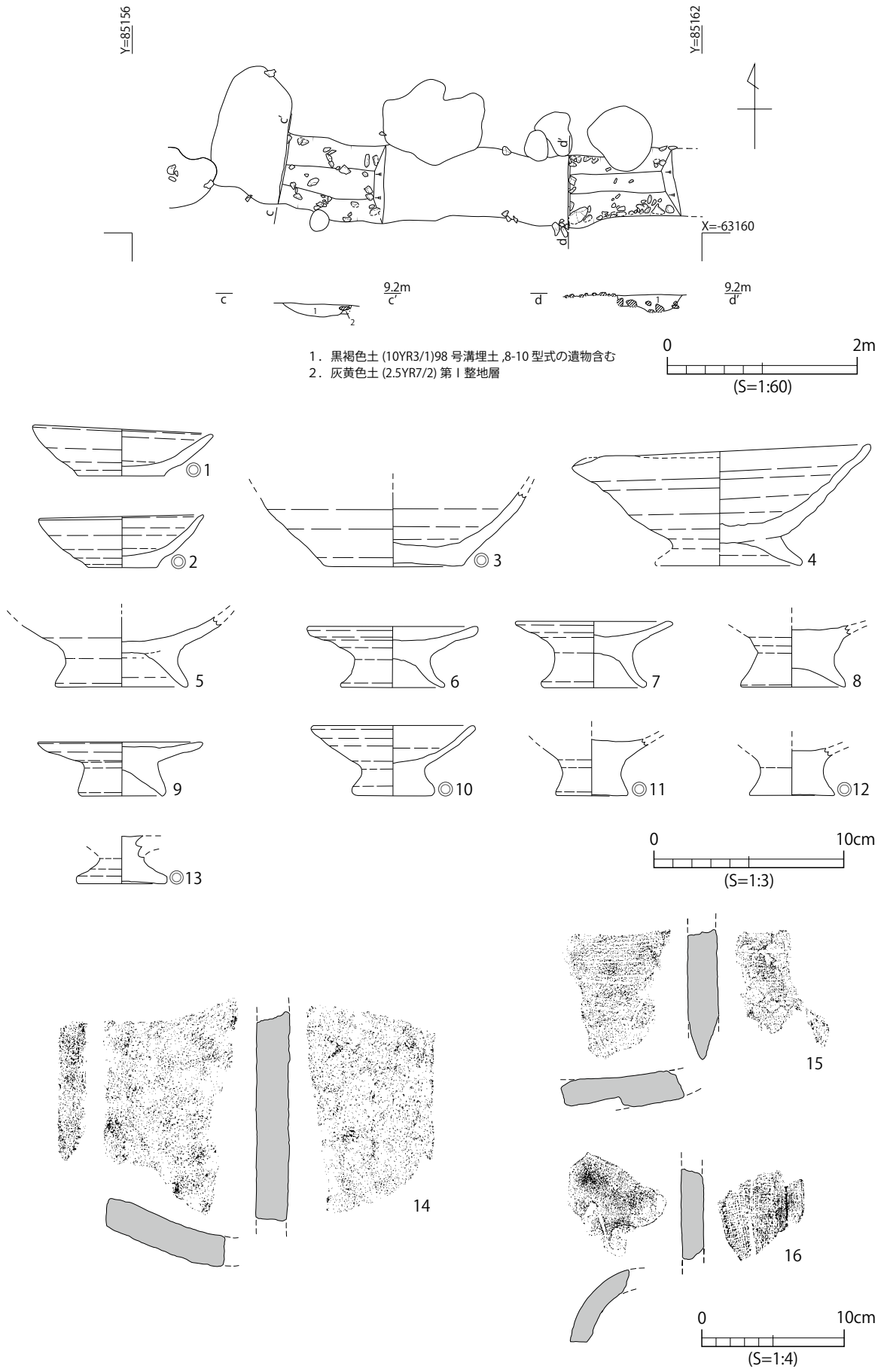
第39図　97号溝実測図・出土遺物

８・９は水晶、第38図１～３は碧玉の石核である。４は礎石の可能性がある。重さ77.219kgで、安山岩もしくは流紋岩である。柱をのせる方は、剥離によって中央部に柱台のように作り出している。一部に被熱痕があり、柱がのった状態で火を受けたのかもしれない。反対面は自然面で調整はされていない。５・６は羽口である。７は小札である。３枚の小札が重なった状態で出土している。第１綴孔がＸ線写真で確認できる。

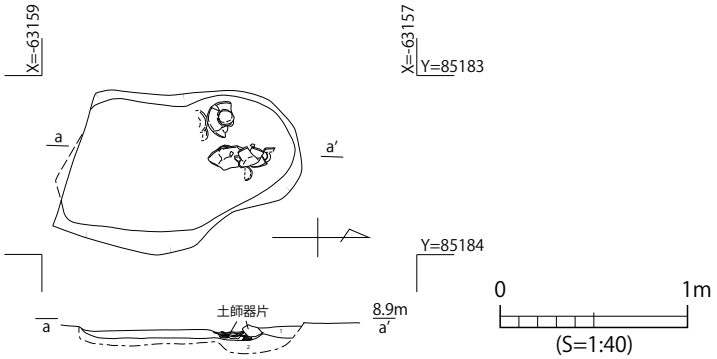
97号溝（第39図）

T70西１区、T71-1区で検出した。主軸はやや北西に傾くが、ほぼ正方位である。長さ5.28m、幅0.32～0.44m、深さ0.12m、断面はＵ字形である。１号石敷遺構との先後関係は不明で、現状では石敷遺構と併存している、もしくは石敷遺構に後出、のどちらとも捉えることができる。埋土中からは第９型式の土師器が主体となって出土した。

第39図１・２は土師器無高台皿である。３・４は土師器足高高台付坏、皿である。５・６は柱状高台付皿である。



第40図　98号溝実測図・出土遺物



1．黒色土(10YR2/1)69 号土坑埋土,多量の土師片（3～4枚ずつの単位で重なって出土）,炭化物含む
2．基盤層

第41図　69号土坑実測図（S=1/40）

98 号溝（第 40 図）

T71- 1 区で検出した。主軸はほぼ正方位で、97 号溝の西に位置する。長さ 5.2m 以上、幅0.7m、深さ 0.15 ～ 0.2m、断面は U 字形である。政庁推定中軸線（T71- 1 区西端）から東に 0.96m の地点で北に曲がっている。切り合いのため正確な長さは不明である。 1 号石敷遺構との先後関係は不明で、現状では石敷遺構と併存している、もしくは石敷遺構に後出、のどちらとも捉えることができる。埋土中からは第 9 型式の土師器が主体となって出土したほか、瓦が出土した。

第40図 1・2 は土師器無高台皿、3 は土師器無高台坏である。 4・5 は土師器足高高台付坏、6・7 は土師器足高高台付皿である。 8 ～ 13は柱状高台付皿もしくは坏である。特に 8・9 は高台部分の特徴から足高高台から柱状高台への過渡的な資料といえる。14・15は平瓦で、凸面調整は格子タタキで焼成は軟質である。出雲国分寺補修期に位置づけられる。16は無段式丸瓦である。焼成は軟質で平瓦と同様に出雲国分寺補修期に位置づけられる。

（3）土坑

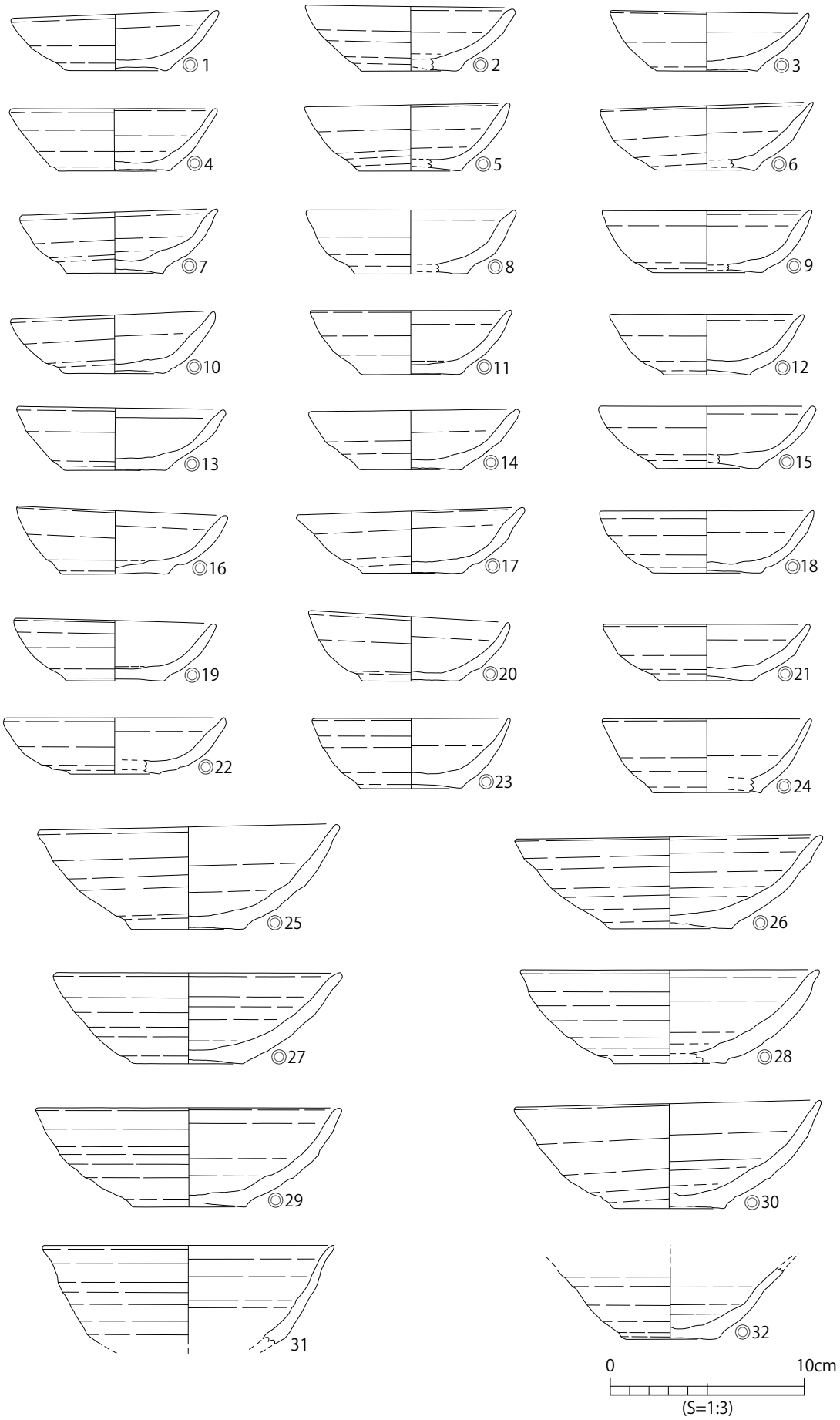
69 号土坑（第 41 図）

T69東 1 区で検出した。96号溝を切っている。規模は 1.2m × 0.86m で深さ 0.08m である。平面形はやや不整形な長楕円形である。土師器無高台坏のみが出土した。出土遺物から第10型式頃の遺構と考えられる。

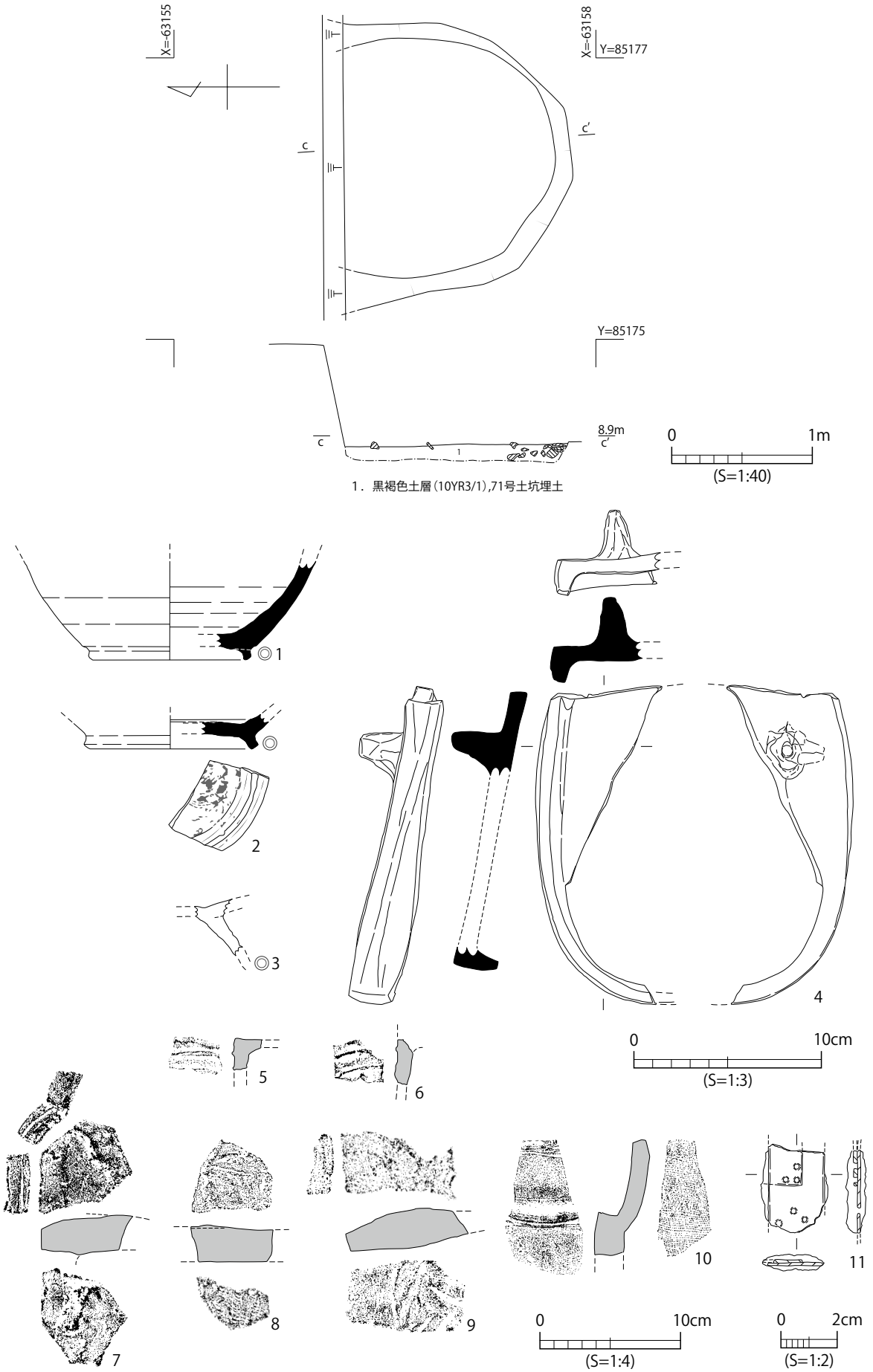
第42図 1 ～ 32は無高台坏である。無高台坏は口径から大きく 2 つのグループに分類することができ、小型の 1 群には色調を異にするものがあり、小型のものは色調からさらに 2 つに分類できる。 1 ～ 24は口径9.8 ～ 10.9cm の小型の 1 群である。色調は橙色系を基本としているが、一部に灰白色系のものもある。25 ～ 32は口径14.6 ～ 15.7cm の大型の 1 群である。色調は橙色系を基本とし、灰白色系のものはみられない。

71 号土坑（第 43 図）

T69西 1 区で検出した。規模は2.0m × 1.64m 以上で深さ 0.3m である。土坑の北半は T69拡張区内でも一部が検出されたのみで、全形は不明であるが、平面形は楕円形である。埋土から土師



第42図　69号土坑出土遺物



第43図　71号土坑実測図・出土遺物

器や須恵器などが出土したが、多くが小片である。そのうち最新の遺物は小片ではあるものの、第８型式頃と考えられる足高高台付坏である。よって遺構の時期もおおよそ第８型式頃と考えられる。

第43図１・２は須恵器高台付壺である。１は内面に黒色の付着物がつく。２は高台内に漆が付着している。３は土師器足高高台付坏である。高台の一部であるが、大型の足高高台付坏になる可能性がある。４は風字硯である。残存している部分では研磨痕は確認できない。５・６は軒丸瓦の瓦当部である。全体の一部のみではあるが、出雲国分寺３類と考えられる。７～９は軒丸瓦の丸瓦部である。10は有段式丸瓦Ａの玉縁部の破片である。11は小札である。２枚の小札が重なった状態で出土している。下の小札は第３縅孔が確認できる。上の小札では、下搦孔が確認できる。下搦孔は３列３孔であると考えられる。

72 号土坑（第 44・45 図）

T69西２区で検出した。土師器甕２個体を埋設した土坑である。そのうち１点は焼成後に底部をうち欠いている。土坑の規模は0.5m以上×0.36m以上で深さ0.26mである。底面の標高は8.62m、検出した標高は8.9mである。平面形は隅丸方形である。

土器内部には、第２基盤層と同様の土が充填されており、土坑掘削時の土がそのまま埋め戻されたものと考えられる。土器内部の土も水洗選別を実施したが、種子などは検出されず、内容物は不明である。土器内部の土からは、須恵器坏身片、滑石製臼玉が出土したが、いずれも意図的に内部に入れられたものではなく、第２基盤層中に含まれていたものが混入したと考えられる。

第45図１は須恵器坏身である。出雲６期頃と考えられる。２・３は土師器甕である。いずれも口径に対して器高が高い。胴部最大径は胴部半ばにある。２は取り上げ段階から底部を欠損しており、埋納にあたって焼成後に底部を割った可能性がある。４は滑石製臼玉である。

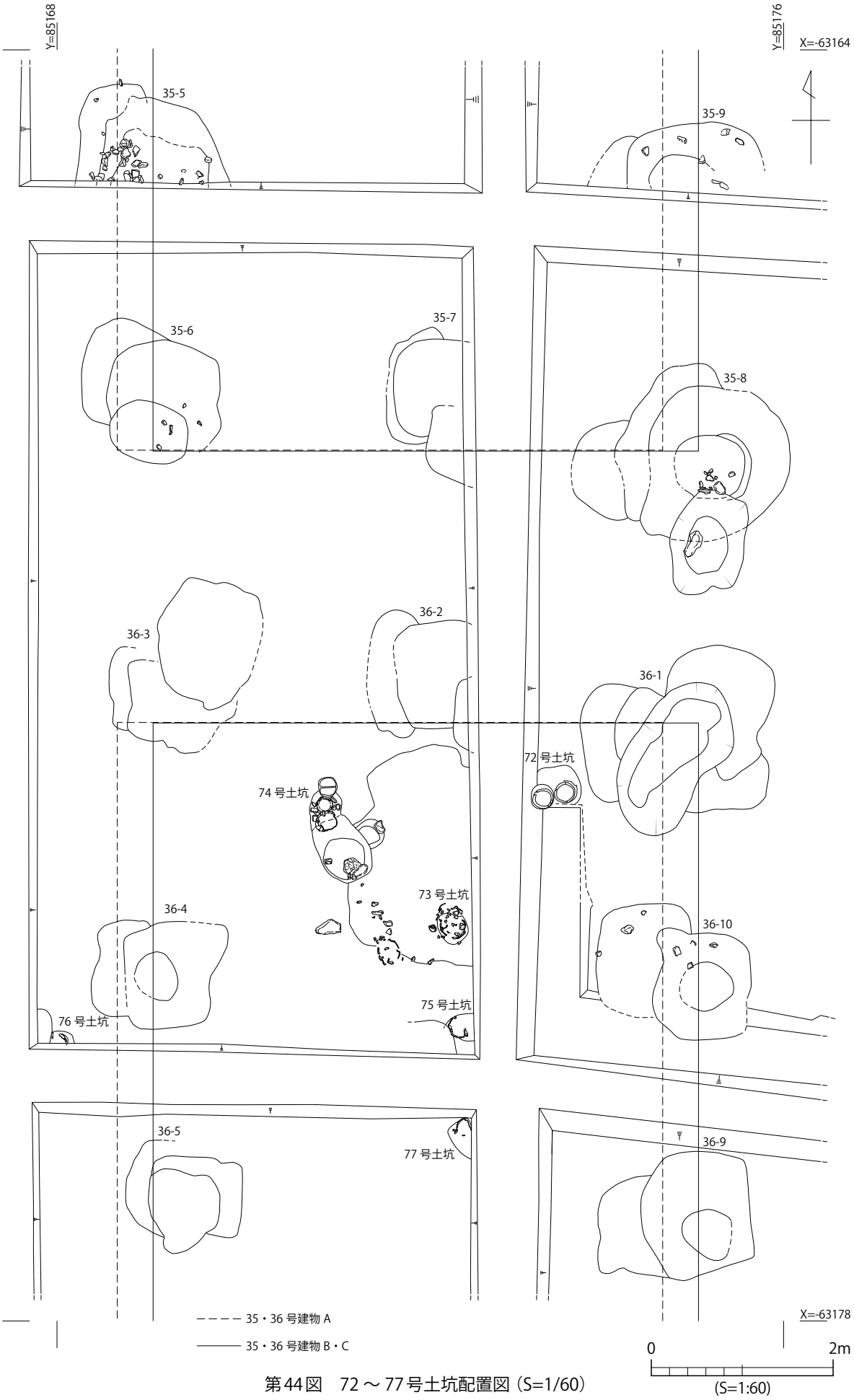
73 号土坑（第 44・47 図）

T70東２区で検出した。土師器甕２個体の底部を土坑内に埋設している。土坑の規模は2.39m×1.38m以上で深さ0.08～0.15mで、底面の標高は8.82m～8.91mである。また、検出した標高は8.99mである。東側が土層観察用畦で検出できていないものの、平面形は隅丸の不整な方形である。東側の土師器は土坑内に掘方をもって置かれている。土坑埋土中からは国分寺補修期の平瓦が出土したが、その他の遺物はほとんどない。このことから遺構の年代は８世紀後葉以降と考えられる。

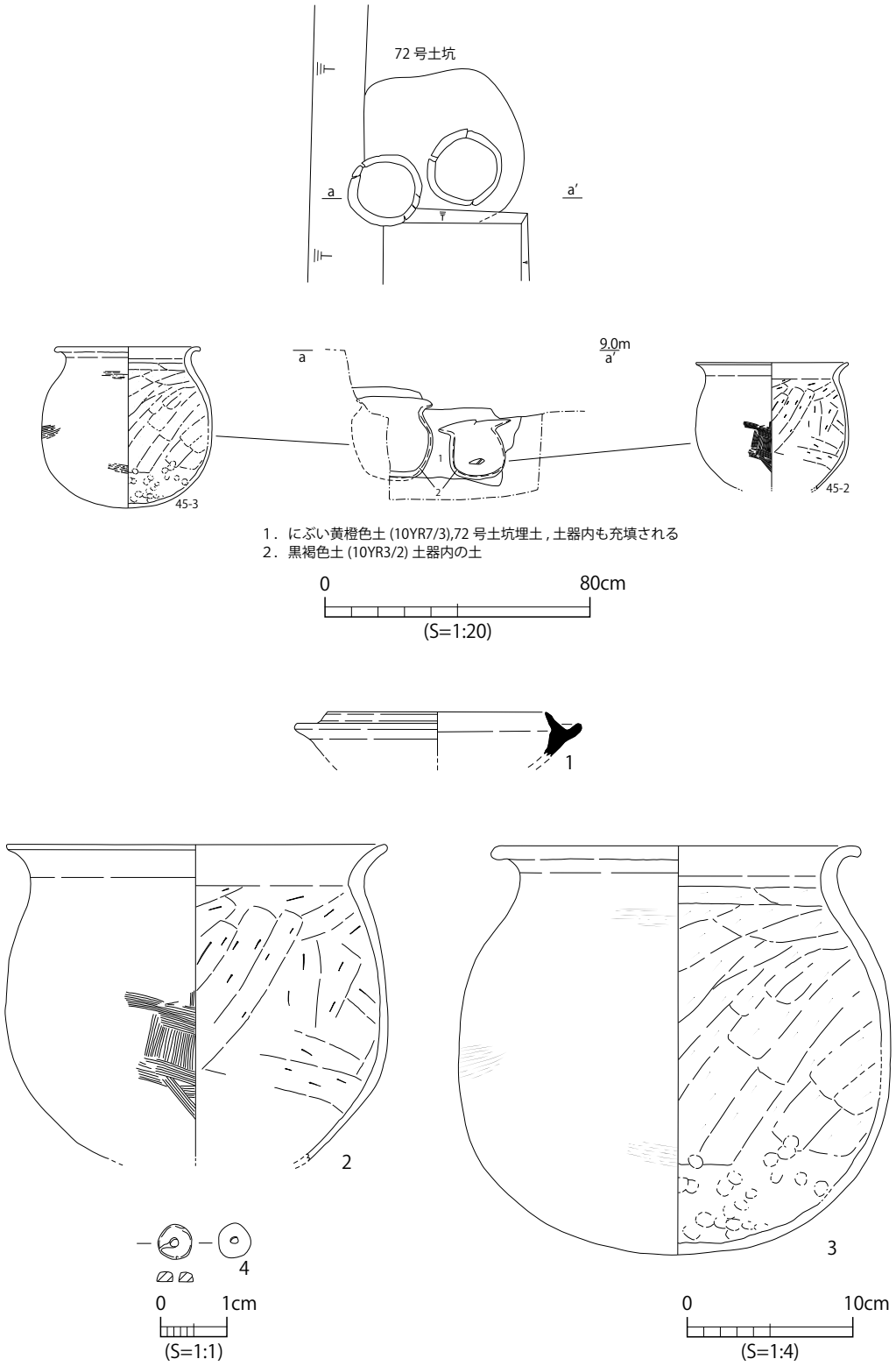
第47図１～５は土師器甕である。１～３は土坑上面で出土したものである。４・５は土坑上面に置かれていたもので、５は底部を欠損している。また、一部に赤彩が残っている。６は土坑正面で出土した縄文土器である。調整等は判然としないが、形態から縄文時代後期の円帯文土器と考えられる。近現代の造成土中の紛れ込みの可能性がある。７・８は平瓦である。７は凸面調整格子タタキで焼成が硬質である。出雲国分寺創建期に位置づけられる。８も凸面調整格子タタキで焼成軟質である。出雲国分寺補修期に位置づけられる。

74 号土坑（第 44・48 図）

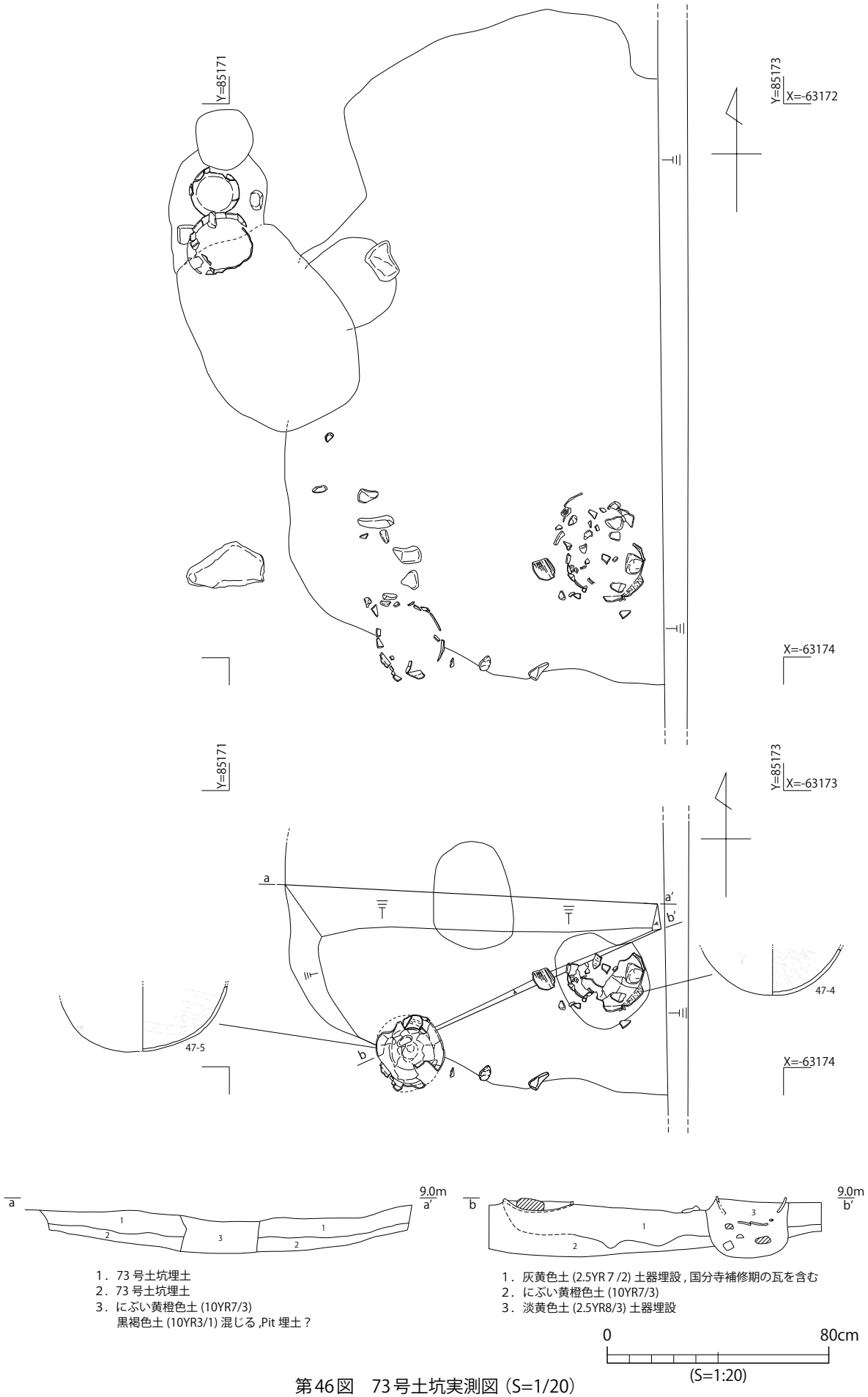
T70東２区で検出した。土師器甕２個体を埋設した土坑である。そのうちの１点は後世の削平



第44図　72 ～ 77号土坑配置図（S=1/60）



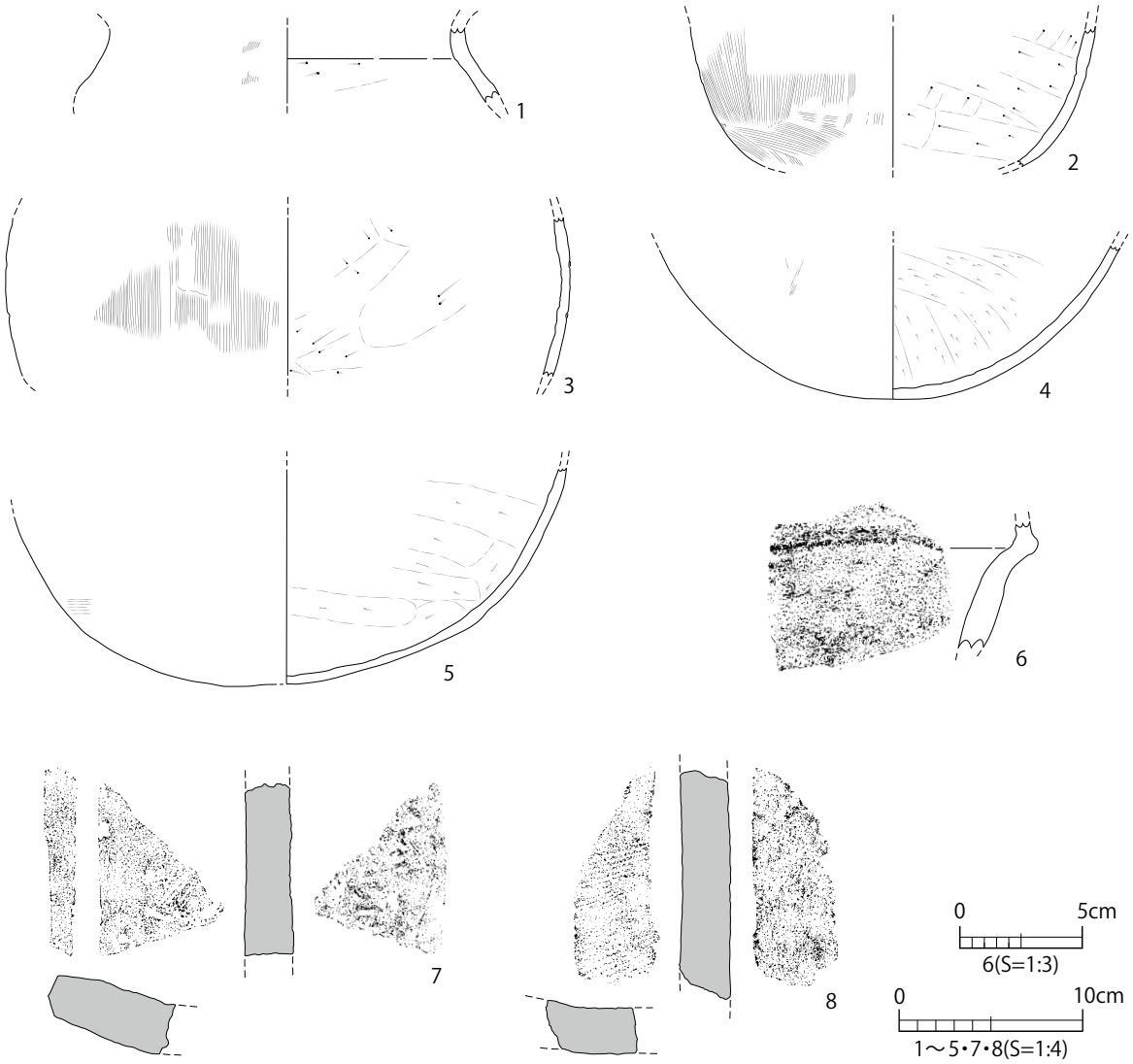
第45図　72号土坑実測図・出土遺物



1．73 号土坑埋土
2．73 号土坑埋土
3．にぶい黄橙色土 (10YR7/3)
　黒褐色土 (10YR3/1) 混じる ,Pit 埋土？

1．灰黄色土 (2.5YR 7 /2) 土器埋設 , 国分寺補修期の瓦を含む
2．にぶい黄橙色土 (10YR7/3)
3．淡黄色土 (2.5YR8/3) 土器埋設

第46図　73号土坑実測図（S=1/20）



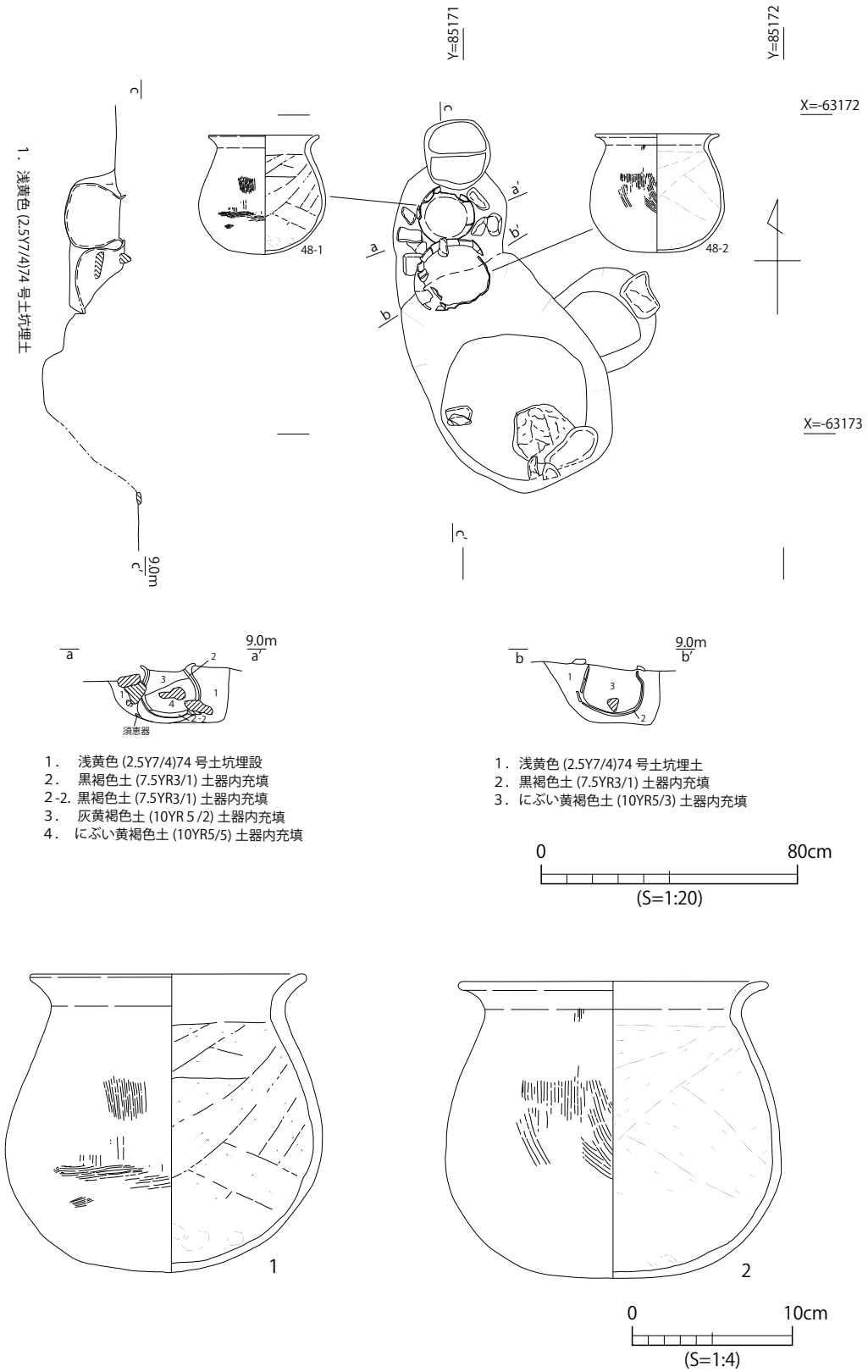
第47図　73号土坑出土遺物

により、甕の半分を失っているが、当初は完形の甕２個体が埋設されていたと考えられる。土坑の規模は0.37m ×0.34m 以上で深さ0.15m である。底面の標高は8.77m、検出した標高は8.92m である。平面形は長楕円形である。土器内部の土の水洗選別を実施したが、土器内部の土から遺物等は出土しなかった。掘方内から須恵器の小片が出土した。

第48図１・２ともに土師器甕である。１はほぼ完形で口径に対して器高が高い。２は後世の削平により半分程度欠損している。口径と器高の値がほぼ同じである。また胴部最大径が胴部中央よりも下半にあり、ややしもぶくれの形態をする。

75 号土坑（第 44 図）

T70東２区で検出した。掘方を検出したのみで土器の取り上げは行っていない。土師器甕１点が埋設されており、口縁部と思われる破片が土坑内に落ち込んでいる。検出した標高は8.99 ～9.01m である。



第48図　74号土坑実測図・出土遺物

76 号土坑（第 44 図）

T70東２区で検出した。掘方を検出したのみで土器の取り上げは行っていない。土師器甕１点が埋設されており、胴部のみを確認した。検出した標高は8.97 ～ 8.99m である。

77 号土坑（第 44 図）

T70東３区で検出した。掘方を検出したのみで土器の取り上げは行っていない。土師器甕１点が埋設されており、胴部のみを確認した。検出した標高は8.89 ～ 8.95m である。

（４）石敷遺構

１号石敷遺構（第 49・50 図）

T70西１区、T71で検出した。第１整地層に敷設されている。調査区北側は昭和調査区Ｉ区と接するため、Ｉ区の土層断面図、平面図を確認したが、石敷遺構とおぼしき石は検出されていない。調査区内で検出された石敷北端と SB020の南側廂柱筋との距離が３m（10尺）であることから調査区内で検出したものが石敷北端の可能性がある。一方で石敷南側は後世の削平により状況が不明であり、全体にどのような広がりをもって敷設されたかは不明である。

石敷遺構中には､黒色埋土の遺構が多数掘り込まれている。97･98号溝も石敷遺構内で検出した。石敷遺構と97・98号溝の前後関係は不明であるものの、同時に併存していた場合、石敷遺構の廃絶年代は第９型式、97・98号溝が石敷遺構に重複するものであれば、第９型式以前には廃絶していたものと考えられる。

敷設時期については不明な点も多いものの、第１整地層から国分寺補修期の瓦片等が出土していることから８世紀後葉以降であることは間違いない。このほか第１整地層中からは越州窯産陶器と考えられる小片が出土しているが、明確な時期は不明である。また、第１整地層中の炭化物の AMS 年代測定の結果、もっとも新しい資料で710 ～ 885年の結果が得られた。

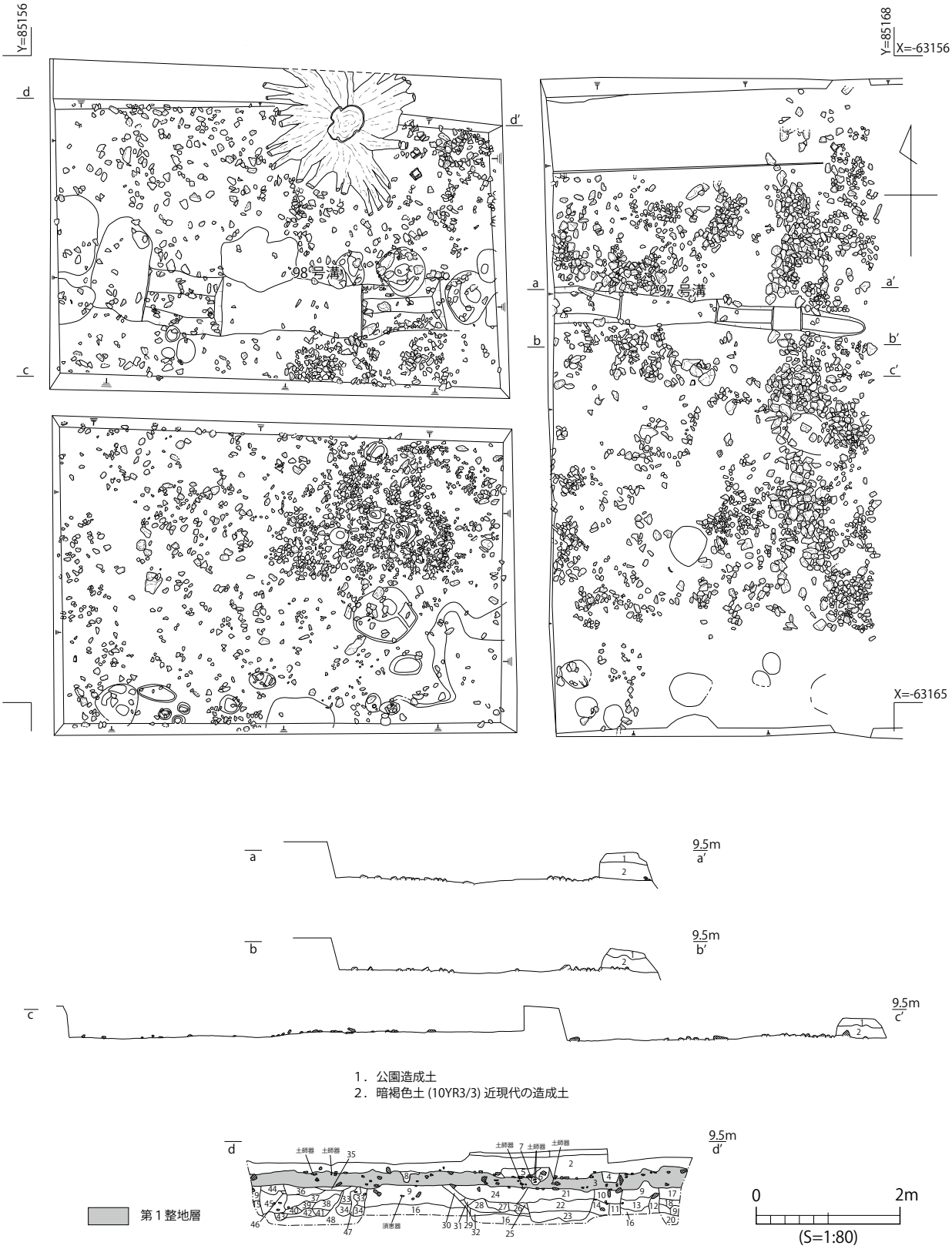
第50図１は灰釉陶器段皿である。口縁から胴部の段までの一部が残る。K14窯式、もしくはK90窯式に位置づけられよう。２は軒丸瓦丸瓦部である。瓦当面の接合箇所に刻みがみられる。焼成が硬質であることから出雲国分寺創建期に位置づけられる可能性がある。３は有段式丸瓦Ａである。わずかに玉縁部の一部が残る。

（５）井戸

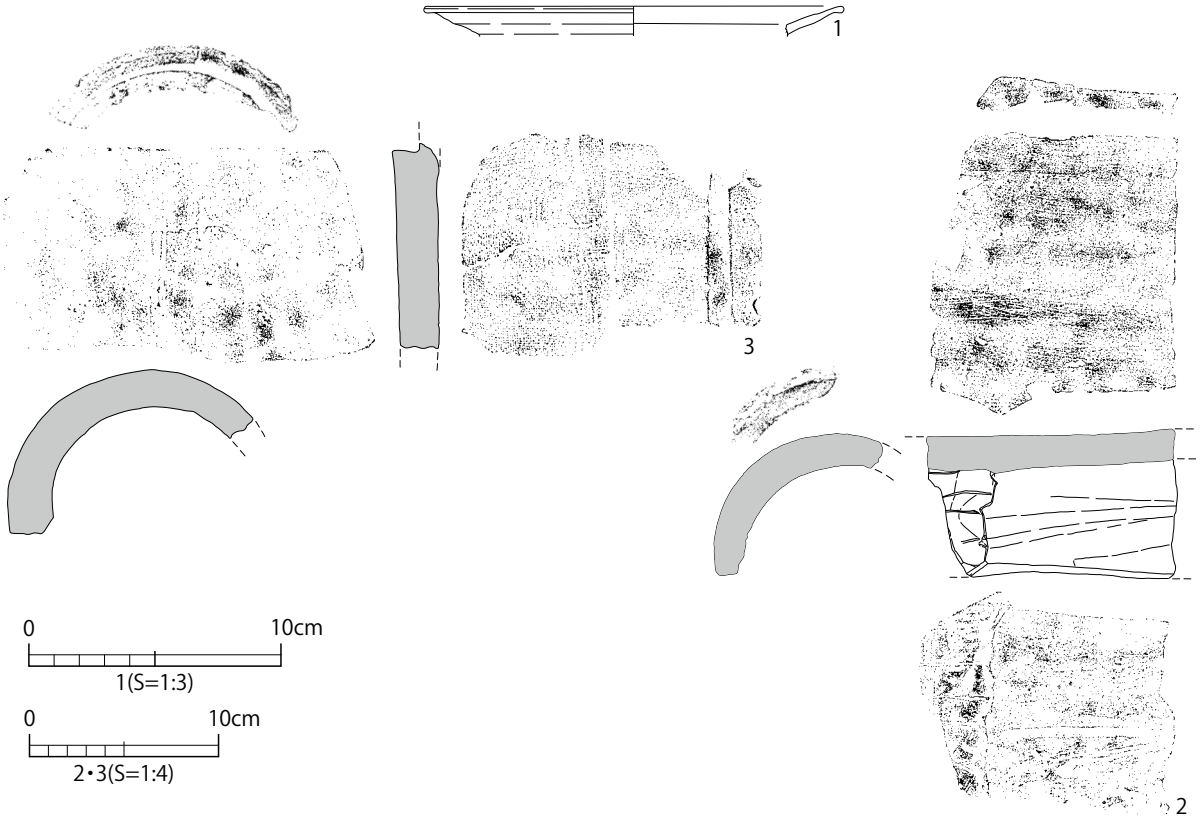
17 号井戸（第 51 図）

T60で検出した。規模は2.0m × 1.4m で深さ0.66m 以上である。サブトレンチ状に掘削を行い、掘り底まで掘りきっていない。平面形は楕円形で､北側は土層観察用の畦により検出できなかった。出土遺物には緑釉陶器、柱状高台付坏、足高高台付坏、黒色土器がある。出土遺物から11世紀後半～ 12世紀前半の遺構と考えられる。

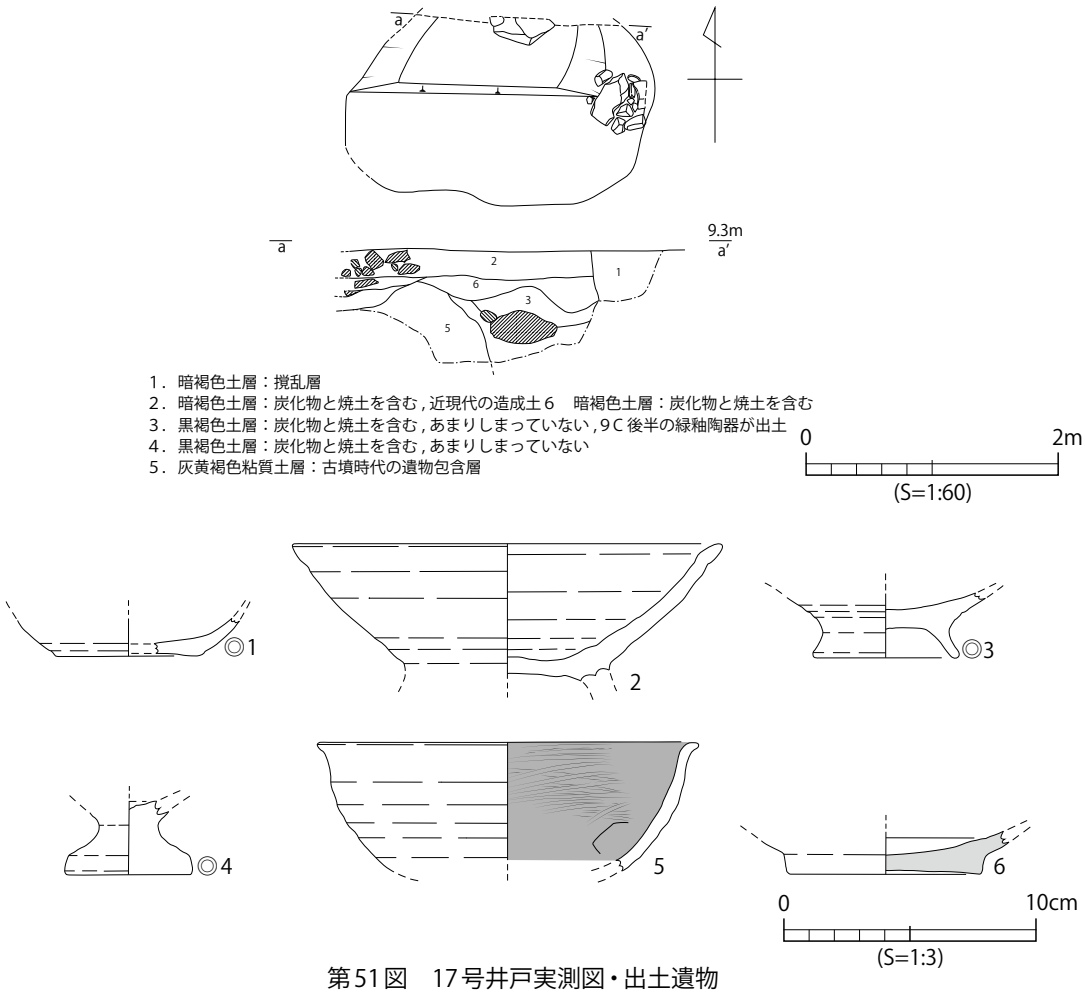
第51図１は土師器無高台皿である。２・３は土師器足高高台付坏、４は柱状高台付坏か皿である。５は黒色土器碗である。内面はヘラミガキ調整し、炭素吸着により黒化処理している。６は緑釉陶器碗である。削り出しによる円盤状高台で胎土は軟質である。緑釉の発色にムラがある。９世紀前半～中頃の京都系と考えられる。



第49図　１号石敷遺構実測図（S=1/80）



第50図　１号石敷遺構出土遺物



第51図　17号井戸実測図・出土遺物

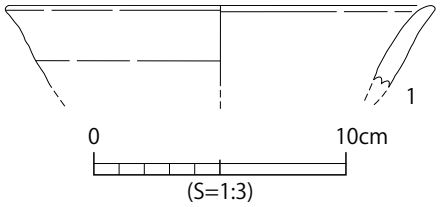
２　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構には、昭和調査区（Ⅰ区）で再検出した溝１条とT69東２区で検出した土坑１基がある。

（１）溝

SD055　（第18・52図）

昭和調査区（Ⅰ区）で検出した溝である。1970（昭和45）年の調査で確認されており、今回の調査では再検出を行うに留めた。既往の報告をもとに概要をしめしておきたい。主軸は北東から南西に向かい斜行し、SD054と平行する。幅2.8m以上、深さ0.6～0.7mを測る。断面は逆台形状を呈する。昭和の調査では松山Ⅲ期（古墳時代中期中葉～後葉）の土師器高坏が出土している。今回の調査では高坏口縁部の小片（第52図）が出土した。



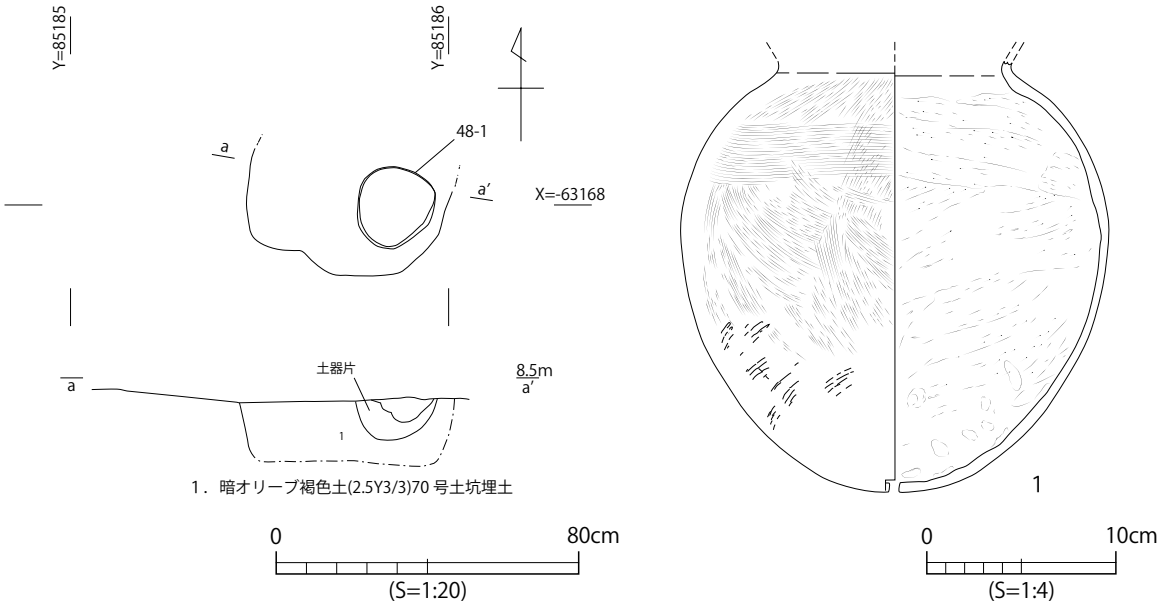
第52図　SD055出土遺物

（２）土坑

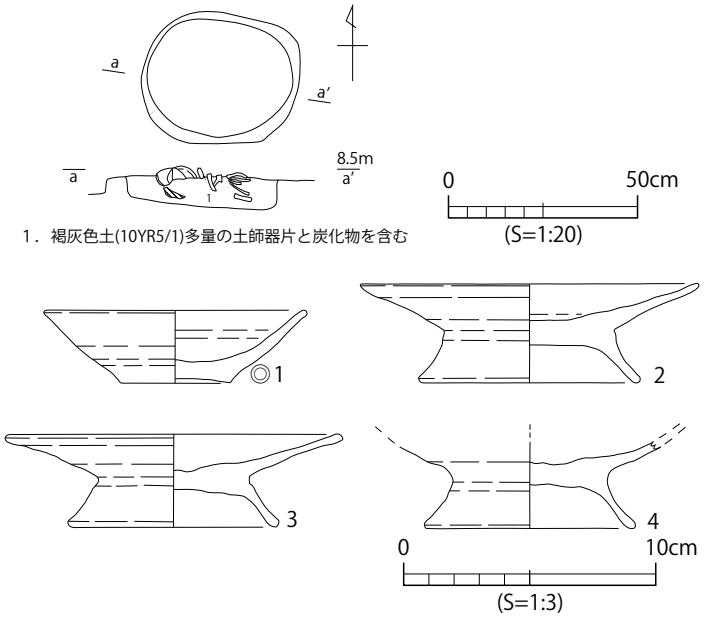
70号土坑（第53図）

T69東２区で検出した96号溝の底面で検出した。規模は0.54×0.27m以上、深さ0.18mである平面形はやや不整形な楕円形である。古墳時代前期後半頃と考えられる土師器甕１点が出土した。甕の口縁部などは出土せず、土坑上面は96号溝掘削の際に削平されたものと考えられる。土師器甕の内部の土は水洗選別したが、特に内容物は確認できなかった。

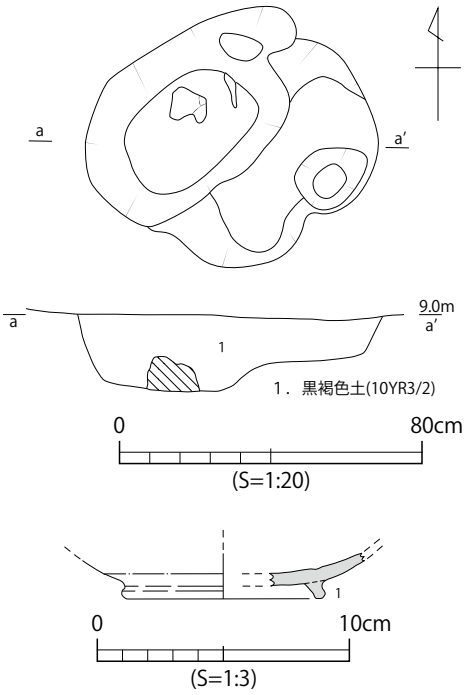
第53図１は土師器甕である。口縁部を欠損しているため、口縁部形態は不明ながら単純口縁となる可能性がある。内外面ともに使用によるススが付着している。底部に５mm程度の孔が開くが、



第53図　70号土坑実測図・出土遺物



第54図　T69東２区 P1実測図・出土遺物



第55図　T69西１区Ｐ１実測図・出土遺物

使用痕がみられることから焼成後に穿孔したと考えられる。布留１新段階（古墳時代前期後半）に併行すると考えられる。

３　その他の遺構

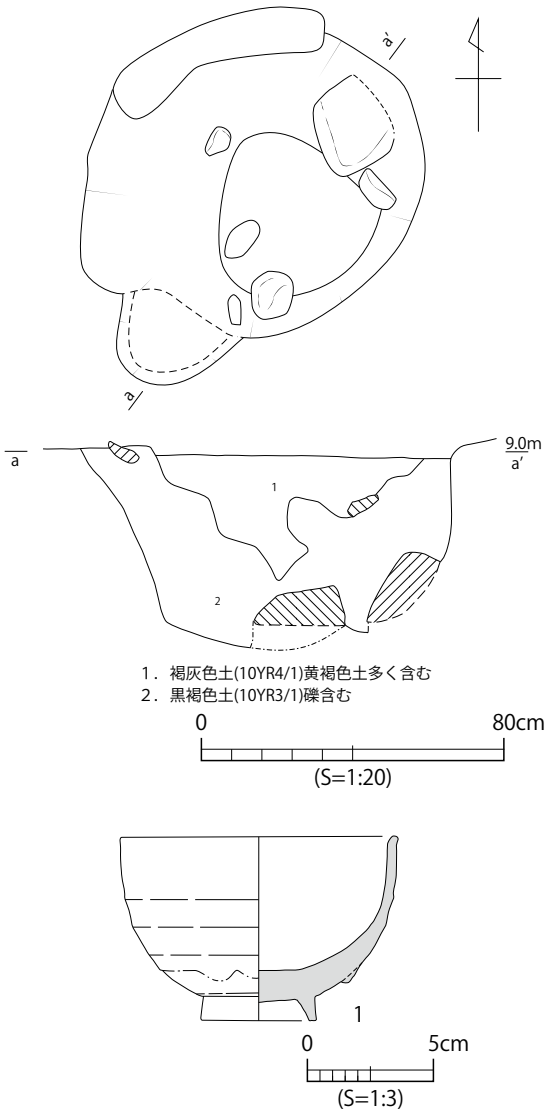
年代的な位置付けや建物を構成する柱穴になりえないが、掘削等を行った遺構のうち、特徴的な遺物が出土したものについて掲載する。第54図はT69東２区で検出した柱穴（P１）とその出土遺物である。規模は0.41×0.35m、深さ0.09mである。埋土中に多量の炭化物を含んでいた。１は土師器無高台坏、２・３は土師器足高高台付皿、４は足高高台付坏である。いずれも第８型式頃に位置づけられる。

第55図はT69西１区で検出した遺構（P１）と出土遺物である。規模は0.77×0.68m、ふくさ0.2mである。１は灰釉陶器碗である。高台部分の破片で、内面に重ね焼き痕がある。東濃型で12世紀ごろのものと考えられる。

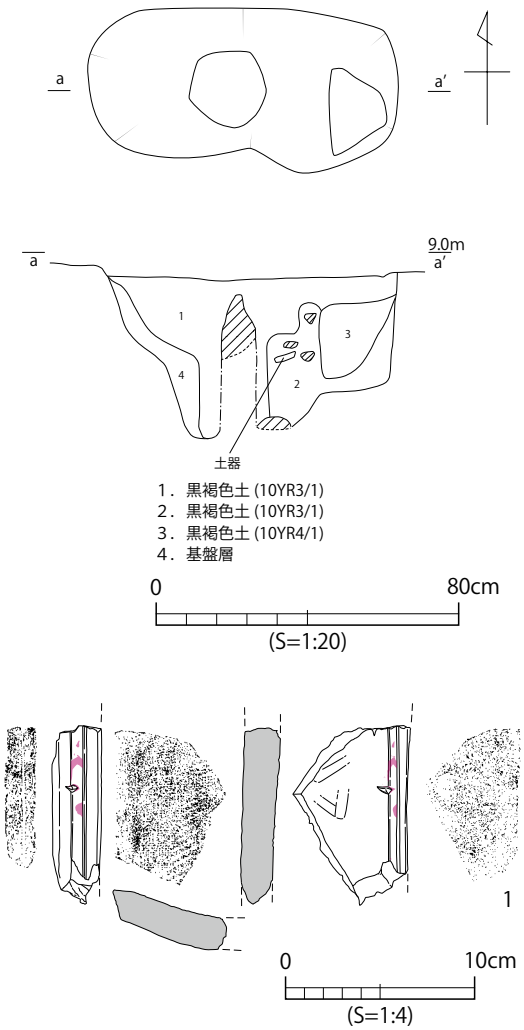
第56図はT70東１区で検出した遺構（P１）とその出土遺物である。規模は1.1×0.85m、深さ0.51mである。1は肥前系陶器丸形碗である。

第57図はT70東１区で検出した柱穴（P２）とその出土遺物である。柱穴は35号建物Ｐ３の抜き取り穴を切っている。埋土中に柱材が残存していたが、取り上げは行っていない。規模は0.82×0.38m、深さ0.42mである。埋土中から平瓦１点が出土した。1は平瓦で、凸面調整は格子タタキで、焼きが硬質であることから、国分寺創建期に位置づけられる。また、この平瓦は凸面と側面に朱が付着しており、このことから建物の特定には至らないが、政庁域の建物の柱が丹塗りであった可能性がある。

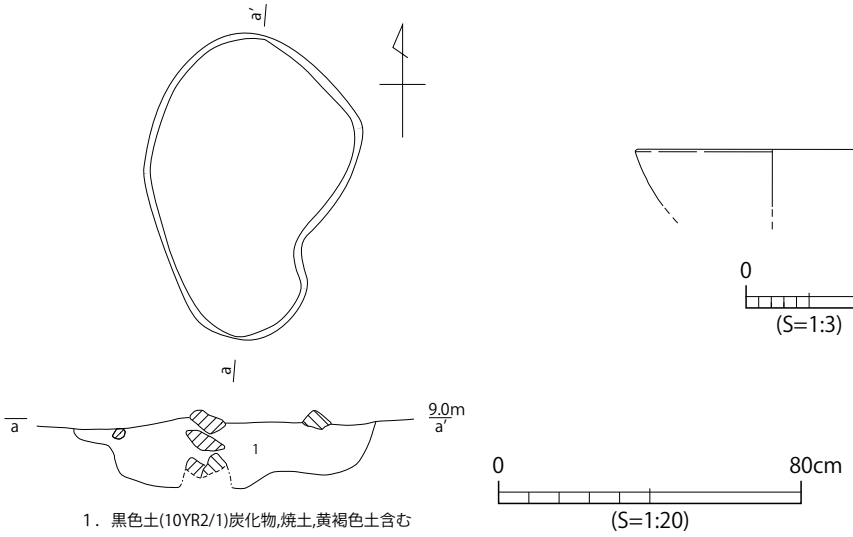
第58図はT70東２区で検出した柱穴（P１）とその出土遺物である。柱穴は35号建物Ｐ７Ａ掘方を切っている。規模は0.81×0.55m、深さ0.16mである。１は越州窯系青磁碗である。



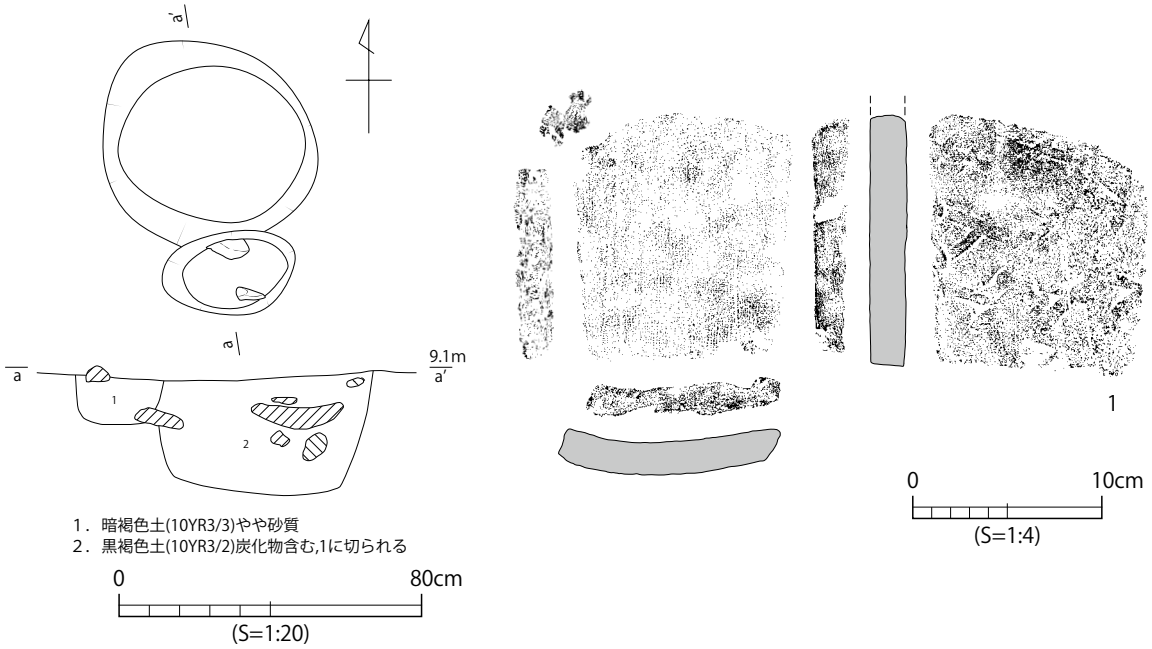
第56図　T70東１区Ｐ１ 実測図・出土遺物



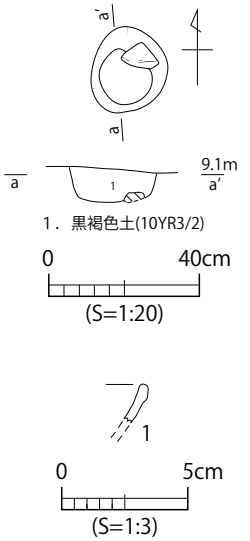
第57図　T70東１区Ｐ２ 実測図・出土遺物



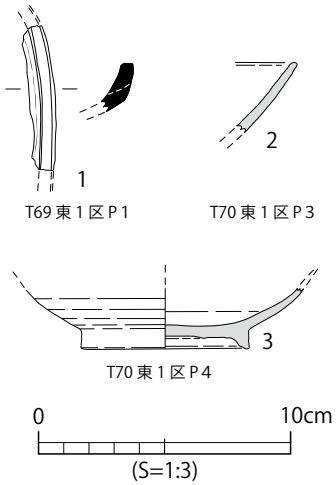
第58図　T70東２区Ｐ１ 実測図・出土遺物



第59図　T70西１区Ｐ１実測図・出土遺物



第60図　T71 １区Ｐ１実測図・出土遺物



第61図　T69・T70Pit 出土遺物

第59図はT70西１区で検出した柱穴(Ｐ１)とその出土遺物である。柱穴は37号建物Ｐ１掘方を切っている。規模は0.5以上×0.56m、深さ0.3m である。隣接する柱穴に一部切られている。１は埋土中から出土した熨斗瓦である。凸面調整は格子タタキ、焼きは軟質である。４辺ともに側面が生きており、切り割りの痕跡も見られない。平瓦を転用した熨斗瓦ではなく、当初から熨斗瓦として製作されたようである。

第60図は T71-１区で検出した柱穴（Ｐ１）とその出土遺物である。Ｐ１は98号溝を切っている。規模は0.22×0.2m、深さ0.09m である。１は埋土中から出土した白磁碗である。口縁部の小片で口縁は玉縁状を呈している。大宰府Ｃ期に位置づけられる。

第61図は遺構の掘削は行っていないが、段下げ中に出土した遺物である。柱穴の埋土はいずれ

も黒褐色土である。１はT69東１区Ｐ１から出土した風字硯である。２はT70東１区Ｐ３から出土した越州窯系青磁碗である。３はT70東１区Ｐ４から出土した緑釉陶器碗である。

４　遺構外出土遺物

（１）T69 出土遺物

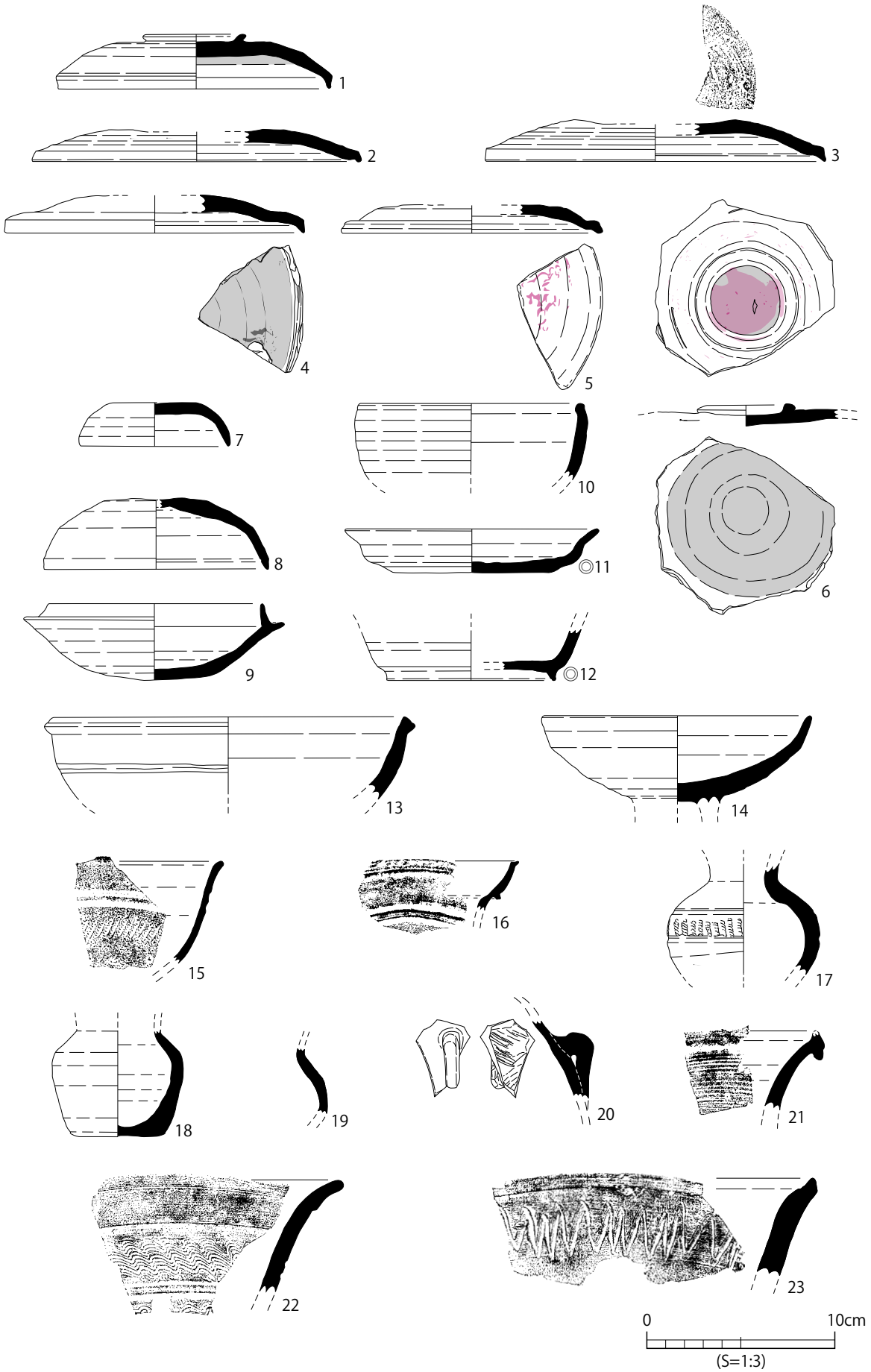
各層位ごとに代表的な遺物を掲載した。第62図～第66図は暗褐色土層、第67図は黒褐色土層、第68図は検出面出土遺物、第69図はT69拡張区暗褐色土層出土遺物、第70図は攪乱層出土遺物である。出土位置等は、遺物観察表を参照されたい。

第62図１～８は須恵器蓋である。このうち、１・４・６は内面に研磨痕のある転用硯である。４は墨痕が付着する。６は輪状つまみ内にも研磨痕があり、つまみ内と外面に朱墨が付着する。蓋内面には朱墨は付着しておらず、墨と朱墨で研磨箇所を分けていたと考えられる。５は研磨痕はないものの、内面に朱墨が付着する。７は短頸壺蓋である。９・10は須恵器坏で、10は底部は残っていないものの、口縁部の形態から無高台坏と考えられる。11は須恵器無高台皿、12は須恵器高台付坏である。13は須恵器鉢、14は須恵器高坏である。15は須恵器器台口縁部で外面に波状文を施す。16・17は須恵器甕である。18は小型の須恵器直口壺、19は須恵器小壺である。20は須恵器提瓶の把手、21～23は須恵器甕口縁部である。

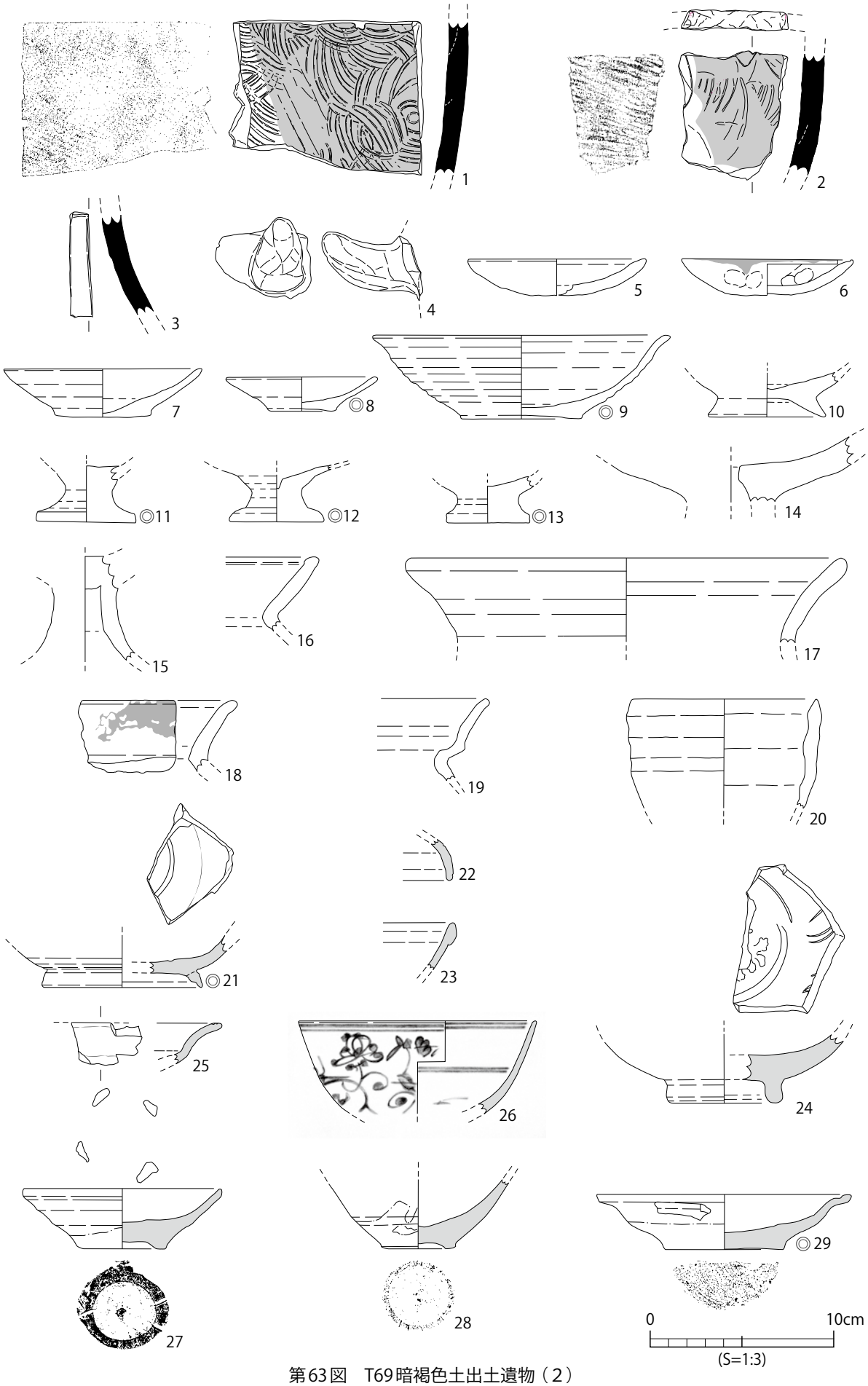
第63図１・２は須恵器甕である。いずれも内面に研磨痕跡がある。転用硯である。２は割れ口と内面にわずかながら朱墨が付着している。３は円面硯の透かし部分の小片である。４は須恵器甑把手である。５・６はかわらけで６は口縁部に煤が付着しており、灯火器として用いられたようである。型作りで12世紀頃の京都産の可能性がある。７・８は土師器無高台皿、９は土師器無高台坏、10は足高高台付坏、11～13は柱状高台である。形態から11・13は柱状高台付坏、12は柱状高台付皿である。14・15は高坏、16～19は甕である。18は口縁部外面に煤が付着する。19は複合口縁である。20は製塩土器である。

21・22は緑釉陶器で、21は碗で有段輪高台をもつ。内面に圏線がある。釉は濃緑色で、10～11世紀頃の近江産と考えられる。22は香炉の蓋である。外面に２条の沈線が施される。釉は淡緑色で薄い。23は白磁玉縁碗である。福建窯産で大宰府Ｃ期に位置づけられる。24・25は青磁である。24は碗で内面に印花文が施される。15世紀頃の明産であろうか。25は稜花皿である。口縁部に２条の沈線文が施される。16世紀頃の龍泉窯産と考えられる。26は青花直口碗である。16世紀後半以降の漳州窯産と考えられる。27～29は陶器である。27は肥前系皿で内面に胎土目が４箇所みられる。28は肥前系杉形碗、29は肥前系溝縁皿である。29は外面に重ね焼きの下の皿の口縁が融着している。

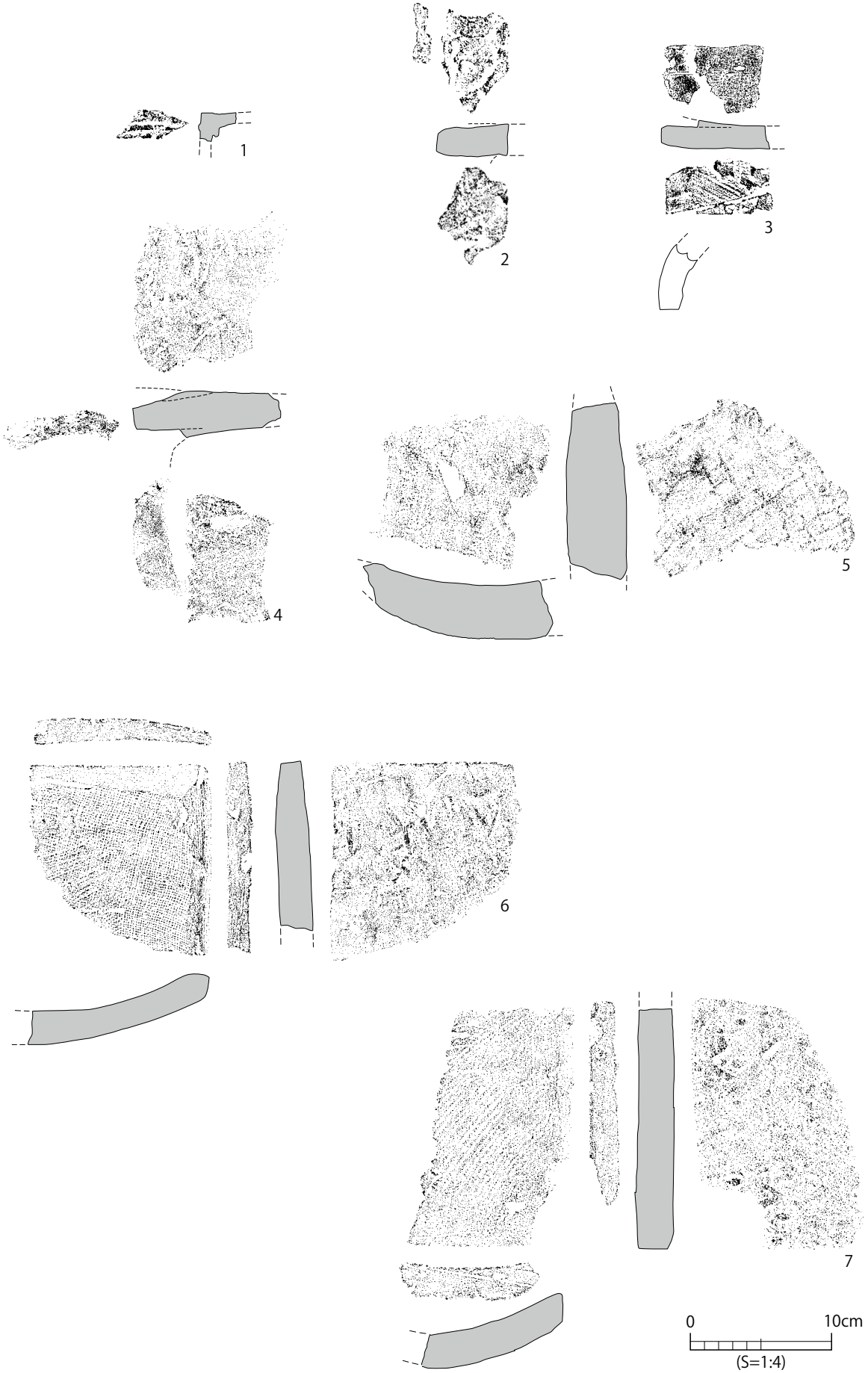
第64図１は軒丸瓦瓦当部である。国分寺３類か。２～４は軒丸瓦丸瓦部である。２・４は焼成軟質、３は焼成硬質である。５は軒平瓦平瓦部である。焼成は軟質で国分寺補修期に位置づけられる。凸面調整は格子タタキである。６・７、第65図１・２は平瓦である。２は中央に分割線がある。凸面調整はいずれも格子タタキである。３～６は丸瓦で、３は無段式、５・６は有段式である。７、第66図１～３は熨斗瓦で、いずれも切り割り熨斗である。４は管玉未製品である。施工分割後、一部研磨している。石材は緑色凝灰岩か。特徴から弥生時代後期頃と考えられる。５は小札である。２つの３枚ずつ束ねられた小札が錆でくっついた状態で出土している。X線写真で部分



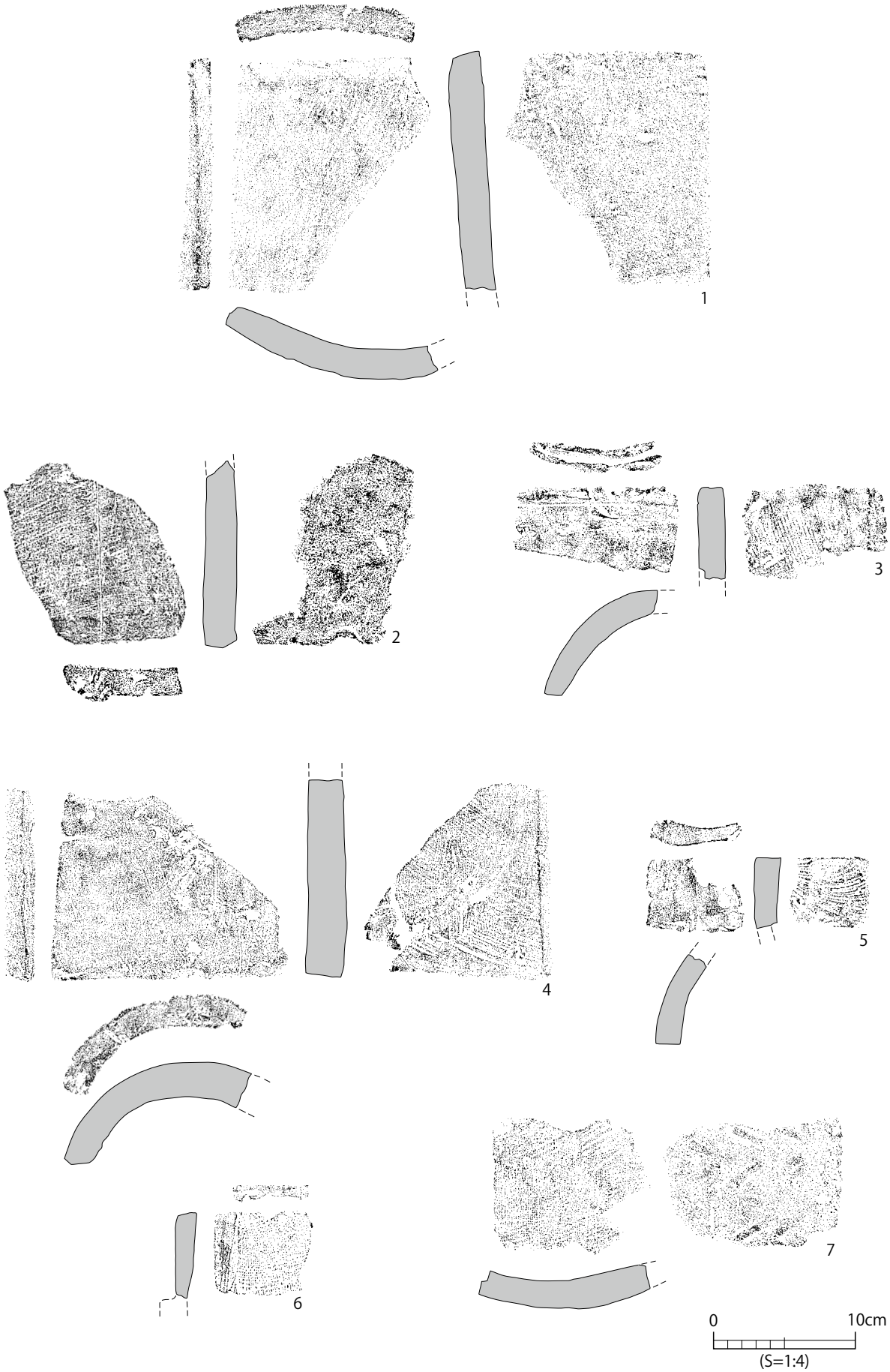
第62図　T69暗褐色土出土遺物（１）



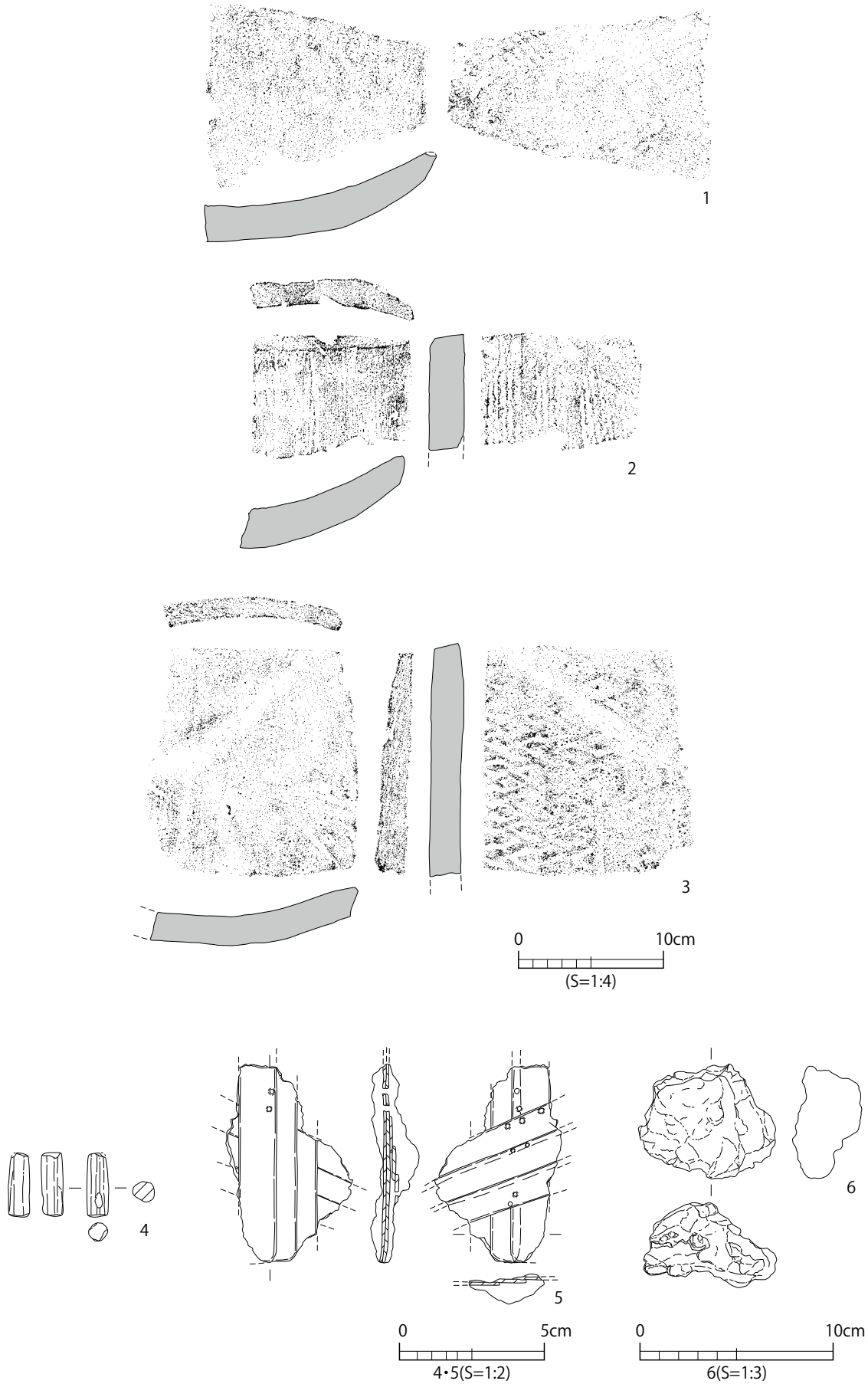
第63図　T69暗褐色土出土遺物（２）



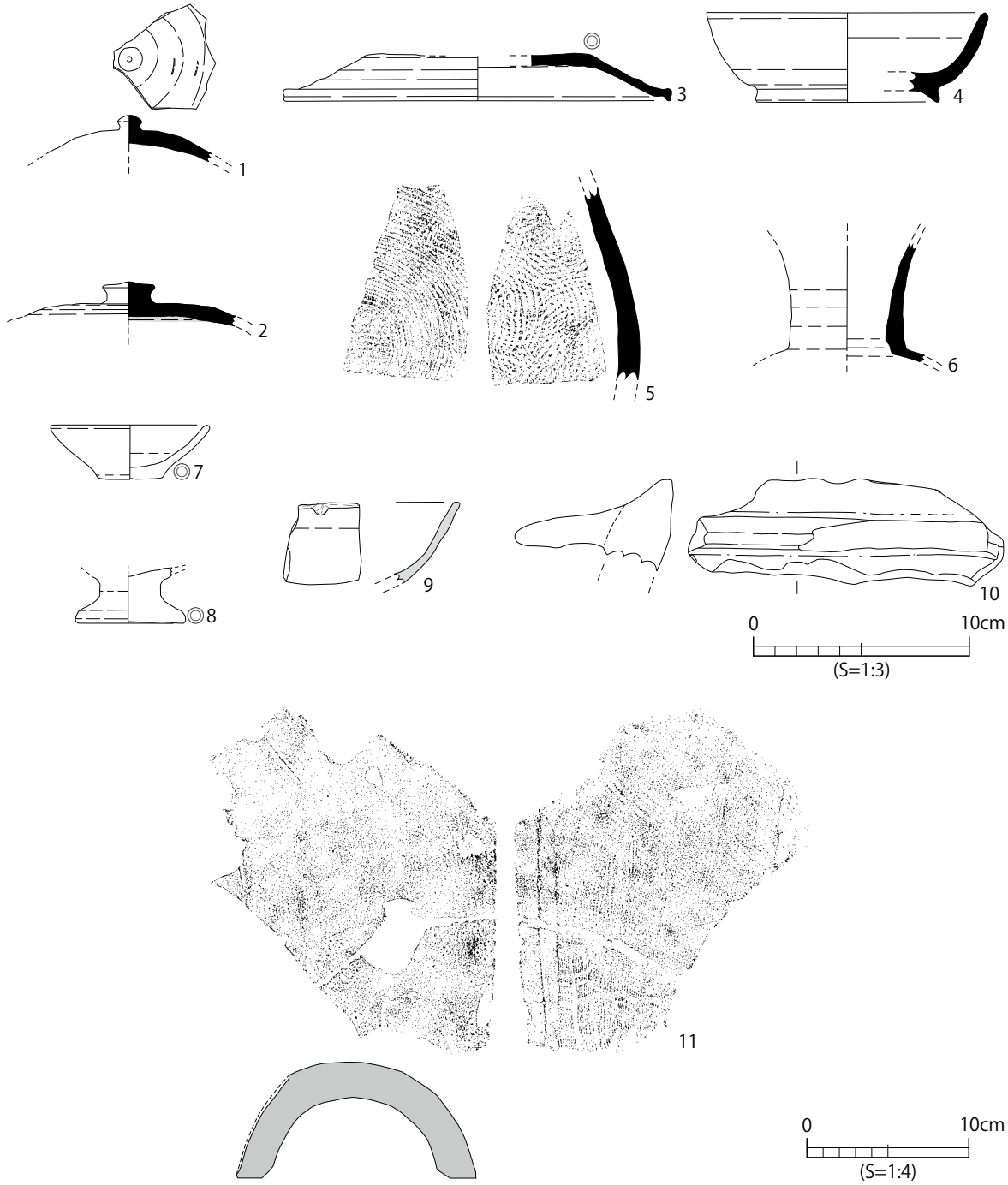
第64図　T69暗褐色土出土遺物（３）



第65図　T69暗褐色土出土遺物（４）



第66図　T69暗褐色土出土遺物（５）

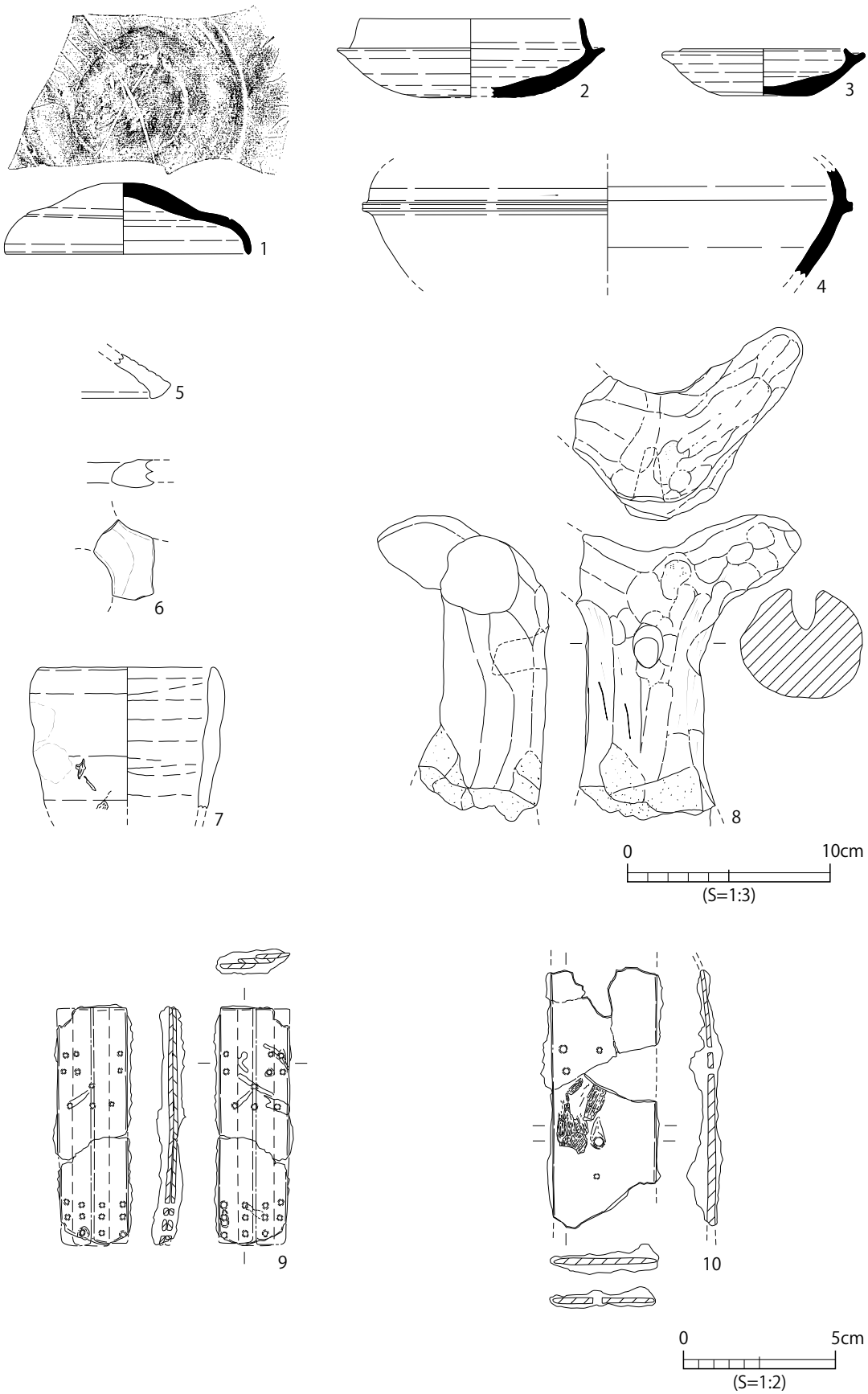


第67図　T69黒褐色土出土遺物

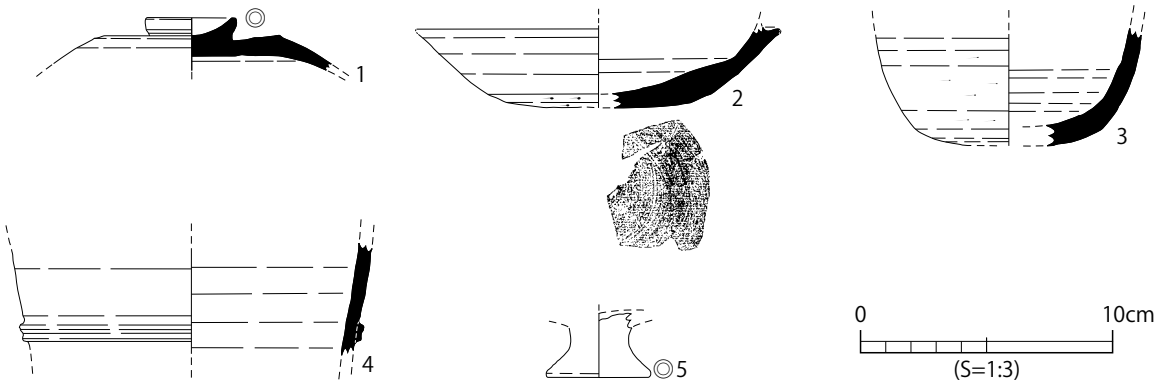
的に綴孔が確認できる。１枚あたりの幅から三型小札と考えられる（津野2011）。６は鉄滓である。重さ139.3gである。

第67図はT69西１区黒褐色土層出土遺物である。中には黒色土層出土として取り上げているものもあるが、同一層から出土したものである。

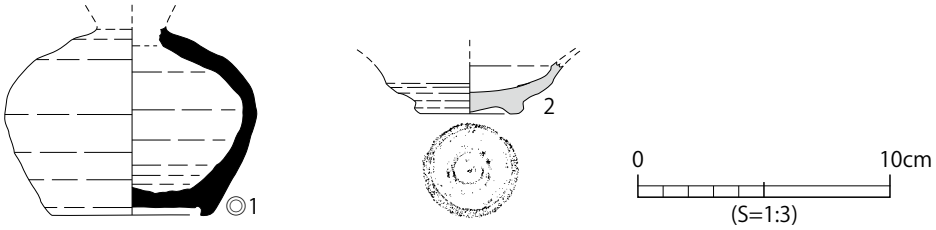
１～３は須恵器蓋である。１は小型の蓋でボタン状つまみがつく。２は内面に研磨痕のある転用硯である。３は頂部外面に回転糸切り痕跡が残る。第５型式に位置づけられる。４は須恵器高台付坏である。５は須恵器提瓶である。６は須恵器長頸壺である。７は土師器皿、８は土師器柱



第68図　T69遺構検出面出土遺物



第69図　T69拡張区出土遺物



第70図　T69撹乱層出土遺物

状高台、９は緑釉陶器輪花碗で、口縁部を押圧している。10は竈の庇部分である。11は丸瓦である。焼成は硬質である。

第68図は遺構検出面出土遺物である。１・３～８はT69西１区、２・９は東１区、10は東２区から出土した。

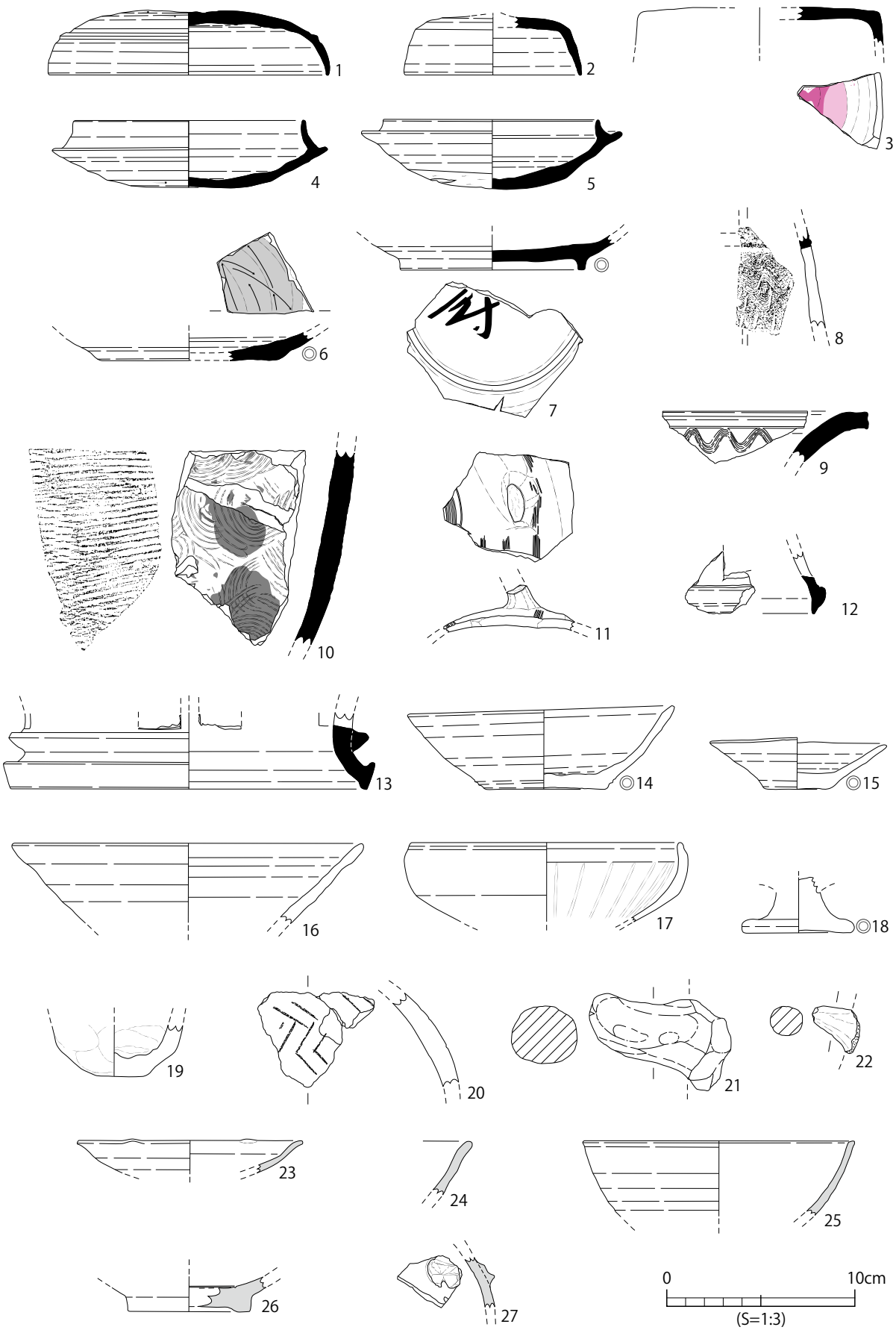
１は須恵器蓋で外面に×の刻書がある。２・３は須恵器坏、４は須恵器壺で胴部に突帯がつく。５は弥生土器高坏の脚端部である。外面に５条以上の凹線文を施す。Ⅳ-１型式であろう。６は甑の底部である。多孔の甑であると考えられる。７は製塩土器、８は土製支脚である。９・10は小札である。９はＸ線写真で、３枚が有機質素材で束ねられた状態で出土していることが確認できる。第３縅孔が確認できることや、１枚あたりの幅（1.2cm）から三型小札と考えられる（津野2011）。10は大ぶりな小札で時期や部位ともに不明である。

第69図はT69拡張区暗褐色土層出土遺物である。１は須恵器蓋である。ボタン状つまみ状の輪状つまみがつく。また、頂部外面に回転糸切り痕が残る。２は須恵器坏、３は須恵器甕底部、４は須恵器坏、５は土師器柱状高台である。４は胴部に突帯がつく。第６型式頃と考えられる。

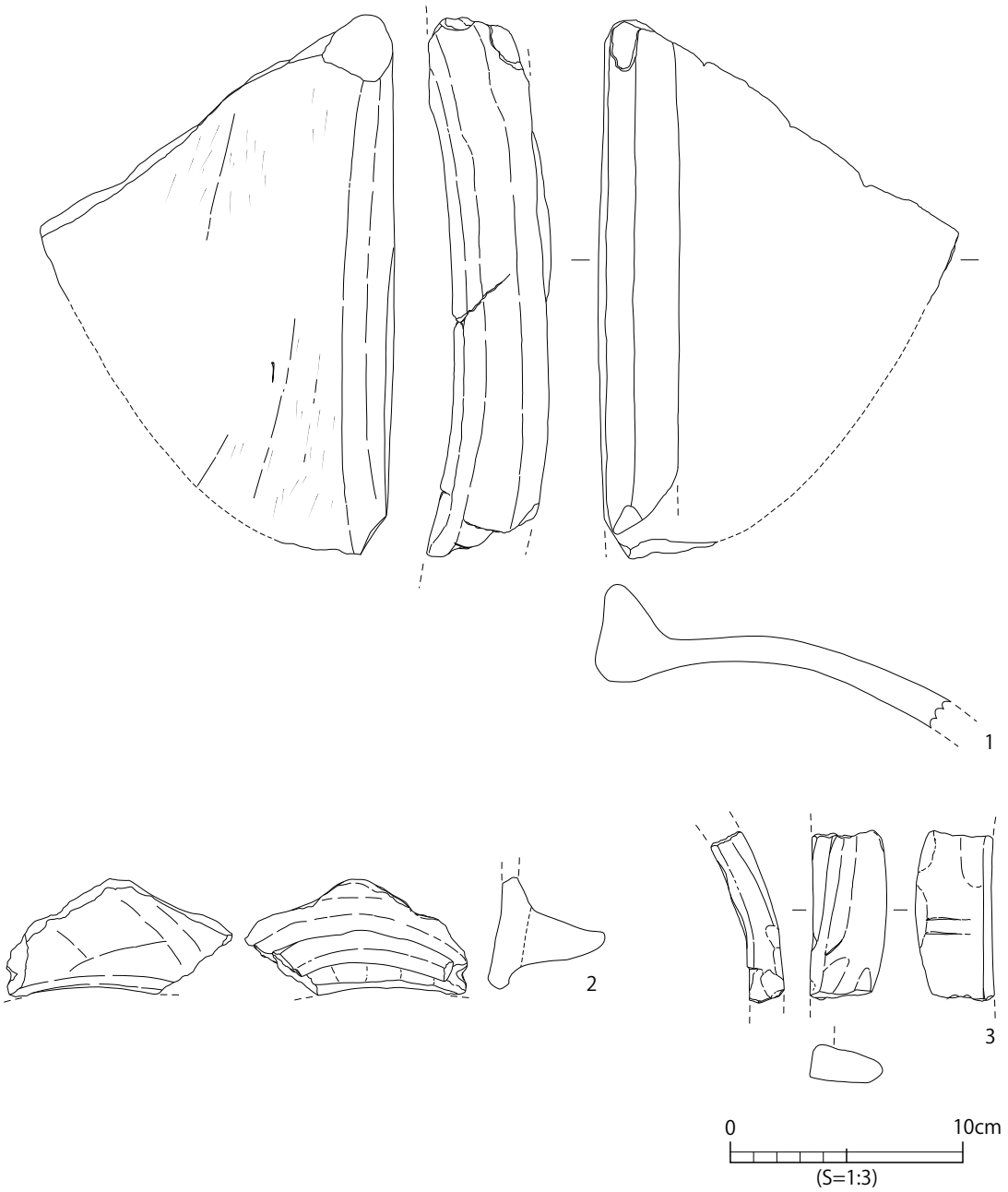
第70図はT69西１区撹乱層出土遺物である。１は須恵器小型壺である。２は肥前系陶器の折縁皿である。内面に４ヶ所胎土目がみられる。

（２）T70出土遺物

各層位ごとに代表的な遺物を掲載した。第71図～第74図は暗褐色土層、第75図は検出面出土遺物、第76図は第１整地層出土遺物、第77図、第78図は撹乱土出土遺物である。出土位置等は、遺物観察表を参照されたい。

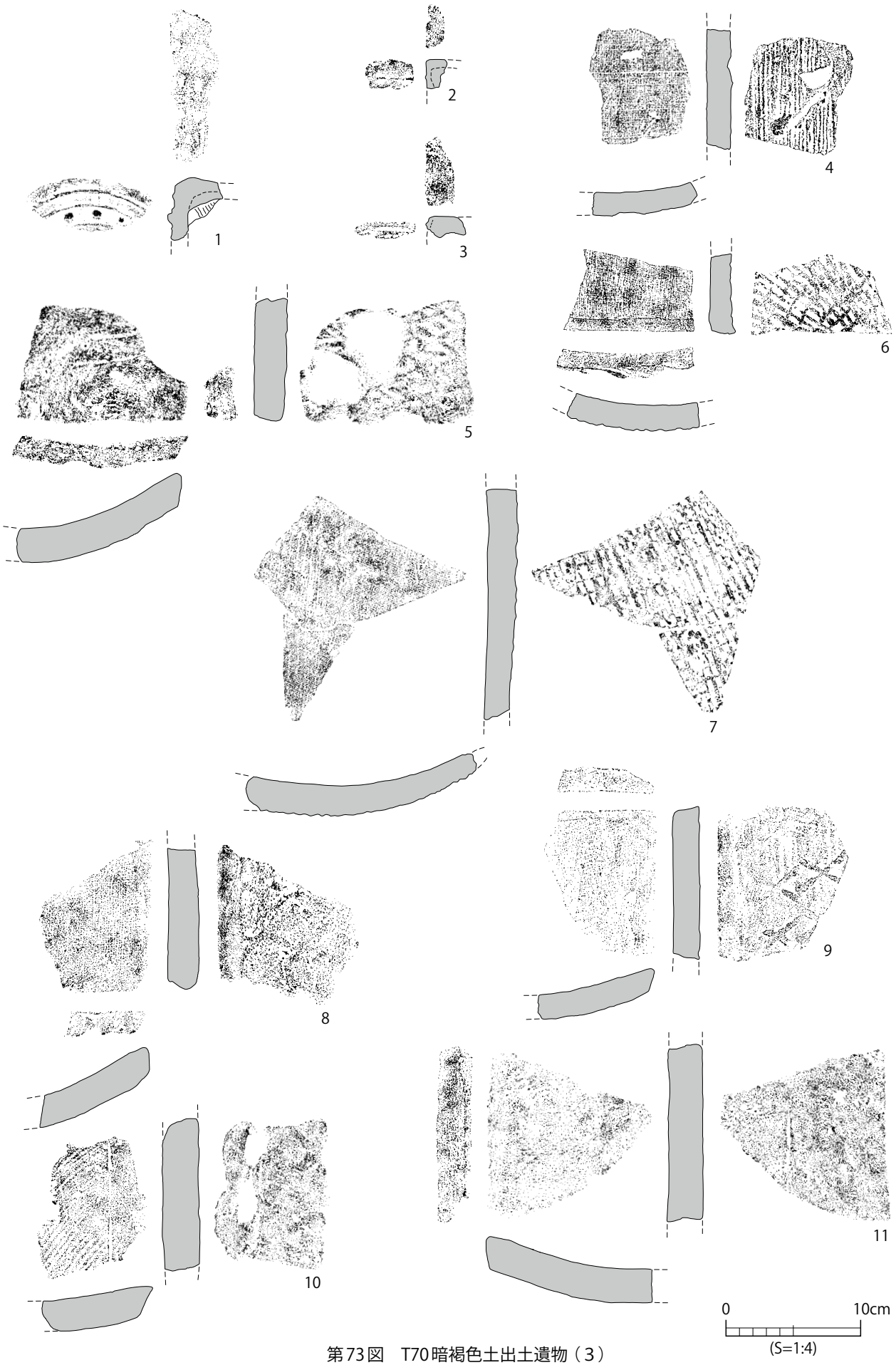


第71図　T70暗褐色土出土遺物（１）



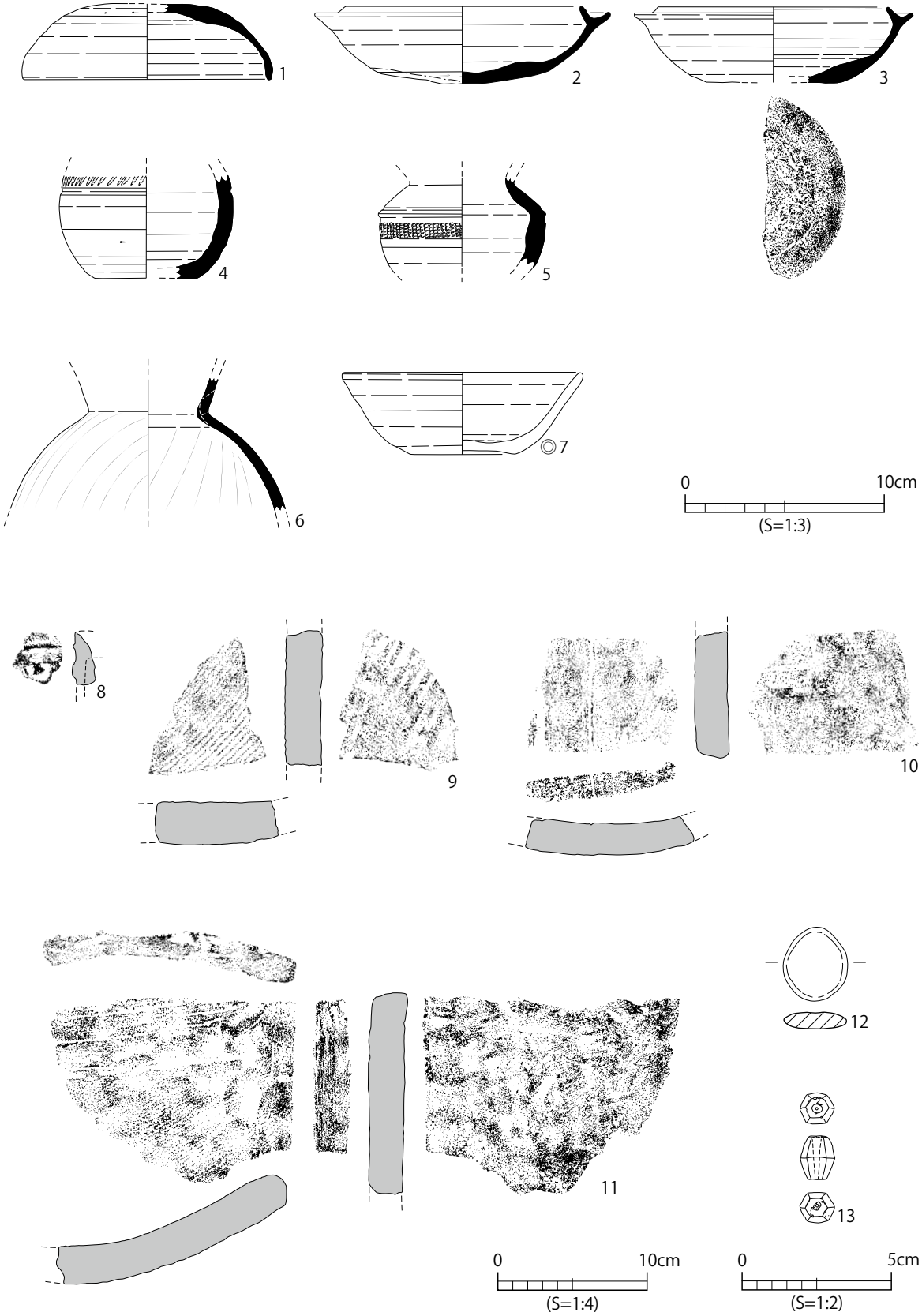
第72図　T70暗褐色土出土遺物（２）

第71図１～３は須恵器蓋である。３は短頸壺の蓋で内面に朱が付着している。朱は中央部の方が濃く付着している。研磨痕はなく、パレットなどとして使用された可能性がある。４・５は須恵器坏身、６は須恵器無高台坏である。内面に研磨痕のある転用硯である。７は高台付坏である。高台内面に「厨」の墨書がある。８は須恵器器台の脚部である。方形透かしが穿たれ、沈線間に４段の波状文が施される。９は須恵器甕口縁である。大きく外反し、波状文が施される。10は須恵器甕胴部で内面に墨痕がつくが、研磨痕はない。11は平瓶の把手部分である。12･13は円面硯である。14は土師器無高台坏、15は土師器無高台皿である。16は土師器坏である。これまでの類例から大型の足高高台付坏であると考えられる。既往の調査では六所脇地区でのみ出土が認められるほか、島根県内では馬場遺跡（雲南市）で事例がある（島根県教委会2019）。第８型式～第10型式に位置づけられる。17は土師器碗である。内面に放射状暗文を施す。18は柱状高台である。19は手づく

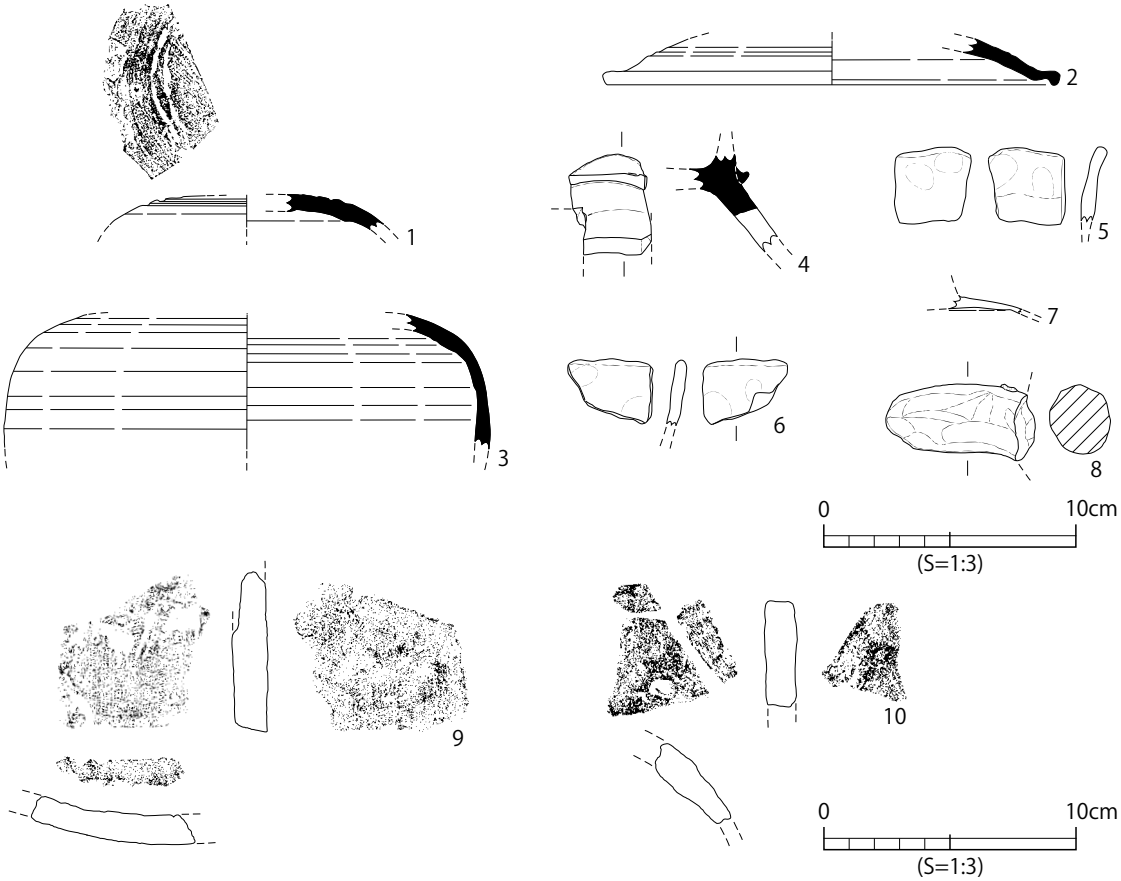


第73図　T70暗褐色土出土遺物（３）

第74図　T70暗褐色土出土遺物（４）



第75図　T70遺構検出面出土遺物



第76図　第１整地層出土遺物

ね土器である。20は壺である。外面に斜行刺突文を施す。21・22は甑把手で22はかなり小型の把手である。

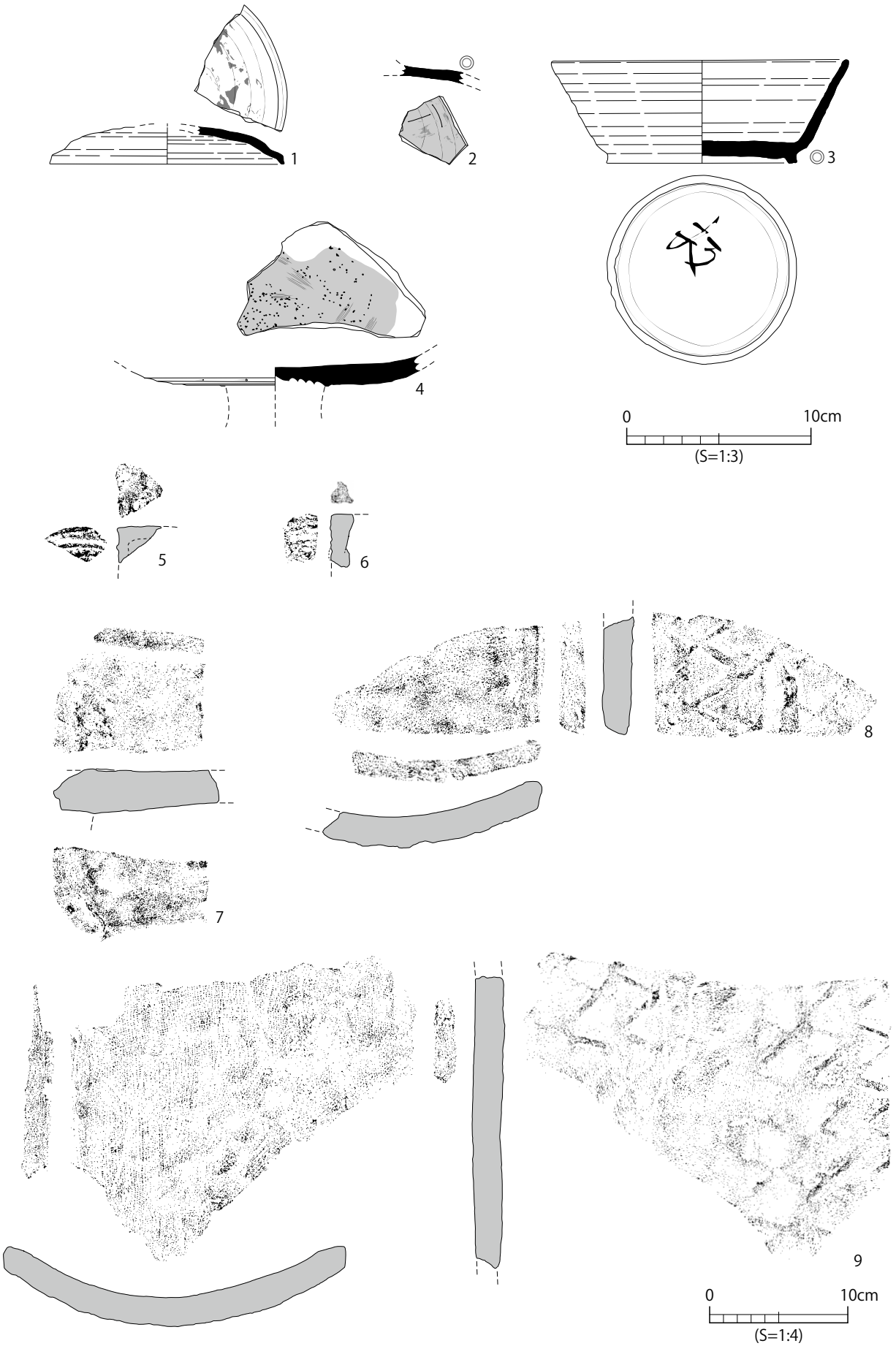
23・24は緑釉陶器で、23は緑釉陶器輪花皿で口縁部を押圧する。25は広東系白磁碗で、大宰府Ⅱ類に位置づけられる。26は福建窯白磁皿で大宰府Ⅳ類に位置づけられる。27は白磁四耳壺の小片である。

第72図１～３は竈である。３は１・２に比べてやや小ぶりである。

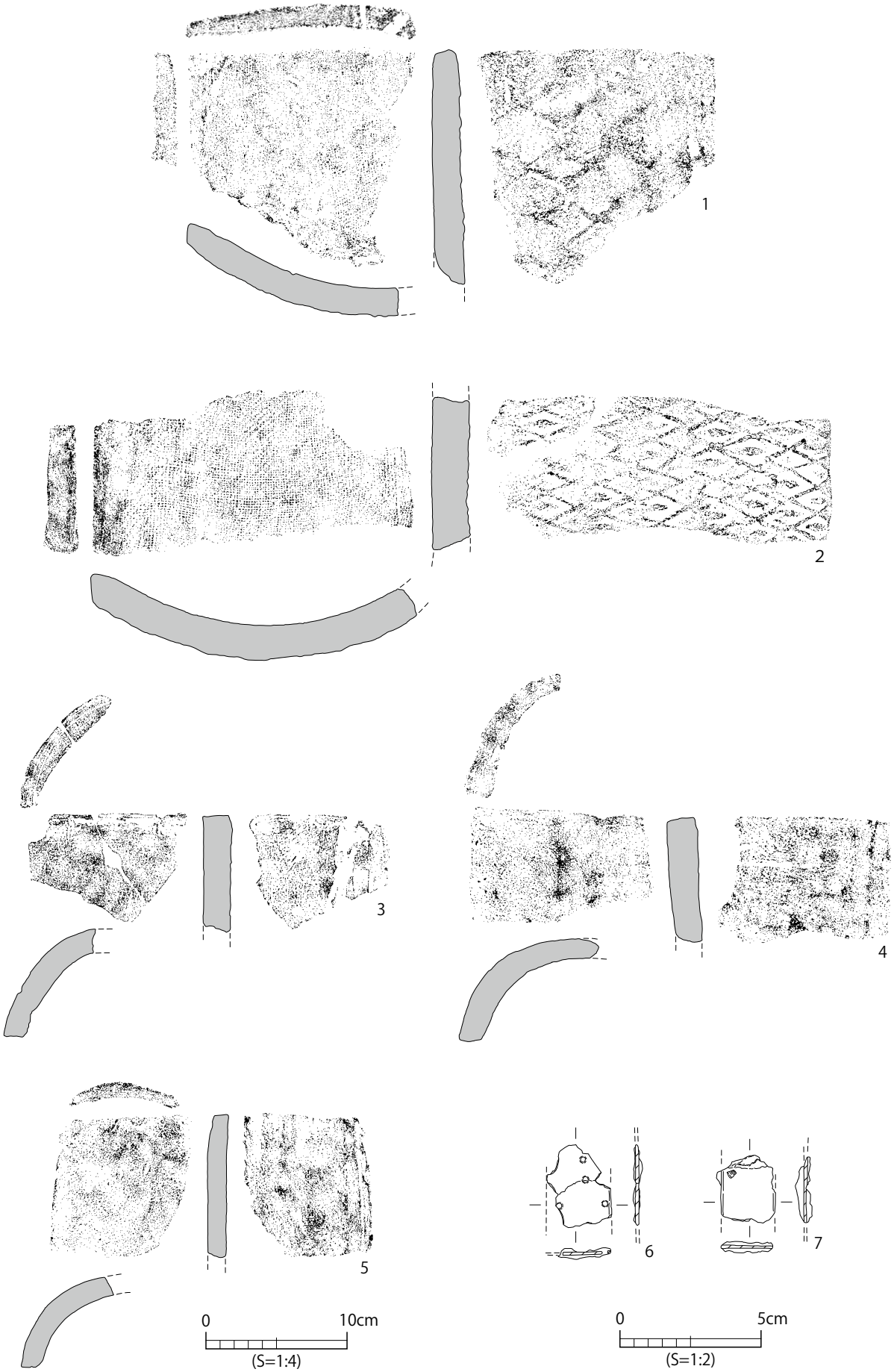
第73図１～３は軒丸瓦瓦当部である。１は国分寺３類、２・３はいずれも国分寺補修期に位置づけられよう。４～11は平瓦である。４は凸面調整縄タタキで焼成硬質である。11は凸面調整ナデもしくはケズリで焼成軟質である。そのほかは凸面調整格子タタキである。第74図１～７は丸瓦で１～３は無段式丸瓦、４は有段式丸瓦で焼成は硬質である。８・９は熨斗瓦である。いずれも切り割熨斗である。10は水晶製平玉である。

第75図は遺構検出面出土遺物である。１～３・７は東１区、４・５・８・11～13は東２区、６は西１区、12は西２区から出土した。

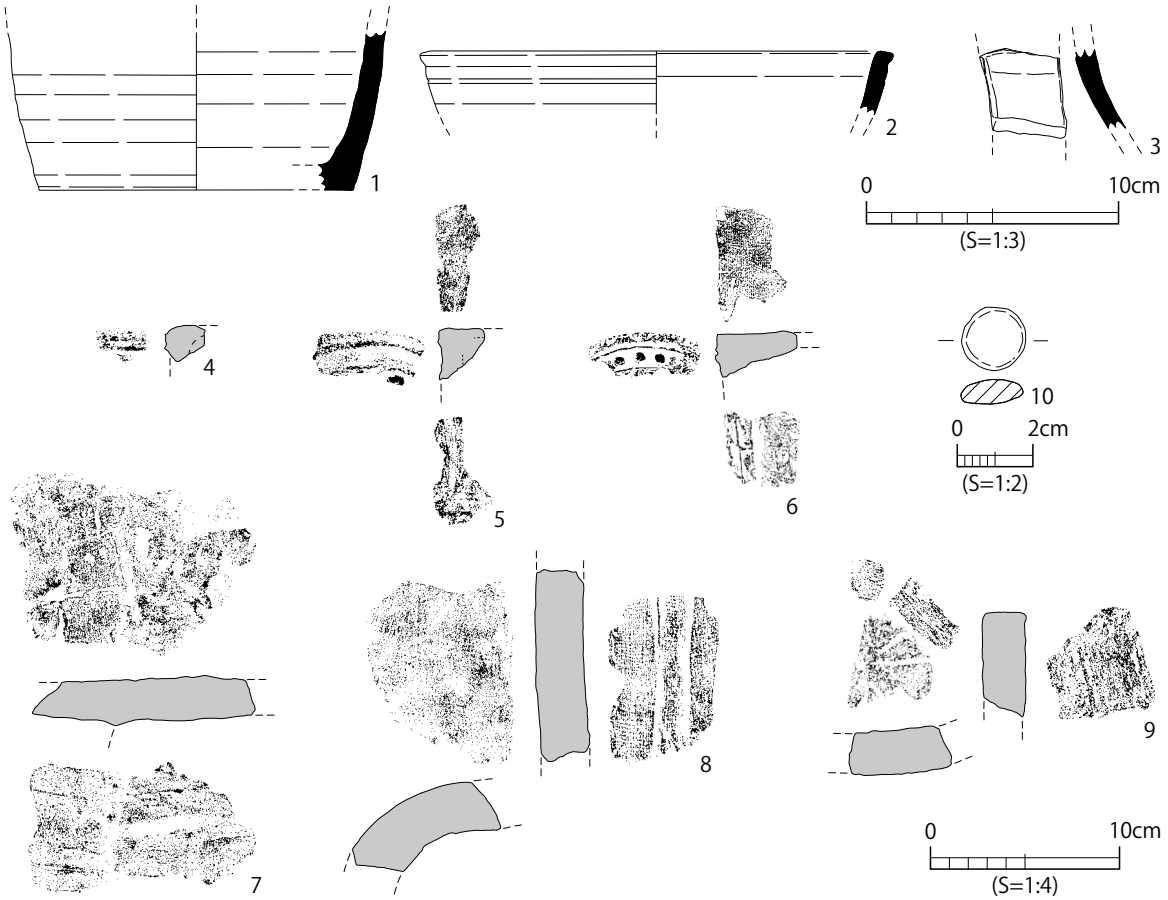
１は東１区で出土した須恵器坏蓋である。２・３は東１区で出土した須恵器坏身である。４・５は東２区で出土した須恵器瓹である。６は西２区で出土した須恵器提瓶である。７は東１区で出土した土師器無高台坏である。８～11は東２区で出土した瓦で８は出雲国分寺３類の軒丸瓦瓦当部である。９～11は平瓦で９は凸面調整平行タタキ、焼成硬質である。10・11は焼成軟質



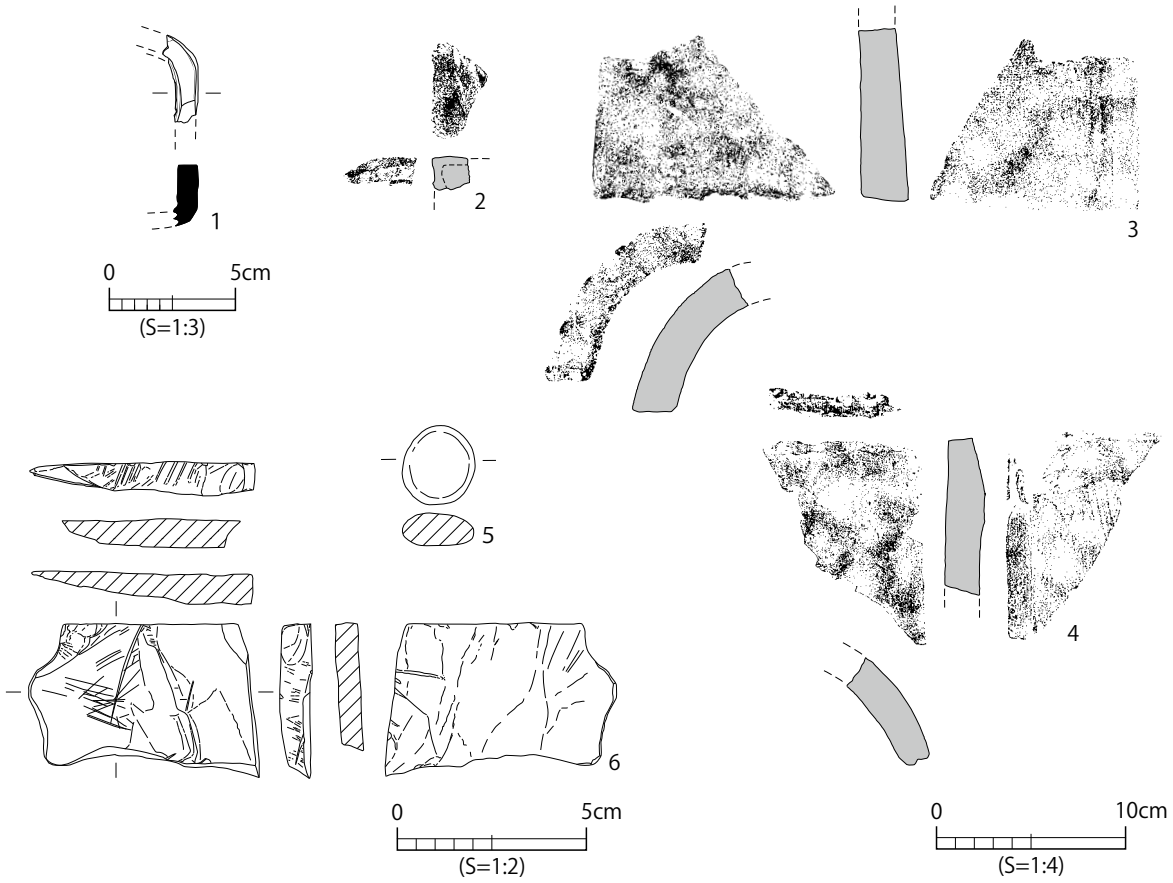
第77図　T70撹乱層出土遺物（１）



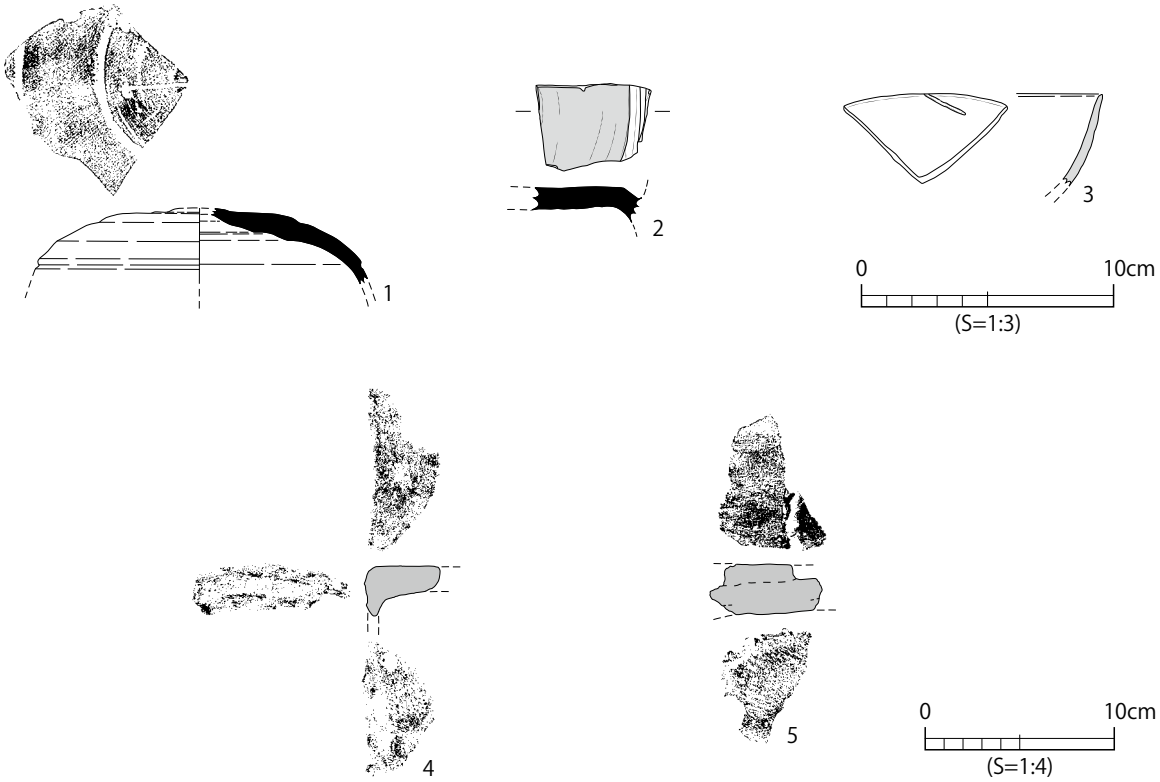
第78図　T70撹乱層出土遺物（２）



第79図　T71暗褐色土出土遺物



第80図　T69・T70埋め戻し土出土遺物



第81図　昭和調査区（Ⅰ区）埋め戻し土出土遺物

である。12は平玉である。全体に研磨され、色調は赤褐色である。流紋岩製と考えられる。13は水晶製切子玉である。６世紀前葉～中葉に位置づけられ、使用痕が少ない成品と考えられる。

第76図はT70西１区に設けたサブトレンチ（第１整地層）出土遺物である。１・２は須恵器蓋、３は須恵器壺、４は円面硯である。５・６は製塩土器である。７は磁器の小片である。器種は蓋の可能性がある。越州窯産の可能性があるが、時期、器種ともに特定は困難である。８は甑把手である。９は平瓦で凹面にヘラによる分割線がみえる。10は無段式丸瓦である。狭端面の隅を落とし調整をしている。９・10はいずれも焼きは軟質で国分寺補修期に位置づけられる。

第77図と第78図は東３区の撹乱土から出土した遺物である。第77図１・２は須恵器蓋である。１は、研磨痕は確認できないものの内面に墨痕がついている。２は内面が全体に研磨されている。転用硯である。３は須恵器高台付坏である。高台内面に墨書がある。全体に墨が薄く、文字は判別できないが、「木へん」もしくは「手へん」の漢字の可能性がある。出雲国府第５型式に位置づけられる。４は須恵器高坏である。内面に研磨痕が確認できる。また、墨痕も付着している。転用硯である。

５・６は軒丸瓦瓦当部である。いずれも小片であるが国分寺３類である。７は軒丸瓦丸瓦部である。焼成は軟質で出雲国分寺補修期に位置づけられる。８・９、第78図１・２は平瓦である。いずれも凸面調整格子タタキで焼成軟質である。８・９は色調と凸面調整から同一個体の可能性がある。また、９は凹面の瓦の重なっていたであろう部分の色調が異なる。３～５は丸瓦である。４は無段式丸瓦、５は有段丸瓦Ｂである。３は焼成硬質、４・５は焼成軟質である。６・７は小札で同

一固体の可能性がある。６は最大幅2.1cm、縅孔１列である。４つの孔がみられる。二型小札と考えられる（津野2011）。

（３）T71 出土遺物

第79図はT71暗褐色土層出土遺物である。１～４・６・７は１区から出土し、それ以外は２区から出土した。

１は須恵器壺底部である。２は須恵器鉢で口縁下に沈線がある。３は円面硯である。４～６は軒丸瓦瓦当部である。４・５は軟質で国分寺３類に位置づけられる。６は焼きが硬質であり、外区珠文の位置から国分寺１類に位置づけられる。７は軒丸瓦丸瓦部である。８は丸瓦、９は隅切平瓦である。焼成は軟質である。10は平玉で黒色を呈する。

（４）その他

第80図はT69、T70の埋め戻し土から出土した遺物である。どの位置から出土したかの情報はないが、特徴的な遺物について掲載する。１は風字硯である。２は軒丸瓦瓦当部である。小片のため特定は困難であるが、四王寺Ⅱ類の可能性がある。３・４は丸瓦である。５は平玉で黒色を呈する。６は板石硯の可能性がある石製品である。表面が研磨されており、側面調整は打割後研磨、あるいは未調整である。古墳時代中期に位置づけられる可能性もあるが、中世の砥石の可能性もある。

第81図は昭和調査区（Ⅰ区）の埋め戻し土出土遺物である。１は須恵器坏蓋で頂部外面にヘラ記号がある。２は円面硯である。小片で全体は不明である。内面全体が研磨されている。３は緑釉陶器碗である。口縁部内面に重ね焼き痕がつく。４は軒丸瓦の瓦当部小片である。出雲国分寺３類に位置づけられる。５は軒丸瓦丸瓦部である。焼成は軟質で国分寺補修期に位置づけられる。

註

（１）37 号建物は令和４年度も継続して調査が行われている。新たに柱掘方等を検出したほか、根石などの可能性がある礫が検出されている。しかし、検出の状況から確実な礎石への建て替えの痕跡は確認できていない。詳細な情報と今後の検討、調査結果に期待したい。

参考文献

島根県教育委員会 2019『史跡出雲国府跡』10

津野　仁 2011『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館

第 4 章　自然科学分析

第 1 節　出雲国府跡 96 号溝・第 1 整地層の AMS 年代測定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

史跡出雲国府跡は、島根県東部、松江市大草町に位置し、意宇川の成す扇状地上に立地する。本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、史跡出雲国府跡発掘調査に伴い検出された遺構の年代と、柱穴埋土の性格を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターからの委託を受け、実施・報告した 2018 年度及び 2020 年度調査に係る AMS 年代測定の調査報告書を再編したものである。

分析試料について

分析試料のうち、AMS 年代測定試料は、島根県教育庁埋蔵文化財センターにより採取・保管されていた中から御提供を受けた。また、以下に示す平面図は、島根県教育庁埋蔵文化財センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。

調査区配置図（第 82 図）中に、試料採取地点を示す。96 号溝内 AMS 年代測定試料（T69-1）採取地点を「●」で示した。また、「昭和の調査区（Ⅰ区）」（図中左上部）を暗灰色のハッチで示し、関連する 3 試料（T71-1 ～ 3 ）の採取位置を昭和の調査区（Ⅰ区）平面図及び南壁断面図（第 83 図）中に示す。いずれも、「第 1 整地層」内から採取されている。

第82図　調査区の配置（試料採取地点）

AMS 年代測定方法

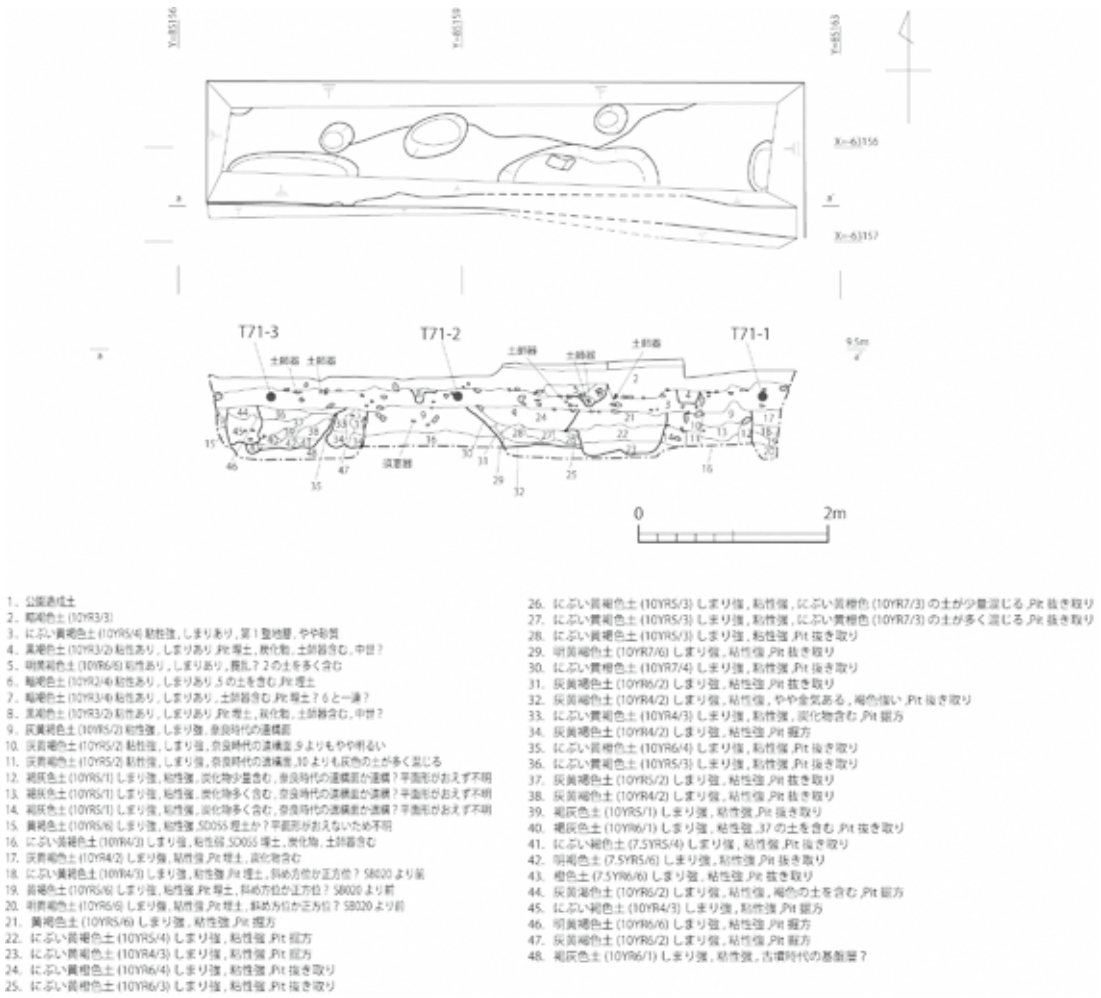
塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.4（Bronk Ramsey, 2009）を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

AMS 年代測定結果とその評価

(1) AMS 年代測定結果

年代測定結果を第 3 表、第 84 図に示す。

第 3 表には、試料の詳細、前処理方法、δ^{13}C 値と 4 種類の測定年代を示している。第 85 図には INTCAL20(Reymer et al., 2020) を用いた暦年較正結果を示した。また、確率分布と σ、2 σ



第 83 図　昭和の調査区（I 区）平面図及び南壁土層図

の構成範囲を示している。

(2) 96 号溝の年代測定結果について

2 σで 706-882 年の値が得られた。これは出雲国府が創建されたと推定される時期を含む。測定対象とした試料が炭化材であり、遺構の実際の時期より遡る年代が得られることが一般的である。これらのことから、試料が採取された遺構が、出雲国府に関係した遺構である可能性が高い。

(3)「第 1 整地層」の整地時期について

第 85 図に暦年較正結果一覧を示す。

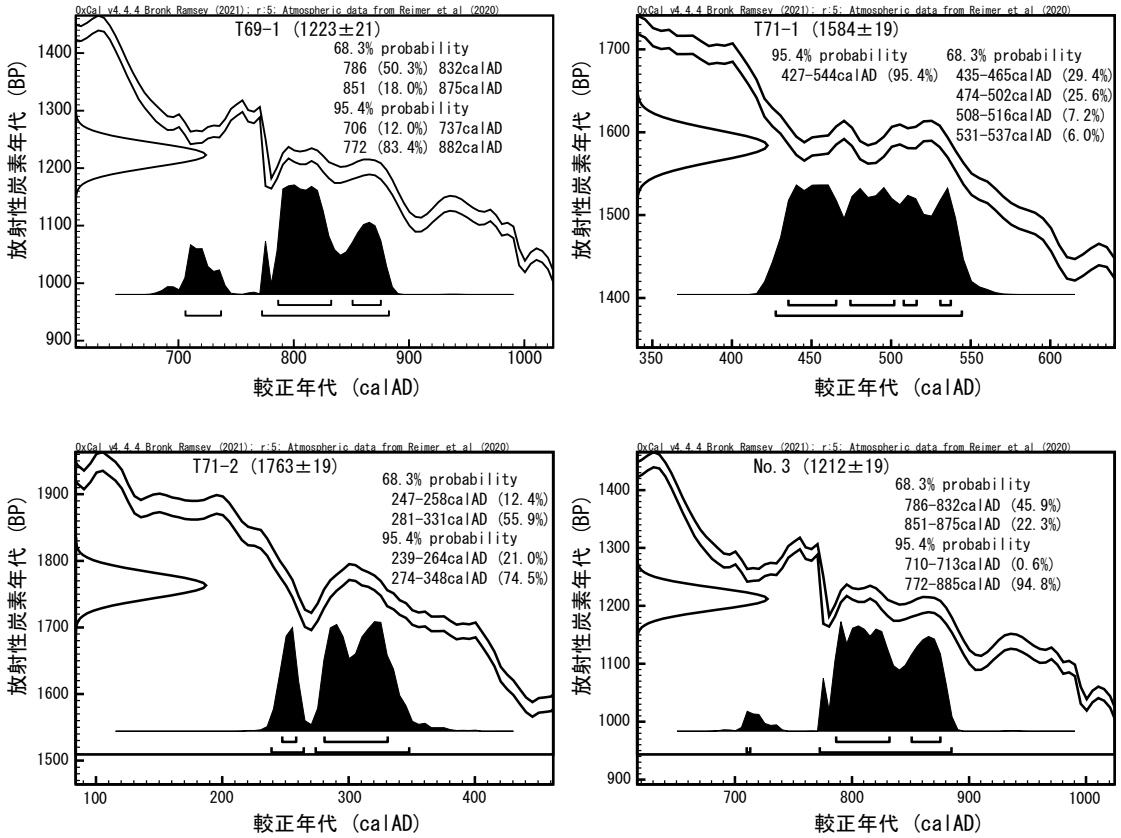
3 試料ともに 2 σでの重なりが認められず、最も古い較正年代が cal AD 239-348（弥生時代後期～古墳時代中期）、最も新しい年代が cal AD710-885（飛鳥時代末～平安時代前期）であった。

出土遺物から「第 1 整地層」は、奈良時代以降に整地されたと考えられている。この時期を示

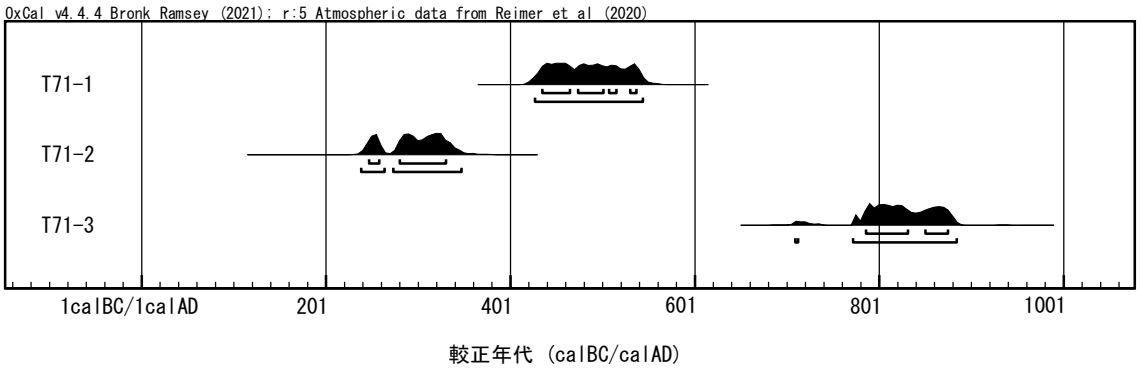
第3表　年代測定結果

試料						前処理	測定番号
試料№	調査区	出土地点（遺構ほか）	状況	重量 (g)	推定時期		
T69-1	T69 東２区	９６号溝	炭化材	0.4185	―	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)	PLD-37964
T71-1	T71 昭和の調査区	第１整地層	炭化材	0.0562	―	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)	PLD-43789
T71-2	T71 昭和の調査区	第１整地層	炭化材	0.1067	-	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)	PLD-43790
T71-3	T71 昭和の調査区	第１整地層	炭化材	1.0988	―	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)	PLD-43791

試料№	δ^{13}C (‰)	δ^{13}C 補正無年代 (yrBP ± 1 σ)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
T69-1	-25.16 ± 0.12	1226 ± 22	1223 ± 21	1225 ± 20	786- 832 cal AD (50.3%) 851- 875 cal AD (18.0%)	706- 737 cal AD (12.0%) 772- 882 cal AD (83.4%)
T71-1	-25.22 ± 0.18	1588 ± 19	1584 ± 19	1585 ± 20	435- 465 cal AD (29.4%) 474- 502 cal AD (25.6%) 508- 516 cal AD (7.2%) 531- 537 cal AD (6.0%)	427- 544 cal AD (95.4%)
T71-2	-23.06 ± 0.14	1731 ± 19	1763 ± 19	1765 ± 20	247- 258 cal AD (12.4%) 281- 331 cal AD (55.9%)	239- 264 cal AD (21.0%) 274- 348 cal AD (74.5%)
T71-3	-28.61 ± 0.12	1272 ± 19	1212 ± 19	1210 ± 20	786- 832 cal AD (45.9%) 851- 875 cal AD (22.3%)	710- 713 cal AD (0.6%) 772- 885 cal AD (94.8%)



第84図　暦年較正結果



第85図　暦年較正結果の分布

す測定値は、最も新しい cal AD710-885（飛鳥時代末～平安時代前期）であり、出土遺物からの推定と一致する。したがって、古い年代値を示した２試料は、整地の母材とから二次的に混入したものと考えられる。

引用文献

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62.

第２節　出雲国府跡 36 号建物抜き取り穴埋土の X 線回折

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

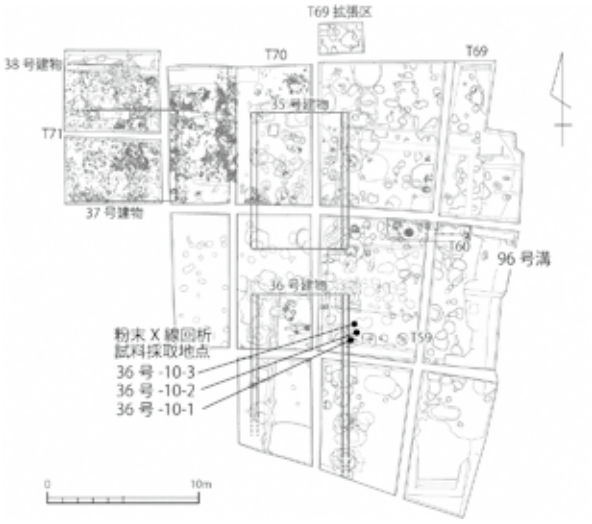
はじめに

史跡出雲国府跡は、島根県東部、松江市大草町に位置し、意宇川の成す扇状地上に立地する。本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、史跡出雲国府跡発掘調査に伴い検出された遺構の年代と、柱穴埋土の性格を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターからの委託を受け、実施・報告した 2018 年度調査で検出された柱穴（36 号建物 P10）に係る顕微鏡観察及び粉末Ｘ線回折の調査報告書を再編したものである。

分析試料について

分析試料のうち、X 線回折用試料は島根県教育庁埋蔵文化財センターと協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。また、以下に示す平面図は、島根県教育庁埋蔵文化財センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。

調査区配置図（第 86 図）中に、試料採取地点を示す。粉末 X 線回折試料（顕微鏡観察試料）採取地点を「●」で示した。



第86図　調査区の配置（試料採取地点）

分析方法

(1) 顕微鏡観察方法

下記の方法で観察試料を調製し、実体顕微鏡下で観察した。観察に際し、火山ガラスの含有状況に注目した。

①観察試料を蒸発皿に分取。

②分取試料を水道水に浸した状態で超音波洗浄機により泥化分散

③ステンレスふるい（4 φ）で粒径処理

④残渣を乾燥し、観察試料とする

(2) 粉末Ｘ線回析方法

下記の手順で分析を行った。また、測定条件を第 4 表にまとめる。

① 60℃に設定した定温乾燥機にて、24 時間乾燥

② 乾燥後、メノウ乳鉢ですり潰す

③ 測定試料をスライドグラス上にスパーテルで 3 杯分を分取し，蒸留水を滴下し撹拌後一晩静置（乾燥）

第４表　X 線回折測定条件

X 線管球のターゲット：Cu	
X 線管球の管電圧及び管電流：30kv　20mA	
走査条件	スリットの条件
走査範囲：2-70°	発散スリット：1°
走査速度：2°/ 分	散乱スリット：0.3°
走査ステップ：0.02°	受光スリット：0.6°

④ 測定 リガクＸ線回折装置（RINT-2000）による

粉末Ｘ線回析結果と試料間の相違

(1) 粉末Ｘ線回析結果

第 87 図に、二次検索シートを示す。

３試料ともに、粘土鉱物としてバーミキュライト、イライト、カオリナイトの３種が、造岩鉱物として石英と斜長石（曹長石）が検出された。

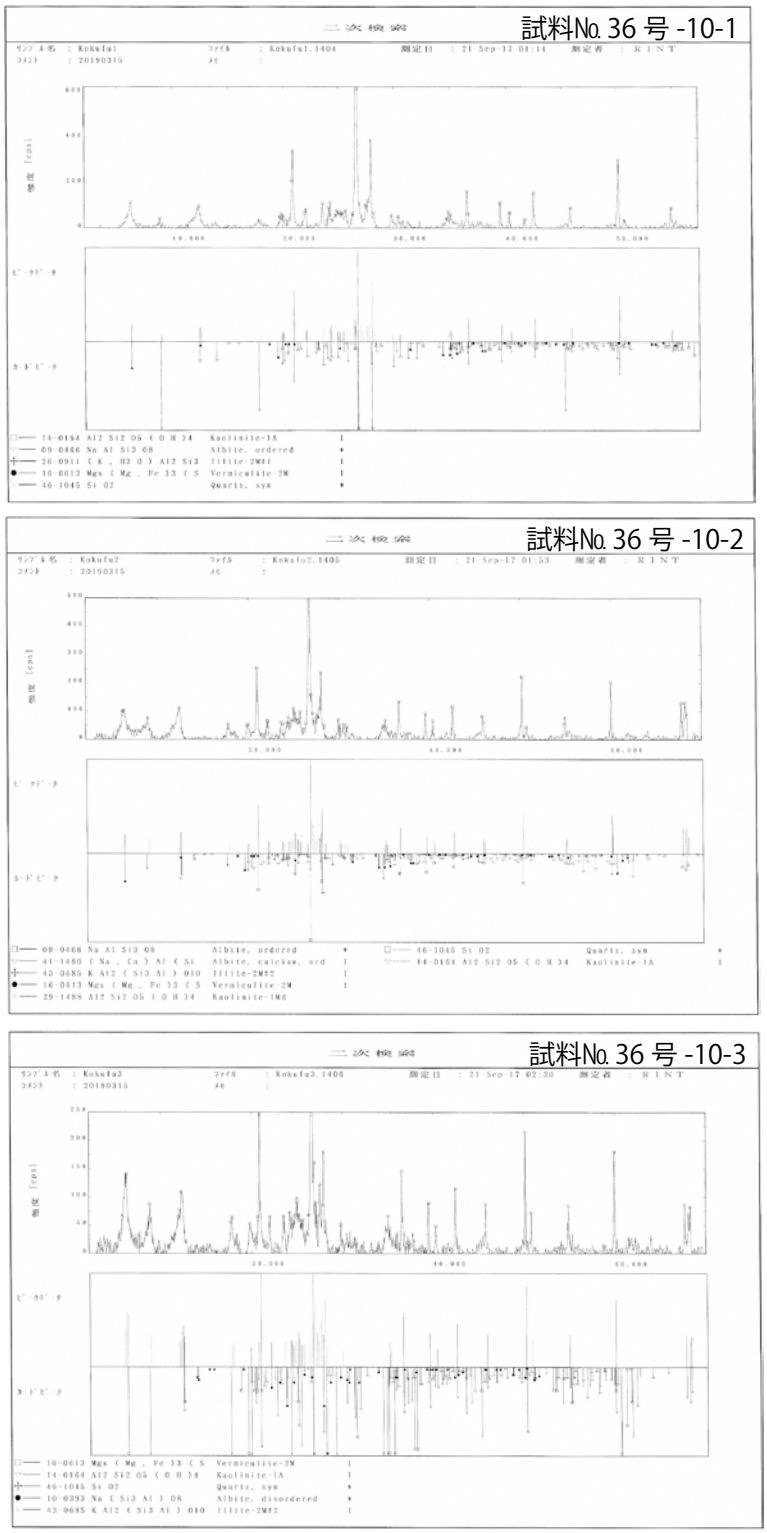
(2) 試料間の相違

第５表 にＸ線回折ピークの強度と石英（Qz）、イライト（Ill）、カオリナイト (K1n) との比を示す。この表から明らかなように、試料№２、３に対して試料№１では石英（Qz）と斜長石（曹長石）（Pl）の強度が高く、含有量が多いことが示唆される。

顕微鏡観察結果と火山灰混合の可能性について

(1) 顕微鏡観察結果

顕微鏡写真を第 88、89 図に示した。試料№１、２では火山ガラスは認められず、石英、長石類が目立った。試料№３では石英、長石類がほとんどを示すが、火山ガラスがごく僅かに認められ、有色ガラスも認められた。



第87図　粉末Ｘ線回折二次検索シート

第５表　Ｘ線回折ピークの強度と比

Sample	Vm	Ill	Kln	Qz	Qz	Pl	Vm/Qz	Ill/Qz	Kln/Qz	Pl/Qz	Qz/Ill	Pl/Ill	Qz/Kln	Pl/Kln
2 θ	6.2	8.9	12.3-4	20.8	26.6	27.8-28								
36 号 -10-1	116	46	100	343	1730	390	0.3	0.1	0.3	1.1	7.5	8.5	3.4	3.9
36 号 -10-2	104	77	114	254	1274	173	0.4	0.3	0.4	0.7	3.3	2.2	2.2	1.5
36 号 -10-3	145	88	109	274	1389	282	0.5	0.3	0.4	1	3.1	3.2	2.5	2.6

また、３試料ともに石英、長石類がほとんどを占めることは、粉末 X 線回折結果と一致した。

(2) 火山灰混合の可能性について

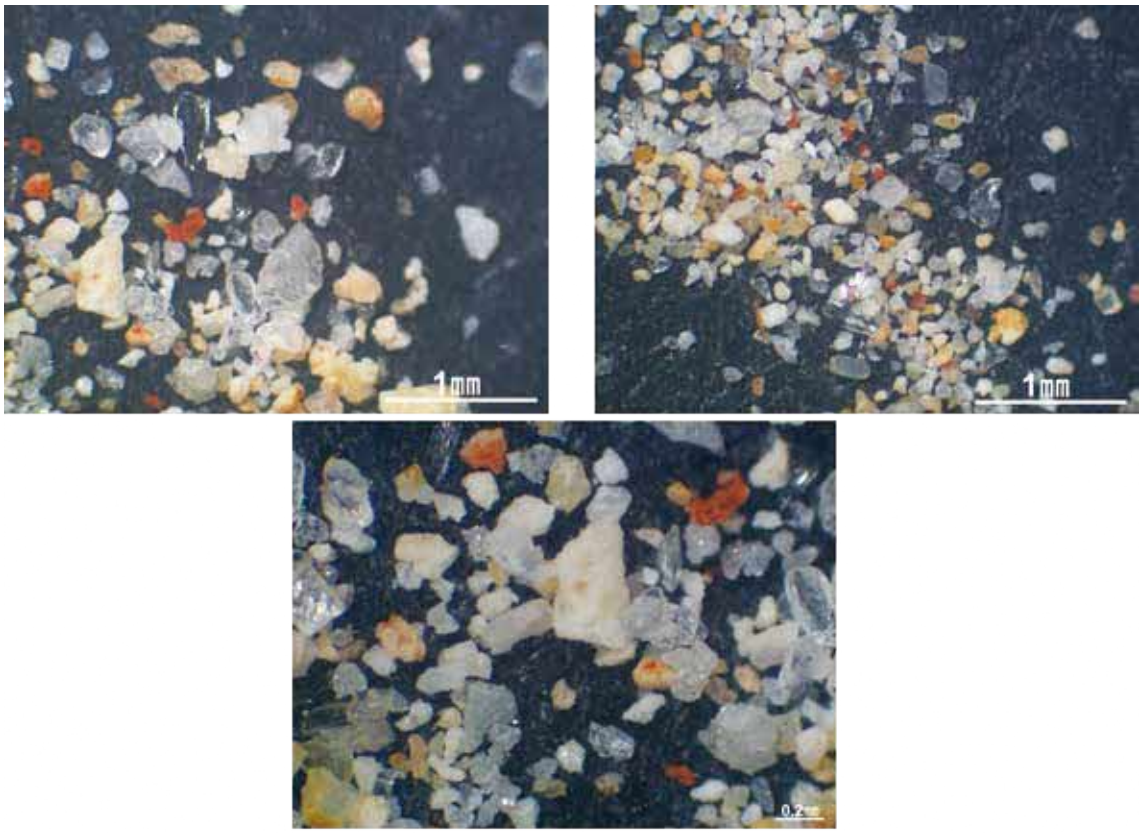
火山灰（降下火山灰）層は、火山ガラス、石英や長石類などの軽鉱物、角閃石、輝石などの重鉱物から成る。火山の噴火に伴い広域に散布され、一般的には火口近くでは重鉱物が多く、離れるに従い軽鉱物、火山ガラスが多くなる傾向にある。

一般に火灰層は、全鉱物に占める火山ガラス含有量の多少で認識されることが多い（いわゆる「広域火山灰（層）」では、遠方から飛来した結果８割以上を火山ガラスで占めることもある。）。火山灰灰層の同定（対比）に、火山ガラスの形態、屈折率、化学組成が多く用いられるのは、このためである。一方で火山ガラスが劣化（風化）し、ほとんど検出されないこともある。このような場合は含まれる重鉱物の量比や屈折率から同定（対比）されることもある。また、火山ガラスは再堆積や生物擾乱によって土壌中に僅かに含まれることも知られている（例えば川崎地質（株），1999）。

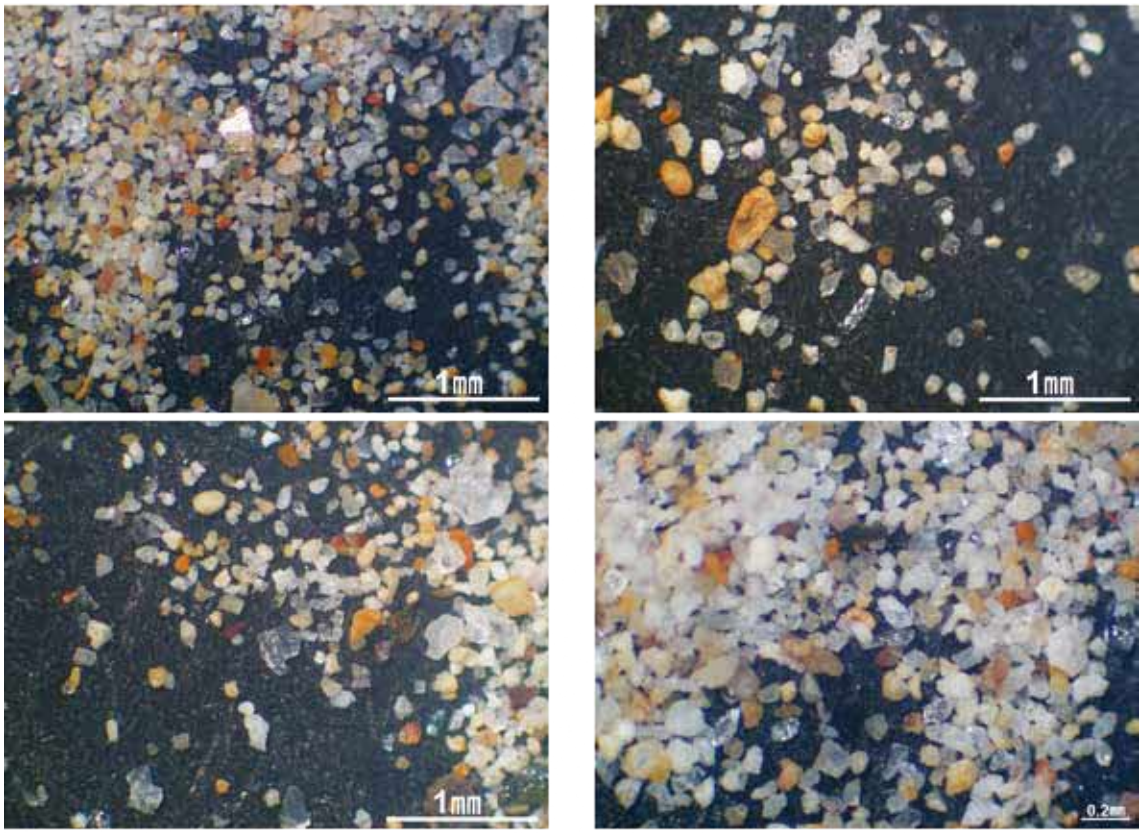
今回の観察では、比較試料として遺構検出面から採取した 36 号 -10-3 でのみ火山ガラスが観察された。一方、柱の抜き取り穴埋土から採取した 36 号 -10-1 や、柱の堀片埋土から採取した 36 号 -10-2 からは火山ガラスは全く検出されていない。また、36 号 -10-3 で検出された火山ガラスも堆積物粒子全体に占める割合はごく僅かであり、火山灰層そのものとは考えにくい。更に堆積物粒子のほとんどが、意宇川上流域に広く分布する花崗岩類に由来する可能性が極めて高い石英、長石類である。したがって観察試料は全て、意宇川流域（出雲国府近辺）で採取した淡色の堆積物に由来する可能性が高いと考えられる。今回の分析で、柱を立てる際、あるいは柱穴を埋める際に火山灰（火山ガラス）を混ぜ込んだ可能性が極めて低いことが明らかになった。一方で、僅かであるが対比試料から火山ガラスが検出されることから、遺構検出面を造成する際に火山灰層を混ぜ合わせた可能性が、僅かにあることが明らかになった。

引用文献

川崎地質株式会社（1999）火山灰分析．尺度遺跡Ｉ南阪奈道路建設に伴う調査，（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書，44，226-229，財団法人大阪府文化財調査研究センター．

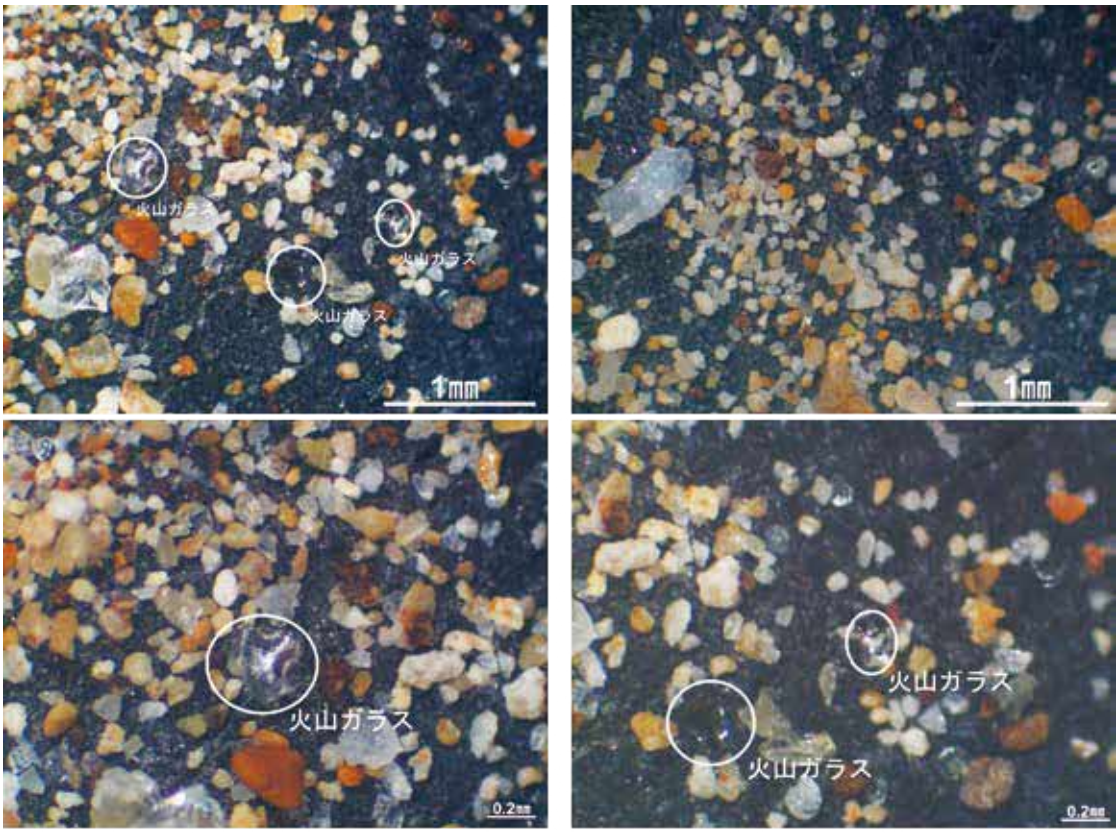


36号-10-1



36号-10-2

第88図　砂粒顕微鏡写真（1）



36号-10-3

第89図　砂粒顕微鏡写真（２）

第 3 節　出雲国府跡 35・36 号建物抜き取り穴埋土の蛍光 X 線分析

上山晶子（島根県埋蔵文化財調査センター）

1. はじめに

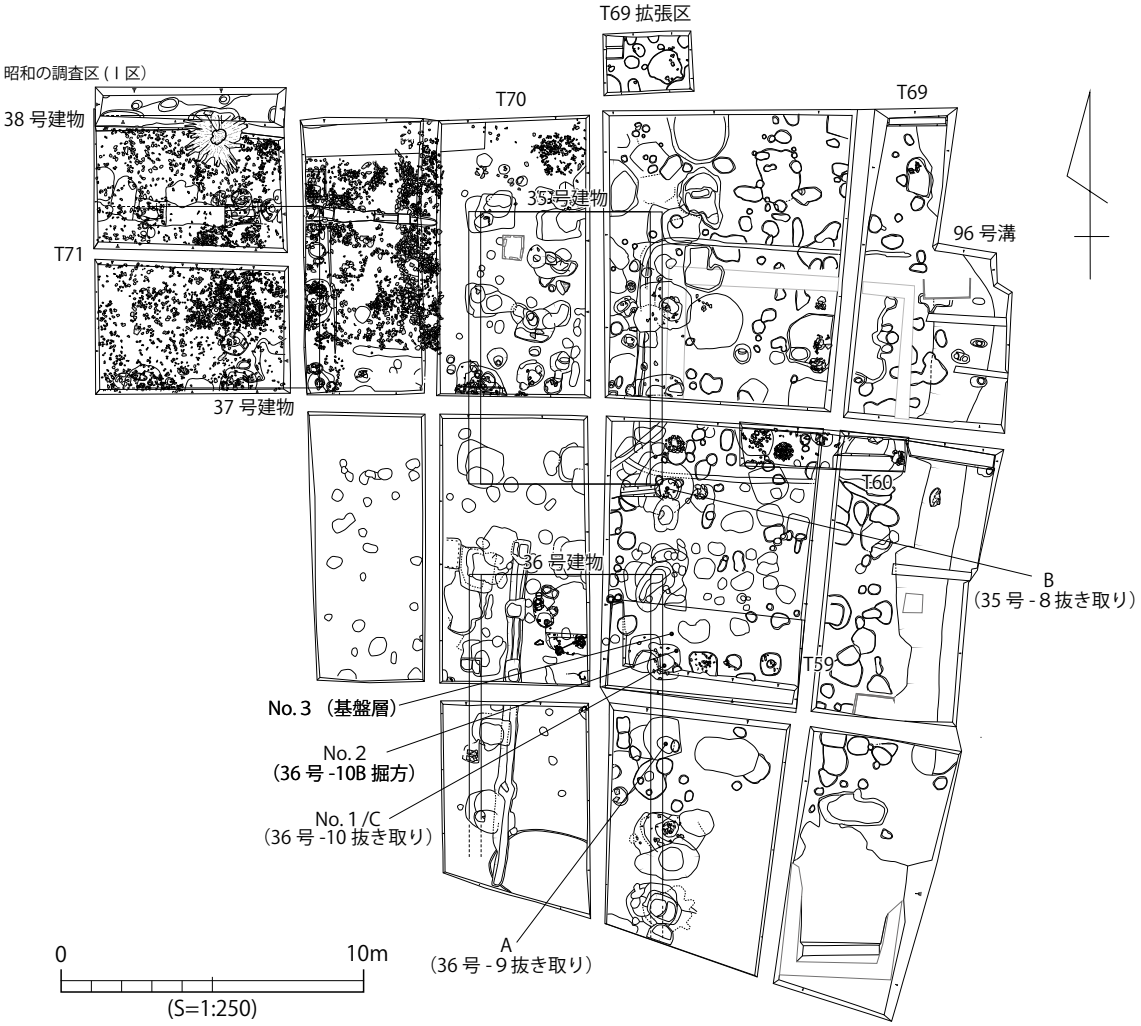
史跡出雲国府跡 35 号・36 号建物跡抜き取り穴埋土の白色土壌試料の蛍光 X 線分析を実施した。

2. 試料と分析方法

史跡出雲国府跡 35・36 号建物跡抜き取り穴埋土の白色土壌試料 6 点である（第 6 表）。

第6表　分析試料の詳細

試料No.	試料採取地点	備考
No. 1	36 号 -10 抜き取り穴	
No. 2	36 号 -10B 掘方	
No. 3	基盤層	
A	36 号 - 9 - 抜き取り穴	
B	35 号 - 8 - 抜き取り穴	35 号建物跡抜き取り穴埋土
C	36 号 -10- 2	試料No. 1 と採取地点は同じ



第 90 図　試料採取位置図

第７表　試料№1 ～ 3・A ～ C の半定量分析結果（Wt%）

	№1	№2	№3	A	B	C
Na_2O	6.17	6.89	5.25	4.99	6.26	6.16
MgO	2.57	2.60	2.19	2.09	2.37	2.50
Al_2O_3	21.26	21.15	22.21	21.55	20.35	20.99
SiO_2	61.26	58.98	59.10	62.08	61.33	61.74
P_2O_5	1.26	1.84	1.22	1.27	1.51	1.20
K_2O	1.86	2.03	2.04	2.07	2.07	1.95
CaO	0.56	0.62	0.61	0.59	0.68	0.56
TiO_2	0.80	0.67	0.74	0.79	0.71	0.77
MnO	0.09	0.17	0.39	0.10	0.16	0.08
Fe_2O_3	4.12	4.98	6.18	4.39	4.49	3.99
ZnO	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01	0.01
Rb_2O	0.01	0.01	0.02	0.01	0.01	0.01
SrO	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.01
Y_2O_3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
ZrO_2	0.03	0.03	0.03	0.03	0.02	0.02

試料採取位置図は第 90 図のとおりである。

試料は乾燥後メノウの乳鉢で粉末状に粉砕し、ハイプレッシャージャッキで約 15 トンの圧力をかけて直径約 20mm のペレット状の試料とし、蛍光 X 線分析による元素定性分析を実施し、検出できた元素については定量分析によって含有元素の濃度（Wt%）を算出した。

定量分析は装置内蔵の理論的な感度係数を用いたファンダメンタル・パラメータ（FP）法により、合計で 100Wt%になるように規格化し酸化物の形態で算出した。標準試料による補正をしていない半定量分析であるので、数値の扱いには注意を要する。

使用した装置は島根県古代文化センター所有・島根県埋蔵文化財調査センター設置のエスアイアイ・ナノテクノロジー（現：日立ハイテクサイエンス）社製ケイ光 X 線分析計 SEA1200VX（エネルギー分散型）である。測定条件は管電圧が測定室雰囲気真空時は 15kV、大気時が 50kV、管電流は管電圧の設定による自動設定（268 ～ 1000 μ A）、コリメータ（測定範囲）は直径 8.0mm、測定時間 100 秒（うち、測定可能な有効時間は 69 ～ 95 秒）、ピーキングタイムは 1.0usec.、X 線管球は Rh（ロジウム）、検出器はマルチカソード Si 半導体検出器である。また、一次フィルタは測定室雰囲気真空かつ管電圧 15kV のときは off・Cr、測定室雰囲気大気かつ管電圧 50kV のときは Pb・Cd を設定した。なお装置の仕様上、Chemplex 社製マイラーフィルムを使用している。

3. 結果

第 7 表と第 91 図～第 102 図の蛍光 X 線スペクトルデータに示す。

元素定性分析の結果、全ての試料からケイ素（SiO_2）、アルミニウム（Al_2O_3）の高いスペクトルピーク（以下、ピーク）を検出し、半定量分析の結果からもこれらの元素成分を主に含むとみられる。

当該時期前後の白色物質として想定されるものとしては、横穴式石室を持つ古墳に使用された漆喰（安田 1986、朽津 2005、2006）や壁画の白色顔料として使用された鉛系白色顔料（成瀬 1992、朽津・前尾・谷口・中井 2005）や珪酸アルミニウムを主成分とする粘土鉱物系顔料の白土（山崎 1987、沢田 1995、竹原・藤根 2016）、そのほか、石英に由来する白色粘土（白石 2009）や、ガラス質の火山灰を含む特殊な「白土」や白色顔料（村上 2002、北野 2005、白石 2009、森先・村田ほか 2022、成瀬 2017）などがあげられる。

以上のことを鑑みると、今回の分析試料からは漆喰の主成分とされるカルシウム（CaO）は、微量に検出されているが基盤層（試料№3）との差はほとんどみられず、漆喰であるとは言い難い。また鉛系白色顔料に含まれる鉛（Pb）については検出されなかった。したがって、35・36 号建物跡抜取穴埋土の白色土壌試料はケイ素とアルミニウムを主成分とする白色顔料としての白土もしくは壁土や基壇化粧土に施された石英に由来する白色粘土やガラス質の火山灰を含む特殊な「白土」や白色顔料の可能性が推測される。

註

第 91 図～第 102 図（蛍光 X 線スペクトルデータ）中の題が「国府壁土」としているのは、分析当時壁土の可能性が指摘されていたことによる。

引用文献

北野信彦 2005「付章 柱穴出土の壁土片の分析」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-2 平安京右京五条三坊三町跡』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 pp.27-36

朽津信明 2005「広島県福山市周辺の漆喰使用古墳について」『考古学と自然科学』第 51 号 日本文化財科学会 pp.11-18

朽津信明 2006「群馬県前橋市周辺の漆喰使用古墳について」『考古学と自然科学』第 53 号 日本文化財科学会 pp.1-9

朽津信明・前尾修司・谷口一雄・中井泉 2005「古代地方寺院で用いられた彩色の特徴について」『文化財保存修復学会第 27 回大会研究発表要旨集』文化財保存修復学会第 27 回大会実行委員会 pp.56-57

沢田正昭 1995「上淀廃寺出土壁画の材質と保存」『淀江町埋蔵文化財調査報告書第 35 集 上淀廃寺』淀江町教育委員会 pp.148-154

白石純 2009「付載 2 備前国分寺跡出土の白色物質について」『赤磐市文化財調査報告 第 3 集 備前国分寺跡』岡山県赤磐市教育委員会 pp.307-308

竹原弘展・藤根久 2016「平成 24 年度 遠江国分寺出土炭化材等分析報告 (3) 遠江国分寺跡出土白色物質の材質分析」『特別史跡 遠江国分寺跡 - 本編 -』磐田市教育委員会 pp.293-295

成瀬正和 2017「正倉院宝物の機器分析調査」『正倉院年報』第 39 号 宮内庁正倉院事務所 pp.27-48

村上隆 2002「山田寺出土壁土の科学的調査－特に『白土』を中心に－」『山田寺発掘調査報告創立 50 周年記念奈良文化財研究所学報第 63 冊 本文編』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 pp.589-594

森先一貴・村田泰輔・中田愛乃・脇谷草一郎 2022「興福寺鐘楼出土白色薄片の材料分析－第 625 次」『奈良文化財研究所紀要 2022』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 pp.220-221

安田博幸 1986「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『日本考古学論集 1 考古学の基本的問題』斎藤忠編 株式会社 吉川弘文館 pp.389-407

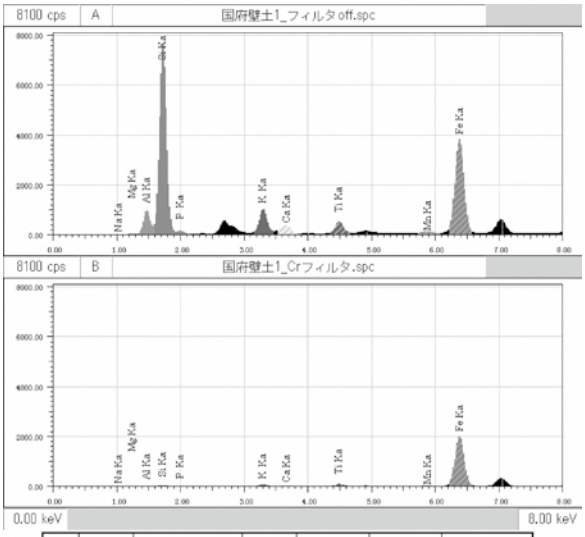
山崎一雄 1987『古文化財の科学』思文閣出版

参考文献

加藤和歳 2018「大宰府出土須恵器に付着する白色物質の推定」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘五〇周年記念論文集刊行会編 pp.701-712

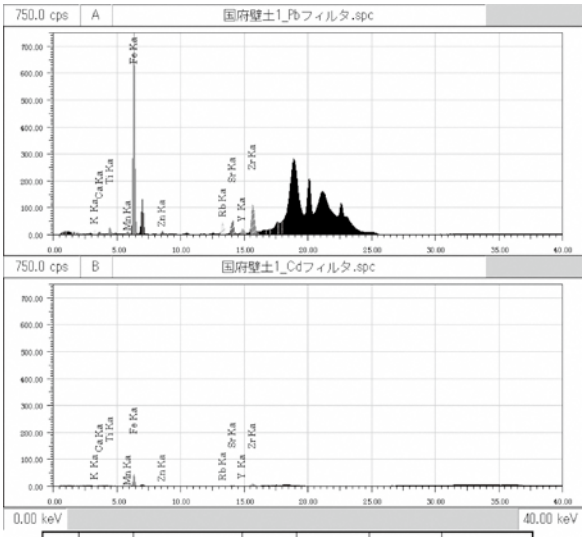
趙哲済 2012「難波宮跡（NW10-4 次）調査出土の白土の母材について（予察）」『難波宮址の研究第十八』公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 pp.176-179

藤根久・米田恭子 2016「平成 27 年度遠江国分寺跡出土壁土分析報告 (1) 壁材の胎土材料」『特別史跡遠江国分寺跡－本編－』磐田市教育委員会 pp.305-315



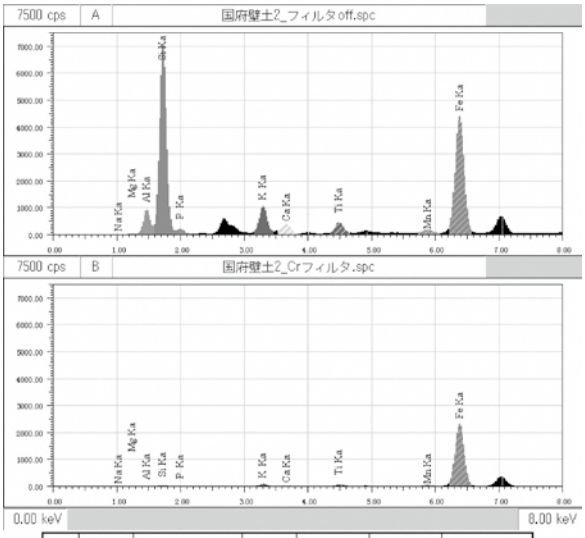
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
11	Na	ナトリウム	K α	158.560	7.009	0.91- 1.17
12	Mg	マグネシウム	K α	487.361	8.313	1.12- 1.39
13	Al	アルミニウム	K α	7321.615	44.601	1.35- 1.62
14	Si	ケイ素	K α	51076.543	294.405	1.60- 1.88
15	P	リン	K α	1653.336	15.983	1.88- 2.15
19	K	カリウム	K α	7931.871	524.327	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	3515.397	279.497	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	4457.158	694.010	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	1673.792	276.184	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	32726.072	17056.104	6.23- 6.57

第 91 図　試料No.1 蛍光 X 線スペクトルデータ
（フィルタ off・Cr フィルタ）



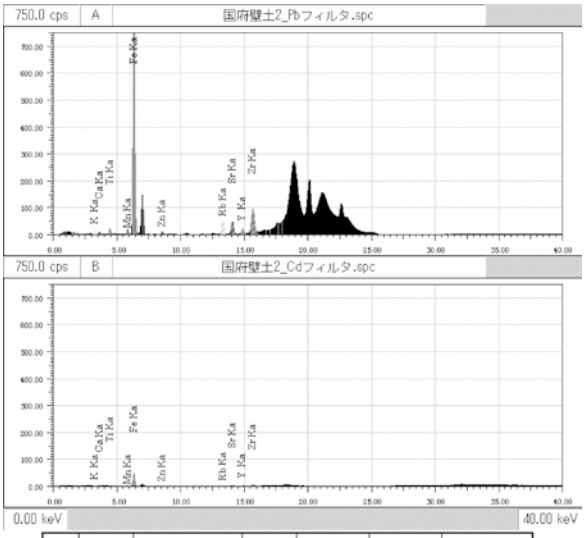
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	142.424	40.295	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	94.120	34.157	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	225.249	36.163	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	112.210	13.533	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	6513.106	374.113	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	119.212	9.856	8.44- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	549.706	35.716	13.16-13.59
38	Sr	ｽﾄﾛﾝﾁｳﾑ	K α	659.084	43.379	13.92-14.36
39	Y	イットリウム	K α	308.549	21.382	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	1481.499	105.257	15.51-15.98

第 92 図　試料No.1 蛍光 X 線スペクトルデータ
（Pb フィルタ・Cd フィルタ）



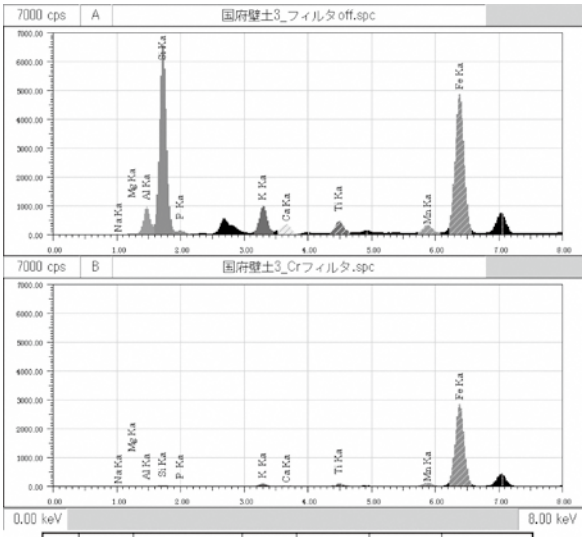
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
11	Na	ナトリウム	K α	161.433	7.033	0.91- 1.17
12	Mg	マグネシウム	K α	468.403	8.843	1.12- 1.39
13	Al	アルミニウム	K α	6940.250	46.049	1.35- 1.62
14	Si	ケイ素	K α	47151.809	276.946	1.60- 1.88
15	P	リン	K α	2115.937	19.869	1.88- 2.15
19	K	カリウム	K α	8154.026	559.683	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	3692.779	304.762	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	4023.799	611.888	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	2128.394	484.084	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	37548.348	19737.314	6.23- 6.57

第 93 図　試料No.2 蛍光 X 線スペクトルデータ
（フィルタ off・Cr フィルタ）



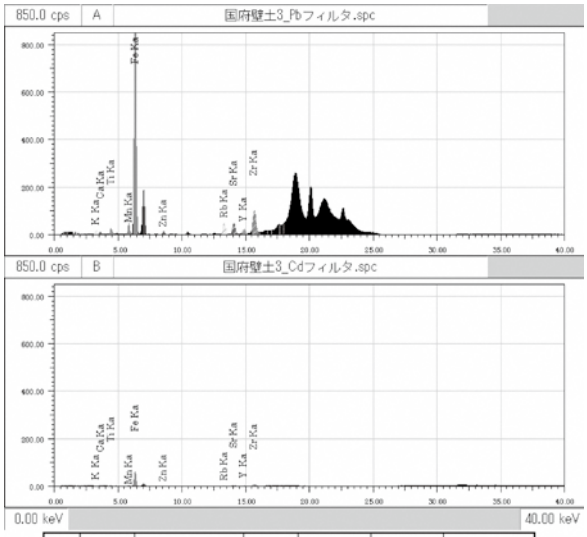
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	148.513	41.176	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	100.514	36.633	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	206.713	35.422	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	189.730	18.093	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	7627.286	431.921	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	116.515	9.488	8.44- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	582.272	38.414	13.16-13.59
38	Sr	ｽﾄﾛﾝﾁｳﾑ	K α	620.523	42.462	13.92-14.36
39	Y	イットリウム	K α	308.515	21.107	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	1309.269	95.571	15.51-15.98

第 94 図　試料No.2 蛍光 X 線スペクトルデータ
（Pb フィルタ・Cd フィルタ）



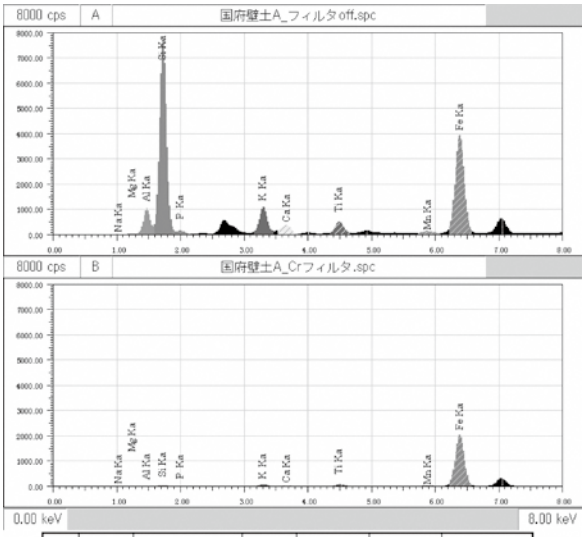
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
11	Na	ナトリウム	K α	151.565	7.330	0.91- 1.17
12	Mg	マグネシウム	K α	458.691	9.551	1.12- 1.39
13	Al	アルミニウム	K α	6852.691	46.727	1.35- 1.62
14	Si	ケイ素	K α	43688.582	273.393	1.60- 1.88
15	P	リン	K α	1566.911	18.804	1.88- 2.15
19	K	カリウム	K α	7721.290	571.339	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	3403.313	306.322	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	4074.154	692.566	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	3352.362	1082.890	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	41487.503	23948.096	6.23- 6.57

第 95 図　試料№3 蛍光 X 線スペクトルデータ
（フィルタ off・Cr フィルタ）



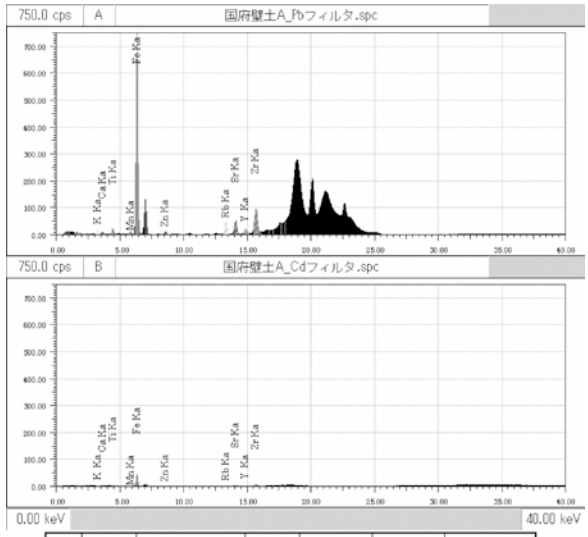
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	151.571	39.375	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	99.960	34.694	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	231.766	33.401	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	396.150	29.039	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	9460.344	540.336	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	130.424	10.102	8.44- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	583.088	37.581	13.16-13.59
38	Sr	ｽﾄﾛﾝﾁｳﾑ	K α	590.128	39.397	13.92-14.36
39	Y	イットリウム	K α	317.086	21.965	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	1343.759	94.635	15.51-15.98

第 96 図　試料№3 蛍光 X 線スペクトルデータ
（Pb フィルタ・Cd フィルタ）



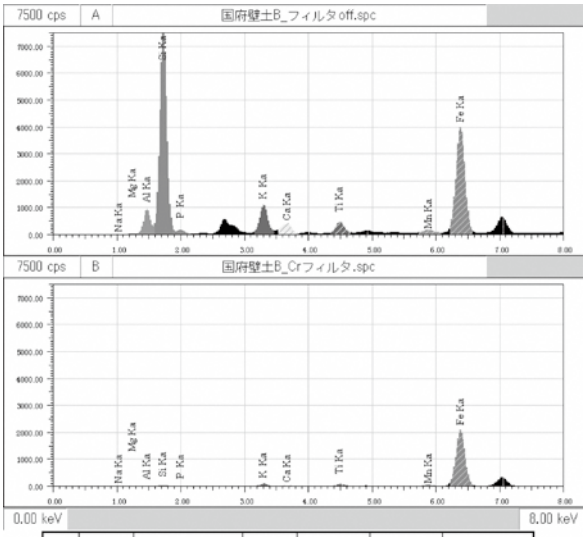
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
11	Na	ナトリウム	K α	163.973	6.746	0.91- 1.17
12	Mg	マグネシウム	K α	496.826	8.308	1.12- 1.39
13	Al	アルミニウム	K α	7448.959	46.121	1.35- 1.62
14	Si	ケイ素	K α	51199.656	285.181	1.60- 1.88
15	P	リン	K α	1784.022	17.084	1.88- 2.15
19	K	カリウム	K α	8553.586	555.307	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	3674.962	287.225	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	4436.840	655.656	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	1794.316	307.343	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	33674.108	17125.662	6.23- 6.57

第 97 図　試料 A 蛍光 X 線スペクトルデータ
（フィルタ off・Cr フィルタ）



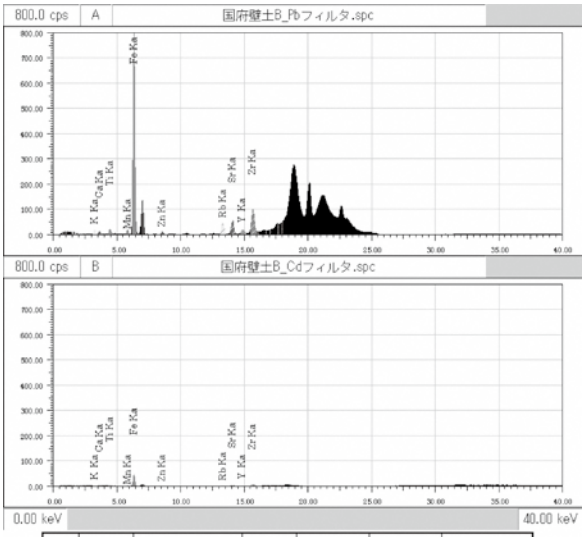
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	152.219	41.328	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	96.067	34.438	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	213.774	34.799	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	121.164	13.792	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	6552.884	378.702	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	122.412	9.171	8.44- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	544.822	35.006	13.16-13.59
38	Sr	ｽﾄﾛﾝﾁｳﾑ	K α	625.799	40.984	13.92-14.36
39	Y	イットリウム	K α	296.363	20.353	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	1320.783	92.625	15.51-15.98

第 98 図　試料 A 蛍光 X 線スペクトルデータ
（Pb フィルタ・Cd フィルタ）



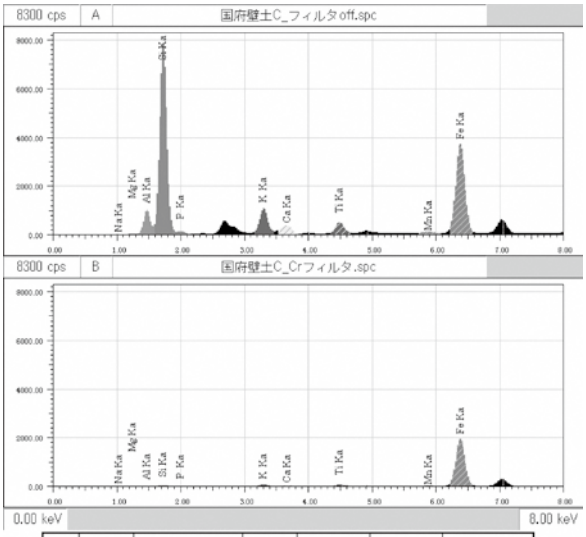
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
11	Na	ナトリウム	K α	161.457	6.513	0.91- 1.17
12	Mg	マグネシウム	K α	462.098	8.644	1.12- 1.39
13	Al	アルミニウム	K α	6953.453	44.935	1.35- 1.62
14	Si	ケイ素	K α	51093.890	295.172	1.60- 1.88
15	P	リン	K α	1888.156	18.246	1.88- 2.15
19	K	カリウム	K α	8537.966	569.822	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	4037.289	325.994	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	4122.028	619.594	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	2159.074	453.880	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	34070.860	17522.855	6.23- 6.57

第99図　試料 B 蛍光 X 線スペクトルデータ
（フィルタ off・Cr フィルタ）



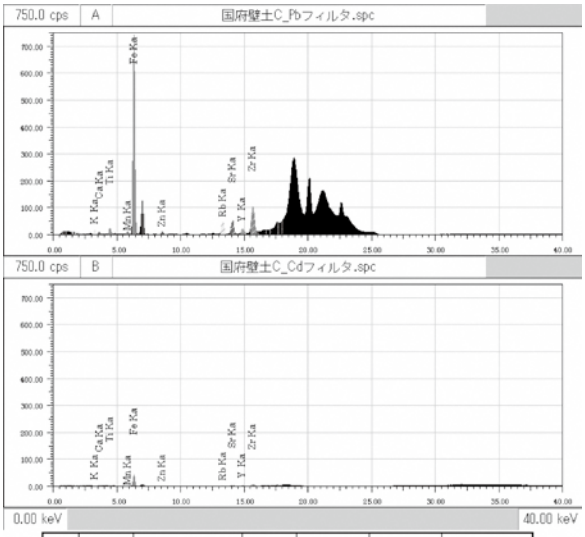
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	151.130	40.448	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	103.985	34.504	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	203.834	33.414	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	177.291	17.578	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	6868.536	394.989	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	116.540	9.859	8.44- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	570.704	36.210	13.16-13.59
38	Sr	ｽﾄﾛﾝﾁｳﾑ	K α	687.991	45.606	13.92-14.36
39	Y	イットリウム	K α	295.353	20.360	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	1336.992	92.833	15.51-15.98

第100図　試料 B 蛍光 X 線スペクトルデータ
（Pb フィルタ・Cd フィルタ）



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
11	Na	ナトリウム	K α	161.579	6.989	0.91- 1.17
12	Mg	マグネシウム	K α	489.165	7.997	1.12- 1.39
13	Al	アルミニウム	K α	7370.382	45.600	1.35- 1.62
14	Si	ケイ素	K α	52545.666	295.079	1.60- 1.88
15	P	リン	K α	1620.428	15.742	1.88- 2.15
19	K	カリウム	K α	8339.549	548.638	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	3631.201	285.280	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	4434.543	669.752	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	1674.482	261.488	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	31993.329	16452.822	6.23- 6.57

第101図　試料 C 蛍光 X 線スペクトルデータ
（フィルタ off・Cr フィルタ）



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	148.664	43.264	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	96.504	37.804	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	216.495	36.199	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	107.031	12.912	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	6297.953	362.203	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	111.844	9.740	8.44- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	564.983	36.123	13.16-13.59
38	Sr	ｽﾄﾛﾝﾁｳﾑ	K α	661.816	43.195	13.92-14.36
39	Y	イットリウム	K α	307.889	21.916	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	1386.904	95.248	15.51-15.98

第102図　試料 C 蛍光 X 線スペクトルデータ
（Pb フィルタ・Cd フィルタ）

第 4 節　出雲国府跡出土須恵器・平瓦付着赤色顔料の蛍光 X 線分析

上山晶子（島根県埋蔵文化財調査センター）

はじめに

出雲国府跡より出土した須恵器と平瓦に赤色顔料が付着しているものがあることが確認された。当該時期の土器や瓦などに付着している赤色顔料の種類としては水銀朱（硫化第二水銀；HgS）、ベンガラ（酸化第二鉄；Fe^2O^3）、鉛丹（四酸化三鉛；Pb^3O^4）がある（市毛 1998 など）。

須恵器は転用硯で、付着している赤色顔料は朱墨であるとみられる。朱墨として使用された赤色顔料としては、正倉院文書の調査で「朱筆」として水銀朱・ベンガラ・鉛丹が使用されており（成瀬 1991）、硯や転用硯に残存する朱墨の成分としてはベンガラが多く確認されている（国交省・島根県 2003、小田 2018、赤崎 2020）が、水銀朱が確認されている例もある（新田 2017）。なお、朱墨としての赤色顔料成分の違いによる使い分けについては時期等によって異なることが示唆されている（成瀬 2011）。

また平瓦に付着した赤色顔料については、島根県松江市山代町所在の四王寺跡出土の軒平瓦にベンガラが付着していることが確認されている（安田・井村 1988）。

これらのことを前提に、蛍光 X 線分析による元素定性分析を実施した。

2. 対象資料（試料）

出雲国府跡出土赤色顔料付着須恵器 8 点、赤色顔料付着平瓦 1 点である（第 8 表）。

また、参考資料として島根県内でこれまでに確認された転用硯などのうち、朱墨とみられる赤色顔料が付着している資料 8 点（第 9 表）の蛍光 X 線分析による元素定性分析を実施した。

3. 分析方法

蛍光 X 線分析による元素定性分析を行った。

原則非破壊で実施したが、一部試料については、接合を外した状態の試料で実施した。

使用機器は島根県古代文化センター所有・島根県埋蔵文化財調査センター設置 「エスアイアイ・ナノテクノロジー社(現;日立ハイテクサイエンス)製SEA1200VX 卓上型ケイ光 X 線分析計(エネルギー分散型)」である。測定条件は以下のとおりである。試料室雰囲気は大気、管電圧は 50kV、管電流は管電圧の設定による自動設定（253 ～ 684 μ A)、測定時間は 100 秒（測定可能な有効時間は 61 ～ 64 秒)、コリメータ（測定範囲）は直径 8.0mm、ピーキングタイムは 8.0usec.、X 線管球は Rh（ロジウム)、検出器はマルチカソード Si 半導体検出器、一次フィルタとして Pb フィルタを設定している。なお、装置の仕様上 Chemplex 社製マイラーカバーを使用している。

測定箇所は肉眼・顕微鏡観察（20 ～ 40 倍）によって視認した赤色顔料付着部分と非赤色部分（須恵器は土器破断面または顔料の付着していない胎土部分、瓦は顔料の付着していない部分）のそれぞれ 1 ～ 5 箇所である。

4. 結果

第８表､第９表と蛍光Ｘ線スペクトルデータ(第 104 ～ 120 図)に示す。蛍光Ｘ線スペクトルデータのうち、A は赤色顔料付着箇所の測定結果を、B は胎土などの赤色顔料の付着していない箇所の測定結果を示す。

(1) 須恵器付着赤色顔料

先述のとおり、朱墨の成分として想定されるのは、水銀朱・ベンガラ・鉛丹であることから、出雲国府跡出土須恵器に付着した赤色顔料ならびに参考資料として分析を行った転用硯に付着した赤色顔料の成分について以下のことが考えられる。

①全ての資料から水銀朱の成分である水銀（Hg)、硫黄（S）のスペクトルピーク（以下、ピーク）は検出されなかった。したがって、水銀朱を主成分とする朱墨ではないとみられる。

②全ての資料から赤色顔料付着部分､胎土部分からも鉄（Fe）の高いピークを示したが､そのピークを比較すると、赤色顔料付着部分のピークが非赤色部分より高く検出される傾向があり、顕微鏡観察においても赤色顔料の粒子が認められるため､酸化鉄を主成分としたベンガラ（広義のベンガラ）による朱墨であるとみられる。パイプ状ベンガラの有無については今回の分析方法では把握できない。

③鉛（Pb）のピークは赤色顔料付着部分、非赤色部分の両方からわずかに検出されているが、これらは土器胎土に由来、もしくは埋蔵環境下において二次的な付着などの可能性があり、赤色顔料の鉛丹に由来するものとは考えにくい。しかし、参考資料として分析を実施した出雲国府跡出土の須恵器坏蓋（島根県 2003『史跡出雲国府跡 1』65 図 -1）からは、鉄の高いピークとともに、わずかではあるが鉛のピークが非赤色部分と比較してやや高く検出された｡また､肉眼･顕微鏡観察等から､やや主観的な表現となるが､鉛を検出しなかった資料が｢赤みの強い褐色｣を呈しているのに対し(一例として第 62 図 - 6 ;Munsell 2.5YR 5/8 ～ 4/8)、橙色と赤みの強い褐色とやや紫色を帯びた暗赤色の色調が混じったような様子が観察された（Munsell 7.5R4/6 ～ 4/8、10R 4/6 ～ 4/8)。正倉院の文書調査における「朱筆」ではベンガラの色調が「濃褐色」「褐色」「赤みの強い褐色」であるのに対し鉛丹の色調は「僅かに紫色を帯びた濃褐色」「濃い橙色」であるとされており（杉本 1987)、平城宮で出土した須恵器を転用した朱用硯の赤色顔料には、色合いに差異があることが指摘されている(神野 2019)。これらのことより当該資料の朱墨についてはベンガラと鉛丹の混在も推測されるが、先述のように鉛は胎土に由来もしくは埋蔵環境下における二次的な付着の可能性などが考えられるため、今回の分析結果だけでは断定はできない。

(2) 瓦付着赤色顔料

瓦に付着した赤色顔料は、赤色顔料の付着がみられない箇所と比較して鉄の検出ピークが高く、顕微鏡観察でも赤色顔料粒子の付着が確認されたため、赤色顔料は鉄を主成分とするベンガラであると推測される。

須恵器・瓦両資料からカリウム（K)、カルシウム（Ca)、チタン（Ti)、マンガン（Mn)、銅（Cu)、亜鉛（Zn）の小さいピークを検出したが、これらは土器胎土あるいは瓦そのものの成分に由来、も

しくは埋蔵環境下における二次的な付着などの要因が考えられる。

なお、出雲国府跡では、11 世紀後半から 12 世紀代の東海系山茶碗 2 点の内面に水銀朱が付着していることが確認されている（島根県 2005、上山 2013）。この 2 点の資料が今回分析を行った須恵器（・土師器）付着の赤色顔料（朱墨）と同じような機能を果たしたか否かについては不明である。

引用文献

赤崎広志 2020「日向国府跡出土須恵器に付着する赤色物質」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第 74 集 日向国府跡 - 第 2 分冊 -』西都市教育委員会 pp.124-125

市毛勲 1998『新版 朱の考古学』雄山閣

上山晶子 2013「出雲国府跡出土赤色顔料付着遺物について」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 21 史跡出雲国府跡 8』島根県教育委員会 pp.70-72

小田和利 2018『科学研究費助成事業 研究成果報告書（研究課題；大宰府管内出土陶硯の科学分析的研究）』

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・島根県教育委員会 2003『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ 古志本郷遺跡Ⅴ 出雲国神門郡家関連遺跡の調査』

島根県教育委員会 2005『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 16 史跡出雲国府跡 3』

神野恵 2019「平城宮朱用硯の実態」『奈良文化財研究所紀要 2019』独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 pp.50-51

杉本一樹 1987「古文書の調査」『正倉院年報』第 9 号 宮内庁正倉院事務所 pp.85-92

成瀬正和 1991「正倉院の “ 朱印 ”“ 朱筆 ”」『日本歴史』521 号 吉川弘文館 pp.84-89

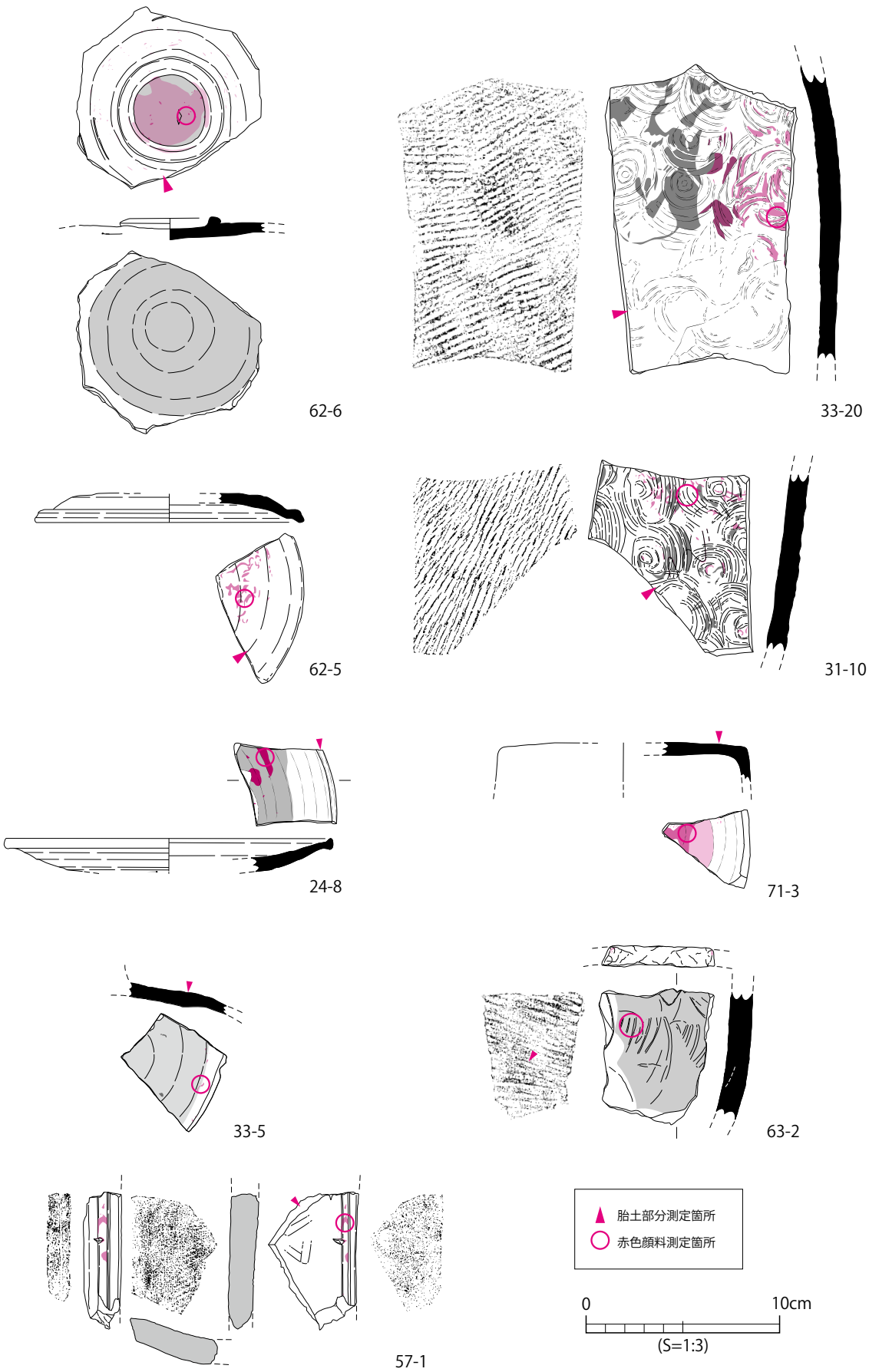
成瀬正和 2011「正倉院文書と顔料調査」『必携 古典籍・古文書料紙事典』宍倉佐敏編著・八木書店発行 pp.176-180

新田宏子 2017「大きな建物と赤いすずり 宗佐遺跡（加古川市八幡町宗佐）」『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡』第 96 号（公財）兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部 pp.6-7

安田博幸・井村由美 1988「島根県松江市山代町四王寺跡出土軒平瓦に付着の赤色顔料物質の化学分析による鑑定」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅴ - 島根県松江市山代町所在・四王寺跡』島根県教育委員会 pp.43-45

参考文献

小山正忠・竹原秀雄・農林水産省農林水産技術会議事務所 2011『新版 標準土色帖』34 版



第103図　赤色顔料測定箇所・胎土部分測定箇所

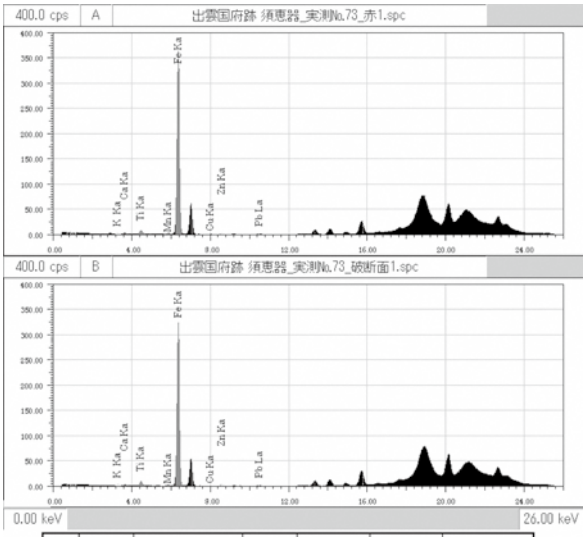
第8表　出雲国府跡出土須恵器・平瓦付着赤色顔料の蛍光線分析結果

挿図番号	種類	器種	赤色顔料付着箇所	推測される顔料の種類
62-6	須恵器	蓋	つまみ内部	ベンガラ (Fe_2O_3)
33-20	須恵器	甕？	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)
62-5	須恵器	蓋	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)
31-10	須恵器	甕	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)
24-8	須恵器	高坏 (B)	坏部内面	ベンガラ (Fe_2O_3)
71-3	須恵器	短頸壺 (蓋)	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)
33-5	須恵器	蓋	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)
63-2	須恵器	甕	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)
57-1	瓦	平瓦	側面	ベンガラ (Fe_2O_3)

第9表　出雲国府跡ほか須恵器・土師器付着赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（参考資料）

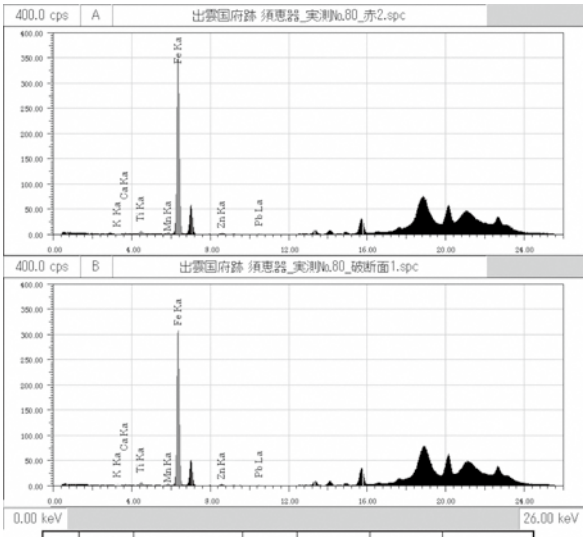
遺跡名	種類	器種	赤色顔料付着箇所	推測される顔料の種類	備考	時期	文献挿図番号	文献
出雲国府跡	須恵器	坏蓋	外面	ベンガラ (Fe_2O_3)	Pb(鉛）もわずかに検出か	国府第 4 ～第 5 型式	65 図 -1	①
出雲国府跡	須恵器	高坏	坏部外面	ベンガラ (Fe_2O_3)		時期不明	15 図 -44	②
出雲国府跡	須恵器	坏	底部内面	- (測定不可)		時期不明	120 図 -36	③
出雲国府跡	須恵器	鉢	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)	測定済（柴崎 2008）	時期不明	146 図 -30	③・⑨
出雲国府跡	須恵器	高台付坏	坏部内面	ベンガラ (Fe_2O_3)		時期不明	72 図 -8	④
青木遺跡	須恵器	坏	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)	朱墨硯か不明	時期不明	113 図 -Z65	⑤
青木遺跡	須恵器	坏	高台内部	- (測定不可)	朱墨硯か不明	時期不明	113 図 -Z66	⑤
青木遺跡	須恵器	蓋	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)	朱墨硯か不明	時期不明	113 図 -Z67	⑤
古志本郷遺跡	須恵器	円面硯	外面底面	ベンガラ (Fe_2O_3)	測定済（国交省・島根県 2003）	8 世紀後葉～9 世紀前葉	Fig.269-5	⑥
御堂谷遺跡	須恵器	皿形土器	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)		9 世紀後半	72 図 -19	⑦
御堂谷遺跡	土師器	蓋	つまみ内部	ベンガラ (Fe_2O_3)		時期不明	74 図 -20	⑦
石見国府跡推定地	須恵器	蓋	内面	ベンガラ (Fe_2O_3)		国庁第 3 または第 4 型式	5 図 -3	⑧

文献 ; ①島根県教育委員会 2003『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 14 史跡出雲国府跡 1』②島根県教育委員会 2004『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 15 史跡出雲国府跡 2』③島根県教育委員会 2008『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 18 史跡出雲国府跡 5』④島根県教育委員会 2009『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 19 史跡出雲国府跡 6』⑤島根県教育委員会 2006『国道 431 号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）第 3 分冊（奈良・平安時代）』⑥国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・島根県教育委員会 2003『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ 古志本郷遺跡Ⅴ 出雲国神門郡家関連遺跡の調査』⑦国土交通省松江国道事務所・島根県教育委員会 2019『一般国道 9 号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 御堂谷遺跡・諸友大師山横穴Ⅳ群 1 号穴』⑧島根県教育委員会 1979『石見国府跡推定地調査報告Ⅱ』⑨柴崎晶子 2008「出雲国府跡から出土した遺物に付着した顔料」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 18 史跡出雲国府跡 5』島根県教育委員会 pp.191-193



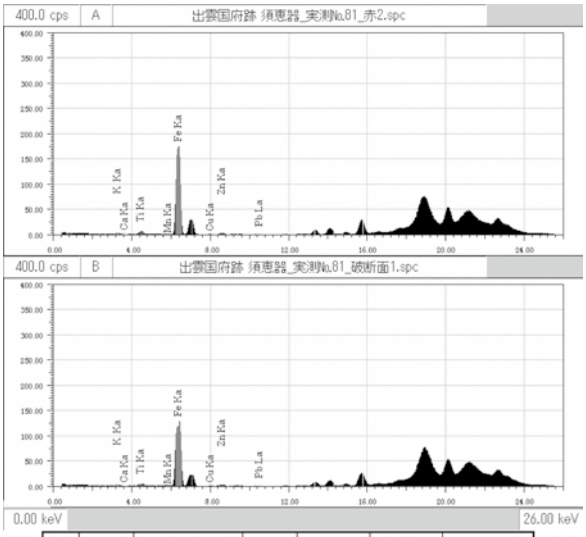
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	ＲＯＩ(keV)
19	K	カリウム	Ｋα	32.526	34.324	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Ｋα	27.141	24.915	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Ｋα	66.907	70.732	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Ｋα	31.543	26.266	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Ｋα	2797.963	2442.687	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Ｋα	10.786	8.662	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	Ｋα	26.142	28.871	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Ｌα	19.226	20.352	10.36-10.73

第104図　出雲国府跡第62図 - 6 蛍光Ｘ線
スペクトルデータ



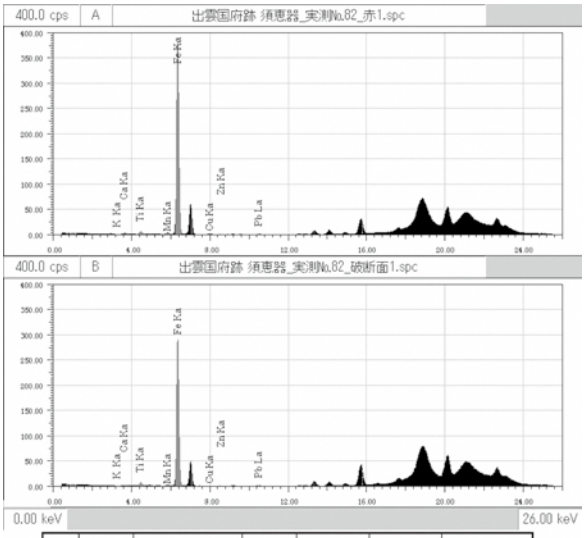
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	ＲＯＩ(keV)
19	K	カリウム	Ｋα	31.377	33.753	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Ｋα	25.000	22.093	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Ｋα	54.940	59.075	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Ｋα	36.985	33.668	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Ｋα	2860.064	2381.881	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	Ｋα	21.116	27.167	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Ｌα	17.217	17.280	10.36-10.73

第105図　出雲国府跡第33図 -20蛍光Ｘ線
スペクトルデータ



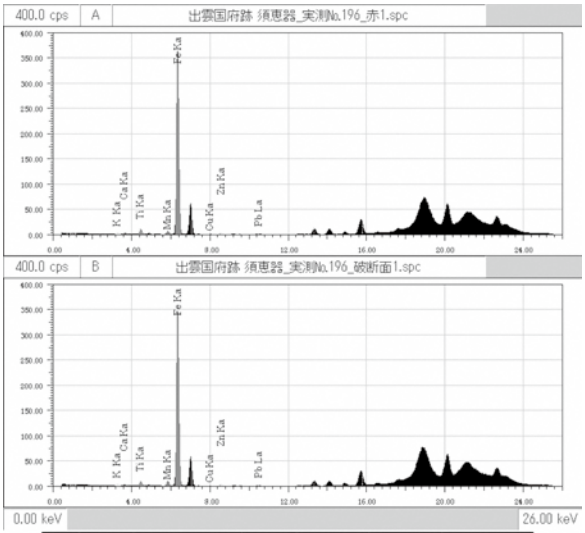
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	ＲＯＩ(keV)
19	K	カリウム	Ｋα	30.911	29.607	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Ｋα	28.682	21.814	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Ｋα	69.192	54.847	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Ｋα	25.534	49.221	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Ｋα	2100.188	1701.325	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Ｋα	12.226	13.726	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	Ｋα	41.243	45.192	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Ｌα	29.065	28.190	10.36-10.73

第106図　出雲国府跡第62図 - 5 蛍光Ｘ線
スペクトルデータ



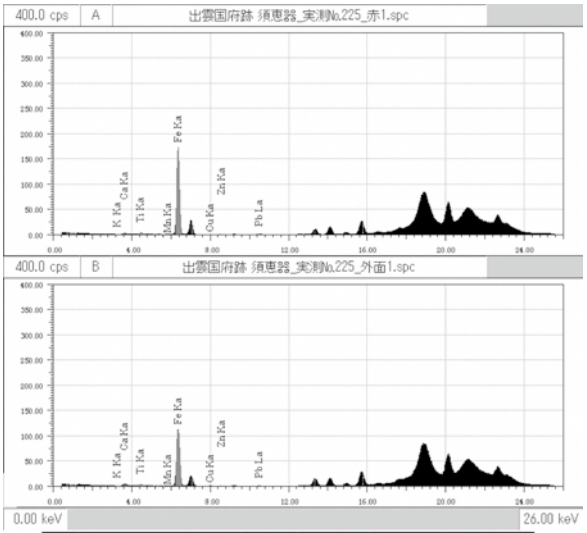
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	ＲＯＩ(keV)
19	K	カリウム	Ｋα	28.518	30.133	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Ｋα	28.399	21.996	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Ｋα	55.319	60.147	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Ｋα	44.600	31.890	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Ｋα	2888.821	2187.328	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Ｋα	22.268	9.948	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	Ｋα	29.179	22.551	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Ｌα	17.416	15.272	10.36-10.73

第107図　出雲国府跡第31図 -10蛍光Ｘ線
スペクトルデータ



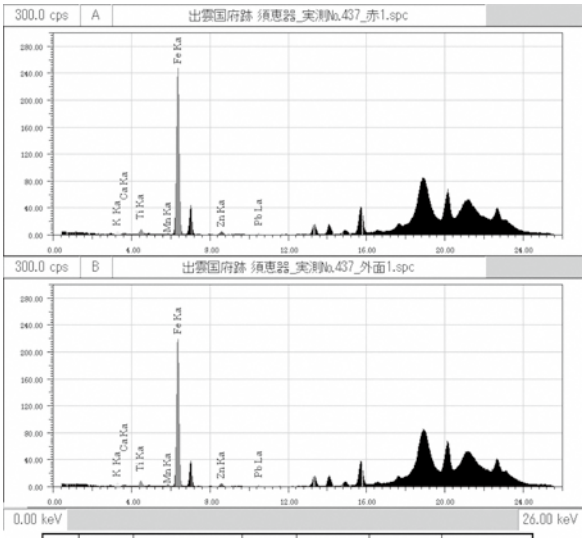
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	33.847	34.755	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	K α	26.032	27.723	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	K α	80.027	76.831	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	K α	56.915	79.718	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	K α	2783.549	2620.420	6.25- 6.55
29	Cu	銅	K α	9.197	9.639	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	K α	28.227	30.104	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	L α	19.890	21.129	10.36-10.73

第108図　出雲国府跡第24図 - 8 蛍光 X 線
スペクトルデータ



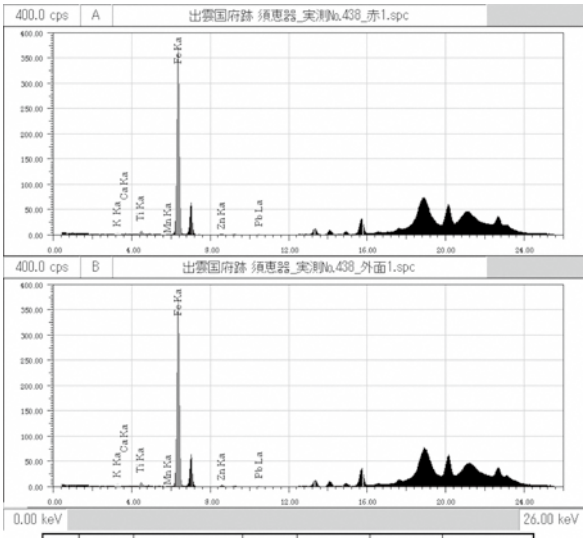
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	33.366	53.858	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	K α	28.364	54.801	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	K α	46.755	42.634	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	K α	20.199	26.134	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	K α	1532.544	1151.417	6.25- 6.55
29	Cu	銅	K α	8.955	11.647	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	K α	26.200	23.798	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	L α	17.721	12.620	10.36-10.73

第109図　出雲国府跡第71図 - 3 蛍光 X 線
スペクトルデータ



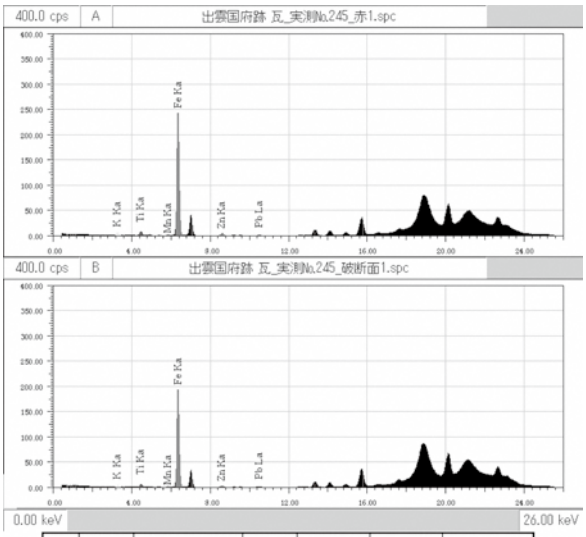
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	39.215	40.779	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	K α	25.962	25.084	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	K α	69.581	65.014	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	K α	27.455	30.354	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	K α	1992.861	1687.228	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	K α	41.757	38.403	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	L α	20.908	19.239	10.36-10.73

第110図　出雲国府跡第33図 - 5 蛍光 X 線
スペクトルデータ



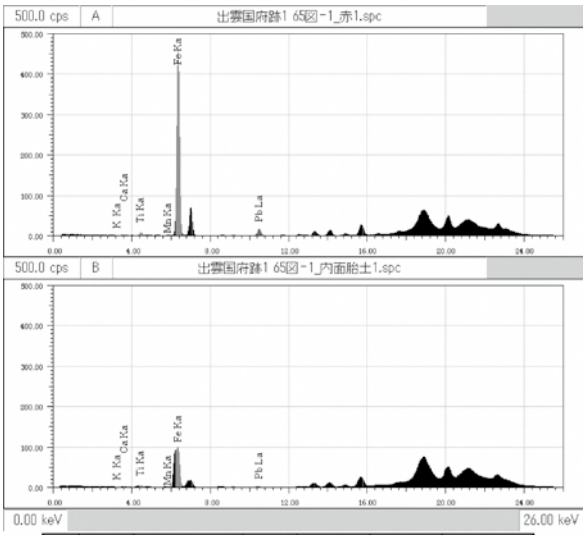
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	39.843	42.662	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	K α	24.228	20.952	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	K α	62.559	65.310	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	K α	18.800	17.536	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	K α	2787.189	2788.509	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	K α	20.411	24.446	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	L α	13.775	13.419	10.36-10.73

第111図　出雲国府跡第63図 - 2 蛍光 X 線
スペクトルデータ



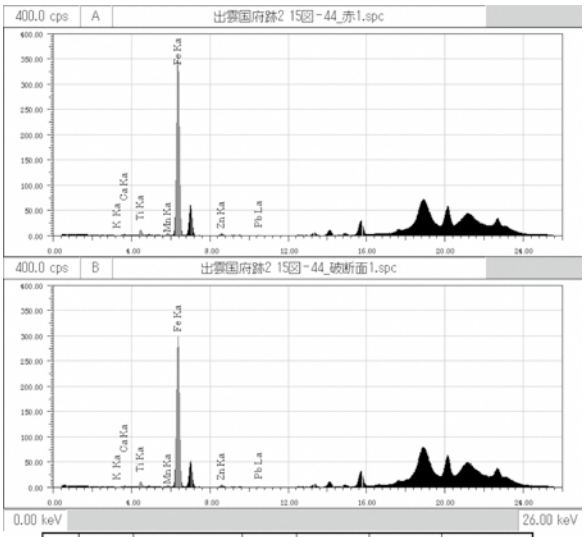
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	Kα	44.865	35.690	3.19- 3.44
22	Ti	チタン	Kα	62.051	54.487	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Kα	24.948	21.507	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Kα	1874.073	1472.846	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	Kα	44.946	35.539	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Lα	15.741	20.065	10.36-10.73

第112図　出雲国府跡第57図 - 1 蛍光Ｘ線
スペクトルデータ



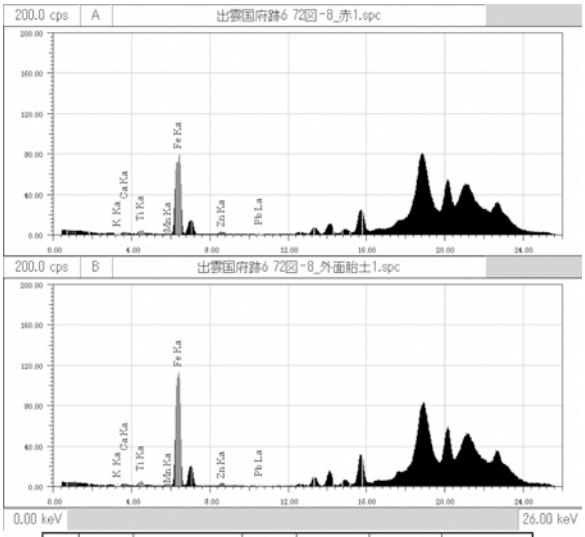
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	Kα	26.401	30.356	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Kα	22.101	20.800	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Kα	63.819	48.679	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Kα	31.468	19.771	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Kα	3648.678	1150.718	6.25- 6.55
82	Pb	鉛	Lα	155.803	17.614	10.36-10.73

第113図　『出雲国府跡１』第65図 - 1 蛍光Ｘ線
スペクトルデータ



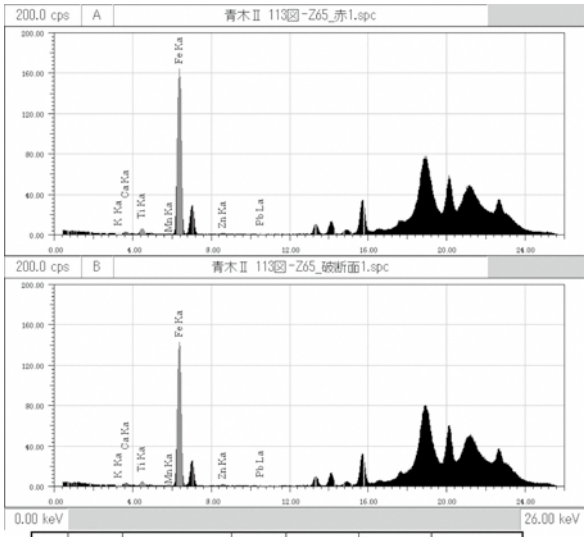
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	Kα	30.462	26.926	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Kα	25.784	24.333	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Kα	91.183	95.852	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Kα	46.184	40.266	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Kα	3061.150	2628.663	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	Kα	40.412	43.109	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Lα	15.608	18.177	10.36-10.73

第114図　『出雲国府跡２』第15図 -44 蛍光Ｘ線
スペクトルデータ



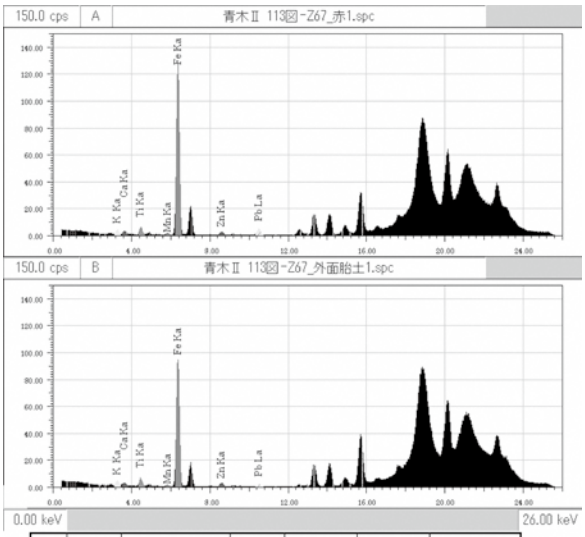
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	29.072	34.189	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	K α	26.025	29.380	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	K α	47.632	55.543	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	K α	23.456	29.494	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	K α	1032.723	1388.445	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	K α	36.255	37.448	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	L α	31.705	28.260	10.36-10.73

第115図　『出雲国府跡 6』第72図 - 8 蛍光 X 線スペクトルデータ



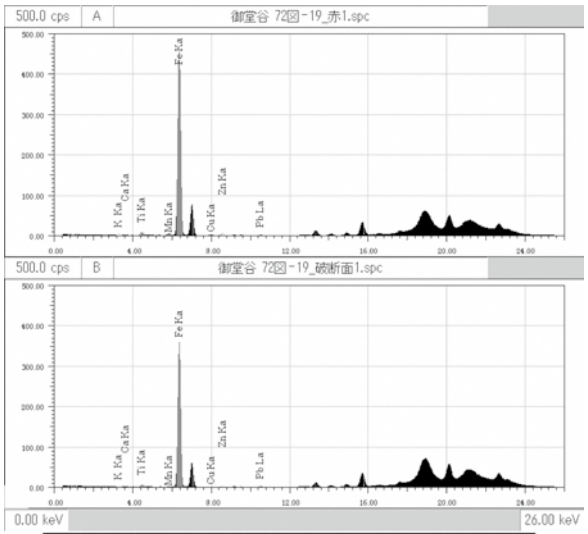
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	31.637	29.399	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	K α	29.232	34.849	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	K α	65.985	50.923	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	K α	19.166	18.602	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	K α	1832.131	1522.907	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	K α	22.485	23.534	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	L α	19.279	16.244	10.36-10.73

第116図　『青木遺跡Ⅱ』第113図 -Z65 蛍光 X 線スペクトルデータ



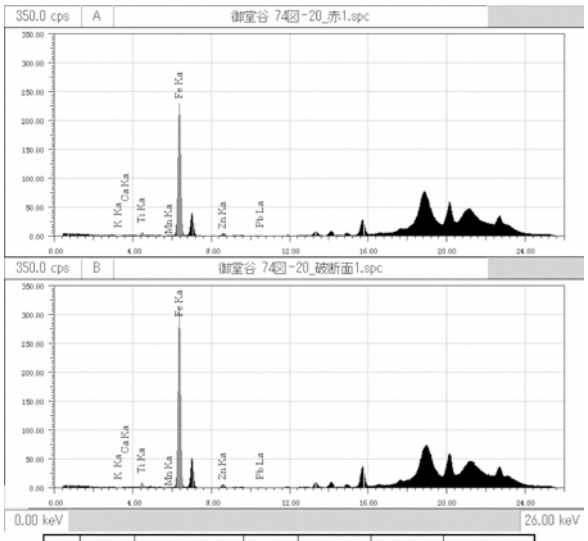
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	39.451	42.475	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	K α	30.773	31.801	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	K α	57.289	58.818	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	K α	18.611	16.645	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	K α	1122.262	866.777	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	K α	28.504	32.202	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	L α	56.091	23.216	10.36-10.73

第117図　『青木遺跡Ⅱ』第113図 -Z67 蛍光 X 線スペクトルデータ



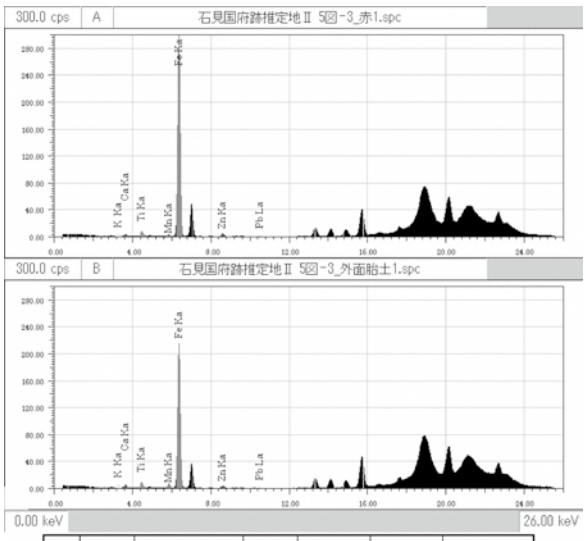
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
19	K	カリウム	K α	45.662	29.658	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	K α	21.247	17.282	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	K α	72.331	56.747	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	K α	59.995	19.230	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	K α	3838.783	2907.073	6.25- 6.55
29	Cu	銅	K α	19.267	8.577	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	K α	60.729	35.440	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	L α	20.022	22.369	10.36-10.73

第118図　『御堂谷遺跡』第72図 -19 蛍光 X 線スペクトルデータ



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	ＲＯＩ(keV)
19	K	カリウム	Ｋα	28.089	30.826	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Ｋα	18.319	19.012	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Ｋα	50.500	67.093	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Ｋα	17.459	18.935	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Ｋα	1931.219	2370.481	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	Ｋα	38.056	48.788	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Ｌα	18.314	20.705	10.36-10.73

第119図　『御堂谷遺跡』第74図 -20蛍光Ｘ線スペクトルデータ



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	ＲＯＩ(keV)
19	K	カリウム	Ｋα	34.558	47.446	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Ｋα	29.142	43.610	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Ｋα	62.558	69.040	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Ｋα	31.700	54.562	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Ｋα	2334.415	1671.423	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	Ｋα	38.175	36.112	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Ｌα	18.613	13.172	10.36-10.73

第120図　『石見国府跡推定地Ⅱ』第５図 - ３蛍光Ｘ線スペクトルデータ

第 5 節　史跡出雲国府跡 2020 年度調査に伴う 1 号石敷遺構出土礫の礫種について

奥中亮太：文化財調査コンサルタント (株)・高須　晃（島根大学名誉教授）

はじめに

史跡出雲国府跡は松江市大草町に位置し、意宇川扇状地上に立地する遺跡である。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、1 号石敷遺構で出土した礫の礫種を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターからの委託を受け、実施・報告した礫種の肉眼鑑定報告書を再編したものである。

観察（鑑定）試料について

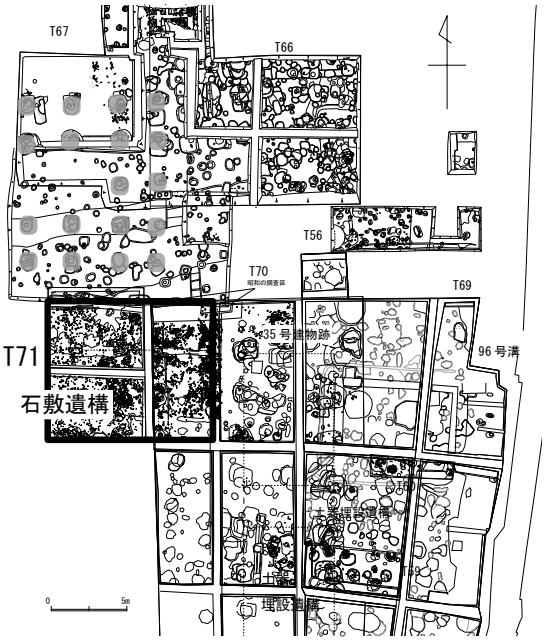
島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより試料の御提供を受けた。また、以下に示す平面図及び断面図は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。

(1) 試料採取地点

第 121 図（調査区の配置）に、1 号石敷遺構の検出されたトレンチを太枠で示す。第 122 図（検出トレンチ拡大）に太線で示した範囲で、試料が採取され、保管されていた。

(2) 試料について

第 10 表に、試料の状況写真と鑑定結果を併せて示す。



第121図　調査区の配置

礫種（岩石名）観察（鑑定）方法

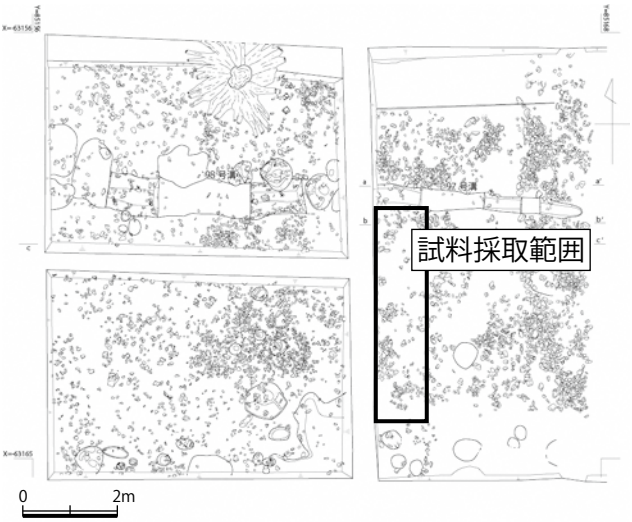
下記の手順で、観察（鑑定）を行った

① 肉眼、ルーペ、実体顕微鏡などを用いて対象試料を観察する。

② 試料表面の風化が進み十分な観察ができない場合、ハンマー等を用いて試料を砕き、新鮮な面を観察する。

③ 岩石名の判定に際し、判定根拠を記載する。また、観察面の写真を撮影し、図版として示す。

④ 御提供を受けた試料に同じ岩石名が付く場合にも、全ての試料について同様の作業を行う。



第122図　試料採取範囲（検出トレンチ拡大）

第10表　試料の状況写真・鑑定結果

試料No.	試料写真	岩石名
1		優白質花崗岩 または 粗粒珪長岩 （フェルサイト）
2		優白質花崗岩
3		細粒斑状黒雲母花崗岩
4		黒雲母花崗岩
5		流紋岩 ～デイサイト質凝灰岩 ～火山礫凝灰岩
6		黒雲母花崗岩
7		アプライト

岩石肉眼鑑定結果

岩石肉眼鑑定結果を表 10 に示した。以下に試料ごとに記載を行い、図版に観察面の写真をまとめた。

(1) 試料 No.1　T70 西 1 区第 1 整地層 201117

岩石名：優白質花崗岩又は粗粒珪長岩（フェルサイト）

組織：粗粒等粒状（一部に斑晶状の石英あり）

構成鉱物：石英、長石（斜長石＋カリ長石？）

粒径：2-5 mm

石英と長石を主要構成鉱物とし，粗粒等粒状の組織を示すことより酸性深成岩と考えられる。苦鉄質鉱物（黒雲母）は含まれないか極微量であるため、優白質花崗岩（又は粗粒フェルサイト）と判定した。ただし、変質により全体に褐色化している。

(2) 試料 No.2　T70 西 1 区第 1 整地層 201116

岩石名：優白質花崗岩（風化・変質著しい）

組織：粗粒等粒状

構成鉱物：石英，長石（斜長石＋カリ長石？）、黒雲母？（極微量）

粒径：3-5 mm

石英と長石を主要構成鉱物とし、粗粒等粒状の組織を示すことより酸性深成岩と考えられる。No.1 に類似するが黒雲母？を極微量伴うことより優白質花崗岩と判定した。ただし、礫の表面より変質・風化が進行し、マサ化して褐色に変色している。

(3) 試料 No.3　T70 西 1 区第 1 整地層 201116

岩石名：細粒斑状黒雲母花崗岩

組織：斑状組織

構成鉱物：石英、長石（斜長石？）、黒雲母

斑晶：石英（< 6 mm）、長石（斜長石？　< 10 mm）

石基：石英、長石、黒雲母（1-2 mm）

石英、長石、黒雲母を主要構成鉱物とし、斑状組織を示すことより酸性半深成岩と考えられる。以上より岩石名は細粒斑状黒雲母花崗岩とした。礫の表面より地下水の浸透によると考えられる変質が進行し、褐色化している。

(4) 試料 No.4　T70 西 1 区第 1 整地層 201116

岩石名：黒雲母花崗岩

組織：粗粒等粒状

構成鉱物：石英、長石、黒雲母

粒径：2-5 mm

石英、長石、黒雲母を主要構成鉱物とし、粗粒等粒状の組織を示すことより酸性深成岩と考えられる。有色鉱物として黒雲母を伴うことより黒雲母花崗岩と判定した。ただし、変質により全体に褐色化し、長石は粘土鉱物に分解している。

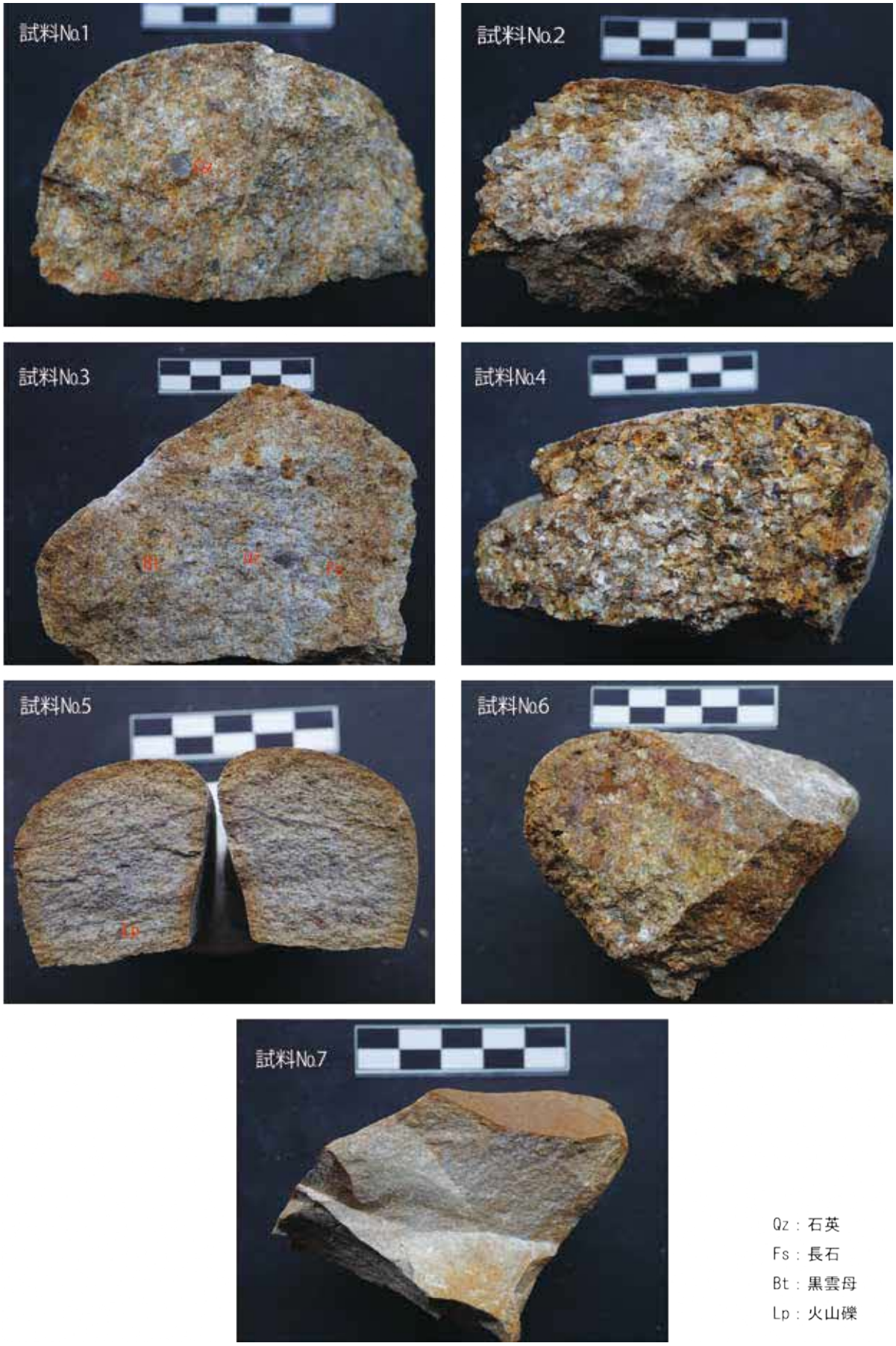
(5) 試料 No.5　T70 西 1 区第 1 整地層 201116

岩石名：流紋岩～デイサイト質凝灰岩～火山礫凝灰岩
組織：大部分は細粒塊状、一部に同質の火山礫が含まれる。
構成鉱物：石英、長石（斜長石？）
粒径：大部分は < 1 mm であるが、火山礫は最大径 6 mm
　石英、長石主要構成鉱物とし、細粒であることより流紋岩質又はデイサイト質の凝灰岩と考えられる。一部に同質の火山礫（< 6 mm）を含む部分は、粒径より火山礫凝灰岩に区分される。
(6) 試料 No.6　T70 西 1 区第 1 整地層 201116
岩石名：黒雲母花崗岩（風化・変質して褐色化している）
組織：粗粒等粒状
構成鉱物：石英、長石、黒雲母
粒径：2-4 mm
　石英、長石、黒雲母を主要構成鉱物とし、粗粒等粒状の組織を示すことより酸性深成岩と考えられる。有色鉱物として黒雲母を伴うことより黒雲母花崗岩と判定した。ただし、変質により全体に褐色化し、長石は粘土鉱物に分解している。
(7) 試料 No.7　T70 西 1 区第 1 整地層 201116
岩石名：アプライト（表面、割れ目に沿って地下水が浸透し、褐色化している）
組織：細粒塊状
構成鉱物：石英、長石
粒径：< 1 mm
　石英、長石を主要構成鉱物とし（酸性岩）、細粒塊状の組織を示すことより酸性半深成岩～火山岩と考えられる。花崗岩体中の細脈の可能性がある。礫の表面より地下水の浸透によると考えられる変質が進行し、褐色化している。

　今回鑑定した礫は、花崗岩体に関連する火成岩と流紋岩～デイサイト質火砕岩であった。これらは、出雲国府跡の南を流れる、意宇川の上流に分布する岩体（鹿野ほか，1994）と大きく外れるものではない。このことから、１号石敷き遺構に用いられた礫の多くは、意宇川から採取・運搬されたと推察される。

鹿野和彦・山内靖喜・高安克己・松浦浩久・豊　遙秋（1994）松江地域の地質、地域地質研究報告 5 万分の 1 地質図幅　松江　岡山（12）第 17 号、地質調査所

第123図　図版 試料観察面



Qz：石英
Fs：長石
Bt：黒雲母
Lp：火山礫

第５章　総括

第１節　遺構の変遷

１　遺構の変遷

これまでの調査によって詳細が判明している大舎原地区（国司館）を中心に遺構の変遷が示されてきた（島根県教委会2019）。平成30～令和２年度の調査により、これまで不明な点の多かった出雲国府跡政庁域の様相が徐々に明らかになりつつある。ここでは六所脇地区を中心に遺構変遷を整理したい。時期区分は『総括報告書』に依拠した。Ⅰ期の前に古墳時代、Ⅵ期の後に13世紀以降の出雲国府、と時期を設定した。

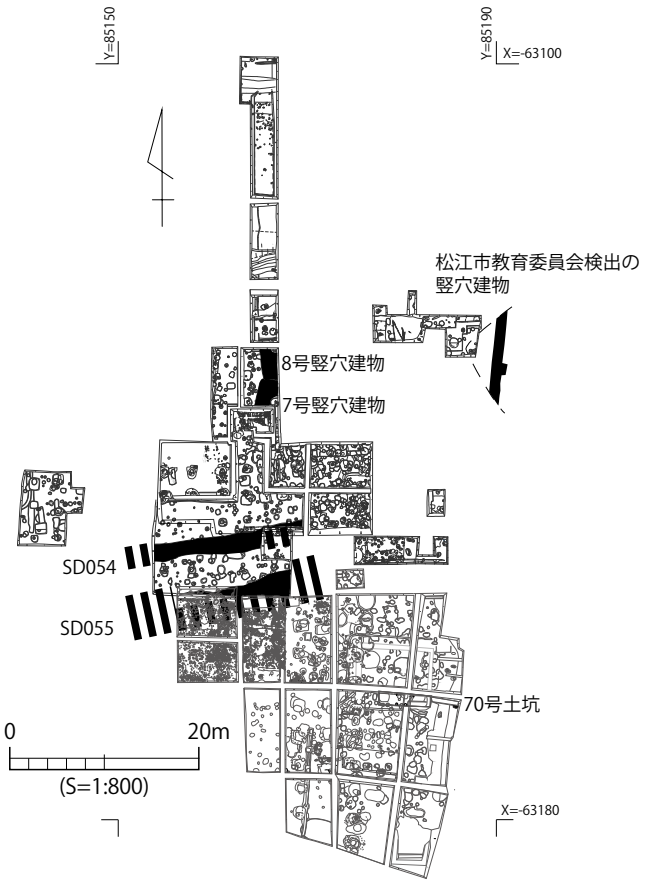
今回の調査で検出した遺構は、検出面、出土遺物、重複関係、主軸を考慮し、時期を決定したほか、後述する土器の編年案によって時期を検討した。

古墳時代

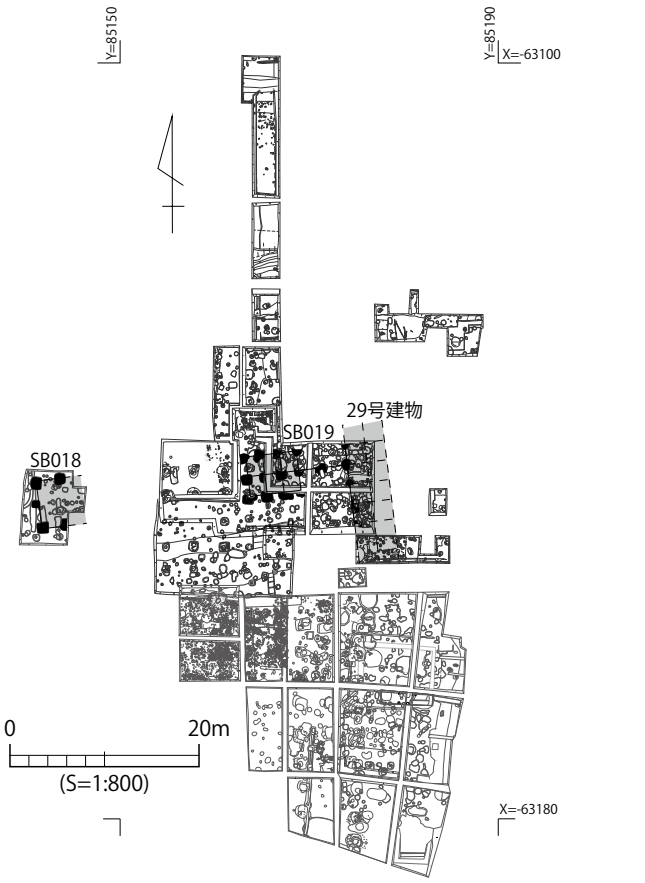
今回の調査では、70号土坑とSD055を検出した。70号土坑は古墳時代前期末、SD055は古墳時代中期中葉に位置づけられる。六所脇地区ではこのほか、古墳時代中期の８号竪穴建物や６世紀前葉の７号竪穴建物、2009（平成21）年度に松江市教育委員会が検出した古墳時代後期後葉の竪穴建物、古墳時代前期末～中期前葉のSD054、７世紀前葉の91号溝などの遺構が検出されている。このうちSD054とSD055は区画溝と想定される。

第11表　出雲国府跡遺構変遷一覧表（『史跡出雲国府跡』10第17表を改変）

<table>
<tr><th>年代</th><th>型式</th><th>出雲国府</th><th>六所脇</th><th>宮の後</th><th>大舎原</th><th>日岸田</th><th>政庁の画期</th></tr>
<tr><td>７世紀後葉</td><td>第１型式</td><td>Ⅰ期</td><td>SB018、SB019、29号建物</td><td>前身官衙</td><td></td><td></td><td>斜め方位</td></tr>
<tr><td>８世紀
第１四半期</td><td>第２型式</td><td>Ⅱ-１期</td><td>SB021、26号建物、38号建物、
72号土坑、82・83号溝</td><td rowspan="2">曹司
（掘立柱建物、区画溝、
木簡、墨書）</td><td>７・８号建物</td><td>15・16号建物</td><td>正方位</td></tr>
<tr><td>８世紀
第２四半期</td><td>第３型式</td><td>Ⅱ-２期</td><td>SB020A、35・36号建物A、
74号土坑、80号溝</td><td>２号建物</td><td>17・18号建物</td><td>本格整備・
定型化国庁</td></tr>
<tr><td>８世紀
第３四半期</td><td rowspan="2">第４型式</td><td rowspan="2">Ⅲ-１期</td><td rowspan="2">SB020B、35・36号建物B、
37号建物、80号溝</td><td rowspan="3">１号池状施設、曹司
（掘立柱建物、区画溝、
木簡、墨書）</td><td rowspan="2">１・４号建物</td><td rowspan="2">20号建物</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>８世紀
第４四半期</td></tr>
<tr><td>９世紀前葉</td><td>第５型式</td><td>Ⅲ-２期</td><td>SB020C、30・31号建物、
35・36号建物C、27・28号建物、
73号土坑、80号溝</td><td>１・４号建物（礎石）</td><td>14号建物</td><td>建物構成の変化・
礎石化</td></tr>
<tr><td>９世紀中葉
～
９世紀後葉</td><td>第６型式</td><td rowspan="2">Ⅳ期</td><td rowspan="2">SB020C、35・36号建物C、
１号石敷遺構、67・68号土坑、
84・85・88・95号溝、96号溝下層</td><td rowspan="2">１号池状施設、
（掘立柱建物、
緑釉・灰釉陶器）</td><td rowspan="2">５号建物、
10・21号建物（礎石）</td><td rowspan="2">19号建物（礎石）</td><td rowspan="2">施設設置の再構成
石敷遺構の敷設</td></tr>
<tr><td>10世紀前半</td><td>第７型式</td></tr>
<tr><td>10世紀後半
～
11世紀前半</td><td>第８型式</td><td>Ⅴ期</td><td>SB020C、35・36号建物C、
１号石敷遺構、71号土坑、
84・89・95溝、８号柵列、
96号溝上層、15・16号井戸</td><td>１号池状施設、
（井戸、土坑、緑釉陶器）</td><td></td><td></td><td>宮の後への機能集約？
政庁域に井戸設置</td></tr>
<tr><td>11世紀後半
～
12世紀前半</td><td>第９型式</td><td rowspan="2">Ⅵ期</td><td rowspan="2">69号土坑、97・98号溝、17号井戸</td><td rowspan="2">黒色土、（井戸、
貿易陶磁器）</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">11・12・13号建物</td><td rowspan="2">政庁域の機能停止</td></tr>
<tr><td>12世紀後半</td><td>第10型式</td></tr>
</table>



第124図　遺構変遷図【古墳時代】



第125図　遺構変遷図【出雲国府Ⅰ期】

Ⅰ期（７世紀後半）

７世紀後葉に位置づけられる時期である。今回の調査でこの時期の遺構は検出されていないものの、既往の調査でSB018（梁行２間×桁行２間以上の掘立柱建物）やSB019（３×４間の総柱建物）、29号建物（梁行２間の掘立柱建物か塀）などが検出されている。いずれも主軸が西に傾くことから、同時期の遺構と考えられる。また、これらの建物は主軸をそろえているなど、計画的な建物配置がなされている。

『総括報告書』では、Ⅰ期はⅡ期へ続く官衙的な要素が備わった時期（出雲国府の揺籃期）と位置づけられている。また、当該時期の性格については、意宇評衙とする説（山中1994）と初期の国府にかかわる国衙中枢施設とする説（大橋2018）がある。

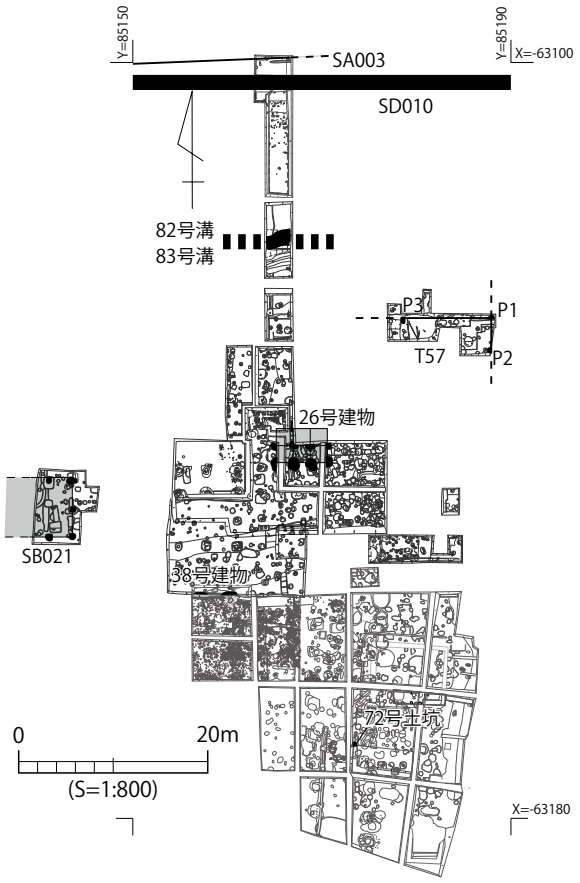
Ⅱ-１期（８世紀第１四半期）

８世紀第１四半期とされる時期で、遺構は26号建物（３×４間の総柱建物）、38号建物（掘立柱建物）、SB021（梁行２間×桁行２間以上の掘立柱建物）、82号溝、83号溝がある。宮の後地区南端ではSD010やSA003がある。

26号建物はSB019に重複するが、主軸が正方位であることから、SB019の建て替えによるものと判断されている。SB021も同様に主軸が正方位であることやSB018との重複関係からSB018の建て替えと判断されている。今回再検出した遺構として38号建物がある。昭和調査区Ⅰ区の南壁に掘方の一部がかかるのみで斜め方位の可能性もあるが、壁からの掘方の出がほぼ同一であることから、正方位であると判断し、Ⅱ-１期に位置づけた。

38号建物は、検出した柱はわずかであるが、柱間は３m（10尺）の規模であり、他の26号建物やSB021に比べて規模が大きいことが想定される。正確な規模は不明であるが、この時期の中心的な建物であった可能性がある。

このほか、土師器甕の年代から、72号土坑がこの時期に位置づけられる可能性がある。土師器甕２点を正位置でおさめた出土状況からは、地鎮などの祭祀が想定される。36号建物の北端部に位置することから36号建物建設に伴って祭祀が行われた可能性がある。その場合、遺構の位置づけとしてはⅡ-２期とした方が整合的である。



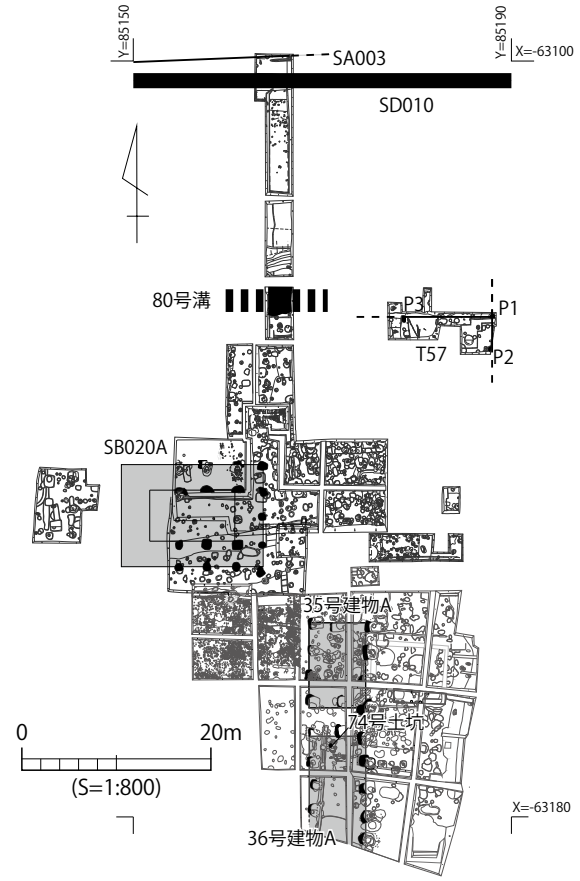
第126図　遺構変遷図【出雲国府Ⅱ-１期】

Ⅱ-２期（８世紀第２四半期～第３四半期）

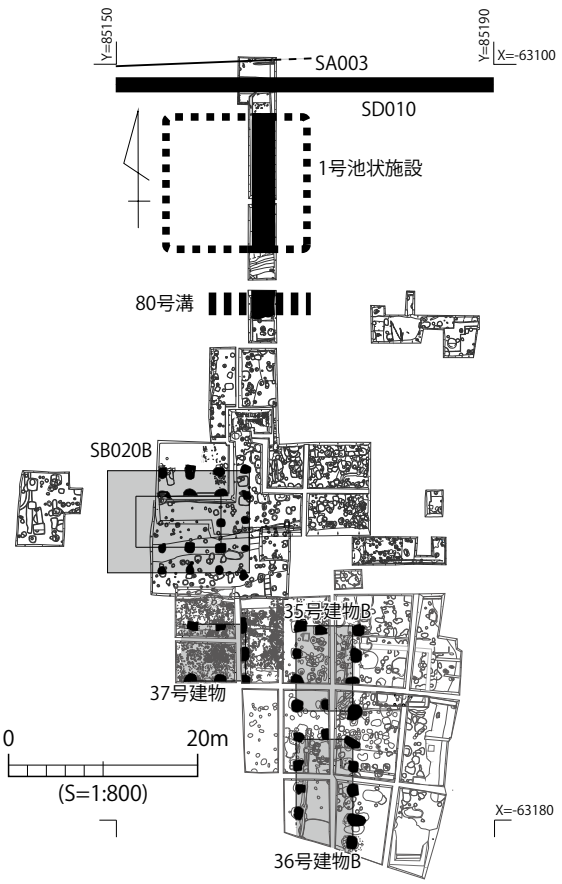
この時期に六所脇地区では、SB020A（四面廂建物）、35号建物Ａ（梁行２間×桁行３間）、36号建物A(梁行２間×桁行４間以上)が設置される。建物配置のあり方からSB020が正殿とみると35・36号建物Ａは東脇殿に該当すると考えられる。また、SB020と同様の建て替えの変遷を追えることからこの時期に位置づけた。宮の後地区の南端ではSD010、SA003が前段階に引き続いて機能していた可能性がある。

このほか六所脇地区では、区画塀雨落ち溝の可能性がある80号溝やT57で検出されたＰ１～Ｐ３（掘立柱塀か）などがあるが、明確な遮蔽施設は不明である。主要な建物以外にも土師器甕の年代から、74号土坑がこの時期に位置づけられる可能性がある。72号土坑と土器の埋設方法が同じであることや72号土坑に位置が近いことから、同様の祭祀が行われていたのであろう。前述したとおり、これらの土坑は36号建物にかかわる祭祀に用いられた可能性がある。72号土坑をⅡ-２期に位置づけた場合、74号土坑はⅢ-１期に位置づけた方が36号建物の建て替えと連動する点から整合的である。

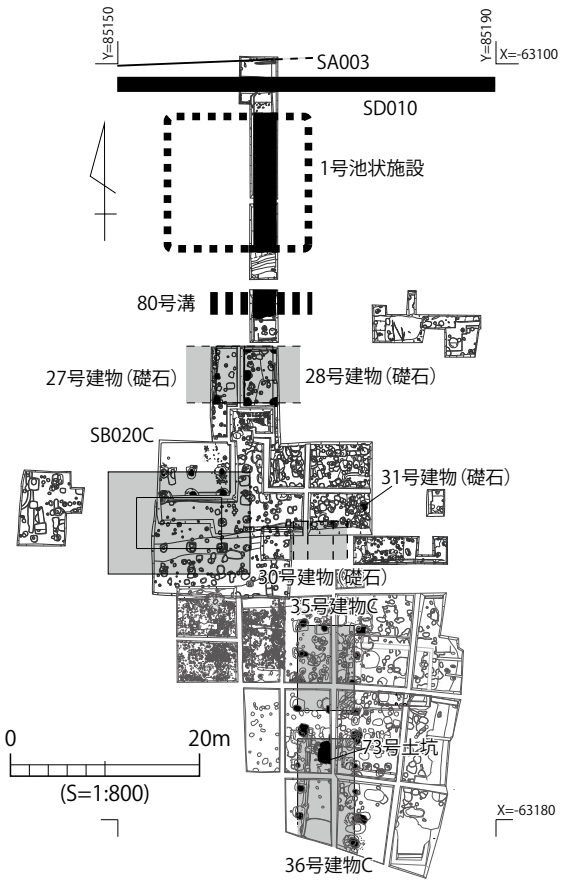
この時期は、政庁域の主要な建物が出そろう



第127図　遺構変遷図【出雲国府Ⅱ-２期】



第128図　遺構変遷図【出雲国府Ⅲ-１期】



第129図　遺構変遷図【出雲国府Ⅲ-２期】

など、建物配置などの面から、本格的な整備がなされた時期と位置づけられる。

Ⅲ-１期（８世紀第４四半期）

この時期はSB020B、35・36号建物Bと新たに37号建物（梁行２間×桁行２間以上）が設置された時期である。SB020BはSB020A、35・36号建物Bは35・36号建物Aの建て替えであることからこの時期に位置づけた。37号建物は、SB020Bの廂と37号建物北側柱筋との距離６m（20尺）、35号建物B西側柱筋との距離６m（20尺）という位置関係とそれぞれ柱筋をそろえることから、この時期と想定した。建物配置のあり方から37号建物は前殿に該当すると考えられる。このほか前述のとおり、74号土坑がこの時期に位置づけられる可能性がある。

宮の後地区南端では新たに１号池状施設が設置されている。また、80号溝やSD010、SA003も前段階に引き続いて機能していた可能性がある。

Ⅲ-２期（８世紀第４四半期～９世紀前葉）

この時期の遺構にはSB020C、27号建物（梁行２間）、28号建物（梁行２間）、35・36号建物Cがある。いずれも礎石建物である。SB020CはSB020B、35・36号建物Cは35・36号建物Bの建て替えであることからこの時期に位置づけた。27・28号建物は、SB020Cと柱筋をそろえている。建物配置のあり方から後殿に該当すると考えられる。37号建物の廃絶時期は不明であるが、他の建物が礎石化する中、礎石化を果たしていないことから、この時期に存在していたか検討の余地がある。

このほか30号建物（梁行３間）や31号建物が報告されているが、具体的な規模は不明である（島根県教委会2019）。特に30号建物は35号建物の北側に存在するが、柱筋等はそろえてい

ない。ただしSB020Cとは柱筋をそろえている点は注目される。T69、T70内では対応する掘方などは検出されていない。

建物以外では73号土坑がこの時期に位置づけられる。この時期においても継続して地鎮などの祭祀が行われたようである。

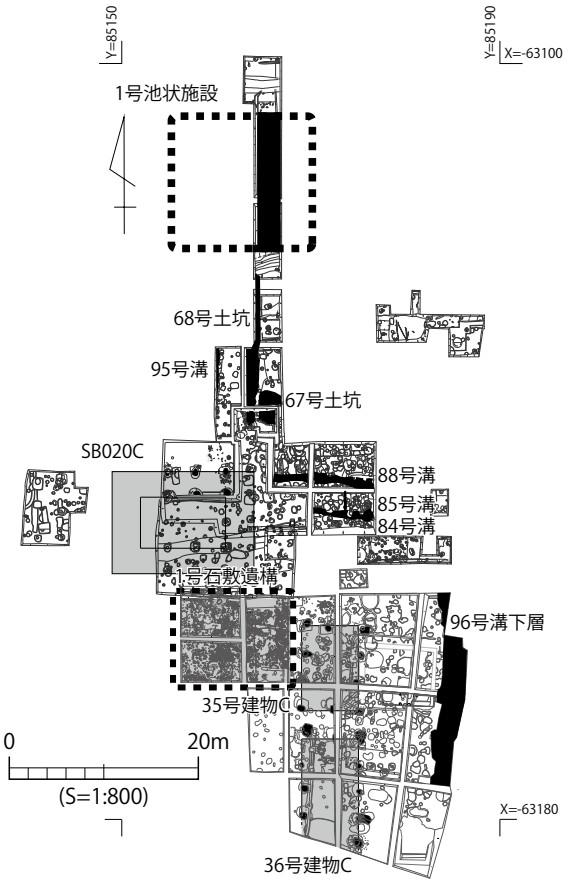
この時期は礎石化した後殿の設置など、政庁域の建物構成に変化がみられるほか、主要な建物が礎石化し、建物構造の面でも大きな画期である。特に大舎原地区の国司館が礎石化するなど、当該時期はⅡ期の施設を基礎に出雲国府の施設が大きく発展した時期と考えられる。

Ⅳ期（９世紀中葉～ 10 世紀前半）

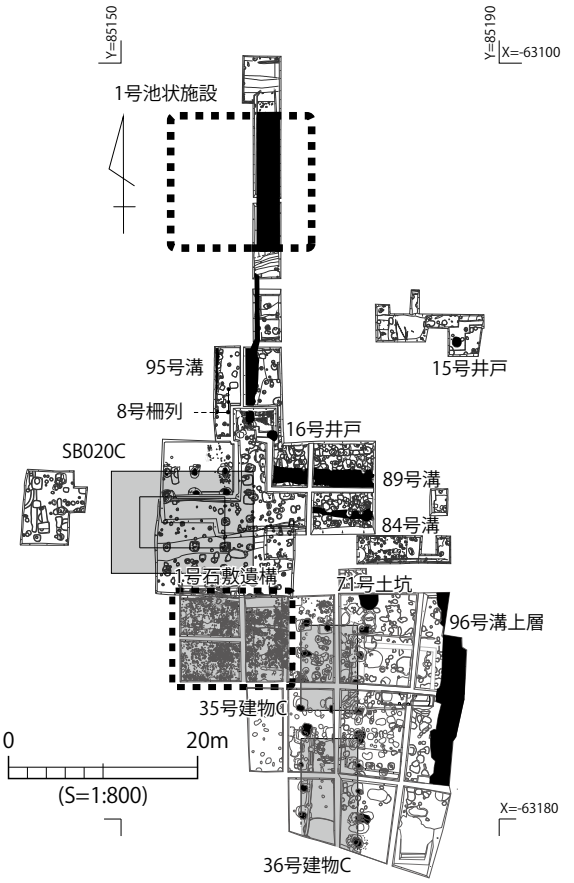
この段階において、正殿前に１号石敷遺構が敷設される。正殿の北側では67号土坑や68号土坑、95号溝があり、後殿は廃絶する。正殿の東側では84号溝、85号溝、88号溝があり、正殿との重複関係は不明である。しかし、正殿前に１号石敷遺構が敷設されることや石敷遺構北端と正殿との距離が３m（10尺）、石敷遺構東端と東脇殿との距離も1.5m（５尺）など、建物との関係を考慮した敷設が行われている可能性があることなどから、この時期には周辺に土坑や溝などが設置されているものの、継続して政庁として機能していたものと想定した。また、前殿が消滅し、前庭の拡大が行われることについて、国庁の唐風化、唐風の儀礼を行うためと捉える見解がある（古瀬1991）。出雲国府でもこの時期に前庭空間が石敷へと変化している点において、儀礼の方法や仕方に変化が起こったと想定される。

Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）

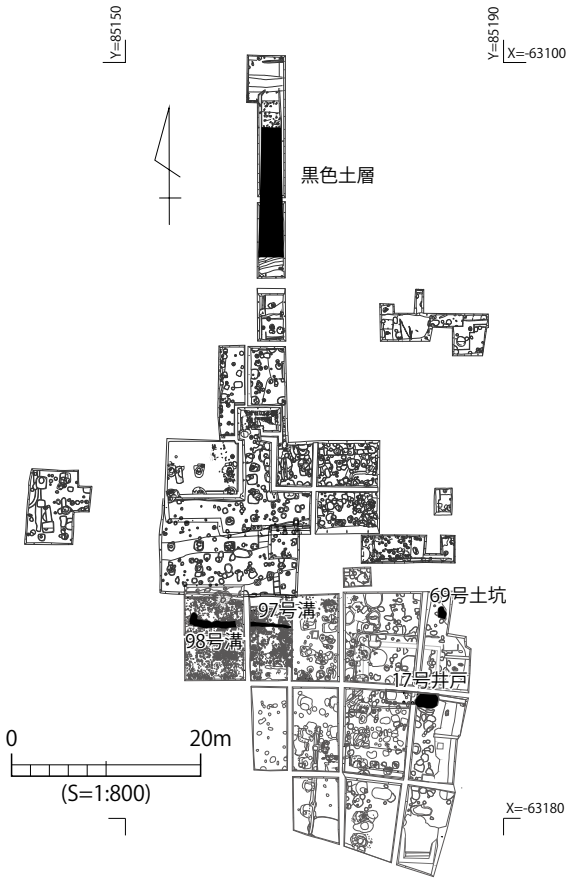
六所脇地区には正殿の北側に15号井戸、16号井戸がつくられるなど、政庁域に井戸が設置される。正殿の東側では84号溝、89号溝があり、また東脇殿の北側にも71号土坑がつくら



第130図　遺構変遷図【出雲国府Ⅳ期】



第131図　遺構変遷図【出雲国府Ⅴ期】



第132図　遺構変遷図【出雲国府Ⅵ期】

れるなど、政庁域に建物以外の遺構が多数つくられる。

『総括報告書』では、この時期に宮の後地区への機能集約を想定している。また、この段階で政庁域としては機能していない可能性が指摘されている（島根県教委会2013）が、正殿や東脇殿とこの時期に帰属する確実な遺構との切り合いがなく、この時期まで建物などは存続していた可能性がある。

Ⅵ期（11 世紀後半～ 12 世紀後半）

政庁域に土坑や井戸などが設置される時期である。１号石敷遺構内にある97・98号溝の廃絶に合わせて、この時期には政庁域の機能が停止しているものと考えられる。『総括報告書』では、古代とは異なる地割りが行われ、宮の後地区と日岸田地区が中心地になったことが想定される。１号池状施設では、黒色土層に大量の坏・皿類や白磁、緑釉陶器などが出土する状況から、近辺で饗宴を行ったためと想定されているが、69号土坑での坏類の出土の状況からもその可能性を指摘することができる。

13 世紀以降の出雲国府

T69、T70、T71では確実に13世紀以降と断定することができる建物等は検出されていない。しかし、六所脇地区では既往の調査で33号建物（梁行２間の掘立柱建物、16～17世紀前半）、34号建物（２×４間の掘立柱建物、33号建物の建て替え）、２号護岸状施設（15世紀中葉～17世紀前半）、１号石組遺構（15世紀中葉～17世紀前葉）がある。33・34号建物は隣接する六所神社の施設と考えられる（島根県教委会2019）。遺物の面からみても16世紀代の中国青花碗や肥前系陶器なども出土している。出雲国府跡では、13世紀代の洪水礫層で中近世の遺構の検出はこれまで困難であったが、六所脇地区南側では洪水の被害を受けることなく、中近世の遺構を検出している。他地区に比べて標高がわずかながら高いことは奈良時代の景観や政庁域の置かれた環境を考える上でも示唆的である。

第２節　遺構の評価と出雲国府跡政庁域について

１　72 ～ 77 号土坑（土器埋設遺構）について

平成30 ～令和 2 年度の調査では、T69西 1 区、T70東 2 区において、多数の土器を埋設した土坑を検出した。これらの遺構は36号建物周辺に集中していることが 1 つの特徴である。土坑内の遺物は、73号土坑を除き、意図的に埋設されたのは土師器甕のみである。 1 つの土坑内に 2 つの土師器甕を埋設することを基本とする。以下、これらの土器埋設遺構について、その性格などについて検討したい。また、時期は後述する土器の編年による。

掘削、取り上げを実施したのは72･73･74号土坑のみで、72･74号土坑は土師器甕 2 点を埋設、73号土坑は大型の土坑内に土師器甕底部を置く。土坑掘り込み検出面の標高は72号土坑で8.89m、73号土坑で8.99m、74号土坑で8.92m（土坑底面の標高は72号土坑で8.64m、73号土坑で8.82m、74号土坑で8.79m）で、掘り込み面の標高・底面の標高からは72→74→73号土坑の順が想定される。これは後述する土師器甕の形態変化とも整合的である。

72 ～ 77号土坑の特徴は、いずれも土師器甕を土坑内に埋設している。土師器甕の内部や土坑内には意図的に入れられたその他の遺物等は確認できない。36号建物に近接する位置で複数回にわたって土器を埋設する行為が確認できることから、建物にかかわって、あるいは政庁域における地鎮などの祭祀が行われていたと想定される。都城においてもこのような祭祀は行われており、地鎮と位置づけられている（上村1999）。都城では土師器甕以外を用いた地鎮も確認することができ、都城における祭祀は複数の種類が存在していたのであろう。一方で出雲国府跡では複数回にわたる祭祀を行っているが、いずれも土師器甕を用いており、その祭祀の意図や作法は一貫していた可能性がある。

２　35・36 号建物について

今回の発掘調査で新たに35・36号建物が検出された。これらの建物は、いずれも 2 度の建て替えが行われており、掘立柱建物から礎石建物へと建て替えられていることが判明した。また、四面廂建物であるSB020が政庁正殿と考えられることから35・36号建物は、東脇殿と推定される。建物の規模は35号建物で 2 間× 3 間、36号建物で 2 間× 4 間以上である。

建物の構造の面では、 2 棟の側柱建物となる可能性もあるが、馬道を設けた屋根を共有した 1 棟の建物となる可能性もある。また、 2 棟の建物とした場合、一部の断ち割り調査によるが、35号建物の方が36号建物に対して掘方の底面標高が低く､根入りがしっかりしている。このことから、35号建物は高床の楼風の建物であった可能性もある。

３　37 号建物と１号石敷遺構について

37号建物は政庁正殿と考えられるSB020の南で検出された建物である。 2 間以上× 2 間の建物で柱筋がSB020、35号建物の柱筋とそろい、特にSB020B、35号建物Bの時期にそれぞれの建物との距離が 6 m（20尺）になる。このことから、計画的な建物配置が想定され、37号建物の帰属時期はⅢ - 1 期と想定される。政庁域の建物配置からは政庁前殿と想定される。これらの特徴から、全国的な集成と類型によると37号建物は、B類（正殿と柱筋を揃え、整然と計画的に配置され、廂はも

たないが、梁行・桁行とも正殿と一致するもの）に位置づけられる（津曲2021）。前殿は現状、掘立柱建物１時期と想定され、短期的にその役目を終えると考えられる。前殿については、平城宮閤門に類似した機能を果たす施設との指摘がある。具体的には、朝賀や告朔などの際に正殿と前殿を隔てたり結節したりする機能、饗宴の際に国守が正殿から出向いて着座する場としての機能が想定されている（山中1994）。

前殿の廃絶後、正殿前の前庭空間はⅣ期に石敷遺構へと変化する。石敷遺構はSB020南側廂柱筋との距離が３m（10尺）、東脇殿と考えられる35号建物の西側柱筋との距離が1.5m（５尺）と計画的に敷設されていることがわかる。廃絶時期についても石敷遺構の中に掘り込まれた97・98号溝が石敷遺構と併存したと仮定して、溝の廃絶時期から想定した。石敷遺構と97・98号溝の前後関係は不明な点もあるが、SB020南側廂柱筋との距離が６m（20尺）であることや、98号溝が政庁推定中軸線を目前に北に曲がることなどは注目される。

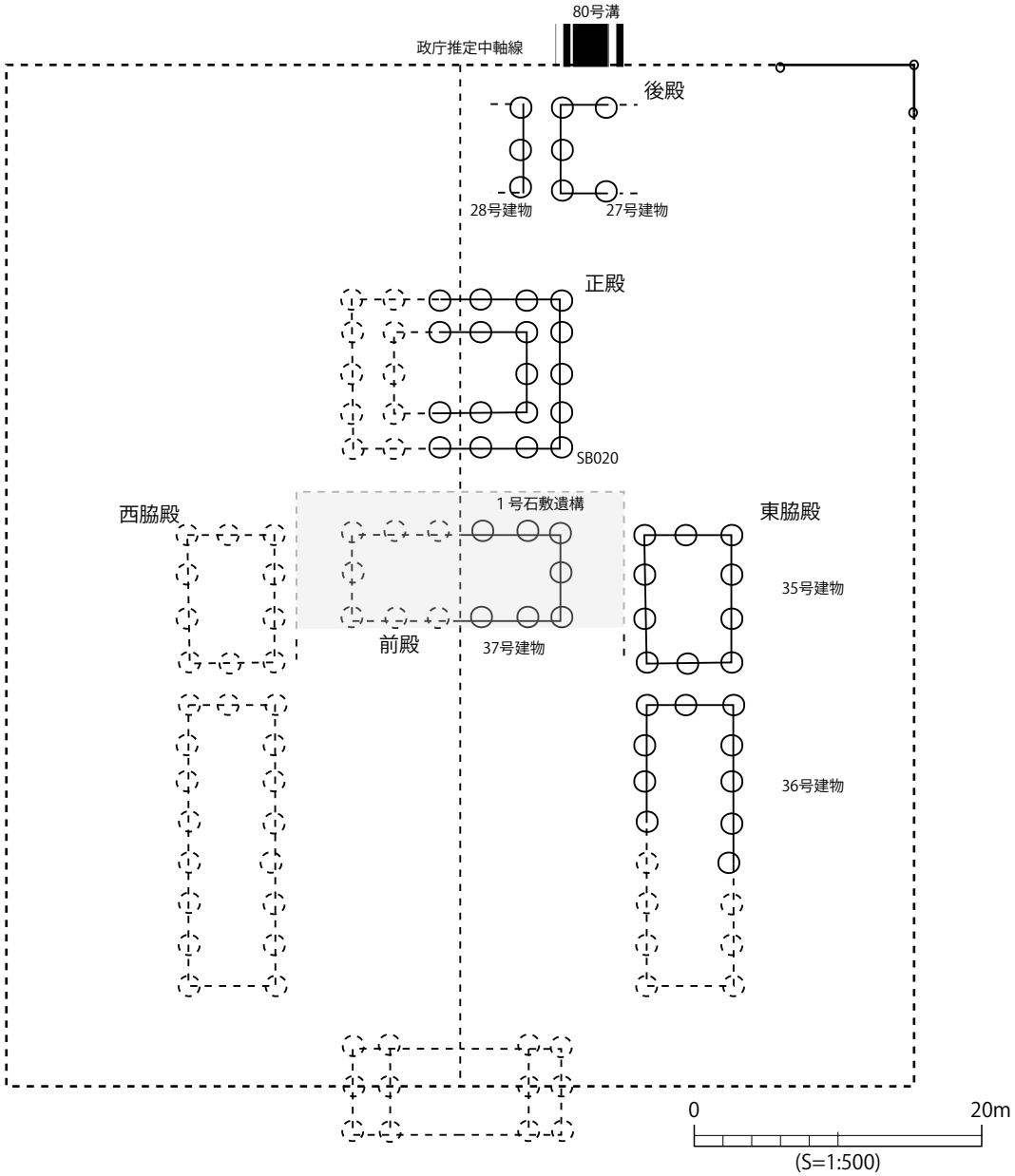
前殿の消滅や前殿から石敷へと変化することについては、阿部義平氏や平井美典氏、山中敏史氏の見解が参考になる。阿部氏は９世紀代に前殿が消滅し、前庭が拡大することが指摘し（阿部1986）、平井氏は儀式の場としての政庁が成立する９世紀代に前殿の不必要化にともなって前殿が消滅するとする（平井1987）。山中敏史氏は、政庁前殿は閤門の消滅と同時期に消滅しているとする（山中1994）。出雲国府政庁域でも37号建物が礎石化とすれば、８世紀後半～９世紀前葉（Ⅲ-２期）までには前殿が廃絶していると考えられる。前殿の廃絶後、９世紀代には石敷遺構へと変化しており、先学の指摘と一致する。前殿の消滅と前庭の拡大については、国庁の唐風化、唐風の儀礼を行うためと捉える見解がある（古瀬1991）。正殿前の空間が石敷へと変化していることから政庁域の儀式に何らかの変化があったことがうかがえる。

４　出雲国府政庁域について

今回の発掘調査で、政庁域を構成する主要な建物である東脇殿、前殿などが新たに検出されたことにより、政庁推定中軸線で反転させることで出雲国府政庁域の復元が可能になった。復元にあたって、遮蔽施設は現在も不明であるが、遮蔽施設の候補となるT57のＰ１～Ｐ３と80号溝を遮蔽施設にかかわるものとして、復元を行った。また、復元は前殿が政庁の中心にくる形で行った。建物配置の点からみるとⅢ-１期では、正殿、前殿、脇殿で構成され、脇殿は馬道を設けた１棟の建物、もしくは北側に楼風の建物を配した建物になる可能性が高い。この場合、いわゆる「長舎型」と呼ばれる建物配置になる可能性が高い（山中2004）。

規模の面でみると、東西63m（210尺）、南北70.8m（236尺）の空間を復元することができる。政庁の規模は、東西70～90mほどになることが一般的とされており、また、政庁の規模の差は国の等級をある程度反映されている可能性が指摘されている（山中2004・海野2009）。出雲国は上国に位置づけられ、出雲国府政庁域の場合、他の上国政庁域の規模と比べ、やや小規模である。また、出雲国内の郡家である郡垣遺跡（大原郡家：45×45m）、古志本郷遺跡（神門郡家：48×42m以上）よりも規模は大きい。

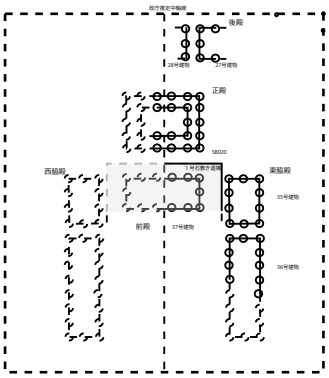
しかし、ここで注目される点が前庭空間である。政庁推定中軸線で脇殿を反転させると、その空間は東西25.8m（86尺）となる。この規模は極めて狭く、発掘調査でその規模が判明しているもので近しいものは伊賀国庁（約26.4m（88尺））である。上国である出雲と下国である伊賀で政庁域の



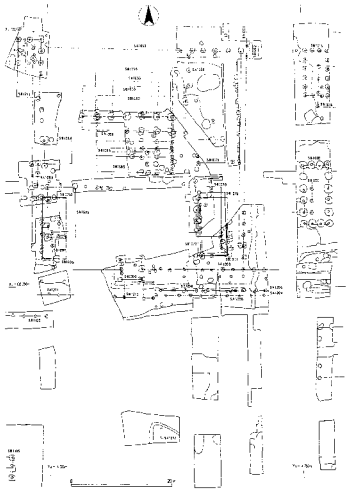
史跡出雲国府跡政庁復元想定図 (政庁推定中軸線で反転、前殿を中心 (63×70.8m(210×236 尺) に復元)
※未検出箇所は点線 (S=1/500)

第133図　政庁推定復元模式図（S=1:500）

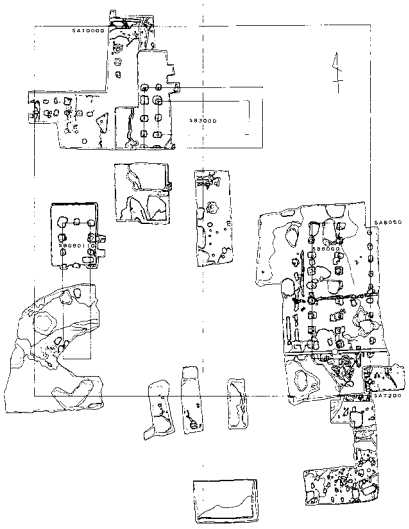
前庭空間の広さがほぼ等しいことについては検討が必要である。さらに郡家である郡垣遺跡や古志本郷遺跡に比べても前庭空間が狭いことは注目される。青木敬氏は正殿の廂の有無が国の等級を反映していた可能性があるとする一方、政庁の規模の面で伊賀や日向の事例から、厳密に国の等級を表現していたとは言い切れない側面もあるとする（青木2012）。出雲国府の場合、前庭の規模という面からではあるが、その一因に地形的な制約による可能性がある。出雲国府全体でみた場合に宮の後地区や大舎原地区は13世紀に洪水の影響を受けていることが知られている。政庁域である六所脇地区は発掘調査によって政庁後殿と考えられる27・28号建物までは洪水による被害が認められるが、正殿や東脇殿周辺ではその痕跡はみられない。つまり、政庁域は出雲国府の中でも最も高所に位置しているのである。政庁域が国府の中でも最も重要な空間ということが、その背景にある可能性がある。意宇平野の狭い高所に政庁域を設けたことが前庭空間等の狭さに起因している可能性が考えられる。



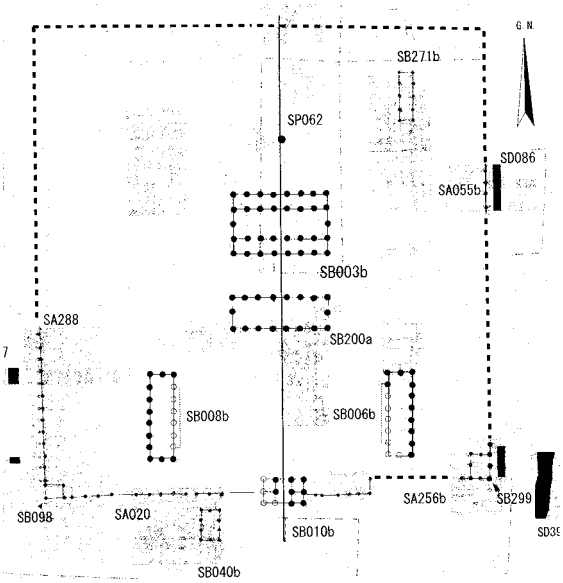
出雲国府跡



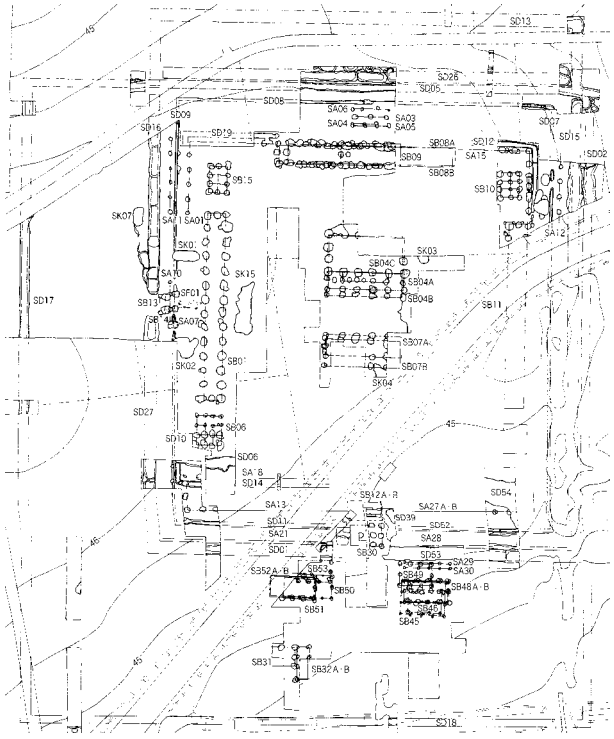
伊賀国府跡



美濃国府跡

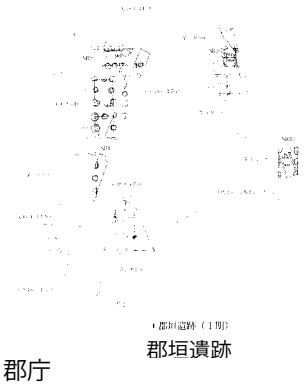


日向国府跡



伯耆国府国庁跡

古志本郷遺跡



郡垣遺跡

0　　50m

(S=1:1,500)

第134図　各地の国府政庁と郡庁

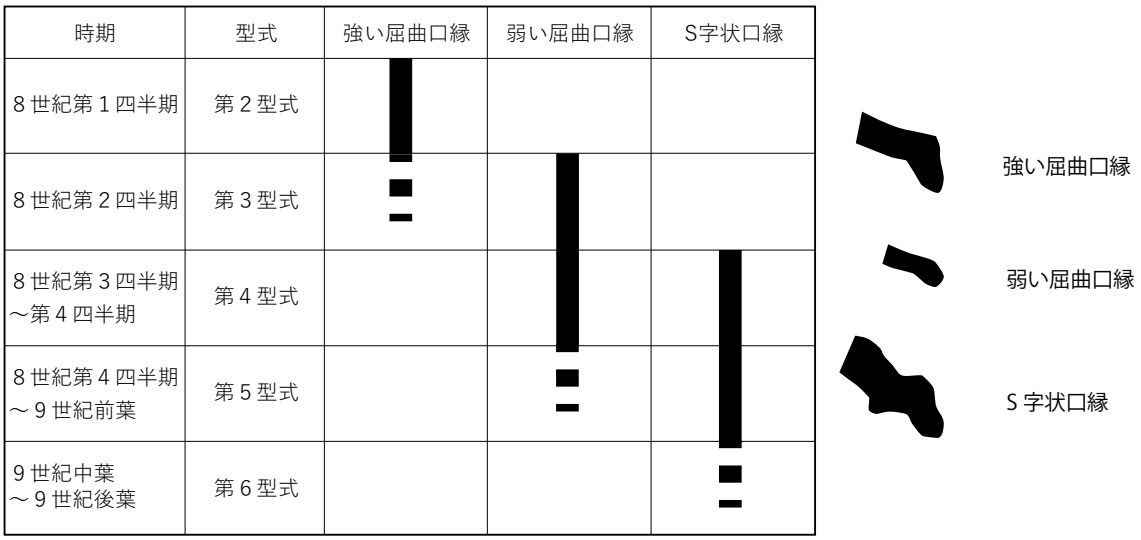
第３節　土器・陶磁器

これまで遺構の変遷や評価などを行ってきたが、ここではその年代の根拠となる土器について示したい。35号建物の抜き取り穴から出土した、いわゆる高坏Ｂと土器埋設遺構から出土した土師器甕の年代についてである。どちらも遺構の年代や出雲国府跡政庁域の変遷を検討するうえで重要である。

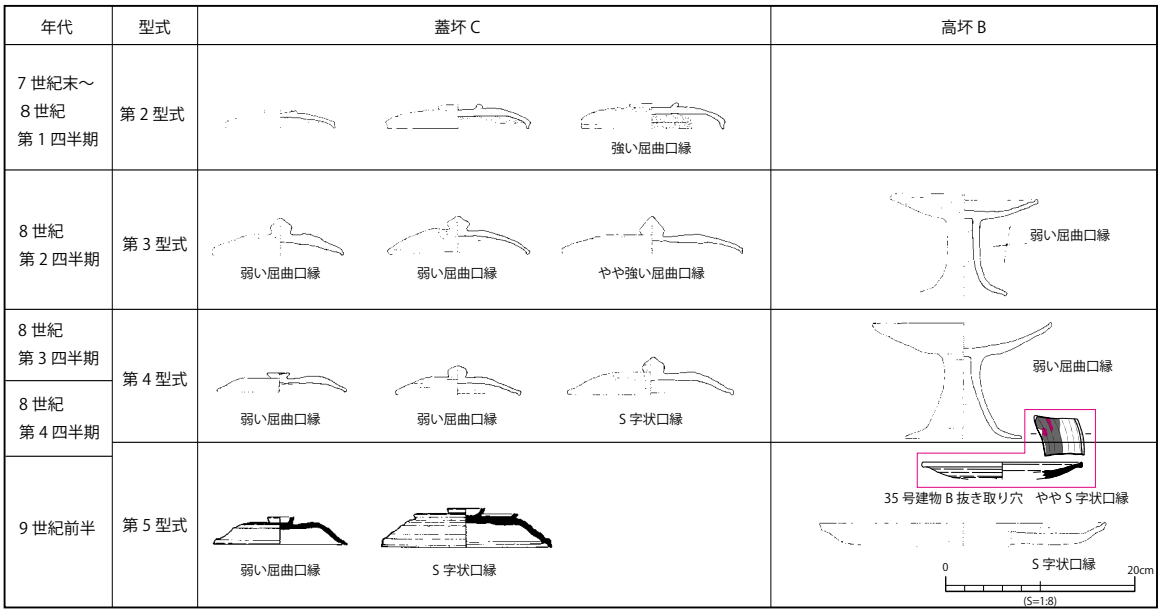
１　高坏Ｂについて

35号建物Ｐ10の抜き取り穴から須恵器高坏の坏部口縁が出土した。坏部内面を朱墨硯として転用している。出雲国府跡出土の高坏は碗状の坏部をもつＡ類と口縁部が外側に折り曲げられるＢ類に分類され（島根県教委会2008）、当該資料はＢ類に該当する。いわゆる高盤と呼ばれる器種であるが、ここでは出雲国府跡の形態分類に従って、高坏Ｂと呼称する。高坏Ｂは蓋を反転させたような偏平な坏部をもつものと分類されている（島根県教委会2008）。

高坏Ｂは、第３型式から登場し、「蓋を反転させたような偏平な坏部」をもつことや内外面の調整は蓋（蓋坏Ｃ）に類似する。蓋坏Ｃ蓋の口縁端部の変化は、「強い屈曲口縁→弱い屈曲口縁→Ｓ字状口縁」（島根県教委2013）とされ、これらの変化は高坏Ｂの変化にも応用できる可能性がある。よって、ここでは、蓋坏Ｃ蓋の口縁端部の変化と高坏Ｂの口縁端部の変化が共通するものと捉えたい。前述のとおり、蓋坏Ｃ蓋の口縁端部の変化は、強い屈曲口縁（第２型式）、弱い屈曲口縁（第３～４型式）、Ｓ字状口縁（第４～５型式）と漸次的に変化する。この変化を高坏Ｂ口縁端部におきかえてみると、第３・４型式では弱い屈曲口縁のものが存在し、第５型式ではＳ字状口縁のものがある。35号建物Ｂ抜き取り穴出土高坏Ｂは、確実なＳ字状口縁に比べ、やや弱い屈曲がみられることから、第４・５型式の中間的な口縁端部形態をしており、第４～５型式に位置づけられる。



第135図　出雲国府蓋坏Ｃ蓋端部形態の変遷



第136図　出雲国府跡蓋坏Ｃ蓋・高坏Ｂ変遷図

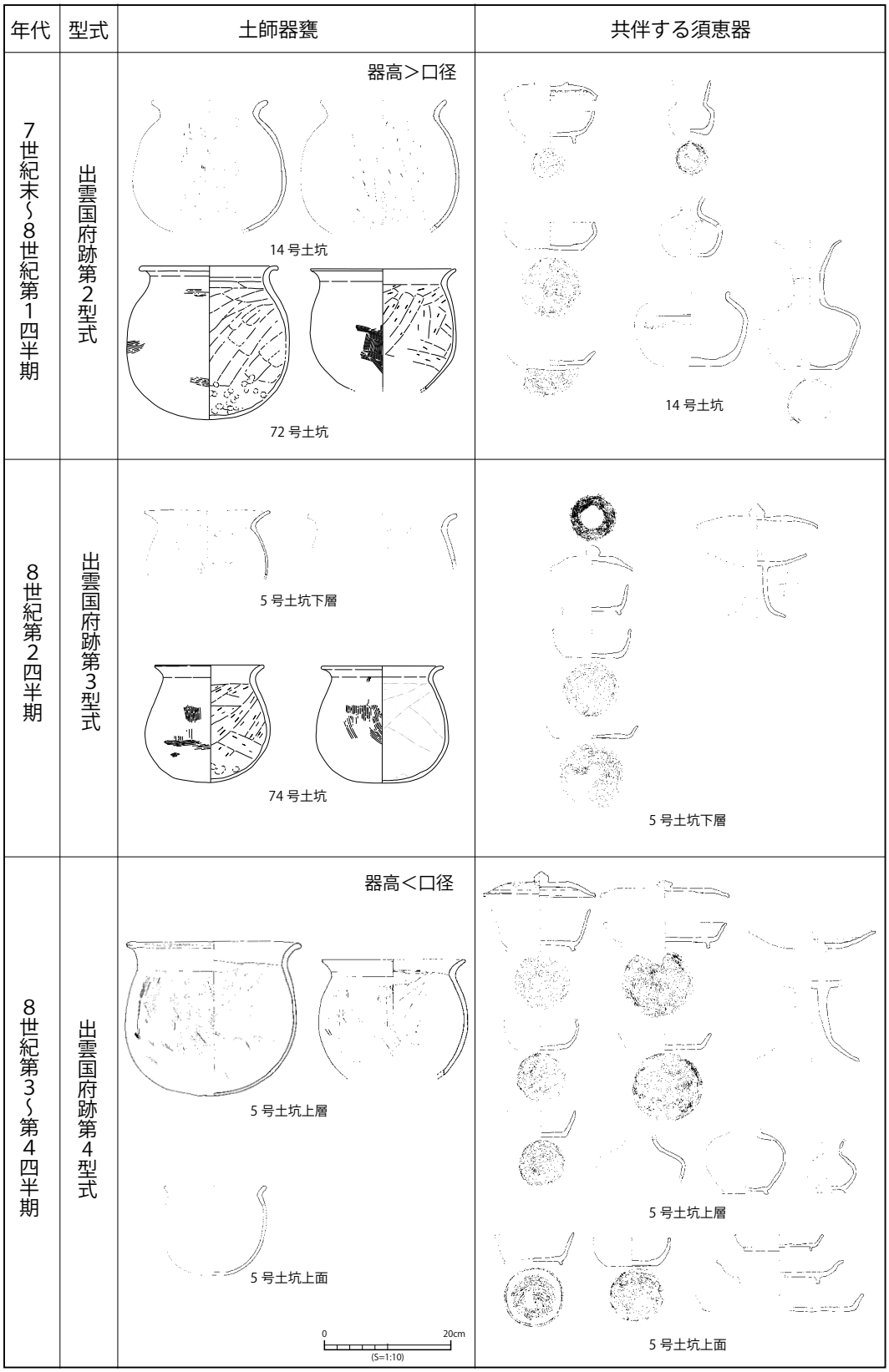
このほか35号建物Ｐ１Ｂ抜き取り穴からも須恵器高台付皿Ａが出土している。形態的な特徴から第４型式に位置づけられる。35号建物P10B抜き取り穴は、礎石化直前の掘立柱建物の柱抜き取り穴である。35号建物Ｐ１・P10B抜き取り穴から出土した須恵器から、これらの建物の礎石化は第４型式～第５型式ごろに行われた可能性がある。

２　土師器甕について

72～77号土坑において、土師器甕を用いた祭祀が行われていることが今回の調査で判明した。このうち、掘削、取り上げを実施したのは72・73・74号土坑のみではあるが、これらの土師器甕について、遺物の年代から遺構の年代について、検討したい。

前述のとおり、掘り込み面の標高・底面の標高からは72→74→73号土坑の順が想定される。いずれの土師器甕の調整も外面ハケ、内面ケズリで共通しており、時期的な変化を見いだすことは難しい。廣江耕史氏によると、８世紀になると胴部の張出しがなくなり胴部に対し口径が広い形態に変化することが指摘されている（廣江1996）。72～74号土坑出土土師器甕はいずれも８世紀代に位置づけられるが、口径が広い資料もあれば、依然として胴部の方が広い形態のものもある。口径/器高の比では、72号土坑で0.8688、74号土坑0.9144であり、74号土坑の出土資料の方が、器高に対して口径がやや大きくなっている。

この変化が時期差を示すか検討するため、出雲国府跡で検出された時期把握が可能な土坑出土資料に注目したい。分析に用いるのは、14号土坑と５号土坑出土資料である。出雲国府第２型式に位置づけられる14号土坑では口径と器高の比は0.8287～0.8728、出雲国府第３型式の５号土坑下層で1.078（復元による推定）、出雲国府第４型式の５号土坑上面で1.110～1.114である。これらのことから分かるのは、時期が下るにつれ、器高に対して口径が大きくなることである。よって、器高と口径の比が土師器甕の時期推定にある程度の有効性を認めることができよう。



第137図　出雲国府跡土師器甕変遷図

この変化をもとに72、74号土坑の土師器甕をみると、口径と器高の比は72号土坑で0.8688、74号土坑で0.9144である。前者は14号土坑出土土師器甕に近く、後者は14号土坑と５号土坑下層の中間に位置する。よって、土師器の年代から72号土坑を第２型式（Ⅱ-１期）、74号土坑を第３型式（Ⅱ-２期）に位置づけられる。また、73号土坑は埋土に国分寺補修期の瓦が含まれることから第４型式以降（Ⅲ-１期～Ⅲ-２期）に位置づけられる。

しかし、これらの土坑はいずれも36号建物に近接した位置につくられており、同一の場所で同一の祭祀を連続して行っている点からは36号建物にかかわる祭祀を行っている可能性がある。そのように考えた場合、遺構としての位置づけは72号土坑をⅡ-２期（36号建物A）、74号土坑をⅢ-１期（36号建物B）、73号土坑をⅢ-２期（36号建物C）と捉えることもできよう。

３　陶磁器について

緑釉陶器は既往の調査で199点が確認されている。今回の調査では、六所脇地区から73点出土した。主に近現代の造成土中や96号溝上層・下層から出土した。小片が多く、産地等の判別が可能な個体は少なく、今回は釉の濃さ（濃い・薄い）と胎土の状況（硬質・軟質）で分類を行い、表に掲載した。今回の調査区での出土量は100㎡あたり約11.6点である。六所脇地区の既往の調査分（29点）を含めると100㎡あたり約8.1点である。

既往の調査では、宮の後地区81点、大舎原地区で36点、日岸田地区で52点、樋ノ口地区０点、その他１点の出土がある。100㎡あたりの出土量は、宮の後地区で1.9点、大舎原地区で0.6点、日岸田地区で5.0点である。この出土量は、出雲国府跡の他地区と比較した場合でも抜きんでて多い。これまでも100㎡あたりの出土量は多いことは知られていた（西尾・守岡1996、島根県教委会2013）が、他の地区を圧倒する出土量であることは注目される。これらの緑釉陶器は饗宴などに用いられた可能性があり、政庁域である六所脇地区の性格を考える上で重要である。

灰釉陶器は既往の調査で111点が確認されている。そのうち六所脇地区では４点の出土である。今回の調査では、六所脇地区から13点出土したほか、山茶碗の可能性があるものが１点出土した。主に近現代の造成土中や96号溝上層から出土した。今回の調査区での出土量は100㎡あたり約2.7点である。六所脇地区の既往の調査分を含めると100㎡あたり約1.3点であり、これまでの傾向と同様に六所脇地区では出土量は少ないといえる。

このほか、貿易陶磁器として、白磁24点、青磁13点、越州窯磁器10点、青花５点が出土している。いずれも近現代の造成土中から出土したものが多い。越州窯磁器は、いずれも碗か皿で、１点のみ蓋の可能性がある。小片が多く、時期の特定は難しい。白磁は、時期が判明したものは、大宰府編年C期に位置づけられるものが多い。また、四耳壺１点を除いて、その他は碗か皿である。政庁域の機能が衰退していく中である12世紀前半代においても政庁域で饗宴などを行っていたことを示す可能性がある。青磁は大宰府編年D期に位置づけられるもののほか、時期が判明するものは15世紀～16世紀のものがある。また、５点ではあるものの、中国青花碗、もしくは皿も出土している。これらはいずれも16世紀代以降に位置づけられる。政庁の機能停止以降も一定の階層に属する集団の政庁域でのなんらかの活動が想定される。

第 12 表　T69・T70・T71 出土緑釉陶器一覧表

番号	挿図番号	種別	器種	調査区	遺構	土層	胎土・釉	備考
1	51-6	緑釉陶器	碗	T60	17 号井戸		軟質・薄い	9Ｃ中、京都
2		緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区		暗褐色土	硬質・薄い	
3		緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区		暗褐色土	硬質・薄い	
4		緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区		暗褐色土	硬質・濃い	
5	31-24	緑釉陶器	碗	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	硬質・薄い	
6		緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	硬質・薄い	
7		緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	硬質・薄い	
8	31-23	緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	軟質・薄い	
9		緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	軟質・薄い	
10		緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	硬質・濃い	
11		緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	硬質・濃い	
12	34-14	緑釉陶器	碗	T69 東１区	96 号溝下層	褐灰色土	硬質・濃い	
13	34-15	緑釉陶器	碗	T69 東１区	96 号溝下層	褐灰色土	硬質・濃い	
14		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	軟質・濃い	
15		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	軟質・薄い	
16		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	軟質・薄い	
17		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	軟質・濃い	
18		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	硬質・濃い	
19		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	硬質・薄い	
20		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	硬質・薄い	
21		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	硬質・薄い	
22		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	硬質・薄い	
23		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土	硬質・薄い	
24		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区	96 号溝上層	黒褐色土	軟質・薄い	
25		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区	96 号溝上層	黒褐色土	軟質・薄い	
26	31-22	緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区	96 号溝上層	黒褐色土	硬質・薄い	
27		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区	96 号溝下層	褐灰色土	硬質・濃い	
28		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区	96 号溝下層	褐灰色土	硬質・薄い	
29		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区	96 号溝下層	褐灰色土	硬質・薄い	
30		緑釉陶器	碗か皿	T69 東２区	96 号溝下層	褐灰色土	硬質・薄い	
31		緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区		暗褐色土	軟質・濃い	
32		緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区		暗褐色土	硬質・薄い	
33		緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区		暗褐色土	硬質・薄い	
34		緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区		暗褐色土	硬質・薄い	
35		緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区		黒褐色土	硬質・薄い	
36	67-9	緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区		黒褐色土	硬質・薄い	
37		緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区		黒褐色土	軟質・薄い	
38		緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区		検出面	硬質・薄い	
39		緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区	Pit(120)		硬質・濃い	
40		緑釉陶器	碗か皿	T69 西１区	Pit(135)		軟質・薄い	
41		緑釉陶器	碗か皿	T69 西２区		暗褐色土	硬質・薄い	
42	63-21	緑釉陶器	碗	T69 西２区		暗褐色土	近江	近江
43	63-22	緑釉陶器	蓋	T69 西２区		暗褐色土	軟質・薄い	
44		緑釉陶器	碗か皿	T69 西２区		検出面	軟質・薄い	
45		緑釉陶器	碗か皿	T69 西２区		検出面	硬質・薄い	
46		緑釉陶器	碗か皿	T69 西２区		検出面	硬質・薄い	
47		緑釉陶器	碗か皿	T69 西２区		検出面	硬質・薄い	
48		緑釉陶器	蓋？	T69 西２区			軟質・薄い	
49		緑釉陶器	碗か皿	T69 西３区		暗褐色土	硬質・濃い	
50		緑釉陶器	碗か皿	T70 東１区		公園造成土下	硬質・薄い	
51		緑釉陶器	碗	T70 東１区		暗褐色土	軟質・薄い	
52		緑釉陶器	碗か皿	T70 東１区		検出面	硬質・濃い	
53	61-3	緑釉陶器	碗	T69 東１区	P4		硬質・薄い	
54		緑釉陶器	碗か皿	T70 東２区		検出面	硬質・薄い	
55		緑釉陶器	碗か皿	T70 東３区		暗褐色土	硬質・濃い	
56	71-23	緑釉陶器	碗	T70 西１区		暗褐色土	軟質・薄い	
57		緑釉陶器	碗か皿	T70 西１区		暗褐色土	硬質・薄い	
58		緑釉陶器	碗か皿	T70 西１区			硬質・薄い	
59		緑釉陶器	碗か皿	T71　２区		暗褐色土	硬質・薄い	
60		緑釉陶器	碗か皿	T60		埋め戻し土	硬質・薄い	
61		緑釉陶器	碗か皿	T60		埋め戻し土	硬質・薄い	
62		緑釉陶器	碗か皿	T69		埋め戻し土	硬質・薄い	
63		緑釉陶器	碗か皿	T69		埋め戻し土	硬質・濃い	
64		緑釉陶器	碗か皿	T69		埋め戻し土	軟質・濃い	
65		緑釉陶器	碗か皿	T69 東１区		埋め戻し土	硬質・薄い	
66		緑釉陶器	碗か皿	T70 東２区		埋め戻し土	硬質・薄い	
67		緑釉陶器	碗か皿	T70 東１区		埋め戻し土	軟質・薄い	
68		緑釉陶器	碗か皿	T70 西１区		埋め戻し土	硬質・薄い	
69		緑釉陶器	碗か皿	T70		排土	硬質・濃い	
70	81-3	緑釉陶器	碗	昭和調査区		埋め戻し土	硬質・濃い	
71		緑釉陶器	碗か皿			表採	軟質・薄い	

第 13 表　T69・T70・T71 出土灰釉陶器・山茶碗一覧表

番号	挿図番号	種別	器種	調査区	遺構	土層	備考
1		灰釉陶器	壺	T69 東１区		暗褐色土	
2	31-25	灰釉陶器	碗	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	11C
3	31-26	灰釉陶器	碗	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	11C
4		灰釉陶器	碗か皿	T69 東２区	96 号溝上層	黒褐色土	
5		灰釉陶器	碗	T69 東２区	96 号溝上層	黒褐色土	
6		灰釉陶器	碗か皿		96 号溝下層	褐灰色土	
7	55-1	灰釉陶器	碗	T69 西１区	P1		12C、東濃型
8		灰釉陶器	壺	T69 西１区		暗褐色土	
9		灰釉陶器	壺	T69 西２区		検出面	
10		灰釉陶器	壺	T69 拡張区		暗褐色土	
11		灰釉陶器	碗か皿	T70 東１区		暗褐色土	
12	50-1	灰釉陶器	段皿	T70 西１区	１号石敷遺構	検出面	
13		灰釉陶器	碗か皿	T70 東２区		埋め戻し土	
14	31-27	山茶碗	碗	T69 東２区	96 号溝上層	黒褐色土	11C ～（12C）、湖西産？

第 14 表　T69・T70・T71 出土越州窯産陶磁器一覧表

番号	挿図番号	種別	器種	調査区	遺構	土層	時期
1		越州	碗	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	
2		越州	碗	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	
3		越州	碗	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	
4		越州	碗	T69 東２区		暗褐色土	
5		越州	碗	T69 西２区	攪乱２		
6	58-1	越州	皿	T70 東１区	ピット (053)		
7		越州	碗か皿	T70 東１区	ピット (034)		
8	61-2	越州	碗	T70 東１区	P3		9ｃ
9	76-7	越州	蓋？	T70 西１区		第１整地層	
10		越州	碗か皿	T70 西１区		暗褐色土	

第 15 表　T69・T70・T71 出土白磁一覧表

番号	挿図番号	種別	器種	調査区	遺構	土層	時期	産地・分類
1	31-28	白磁	皿	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	11c 後～ 12c	福建
2		白磁	碗か皿	T69 東１区	96 号溝上層	黒褐色土	中世前半？	
3		白磁	碗か皿	T69 東１区		暗褐色土		
4		白磁	皿	T69 東１区	攪乱		大宰府 C 期	Ⅱ類
5		白磁	碗か皿	T69 東１区		検出面		
6		白磁	碗か皿	T69 東２区		暗褐色土		
7		白磁	碗か皿	T69 東３区		暗褐色土		広東
8		白磁	碗か皿	T69 東３区		暗褐色土		福建
9		白磁	碗か皿	T69 東３区	Pit			福建
10		白磁	皿	T69 東３区	Pit			Ⅱ類、広東
11		白磁	端反皿	T69 西１区		黒褐色土	16c	E 群
12	63-23	白磁	玉縁碗	T69 西１区		暗褐色土	大宰府 C 期	Ⅳ類、福建
13		白磁	玉縁碗	T69 西１区		黒褐色土	大宰府 C 期	Ⅱ類
14		白磁	碗か皿	T69 西１区		暗褐色土	大宰府 C 期	
15		白磁	碗か皿	T69 西２区		暗褐色土	大宰府 C 期	
16	71-26	白磁	皿	T70 西２区		暗褐色土		Ⅳ類、福建
17		白磁	碗か皿	T70 西２区		暗褐色土		Ⅳ類、福建
18	71-27	白磁	四耳壺	T70 東１区		暗褐色土		
19	71-25	白磁	碗	T70 東１区		暗褐色土		Ⅱ類、広東
20		白磁	碗か皿	T70 東３区		暗褐色土	中世前半	
21		白磁	碗	T70 東３区		暗褐色土		
22	60-1	白磁	玉縁碗	T71 １区	P1		大宰府 C 期	Ⅱ類、広東
23		白磁	碗か皿	T71 ２区	Pit			
24		白磁	碗か皿	T71 ２区		暗褐色土		Ⅳ類、福建

第 16 表　T69・T70・T71 出土青磁一覧表

番号	挿図番号	種別	器種	調査区	遺構	土層	時期	産地・分類
1		青磁	碗か皿	T69 西１区		暗褐色土		
2		青磁	碗？	T69 西２区		暗褐色土	15c 以降？	
3		青磁	壺、瓶？	T69 西２区		埋戻土		
4		青磁	碗	T69 西３区	Pit(475)	埋土		
5		青磁	碗、皿？	T69 東１区		暗褐色土		龍泉
6		青磁	碗？	T69 東１区		暗褐色土		
7		青磁	皿	T69 東１区	攪乱９	埋土	大宰府Ｄ期 12c 後半～ 13C 前半	同安窯系 I-16
8	63-24	青磁	碗	T69 東３区		暗褐色土	15c	龍泉
9	63-25	青磁	陵花皿	T69 東３区		暗褐色土	16c	龍泉
10		青磁	碗	T69 東３区	Pit(461)	埋土		
11		青磁	碗か皿	T70 東２区	攪乱２	埋土		龍泉
12		青磁	碗か皿	T70 東３区		検出面		
13		青磁	碗か皿	T71 ２区		暗褐色土		龍泉

第 17 表　T69・T70・T71 出土中国青花一覧表

番号	挿図番号	種別	器種	調査区	遺構	土層	時期	分類
1		青花	端反皿	T69 西１区		暗褐色土	16c 前半代	B1 類
2	63-26	青花	碗	T69 西１区		暗褐色土	16c 後半以降	青花碗Ｅ群直口 粗製漳州窯
3		青花	青花皿	T69 西２区		検出面	16c 後半以降	青花皿Ｃ群
4		中国陶器？	碗？	T70 西２区		暗褐色土	中世か？	
5		青花？	皿か碗	昭和調査区		埋戻土		

第４節　墨書土器

今回の調査で墨書土器は２点出土した。１点は「厨」、１点は判読不明であるが、「木へん」あるいは「手へん」の漢字であると考えられる。器種はいずれも須恵器高台付坏で、底部外面に墨書がなされている。

六所脇地区の既往の調査では、６点の墨書土器が出土しており、今回の調査で出土したものをあわせて計８点の出土がある。この出土量は宮の後地区105点、大舎原地区99点に比べて極めて少ない。しかし、この出土量の少なさが政庁域の特徴を示している可能性もあるだろう。

政庁域で出土した墨書土器は他の地区と比べて少ないものの、８点のうち４点が「厨」の墨書であることが注目される。墨書がなされた土器はいずれも須恵器で、多くが出雲国府第５型式に該当する。饗宴などにともなって、厨から食器類が持ち込まれたことを反映するものと考えられる。また、既往の調査で出土した「修」の墨書土器については、政庁域が仏教法会の場となったことを示す可能性がある（佐藤1994）。また、「兵」の墨書土器については、兵士の警備を表している可能性がある。政庁域で出土した墨書土器は少ないながらも政庁域の活動の一端を示している。

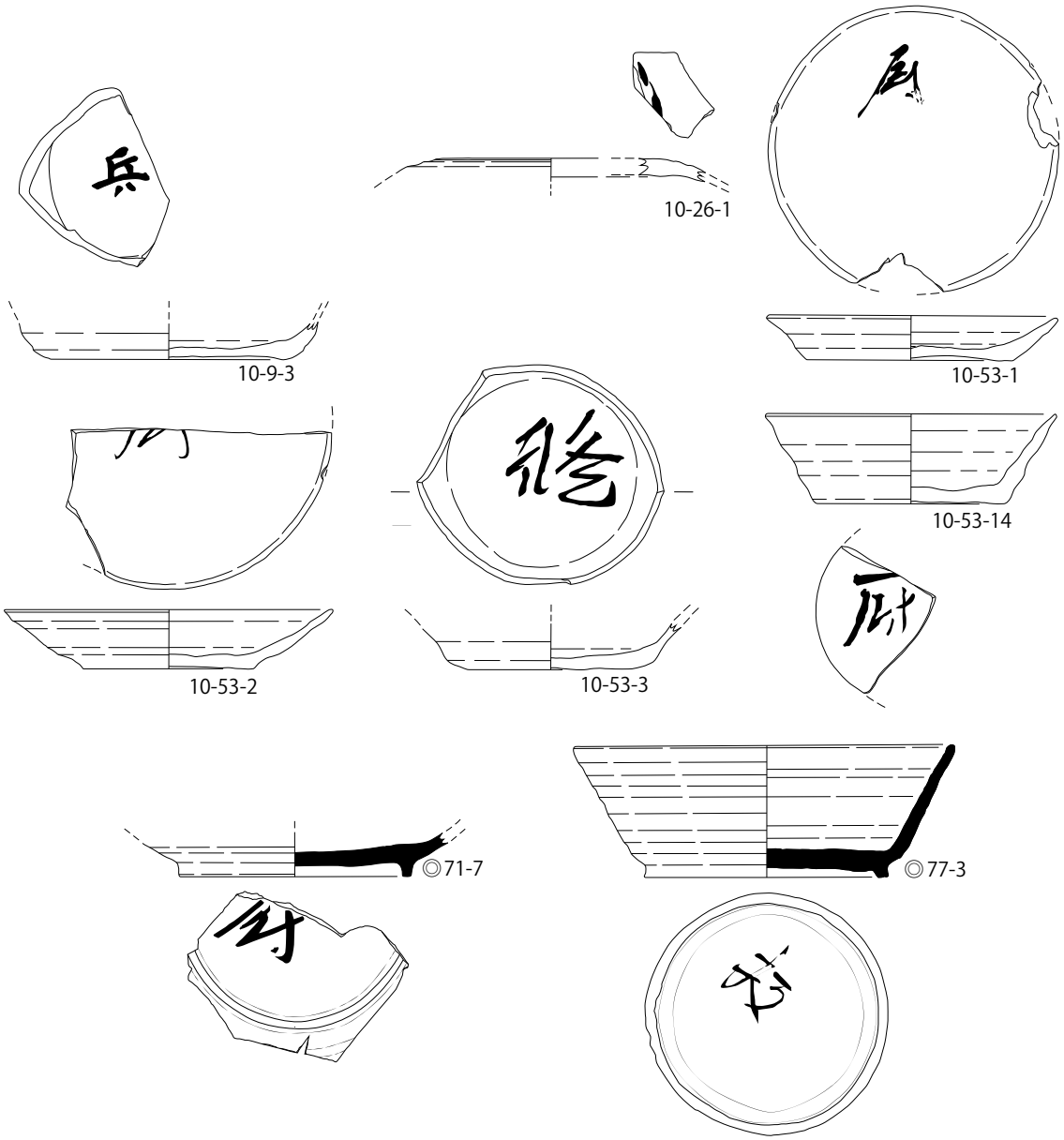
第５節　硯

硯はこれまでの調査で定形硯118点、転用硯258点、石硯４点の合計380点の硯が出土している。六所脇地区に限ってみれば、定形硯１点、転用硯21点が出土している。今回の調査では、定形硯11点、転用硯81点の計92点が出土した。定形硯は風字硯３点、円形硯２点、円面硯６点である。

転用硯81点のうち、６点は朱墨硯にも転用されている。六所脇地区で出土した硯の総計は定形硯12点、転用硯102点の計114点である。今回の調査で出土した硯は、既往の六所脇地区の調査で出土した硯全体と比較すると約４倍の出土点数で、六所脇地区の中でも多いことがわかる。出土位置についても東脇殿と考えられる35・36号建物の東側に集中しており、全体の約６割にあたる66点が出土している。東脇殿の性格や政庁域での文書行政のあり方を考えるうえで重要である。

第18表　六所脇地区出土墨書土器（須恵器）一覧表

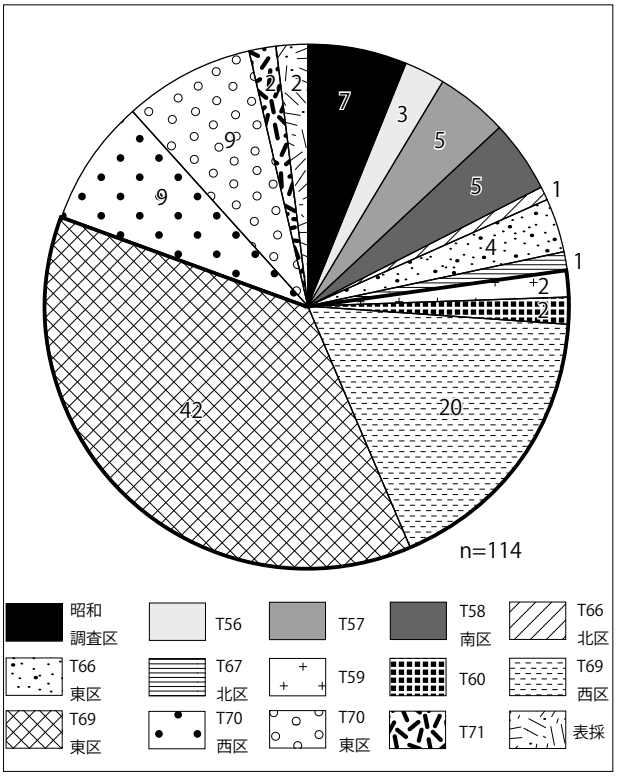
挿図番号	地区	調査区	遺構名	層位	器種	文字	箇所	型式
10-9-3	六所脇地区	T56		褐灰色土	無高台坏か皿	兵	底部外面	第３型式以降
10-26-1	六所脇地区	T67 中央区		耕作土	蓋	不明	天井部外面	出雲３期～４期？
10-53-1	六所脇地区	T58 南区	80 号溝	灰色粘質土	無高台皿	厨	内面	第５型式
10-53-2	六所脇地区	T58 南区	80 号溝	灰色粘質土	無高台皿	厨	内面	第５型式
10-53-3	六所脇地区	T58 南区	80 号溝	灰色粘質土	無高台坏か皿	修	内面	第６型式？
10-53-14	六所脇地区	T58 南区	80 号溝	灰色粘質土	無高台皿	厨	外面	第５型式
71-7	六所脇地区	T70 東２区		暗褐色土	高台坏坏	厨	底部外面	第５型式
77-3	六所脇地区	T70 東３区	撹乱		高台坏坏	不明	底部外面	第５型式



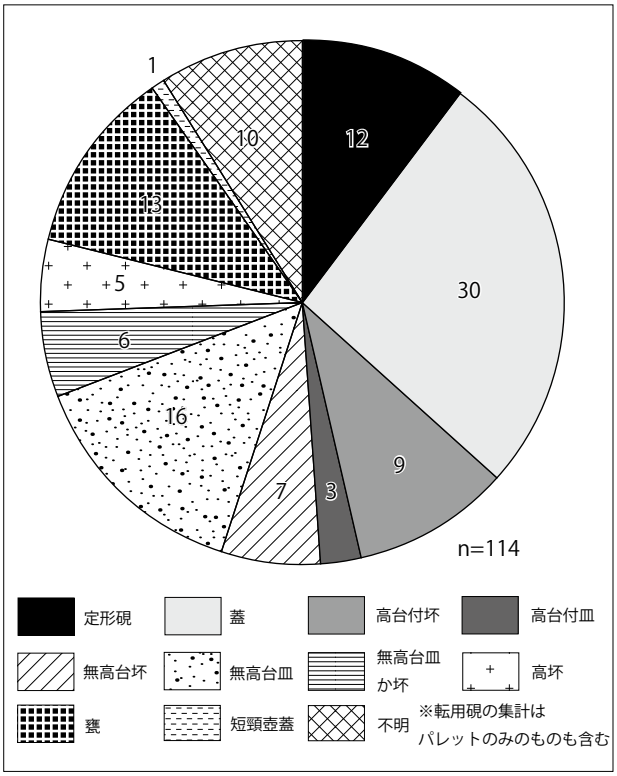
第138図　六所脇地区出土墨書土器

近年、常陸国衙政庁域や下野国庁、多賀城政庁の陶硯の出土位置の分析から東西の脇殿では、空間利用の違いや格式の差があったことが指摘されている（関根2021）。これらの事例では、西脇殿周辺で陶硯が多数出土するのに対し、東脇殿周辺では少ないとの見解から西脇殿で文書整理等を行い、東脇殿は口頭決裁の場であった可能性が指摘されている。出雲国府跡では政庁西側の状況が不明なものの東脇殿周辺で多数の陶硯類が出土していることから、これらとは違った傾向が読み取れる。この違いが何に起因するのかは、検討が必要である。

また、今回の調査では、朱墨硯が８点出土した。いずれも転用硯で、定形硯では朱は用いていない。また、朱は蛍光Ｘ線分析の結果からいずれもベンガラであるとこが明らかになっている。朱墨硯のうち、確実に研磨が行われているのは須恵器蓋２点、須恵器甕２点、高坏１点の５点で、残りの３点はパレットとして用いられたようで、朱墨が付着するのみである。研磨が行われている資料のうち１点は、蓋は内面を黒墨、つまみ内面を朱墨で使用しており、使い分けがみられる。平城宮では、やや器高の高い蓋の内面で、坏ではやや小型のものの底部内面で朱墨を用いていることが指摘されており、これは朱墨が少量の利用で、貴重品であるためこぼれにくさを重視するためとされる（神野2019）。出雲国府出土資料では、蓋のつまみ内面を用いており、少量を擦るためとしては有効であったのであろう。一方で甕では黒墨も朱墨も内面を使用している点で器種によって、使用のあり方に差異がみられる。出雲国内の類例では、神門郡家と考えられる古志本郷遺跡で三足円形硯がある。古志本郷遺跡出土の三足円形硯では、底部外面を朱墨硯として用いており、そのあり方は特徴的である。



第139図　六所脇地区調査区別出土硯割合



第140図　六所脇地区器種別出土硯割合

第 19 表　T69・T70・T71 硯一覧表 1

番号	挿図番号	器種	調査区	遺構	土層	型式	硯面	備考
1		不明	T59		造成土		内	
2		甕	T59		西壁サブトレ		内	
3		蓋	T60		造成土	2	内	
4		無高台皿	T60		造成土		内	内に墨痕
5	24-1	高台付皿	T69 西 1 区	35 号建物		5	内・外	墨痕
6	62-6	蓋	T69 西 1 区		暗褐色土	2	内・外	つまみ内朱
7	62-5	蓋	T69 西 1 区		暗褐色土	4-5		内に朱付着
8	43-4	風字硯	T69 西 1 区	401				
9	63-3	円面硯	T69 西 1 区		暗褐色土			
10	24-8	高坏	T69 西 1 区	35 号建物抜き取り			内	内に朱墨痕
11		無高台坏	T69 西 1 区	Pit			内	
12		無高台坏	T69 西 1 区		暗褐色土		内	
13		無高台皿	T69 西 1 区		暗褐色土		内	
14		高台付坏	T69 西 1 区		暗褐色土	4-5	外	
15		高坏？	T69 西 1 区		暗褐色土		内	
16		無高台皿	T69 西 1 区		黒褐色土		内	
17		無高台皿	T69 西 1 区		黒褐色土		内	
18		高台付坏	T69 西 1 区		黒褐色土		内・外	外に墨痕
19		蓋	T69 西 1 区		検出面		内	
20		高台付坏？	T69 西 1 区		表土		内	
21		甕	T69 西 1 区		表土		内	
22		無高台皿	T69 西 2 区	Pit(341)			内	
23		蓋	T69 西 2 区		暗褐色土	4-5	内	
24	62-1	蓋	T69 東 1 区		暗褐色土	2	内	
25	31-11	円形硯	T69 東 1 区	96 号溝上層	黒褐色土			
26	60-1	風字硯	T69 東 1 区	490（中世）				
27		無高台坏	T69 東 1 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
28		無高台坏	T69 東 1 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
29		高台付坏	T69 東 1 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
30		無高台坏	T69 東 1 区	96 号溝上層	黒褐色土		内	
31		蓋	T69 東 1 区	撹乱 9		2	内	
32		無高台皿	T69 東 1 区		暗褐色土		内	
33		高台付坏	T69 東 1 区		暗褐色土		内	非出雲？
34	62-4	蓋	T69 東 2 区		暗褐色土	4-5	内	墨痕
35	33-21	円形硯	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土			
36	33-2	蓋	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土	4	内	
37	33-4	蓋	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
38	33-5	蓋	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
39		蓋	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土	2	内	
40	33-10	無高台皿	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
41		無高台皿	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土	5	内	内に墨痕
42		無高台皿	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
43		高台付皿	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
44		高台付坏	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
45	33-17	高坏	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土		内	
46	33-20	甕	T69 東 2 区	96 号溝下層	褐灰色土			内に朱・墨痕
47		無高台皿	T69 東 2 区	96 号溝上層	黒褐色土		内	
48		蓋	T69 東 2 区	96 号溝上層	黒褐色土		内	
49	31-10	甕	T69 東 2 区	96 号溝上層	黒褐色土		内	内に朱・墨痕
50		蓋	T69 東 2 区		暗褐色土	4-5	内	
51		蓋	T69 東 2 区		暗褐色土	1 ？	内	
52		高台付坏	T69 東 2 区		暗褐色土	2	内・外	
53		高坏	T69 東 2 区		暗褐色土	4-5	内	
54		甕	T69 東 2 区		暗褐色土		内	
55		甕	T69 東 2 区		暗褐色土		内	
56	63-1	甕	T69 東 2 区		暗褐色土		内	
57	63-2	甕	T69 東 2 区		暗褐色土		内	内に墨痕
58		不明	T69 東 2 区		暗褐色土		内	
59		無高台皿？	T69 東 2 区		検出面		内	
60		蓋	T69 東 3 区		暗褐色土		内	
61		甕	T69 東 3 区		暗褐色土		内	
62		不明	T69 東 3 区		暗褐色土		内	

第 20 表　T69・T70・T71 硯一覧表２

番号	挿図番号	器種	調査区	遺構	土層	型式	硯面	備考
63		不明	T69 東３区		暗褐色土		内	
64	76-4	円面硯	T70 西１区		第１整地層			
65	71-13	円面硯	T70 西１区		暗褐色土			
66		蓋	T70 西１区		公園造成土下	4-5	内	
67		ベタ高台坏か皿	T70 西１区		暗褐色土		内・外	
68	71-10	甕	T70 西１区		暗褐色土			内に墨
69		甕	T70 西１区		暗褐色土			内に墨痕
70		不明	T70 西１区		暗褐色土		内	
71	71-3	短頸壺蓋	T70 西２区		暗褐色土			内に朱
72		不明	T70 西１区		暗褐色土		内	
73		無高台皿か坏	T70 東１区		検出面		内	
74	71-12	円面硯	T70 東２区		検出面			
75	71-6	無高台坏か皿	T70 東２区		暗褐色土		内	
76		不明	T70 東２区		暗褐色土		内	
77		蓋	T70 東３区		暗褐色土		内	
78	77-1	蓋	T70 東３区	攪乱４		4-5		内に墨
79	77-2	蓋？	T70 東３区	撹乱４			内	内に墨
80		蓋	T70 東３区	撹乱４				内面に墨痕
81	77-4	高坏	T70 東３区	撹乱４			内	内に墨
82	79-3	円面硯	T71　１区		暗褐色土			
83		不明	T71　２区		暗褐色土		内	
84	80-1	風字硯	T70		埋め戻し土			
85	81-2	円面硯	昭和調査区		埋め戻し土			
86		蓋	昭和調査区		埋め戻し土		内	
87		無高台坏か皿	昭和調査区		埋め戻し土		内	
88		不明	昭和調査区		埋め戻し土		内	
89		高台付坏？	表採			4-5	内	

第６節　瓦

今回の調査（調査面積628㎡）で出土した瓦類は約229㎏である。１㎡あたりの出土量に換算すると約365g である。『史跡出雲国府跡』10で報告された調査区を除いた既往の調査では１㎡あたり328g、『史跡出雲国府跡』10で報告された調査区では960g の出土量がある。今回の調査で出土した瓦類の量は少ないといえる。

軒瓦では、軒丸瓦の瓦当部23点、丸瓦部12点が出土したほか、軒平瓦の平瓦部２点が出土した。軒丸瓦は山代郷南新造院（四王寺）Ⅱ類の可能性がある外縁の小片が１点ある。それ以外で瓦当文様がわかるものは出雲国分寺式で１類１点、２類１点、３類14点である。軒平瓦は、平瓦部のみの出土であるが焼成は軟質で、おそらく出雲国分寺２類、もしくは３類の国分寺補修期にともなうものと考えられる。

平瓦は桶巻き作りのものはなく、全て一枚作りであった。分類は『史跡出雲国府跡６』に従った。凸面調整は、縄タタキ、格子タタキ、平行タタキ、ナデのほか、不明なものもある。平瓦の中には赤色顔料（ベンガラ）が付着したものが１点ある。焼成は硬質で凸面調整は格子タタキである。

丸瓦は有段式のものと無段式のものがある。平瓦と同様に分類は『史跡出雲国府跡６』に従った。このほかの丸瓦は、多くが狭端面を欠損しており、有段式か無段式か不明である。

道具瓦は45点出土した。このうち熨斗瓦が44点で焼成が硬質のものと軟質のものがある。１点を除いて、平瓦に切り込みを入れて割った切割熨斗である。このほか、焼成が軟質の隅切平瓦が１点ある。

第 21 表　出土瓦類集計表

			T59・T60・T69・T70・T71			六所脇総計（既往の調査分含む）		
種別	分類		破片数	隅数	重量（g）	破片数	隅数	重量（g）
軒丸瓦	四王寺	Ⅰ類	0	0	0	1	0	740
		Ⅱ類	1	0	20	1	0	20
	出雲国分寺	１類	1	0	50	1	0	50
		２類	1	0	70	1	0	70
		３類	14	0	1,520	37	0	4,260
		不明	6	0	230	8	0	330
		丸瓦部	12	0	3,160	31	0	5,720
小 計			35	0	5,050	80	0	11,190
軒平瓦	一枚作り	平瓦部	2	0	880	2	0	880
小 計			2	0	880	2	0	880
平瓦	桶巻き	縄タタキ・平行タタキ	0	0	0	0	0	0
	小 計		0	0	0	0	0	0
	一枚作り	縄タタキ１（硬質）	33	3	4,070	62	4	9,240
		縄タタキ１（軟質）	10	0	1,400	55	9	10,330
		縄タタキ２	0	0	0	2	0	170
	小計		43	3	5,470	119	13	19,740
	一枚作り	格子１	8	2	2,170	37	12	14,070
		格子２	68	10	11,310	136	15	27,200
		格子３	1	0	150	7	0	2,660
		格子４	9	2	1,820	10	2	2,300
		格子５	14	6	6,220	20	7	7,500
		格子６	1	0	300	2	0	460
		格子７	3	0	540	24	6	5,840
		格子８	8	3	3,920	10	3	4,090
		格子９	1	0	130	2	0	230
		格子１０	1	0	140	3	0	390
		格子１１	3	0	810	3	0	810
		格子１２	3	0	1,090	6	1	1,890
		格子１３	3	0	820	3	0	820
		格子１４	2	0	590	2	0	590
		格子１５	4	1	510	8	2	1,210
		格子１６	3	1	840	5	2	1,520
		格子１７	8	0	1,560	13	1	3,570
		格子１８	2	1	680	5	1	1,830
		格子１９	1	0	140	3	0	580
		格子２０	3	0	450	6	1	1,400
		格子２１	1	0	100	4	0	610
		格子２２	2	0	160	7	1	2,240
		格子２３	9	2	3,650	18	3	6,110
		格子不明（硬質）	74	11	14,590	134	23	28,250
		格子不明（軟質）	247	19	33,770	454	49	74,430
	小計		479	58	86,460	922	129	190,600
	一枚作り	平行	1	1	410	15	3	4,390
	一枚作り	ナデ	6	1	980	10	1	1,390
	一枚作り	不明（硬質）	57	6	6,690	327	23	49,000
		不明（軟質）	292	26	30,720	292	26	30,720
	小計		356	34	38,800	644	53	85,500
総　　計			878	95	130,730	1,687	195	296,660
丸瓦	有段式	A	21	7	1,640	86	25	7,180
		B	11	2	900	12	2	1,000
	小計		32	9	2,540	98	27	8,180
	無段式	硬質	19	12	3,850	36	20	7,640
		軟質	44	24	6,890	62	40	12,550
	小計		63	36	10,740	98	60	20,190
	不明	焼成硬質	208	20	27,160	319	24	44,460
		焼成軟質	482	17	38,440	955	34	90,060
	小計		690	37	65,600	1,274	58	134,520
総　　計			785	81	78,200	1,470	145	162,890
道具瓦	熨斗瓦	焼成硬質	8	3	2,500	8	3	2,500
		焼成軟質	36	12	7,980	36	12	7,980
		焼成不明	－	－		60	22	16,800
	塼		0	0	0	0	0	0
	シビ		0	0	0	0	0	0
	隅切平瓦		1	0	90	4	3	2,260
	隅落丸瓦		0	0	0	0	0	0
	鬼瓦		0	0	0	1	0	200
	不明		0	0	0	1	0	200
小　　計			45	15	10,570	110	40	29,940
不明			501	0	11,360	799	0	21,360

第 22 表　T69・T70・T71 の丸瓦・平瓦の比率

地区名	平瓦			丸瓦		
	破片数（点）	隅数（点）	重量（ｇ）	破片数（点）	隅数（点）	重量（ｇ）
六所脇	878	95	130,730	785	81	78,880

個体数（隅数÷４）

地区名	個体数（枚）		比率	
	丸	平	丸	平
六所脇	20.25	23.75	1	1.2

第 23 表　六所脇地区の瓦変遷

時期	国分寺軒瓦	瓦の組み合わせ	破片数	隅数	重量（ｇ）
国分寺創建期	軒丸瓦１類	平瓦　格子タタキ（１・３・５・６・７・１０・不明硬質） 縄タタキ１（硬質）縄タタキ２　平行タタキ	135	23	28,590
	軒平瓦１類	丸瓦　有段式（A・硬質）	21	7	1,640
国分寺補修期	軒丸瓦２～３類	平瓦　格子タタキ（２・４・８・９・１１～２３・不明軟質） 縄タタキ１（軟質）・ナデ	393	40	64,730
	軒平瓦２～３類	丸瓦　有段式（B・軟質）無段式	74	38	11,640

第 24 表　六所脇地区の瓦変遷（既往の調査分含む）

時期	国分寺軒瓦	瓦の組み合わせ	破片数	隅数	重量（ｇ）	１枚あたりの重量	（重量の根拠）	枚数	比率	隅数計測法
国分寺創建期	軒平瓦１型式	平瓦　格子タタキ（１・３・５・６・７・１０・不明硬質）縄タタキ1（硬質）縄タタキ２　平行タタキ	441	78	101,560	4,000	３－７４－１	25.4	7.7	2.4
	軒丸瓦１型式	丸瓦　有段式（A・硬質）	107	32	8,820	2,700	１－７３－１２・１３の平均値	3.3	1.0	1.0
国分寺補修期	軒平瓦２～３型式	平瓦　格子タタキ（２・４・８・１１～２３・不明軟質）縄タタキ（軟質）・ナデ	1,153	131	207,880	3,200	中竹矢９４－３８３・３８４の平均値	65	4.7	1.3
	軒丸瓦２～３型式	丸瓦　有段式（B・軟質）　無段式	184	100	32,830	2,400	１－３８－１５・６－５６－３の平均値	13.7	1.0	1.0

※１枚あたりの重量は、出雲国府跡出土瓦から設定したが、補修期平瓦のみ中竹矢瓦窯跡資料（島根県教育委員会 1992『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ（中竹矢遺跡）』を使用した。数字の先頭が報告書シリーズ番号、枝番号が挿図番号である。
※既往の調査分の瓦（破片数・隅数・重量）は『史跡出雲国府跡』６（島根県教育委員会 2009）、『史跡出雲国府跡』10（島根県教育委員会 2019）の集計表を用いた。

個体数（隅数÷４）

地区名	個体数（枚）		比率	
	丸	平	丸	平
国分寺創建期	6.25	19.5	1	3.1
国分寺補修期	15.5	29.25	1	1.9

次に屋根景観の復元について、検討する。今回の調査で出土した丸瓦と平瓦の比率は隅数計測法に基づくと1：1.2となり、国分寺創建期で1：3.3、国分寺補修期で1：1.1となる。重量計測法では、国分寺創建期で1：11.9、国分寺補修期で1：4.1となる。既往の調査分を含めると隅数計測法では、国分寺創建期で1：2.4、国分寺補修期で1：1.3、重量計測法では、国分寺創建期で1：7.7、国分寺補修期で1：4.7となる。この状況は、瓦葺建物に使用された瓦が廃棄された状況を示していると考えられる（花谷2003）。

特に軒瓦では、軒丸瓦は既往の調査を含め国分寺１類１点、２類２点、３類37点が出土しており、他地区に比べて多い。対して軒平瓦は既往の調査分を含めても２点のみで、これは他地区も同様の状況である。このことから出雲国府跡では、軒平瓦は極めて限定的に使用された可能性が高い。

このほか、道具瓦では、隅切平瓦が創建期、補修期ともに出土している。この瓦の存在は総瓦葺き建物が六所脇地区に所在していたことを示すものである。また、焼きが硬質の赤色顔料が付着した平瓦（創建期）が出土していることから、建物は特定できないものの出雲国分寺創建期の段階に六所脇地区に総瓦葺きで丹塗りの建物が存在していた可能性がある。しかし、この段階での主要な建物は掘立柱建物であることは今後の検討課題である。また、宮の後地区ではあるが、桶巻作り平瓦や鴟尾が出土している。これらはいずれも出雲国分寺創建期以前の瓦であることが注目される。一枚作りの採用は多くが国分寺創建期であること（大橋2004）や山陰型鴟尾が７世紀第４四半期～８世紀第２四半期に位置づけられること（久保2015）などから、国分寺創建期以前の８世紀前半に宮の後地区あるいはその周辺に瓦葺建物が存在した可能性がある。

第７節　鉄製品

史跡出雲国府跡では、18点の小札（小札の可能性があるもの、同一個体の可能性があるものも含む）が出土している。出土地点は昭和調査区I区（1970年調査）、T56（2015年調査）、T66（2016年調査）、T69（2018年調査）、T70（2019年調査）で、いずれも政庁域である六所脇地区にある。（第25表）

このうちT56で出土している小札の５点は、第１整地層（平安時代以降の整地層）から出土しているほか、T69東１・２区から出土している小札も検出面（整地層）から出土している。

その他の小札については、整地層を覆う近現代の耕作土や造成土、撹乱などから出土しているほか、10世紀初頭までの遺物を包含する96号溝下層や71号土坑、中近世のものと考えられる黒色ピット内から出土している。

破片資料が多く、小札の全長が分かるものや頭部形状が分かるものは、ほとんどない。このうち第141図３・５・６・７・10・14・15は複数枚の小札が重なった状態で出土しており、10・14では有機質の痕跡のようなものがＸ線写真で確認できる。

小札に当たっては、津野仁氏の分類（津野2011）を参考にした。破片資料が多く、全体像が分からないものもあるが、小札の最大幅と第３縅孔の有無などを重視して、以下のように大きく2つに分類した。

【出雲国府Ａ類】：１枚あたりの最大幅1.8～2.1cmで第３縅孔や下搦孔が確認できるもの。そのうち、第３縅孔が確認できるものをA-1、確認できないものをA-2とした。

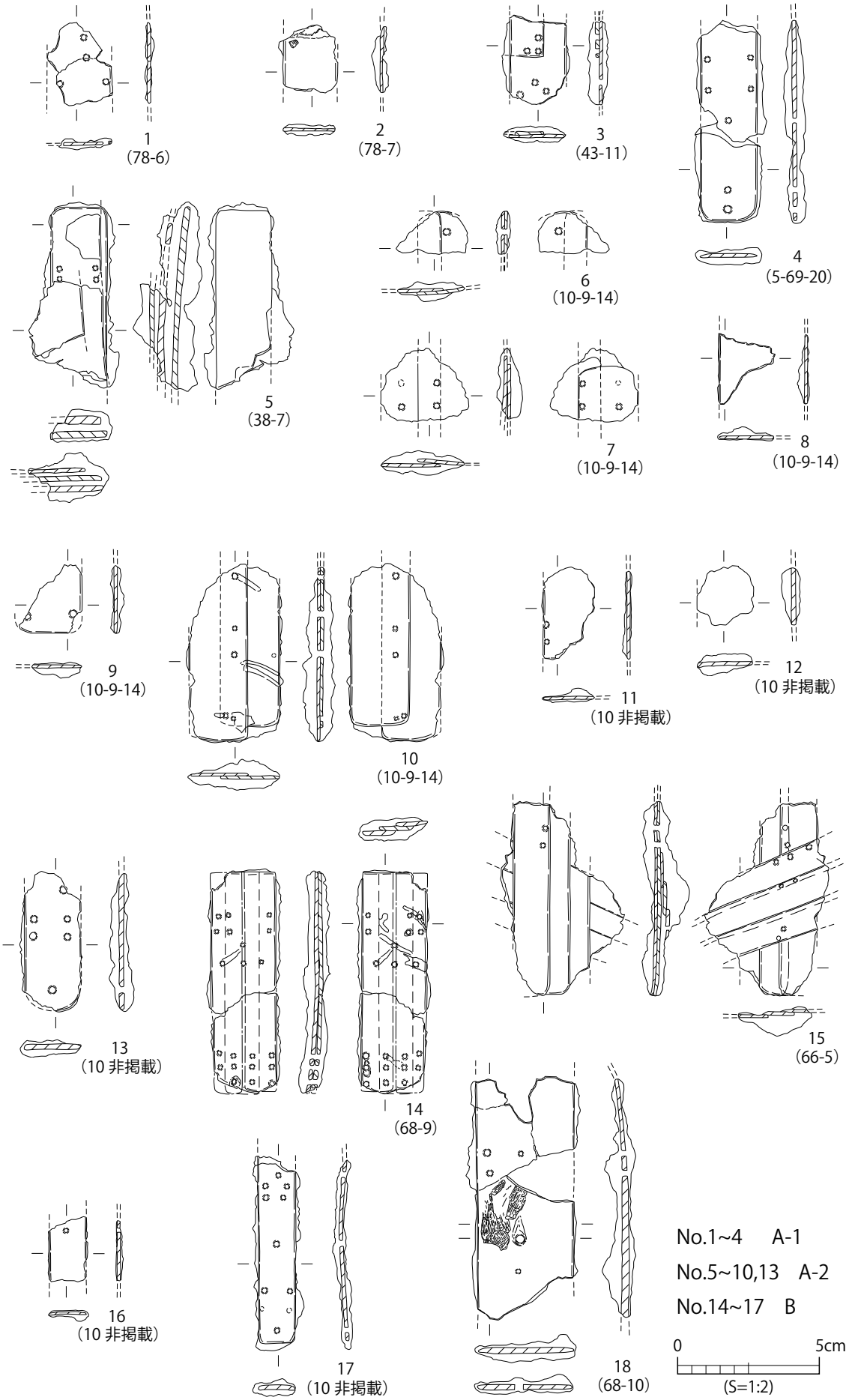
【出雲国府Ｂ類】：１枚あたりの最大幅1.2～1.3cmのものでいずれも第３縅孔が確認できるもの。

このうち出雲国府A類は津野氏の二型小札、出雲国府B類は津野氏の三型小札に対応する。小札は、８世紀中葉まで幅が狭くなり、その後再度幅広になる傾向が指摘されているほか、第３綴孔の消滅、下搦孔の減少などが変化の方向性として指摘されている（津野2011）。このような傾向のもと出雲国府跡出土小札を見ると大きく２時期（型式）の小札が出土していることが分かる。また、整地層から出土している小札の中で時期差がみられるものもある。時期は７世紀後葉～８世紀中葉と考えられる。

長岡宮跡第472次調査において、第二次内裏「東宮」正殿地区の東第二脇殿の基壇の化粧石として使用されていた凝灰岩縁石の抜き取りから６世紀後半～８世紀後葉までの小札が出土している。東第二脇殿の解体にあたり、祓いや地鎮等の何らかの祭祀のために小札が埋納されたと指摘されている（塚本・山田・初村2012）。平城宮若犬養門付近からも型式の違う小札を交互に束ねて出土している（諫早2013）。このほか秋田城SI1547竪穴状工房跡（秋田市教委会1999・伊藤2000）や大宰府政庁Ⅲ期整地層最下層（小嶋2010）、鴻臚館第23次調査包含層（福岡市教委会2007）などからも複数型式の小札が出土している。これらの複数型式の小札祭祀は重要拠点地域のみで確認できる重要な作法であった可能性が指摘されている（塚本2016）。出雲国府跡でも、整地層からまとまって少なくとも時期の異なる２型式の小札が出土している状況から、地鎮など、何らかの祭祀にかかわって、これらの小札を埋納、もしくは散布した祭祀が行われた可能性がある。

第25表　出雲国府跡小札の分類

No	挿図番号	地区	調査区	遺構・層位	状態	全長(cm)	最大幅(cm)	頭部形状	縅孔列	第３縅孔	下搦孔数	津野分類（津野 2011）	出雲国府	備考
1	78-6	六所脇	T70 東３区	撹乱４	小片		2.1		１列	○		二型小札	A-1	綴孔
2	78-7	六所脇	T70 東３区	撹乱４	小片		1.9					二型小札	A-1	孔不明
3	43-11	六所脇	T69 西１区	71 号土坑	２枚重ね		2			○		二型小札	A-1	２枚重ね・上の小札は下搦孔３列３孔
4	5-69-20	六所脇	I 区	IQ09 黒色ピット			2		１列	○	１列１孔	二型小札	A-1	
5	38-7	六所脇	T69 東２区	96 号溝下層	３枚重ね		2	非円頭						孔不明
6	10-9-14	六所脇	T56（東）	19 層			1.8 以上	円頭	１列			二型小札	A-2	２枚重ね
7	10-9-14	六所脇	T56（東）	19 層			2.1					二型小札	A-2	綴孔のみ・２枚重ね
8	10-9-14	六所脇	T56（東）	19 層	小片		1.9 以上					二型小札	A-2	綴孔？
9	10-9-14	六所脇	T56（東）	19 層			(2.3)				２列２孔	二型小札	A-2	
10	10-9-14	六所脇	T56（東）	19 層			2.1				２列２孔？	二型小札	A-2	綴孔・２枚重ね
11	10 非掲載	六所脇	T56（東）	にぶい黄褐色土（９層）	小片		1.8 以上							綴孔のみ
12	10 非掲載	六所脇	T56（東）	にぶい黄褐色土（９層）	小片		２以上							孔不明
13	10 非掲載	六所脇	T56（東）	にぶい黄褐色土（９層）			2				１列１孔	二型小札	A-2	
14	68-9	六所脇	T69 東１区	検出面	３枚重ね	7.7	1.2	非円頭	１列	○	２列２孔	三型小札	B	有機質残存
15	66-5	六所脇	T69 西１区	暗褐色土	３枚重ね		1.3					三型小札	B	３枚重ね２つ・綴孔
16	10 非掲載	六所脇	T56（東）	にぶい黄褐色土（９層）	小片		1.3		１列	○		三型小札	B	
17	10 非掲載	六所脇	T66	耕作土			1.3		１列	○	１列１孔	三型小札	B	
18	68-10	六所脇	T69 東２区	検出面			3.4		２列	○				11 孔



第141図　出雲国府跡出土小札

第８節　出雲国府の中での政庁域

1968（昭和43）年に開始された発掘調査で、政庁域や国司館、後方官衙群、工房地区など、さまざまな施設が検出されている。このうちこれまで不明な点の多かった政庁域の実態が今回の調査で徐々に明らかになってきた。ここでは、出雲国府政庁域について、遺構の状況、遺物相から出雲国府跡の中で位置づけてみたい。

六所脇地区では、Ⅱ-２期以降、正殿と考えられるSB020、東脇殿と考えられる35・36号建物、前殿と考えられる37号建物、後殿の可能性がある27・28号建物、前庭を飾る１号石敷遺構が検出されている。地区西側の状況は不明なものの、先に推定復元図を示したとおり、政庁推定中軸線で折り返して復元した場合、左右対称のコの字形建物配置になり、非常に計画的な整備がされていたと想定される。

宮の後地区では掘立柱建物群と区画溝が検出されている。掘立柱建物の帰属時期は不明な点が多いものの、大型掘立柱建物など、建物は整然と配置されている。

大舎原地区ではⅢ期に国司館と考えられる１号建物や４号建物などが検出されている。このほか北側では八脚門と考えられる９号建物や区画溝や柵列が正方位で設けられている。これらの建物はいずれも政庁推定中軸線を基準に設計されている（島根県教委会2013）。

日岸田地区は時期によって性格を変化させており、Ⅱ期には玉や漆生産にかかわる工房やそれにともなう倉庫群と考えられる総柱建物が検出されている。Ⅲ期になると玉や漆生産にかかわる遺物はみられず、金属加工を行っていたとみられる遺構や掘立柱建物がみられる。Ⅳ期には礎石建物が検出されており、工房等にかかわるものはみられなくなる。このように時期によって性格を変化させており、Ⅱ・Ⅲ期では工房としての位置がある一方でⅣ期になると礎石建物や大量の緑釉陶器、灰釉陶器の出土から有力者層の居住空間、もしくは緑釉陶器等の集積場所に位置づけられている。

樋ノ口地区は様相が不明な点が多いが、大型の竪穴建物や掘立柱建物が存在していることなどから金属生産工房の可能性がある。

遺物の面では、硯からみると六所脇地区では113点、宮の後地区では158点、大舎原地区で174点、日岸田地区で22点、樋ノ口地区で３点が出土している。工房が想定される日岸田地区と樋ノ口地区では出土量が少ないものの、六所脇地区や宮の後地区、大舎原地区など文書行政の場であることが想定される場所では出土量が多い。100㎡あたりの出土量でみると六所脇地区は約９点、宮の後地区は約3.7点、大舎原地区は約5.5点、日岸田地区は約2.3点、樋ノ口地区は約0.5点である。硯の面でみてもその出土量は六所脇地区が他地区を圧倒しており、六所脇地区で文書行政が活発に行われていたことを示す。

次に緑釉陶器、灰釉陶器の面からみていきたい。これまで緑釉陶器は100㎡あたりの出土量は日岸田地区が突出していることが知られていた（島根県教委会2019）。しかし、今回の調査で六所脇地区の100㎡あたりの出土量が約８点となり、出雲国府全体でみた場合にも突出する値になることが判明した。国家的儀式や饗宴に利用されていた（高橋2001a）と考えられることから政庁域での利用のあり方の一端を表すものと理解できる。

以上、各地区の遺物や遺構について概観した。出雲国府全体の遺構配置をみた場合、六所脇地区のSB020の推定中軸線を基準に宮の後地区や大舎原地区で建物が設定されていることが分かる。

第142図　出雲国府跡遺構配置図（Ⅲ - 1 期）

また、六所脇地区では計画的な建物配置により建物が構成されていることや主要な建物があまり場所を変えずに礎石建物へと建て替えが行われ、正殿前の空間が石敷に変化する点は重要である。遺物の面からみた場合、六所脇地区では文書行政を示す硯が多量に出土していることや饗宴の実態を示す緑釉陶器の出土など、他の地区を圧倒している。

これまで遺構、遺物から出雲国府を概観した。政庁推定中軸線を用いた検討であるため、今度の調査成果次第では修正の必要もあるだろう。しかし、現状の調査成果や検討から導き出される六所脇地区の様相は計画的な建物配置や他の地区の建物が政庁推定中軸線を基準としている点、遺物相からみても、出雲国府の中枢域であるとまとめることができる。

註

第 134 図の出典は、以下のとおりである。

伊賀国庁（三重県埋蔵文化財センター 2003）、美濃国庁（垂井町教委会 2005）、伯耆国庁（倉吉市教委会 2012）、日向国庁（西都市教委会 2020）、古志本郷遺跡（島根県教委会 2003）、郡垣遺跡（雲南市教委会 2014）

引用・参考文献

青木　敬 2012「宮都と国府の成立」『古代文化』63-4 古代学協会

秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所 1999『秋田城　平成十年度秋田城跡調査概報』

阿部義平 1986「国庁の類型について」『国立歴史民俗博物館研究報告』10 国立歴史民俗博物館

諫早直人 2013「平城宮若犬養門付近出土の小札甲」『奈良文化財研究所紀要 2013』奈良文化財研究所

伊藤武士 2000「秋田城跡の発掘調査成果」『日本考古学』10 日本考古学協会

岩永省三 2018「古代都城における帝国標章の浮沈」『大宰府の研究』高志書院

上村和直 1999「都城における埋納遺構 - 鎮祭遺構を中心にして -」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論集刊行会

雲南市教育委員会 2014『郡垣遺跡』Ⅲ

海野　聡 2009「古代地方官衙政庁域の空間構成」『日本建築学会計画系論文集』74-645 日本建築学会

大橋泰夫 2004「Ⅲ　瓦類」『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編 奈良文化財研究所

大橋泰夫 2010「国府成立と出雲国の形成」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

大橋泰夫 2018『古代国府の成立と国郡制』吉川弘文館

久保穰二朗 2015「山陰の鴟尾」『調査研究紀要』６ 鳥取県埋蔵文化財センター

倉吉市教育委員会 2012『史跡伯耆国府跡国庁跡発掘調査報告書』（第 12 次～第 14 次）

小嶋　篤 2010「大宰府政庁跡出土小札の検討」『九州歴史資料館研究論集』35 九州歴史資料館

西都市教育委員会 2020『日向国府跡』

佐藤　信 1994「宮都・国府・郡家」『岩波講座日本通史』４古代３ 岩波書店

関根美季 2021「出土位置からみた国府出土陶硯の特質」『國學院大學博物館研究報告』37 國學院大學博物館

島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡』Ⅴ

島根県教育委員会 2008『史跡出雲国府跡』５

島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡』９ 総括編

島根県教育委員会 2019『史跡出雲国府跡』10

神野　恵 2019「平城宮朱用硯の実態」『奈良文化財研究所紀要 2019』奈良文化財研究所

高野芳宏 2008「多賀城政庁の建物塗装―赤色顔料付着の軒平瓦から―」『東北歴史博物館研究紀要』東北歴史博物館

高橋照彦 2001a「三彩・緑釉陶器と地方官衙」『考古学ジャーナル』475 ニュー・サイエンス社

高橋照彦 2001b「地方官衙出土の平安時代の緑釉陶器」『考古学ジャーナル』475 ニュー・サイエンス社

垂井町教育委員会 2005『美濃国府跡発掘調査報告書』Ⅲ

塚本敏夫 2014「古代・中世における武具埋納祭祀の具体相」『日本考古学協会第 80 回総会　研究発表要旨』日本考古学協会

塚本敏夫 2016「古代・中世における武具埋納祭祀の受容と展開」『日本考古学協会第 82 回総会　研究発表要旨』日本考古学協会

塚本敏夫・山田卓司・初村武寛 2012「長岡京出土小札の再検討」『向日市埋蔵文化財センター―年報　都城 23―』財団法人向日市埋蔵文化財センター

津野　仁 2011『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館

津曲大祐 2021「日向国庁の前殿に関する諸問題」『古文化談叢』87 九州古文化研究会

西尾克己・守岡正司 1996「出雲国庁跡出土陶磁器について（１）―緑釉陶器―」『八雲立つ風土記の丘』141 島根県立八雲立つ風土記の丘

西尾克己・守岡正司 1997「出雲国庁跡出土陶磁器について（２）」『八雲立つ風土記の丘』145
　島根県立八雲立つ風土記の丘
花谷　浩 2003「出土瓦をめぐる諸問題」『大和吉備池廃寺』奈良文化財研究所
平井美典 1987「律令官衙政庁部の構造」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』１滋賀県埋蔵文化財センター
廣江耕史 1996「山陰の煮炊具―出雲・石見―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東４ 煮炊具― 』
　古代の土器研究会
福岡市教育委員会 2007『鴻臚館跡』平成 16・17 年度発掘調査報告書
古瀬奈津子 1991「唐礼継受に関する覚書―地方における儀礼・儀式―」『国立歴史民俗博物館研究報告』35
　国立歴史民俗博物館
間野大丞 2010「瓦類からみた出雲国府跡の再検討―国司館の屋根景観復元―」『出雲国の形成と国府成立の研究』
　島根県古代文化センター
三重県埋蔵文化財センター 2003『研究紀要』13
山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
山中敏史 2004「Ⅵ 国府」『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編 奈良文化財研究所

第６章　結語

第１節　出雲国府跡政庁域について

近年の発掘調査で出雲国府政庁域の建物配置や変遷などの様相が明らかになりつつある。前章で遺構・遺物については、その位置付けなどについて検討した。ここでは、今回の発掘調査の主な成果をまとめ、本書の結語としたい。

今回の発掘調査では、主に東脇殿と考えられる 35・36 号建物や前殿と考えられる 37 号建物、前庭を飾る１号石敷遺構などを検出した。これらの遺構は政庁域を構成する主要な建物や施設である。また、このほかに正殿と考えられる SB020 があり、政庁域の主要な建物が検出されたことになる。Ⅱ - ２期（８世紀第２四半期）に整然としたコの字形建物配置をとることは、出雲国府跡政庁域の大きな画期である。35・36 号建物は SB020 と同調する２度の建て替えが行われ、礎石化していることが判明した。また、SB020 の南には 37 号建物が存在し、廃絶後には石敷遺構へと変化していることが判明した。前庭空間の利用の変化は、儀礼等のあり方の変化について考える上で重要である。これらの主要な建物等は建て替えによる構造の変化はあるが、Ⅱ - ２期（８世紀第２四半期）～Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）までコの字形建物配置が踏襲される。また、石敷遺構内にある 97・98 号溝から石敷遺構が 11 世紀後半までには廃絶していることが明らかとなり、政庁域の機能停止時期について考える上でも重要な手がかりとなった。

西側の状況は依然不明なままであるが、これらの成果をもとに政庁推定中軸線で反転復元が可能となった。また、遺物の面で、硯や緑釉陶器の出土量は出雲国府跡の中でも抜きんでている。また、瓦のあり方をみても、総瓦葺建物の存在や建物の柱を丹塗りとしていることなども重要である。これらのことから国府の中枢である政庁（国庁）とみることができる。このほか、72 ～ 77 号土坑にみられる地鎮や小札を用いた祭祀など、他の地区ではみられない様相もあり、その特殊性は注目される。

主要な建物配置が判明し、政庁推定中軸線で復元が可能となった反面、前庭空間の狭小さが強調されることとなった。規模の面では東西 63m（210 尺）、南北 70.8m（236 尺）の空間を復元することができるが、前庭空間は東西 25.8m（86 尺）となり、近似する政庁では伊賀国庁がある。政庁の規模の差は国の等級をある程度反映している可能性がある（山中 2004）。そのうえで、前庭の広さではあるが、上国である出雲と下国である伊賀で前庭空間がほぼ等しいことについては今後さらなる検討が必要である。さらに出雲国内で判明している郡家である郡垣遺跡や古志本郷遺跡と比べても前庭空間が狭いことは注目すべきことである。この点は出雲国府政庁域の特徴であるものの、国府と郡家のあり方や出雲国内での国府の位置などさまざまな検討課題をはらんでいる。出雲国府が山陰道に北面する特殊な立地環境や文献史学の成果などを取り入れながら、検討をする必要があろう。

第２節　今後の課題

今回の発掘調査では、これまで不明な点の多かった六所脇地区（政庁域）での建物配置や変遷が明

らかとなった点は大きな成果である。また、政庁推定中軸線をもとに政庁域の規模等について復元を行った。今回は T57 で検出されている P1 ～ P3 を東辺の掘立柱塀、T58 南区で検出されている 80 号溝を北辺の区画溝と仮定して、政庁域の復元を行った。しかし、80 号溝が近接する T57 まで延びないことや T57 で検出された P1 ～ P3 が掘立柱建物となる可能性も残しているのが現状である。いまだ政庁域を構成する上で重要である確実な遮蔽施設が不明であることや政庁西側の状況が不明な点で課題は多い。確実な遮蔽施設の検出や西脇殿を中心とした政庁推定中軸線よりも西側の状況の把握が必要と考えられ、今後の調査研究の進展に期待したい。

また、今回の調査で主要な建物がでそろい、遺構変遷もある程度整理をすることができた。しかし、多くの遺構で時期を特定することのできる遺物が出土しなかったことから、遺構の重複関係や主軸、他の遺構とのかかわりなどから、先後関係を推定し、『総括報告書』の時期区分に当てはめて検討を行った。すでに指摘されているが、『総括報告書』は大舎原地区と日岸田地区の遺構変遷を基準としているため、今回示した遺構変遷と実年代が必ずしも一致していない可能性がある（島根県教委会 2019）。遮蔽施設の確認等の調査が行われたのちに、六所脇地区をもとにした出雲国府全体の時期区分を実年代も含めて再検討する必要があろう。

引用・参考文献

島根県教育委員会 2019『史跡出雲国府跡』10

山中敏史 2004「Ⅵ 国府」『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編 奈良文化財研究所

第 26 表　出雲国府跡出土土器・陶磁器観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量(　)内復元値			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	型式時期	備考
								口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)						
16-1	35		T59		造成土	かわらけ？	皿	8.0	2.0	2.6	緻密	良好	外面：灰白色5Y8/1 内面：灰白色2.5Y8/2	外面：型づくり？、ミガキ？ 内面：回転ナデ		
17-1	35		T60		埋戻土 調査区内表採	陶器	輪花皿	(11.6)	3.7	3.4	褐色	良好	外面：藁灰釉 内面：鉄釉	外面：ロクロ形成、ケズリ 内面：指頭圧痕 口縁部：鉄釉重ね掛け、波口縁	九Ⅰ	肥前系(帆柱窯指標)
24-1	22 35		T69 西1区	35号 -1B 抜取	検出面	須恵器	高台付皿	18.4	3.45	15.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：オリーブ灰色2.5GY6/1	外面：回転ナデ、回転糸切り(底部) 内面：回転ナデ	第４型式	内外面研磨痕　転用硯痕付着
24-2	35		T70 東1区	35号 -5-B 抜取	埋土	土師器	甕		(3.8)		やや粗(1mm大の石英含む)	良好	外・内面：橙色7.5YR7/6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ケズリ		
24-3	35		T69 西2区	35号 -8A (掘方)	埋土	土師器	甕				蜜(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色7.5YR8/4	外・内面：ヨコナデ	草田5～6	
24-4	35		T69 西2区	35号 -8A (掘方)	埋土	土師器	高坏		(4.7)		密(1mm大の砂粒を含む)	良好	外・内面：浅黄橙色7.5YR8/4	外面：ナデ 内面：ナデ、ハケメ	古墳中	
24-5	35		T69 西2区	35号 -8A (掘方)	埋土	土師器	高坏				密(2mm大の小石を含む)	良好	外・内面：浅黄橙色10YR8/3	外・内面：ナデ	古墳中	
24-6	35		T69 西2区	35号 -8A 抜取	埋土	須恵器	蓋？				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面：黄灰色2.5Y6/1 内面：灰黄色2.5Y6/2	外・内面：回転ナデ		
24-7	35		T69 西2区	35号 -8A 抜取	埋土	土師器	甕				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：浅黄橙色10YR8/3	外・内面：ヨコナデ	草田5～6	
24-8	35	19-1	T69 西1区	35号 -10B 抜取	検出面	須恵器	高坏	(17.0)			密(1mm程度の砂粒を含む)	良好	外面：灰色N4/ 内面：灰色N5/	外面：回転ナデ、ケズリ 内面：回転ナデ	第4～5型式	内面研磨痕 転用硯 朱墨墨付着
29-1	35		T70 西1区	37号 -4抜取	埋土	須恵器	蓋	(12.0)			密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面：灰色7.5YR5/1 内面：灰色N5/	外・内面：ナデ	出雲6bc	
31-1	22		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	坏身		(3.7)	7.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：灰白色5Y8/1	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	第5型式	
31-2	35		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	無高台坏		(3.2)	6.0	密(1mm程度の砂粒を含む)	良好	外・内面：灰白色10YR7/1	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	第4～5型式	
31-3	35		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	無高台坏			7.4	密(黒色砂粒をわずかに含む)	やや良好	外・内面：褐灰色7.5YR6/1	外面：回転ナデ、回転転糸切り 内面：回転ナデ、「×」ヘラ描き	第4型式	
31-4	35		T69 東2区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	鉄鉢形？	11.8	(3.8)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：灰色N6/1	外・内面：回転ナデ	第4型式	
31-5	22		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	高台付皿	15.0	4.0	7.1	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面：灰色N5/ 内面：灰色N6/1	外面：回転ナデ回転糸切りのちナデ 内面：回転ナデ	第6型式	
31-6	35		T69 東2区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	高台付皿			(11.6)	密(砂粒を多く含む)	良好	外面：灰色N6/1 内面：灰色7.5Y6/1	外面：回転ナデ、回転糸切りのちナデ 内面：回転ナデ		
31-7	35		T69 東2区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	高坏 (脚部)		(2.75)	12.2	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：灰白色2.5Y7/1	外・内面：回転ナデ		
31-8	35		T69 東2区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	壺				密(2mm以下の石英、長石等を含む)	良好	外面：灰色N6/ 内面：灰白色2.5Y7/1	外面：回転ナデ、沈線 内面：回転ナデ		
31-9	35		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	甕？		(5.0)		密(1mm大の石英、長石等を含む)	良好	外・内面：灰色N6/1	外面：回転ナデ、頸部に波状文 内面：回転ナデ		
31-10	35		T69 東2区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	甕				密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	外面：灰色N4/ 内面：灰色N5/	外面：平行タタキ 内面：同心円あて具		研磨、転用硯 墨痕・朱墨付着
31-11	22		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	須恵器	三足円面硯		(2.2)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：黄灰色2.5Y6/1	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ		内面研磨
31-12	35		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	土師器	無高台坏	12.1	4.8	5.7	やや粗	良好	外・内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	第8型式	
31-13	35		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	土師器	無高台坏		(3.7)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、赤彩？	第6型式	
31-14	36		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	土師器	無高台坏		(3.6)	11.0	やや密(1mm大の石英を含む)	良好	外・内面：淡黄色2.5Y8/4	外面：摩滅により不明 内面：摩滅により不明	第6型式	
31-15	36		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	土師器	高台付坏		(3.2)	9.1	やや密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：浅黄橙色10YR8/4	外・内面：回転ナデ	第6型式	
31-16	36		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	土師器	足高高台付坏		(3.7)		やや粗(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：浅黄橙色7.5YR8/4	外・内面：回転ナデ	第8型式	
31-17	36		T69 東2区	96号 溝	黒褐色土	土師器	足高高台付坏		(2.8)	8.1	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：浅黄橙色7.5YR8/6	外面：回転ナデ 内面：摩滅により不明	第8型式	
31-18	36		T69 東2区	96号 溝	黒褐色土	土師器	足高高台付坏		(3.0)	8.7	やや粗(1mm大の長石を含む)	良好	外・内面：橙色7.5YR7/6	外・内面：回転ナデ	第8型式	
31-19	36		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	土師器	甕	27.0	(4.3)		粗(1～2mm程度の長石を含む	良好	外面：にぶい橙色5YR7/4 内面：橙色5YR7/6	外面：ナデ、タテハケ 内面：ナデ、ケズリ		
31-20	36		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	土師器	甕		(5.9)		やや密(4cm大の小石を含む)	良好	外・内面：7.5YR6/4	外面：ナデ 内面：ナデ、(肩部)ケズリ		
31-21	36		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	製塩土器	製塩土器	(10.2)			やや密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面：橙色5YR7/6	外・内面：回転ナデ		
31-22	36		T69 東2区	96号 溝	黒褐色土	緑釉陶器	皿か碗	(14.0)			密、硬質	良好	外・内面：淡緑	外面：回転ナデ、 施釉、口縁の一部押圧 内面：回転ナデ、施釉		硬質、うすい
31-23	36		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	緑釉陶器	碗		(1.6)	8.0	緻密(黒色砂粒を含む)	良好	外・内面：(緑釉)オリーブ5Y5/6	外面：回転ナデ、施釉 内面：回転ナデ、施釉		
31-24	36		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	緑釉陶器	碗		(2.6)	(7.6)	密	良好	外・内面：淡緑	外・内面：回転ナデ	9～10C初	硬質、うすい 全面施釉
31-25	36		T69 東1区	96号 溝	黒褐色土	灰釉？	碗		(2.4)	(6.4)	密	良好	外・内面：灰白色2.5Y8/2	外面：回転ナデ、(底部)ケズリ出し高台 内面：回転ナデ	11C	見込み部分に灰釉少量残る

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量(　)内復元値			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	型式時期	備考
								口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)						
31-26	36		T69東1区	96号溝	黒褐色土	灰釉陶器	碗				蜜		外・内面:灰黄色2.5Y7/2	外・内面:回転ナデ	11C	
31-27	36		T69東2区	96号溝	黒褐色土	陶磁器	山茶碗		(1.9)	5.5	密	良好	外・内面:灰黄色2.5Y7/2	外面:回転ナデ(底部)ケズリ 内面:回転ナデ	11C～(12C)	尾張産でない湖西の可能性あり
31-28	36		T69東1区	96号溝	黒褐色土	白磁	皿	12.0	(2.4)		密	良好	外・内面:白色	外面:回転ナデ、施釉 内面:回転ナデ、施釉	大宰府C期	福建
32-9	36		T69東1区	96号溝	黒褐色土	土製品	土錘	長さ:4.3	外径:1.6	内径:5.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/3	外面:ナデ、指押さえ		
33-1	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	蓋	14	2.2	14	蜜(1～2mmの砂粒を含む)	良好	外面:灰色N6/ 内面:灰白色10Y7/1	外・内面:回転ナデ	第4型式	
33-2	22		T69東2区(南壁)	96号溝	褐灰色土	須恵器	蓋	12.4	3.0	12.4	蜜(1～2mmの砂粒を含む)	良好	外面:灰色N5/ 内面:灰色10Y6/1	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、研磨痕	第3型式	内面研磨転用硯
33-3	37		T69東1区	96号溝	褐灰色土	須恵器	蓋	(14)		(14)	蜜(1～3mm)の砂粒を含む	やや不良	外面:明赤褐色5YR5/6 内面:褐灰色10YR5/1	外面:ケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ	第4型式	
33-4	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	蓋				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/	外面:回転ナデ、ケズリ 内面:回転ナデ	第2型式	内面研磨転用硯
33-5	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	蓋				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:灰色5Y6/1 内面:灰白色5Y7/1	外面:ケズリ 内面:回転ナデ		内面研磨転用硯、墨痕と朱痕付着
33-6	37	18-23	T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	無高台坏		(2.9)	6.6	密(1mm程度の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色2.5Y8/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第5型式	
33-7	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	無高台坏	(14)		10	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	外面:灰白色7.5Y8/1内面:灰白色10Y8/1	外面:回転ナデ、ヘラ切り 内面:回転ナデ	第3～4型式	
33-8	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	無高台坏			(8.4)	密(1mmの砂粒を少量含む)	良好	外・内面:灰色10Y6/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第4型式	底部内面刻書 内面研磨転用硯
33-9	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	無高台坏		(1.6)	5.7	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第6型式	内面漆付着
33-10	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	無高台皿	(15.0)	2.7	(8.0)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第5型式	内面研磨転用硯
33-11	22		T69東1区	96号溝	北端サブトレ(下層)	須恵器	高台付坏	14	6.3	8.4	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第4型式	
33-12	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	高台付坏	16	6.0	10.8	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:灰白色N8/ 内面:灰白色N7/	外・内面:回転ナデ	第4型式	
33-13	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	高台付坏			(11.2)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:青灰色5B5/1 内面:青灰色5B6/1	外面:回転ナデ、回転糸切りのちナデ 内面:回転ナデ	第4型式	内面研磨転用硯
33-14	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	高台付坏		(4.2)	6.6	密(1mm程度の長石、石英を含む)	良好	外・内面:灰色2.5Y7/1	外面:回転ナデ、静止糸切り? 内面:回転ナデ	第6型式	
33-15	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	坏	20.0	(7.6)		密(1mm大の長石、石英を含む)	良好	外・内面:灰白色7.5Y7/1	外面:胴部突帯 内面:回転ナデ	第6型式	
33-16	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	坏		(4.7)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面面:灰色N5/	外面:胴部突帯 内面:回転ナデ	第5～6型式	内面に漆付着
33-17	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	高坏				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:灰色N4/ 内面:灰色7.5Y5/1	外面:ケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ		内面研磨転用硯
33-18	37		T69東1区	96号溝	褐灰色土	須恵器	脚付壺?		(3.2)	(18.2)	蜜(1.0～2.0mmの砂粒を少し含む)	良好	外面:灰色N5/ 内面:灰色N6/	外面:ケズリ後指頭圧、底面ケズリ?底部縁回転ナデ 内面:回転ナデ	第4～5型式	透かし形不明
33-19	22		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	長頸壺		(13.8)	(12.0)	密(1～2mm程度大の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、二重の沈線文、回転糸切りのちナデ消し 内面:回転ナデ	第2型式	
33-20	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	甕?				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:灰白色7.5Y7/1 内面:灰色7.5Y6/1	外面:タタキ 内面:当て具痕のちナデ		内面に黒墨と朱墨付着
33-21	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	須恵器	円形硯				密(1～2mmの長石、石英等を含む)	良好	外・内面:灰色N5/	外面:回転ナデ、裏面ヘラケズリと回転糸切り、口縁部:ヘラ切り 内面:回転ナデ		内面研磨転用硯
34-1	23		T69東2区	96号溝	褐灰色土	土師器	無高台坏	12.2	(3.7)	7.5	やや粗(1mm以下の石英、長石を含む)	良好	外・内面:灰白2.5Y8/2	外面:回転ナデ、糸切り後ナデ消し 内面:回転ナデ	第6型式	
34-2	23		T69東2区	96号溝	褐灰色土	土師器	無高台皿	12.2	4.1	7.1	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:橙色5YR7/8 内面:浅橙色7.5YR8/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第6型式	
34-3	23		T69東2区	96号溝	褐灰色土	土師器	無高台皿	12.3	3.7	7.0	密(2mm程度大の石英、長石を含む)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/4 内面:浅黄橙色10YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第6型式	
34-4	23		T69東2区	96号溝	褐灰色土	土師器	無高台坏	(11.4)	3.9	6.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR7/8	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第6～7型式	
34-5	23		T69東1区	96号溝	褐灰色土	土師器	無高台坏	11.5	(3.3)	6.3	やや密(1mm以下の長石を含む)	良好	外・内面:橙色5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第6型式	
34-6	23	18-21	T69東2区	96号溝	褐灰色土	土師器	無高台坏	13.0	3.4	6.8	密(5mm大の小石を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外面:回転ナデ、回転糸切りのちナデ 内面:回転ナデ		
34-7	23		T69東2区	96号溝	褐灰色土	土師器	足高高台付坏		(5.0)	8.4	やや粗:	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外・内面:回転ナデ	第6～7型式	
34-8	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	土師器	足高高台付坏		(2.4)	7.2	やや粗(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:黄橙色7.5YR8/8	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第6～7型式	
34-9	23		T69東2区南壁	96号溝	褐灰色土	土師器	無高台皿	14.6	(1.5)	12.3	やや密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:浅黄橙10YR8/4 赤彩:明赤褐色2.5YR5/8 内面:浅黄橙10YR8/3 赤彩: 明赤褐色2.5YR5/8	外・内面:回転ナデ	第5型式	外・内面に赤彩
34-10	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	土師器	壺	20.6	(6.7)		やや密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内 面:浅黄橙色10YR8/4	外・内面:回転ナデ	小谷3新～4	
34-11	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	土師器	甕	(17.5)	(10.7)		粗(3mm大の石英を多量に含む)	良好	外面:にぶい褐色7.5YR6/3 内面:浅黄橙色10YR8/3	外面:ナデ、指頭圧痕 内面:ナデ、ケズリ		外面にススが全体的に付着
34-12	37		T69東2区	96号溝	褐灰色土	製塩土器	製塩土器	8.0	(6.1)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:7.5YR8/6	外・内面:ナデ		

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量(　)内復元値			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	型式時期	備考
								口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)						
34-13	37		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	製塩土器	製塩土器	9.4	(7.8)		やや密		外・内面:黄橙色7.5YR8/8	外・内面:ナデ		
34-14	37	18-18	T69 東1区	96号溝	褐灰色土	緑釉陶器	碗	18.0	(5.0)		密	良好	外・内面:緑	外面:施釉 内面:施釉、見込み	9～10C初	
34-15	37		T69 東1区	96号溝	褐灰色土	緑釉陶器	碗				蜜	良好	外・内面:濃緑	外面:緑釉 内面:緑釉、口縁部内面陰刻花文		
39-1	23		T70 西1区	97号溝	埋土	土師器	無高台皿	8.9	2.4	3.5	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:灰白色2.5Y8/2 内面:淡黄色2.5Y8/3	外・内面:回転ナデ	第9型式	
39-2	40		T70 西1区	97号溝	埋土	土師器	無高台皿	8.9	2.5	4.8	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:にぶい黄橙色10YR7/3 内面:浅黄橙色10YR8/3	外・内面:回転ナデ	第9型式	
39-3	40		T70 西1区	97号溝	埋土	土師器	足高高台付皿		(2.1)	5.4	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/4	外・内面:回転ナデ	第8型式	
39-4	40		T70 西1区	97号溝	埋土	土師器	足高高台付坏		(2.1)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外・内面:回転ナデ	第8型式	
39-5	40		T70 西1区	97号溝	埋土	土師器	柱状高台付皿	8.4	3.3		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:浅黄橙色7.5YR8/4 内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外面:回転ナデ、回転糸切りのちナデ 内面:回転ナデ	第9型式	
39-6	40		T70 西1区	97号溝	埋土	土師器	柱状高台付皿		(2.6)	4.9	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:淡黄色2.5Y8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
40-1	23		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	無高台皿	9.3	2.6	4.6	密(1mm以下の砂粒を少し含 む)	良好	外面:橙色5YR7/6 内面:橙色7.5YR6/8	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
40-2	23		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	無高台皿	8.5	2.7	3.6	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:橙色5YR7/8 内面:橙色7.5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
40-3	23		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	無高台坏		(3.9)	7.4	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
40-4	24	20-101	T71 1区	98号溝	埋土	土師器	足高高台付坏	15.8	最大6.4		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/3	外・内面:回転ナデ	第8型式	赤彩あり？
40-5	24	20-99	T71 1区	98号溝	埋土	土師器	足高高台付坏		(3.7)	7.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/3	外・内面:回転ナデ	第8型式	
40-6	24		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	足高高台付皿	9.0	3.2	5.5	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/3	外・内面:回転ナデ	第8型式	
40-7	24		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	足高高台付皿	8.2	3.5	5.7	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/3	外・内面:回転ナデ	第8型式	
40-8	40		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	柱状高台付皿or坏		(3.2)	5.4	密(1mm大の小石を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/3	外・内面:回転ナデ	第8～9型式	
40-9	24		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	柱状高台付皿	8.7	(2.85)	4.6	密(2mm大の小石を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/3	外・内面:回転ナデ	第8～9型式	
40-10	24		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	柱状高台付皿	8.5	3.7	4.0	密(1mm以上の石英を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/4	外面:回転ナデ、回転糸切りのちナデ 内面:回転ナデ	第9型式	
40-11	40		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	柱状高台付皿				密(1mm大の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
40-12	40		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	柱状高台付皿		(2.5)	4.6	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色2.5YR8/2	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
40-13	40		T71 1区	98号溝	埋土	土師器	柱状高台付皿		(2.6)	4.8	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色2.5YR8/2	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
42-1	25	18-16	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.5	3.1	5.2	密(1mm大の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/4	外・内面:回転ナデ	第10型式	
42-2	25	18-14	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.6	3.4	(4.9)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:にぶい橙色7.5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-3	25	18-32②	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	6.1	3.1	5.2	密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:にぶい橙色7.5YR7/4 内面:にぶい橙色5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-4	25		T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.5	3.2	5.8	密(1mmの砂粒を含む)	良好	外・内面:橙色5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-5	25		T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.9	3.5	(5.3)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:にぶい橙色7.5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-6	25		T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.9	3.5	(5.0)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:にぶい橙色5YR7/4 内面:橙色5YR6/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-7	25	18-34	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.0	3.3	5.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色10YR8/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-8	25		T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	(10.6)	3.3	(5.8)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:橙色7.5YR7/6 内面:にぶい橙色7.5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-9	25		T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	(10.6)	3.2	(5.6)	密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-10	25	18-34	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.5	3.2	5.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-11	25	18-12	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.2	3.3	5.2	密(3mm大の小石を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-12	25	18-34	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	(9.8)	3.1	4.4	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:にぶい橙色7.5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-13	26	18-32	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.5	3.3	5.2	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:にぶい橙色7.5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-14	26	18-34	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.6	3.1	5.2	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:にぶい橙色7.5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-15	26	18-32	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	(10.9)	3.2	(5.2)	密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:にぶい橙色7.5YR7/4 内面:橙色5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-16	26	18-33	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.7	3.5	5.5	密(1mm大の砂粒を含)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-17	26	18-32	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	11.5	3.4	5.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:にぶい橙色7.5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-18	26	18-32	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	(10.8)	3.2	(5.6)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:橙色5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-19	26	18-13	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.2	3.2	5.0	密(3mm大の長石を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-20	26	18-32	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	10.2	3.7	5.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:橙色7.5YR7/6 内面:にぶい橙色7.5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-21	26	18-34	T69 東1区	69号土坑	埋土	土師器	無高台坏	(10.4)	2.9	4.8	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:橙色5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量(　)内復元値			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	型式時期	備考
								口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)						
42-22	26	18-32	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	(11.2)	2.9	(4.6)	密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:浅黄橙色7.5YR8/4 内面:にぶい橙色 7.5YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-23	26		T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	(10.0)	3.6	(5.2)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:浅黄橙7.5YR8/6 内面:橙7.5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-24	26	18-32	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	(10.6)	3.8	(5.6)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色 10YR8/2	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-25	27	18-34	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	15.3	5.4	5.8	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:橙色5YR6/8	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-26	27	18-32 ①	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	15.7	4.8	6.3	密(1～2mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:橙色7.5YR7/6 内面:橙色5YR7/8	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-27	27	18-34 ①	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	14.6	4.7	5.6	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:橙色5YR6/6 内面:橙色5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-28	27	18-34	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	(15.3)	4.8	(5.8)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:橙色7.5YR6/6 内面:橙色5YR6/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-29	27	18-34	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	(15.6)	5.1	5.8	密(1mm の砂粒を含む)	良好	外・内面:橙色7.5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-30	27	18-32 ③ 18-34	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	15.7	5.6	5.7	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:橙色5YR6/8	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
42-31	41	18-12	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏	(15.0)			密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 10YR8/3	外・内面:回転ナデ	第10型式	
42-32	27	18-15	T69 東1区	69号 土坑	埋土	土師器	無高台坏		(3.3)	5.2	密(1mm大の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 10YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第10型式	
43-1	41		T69 西1区	71号 土坑	埋土	須恵器	高台付壺		(5.5)	8.6	密(1mm以下の砂粒を多く含む)	良好	外面:灰色N6/1 内面:褐灰色10YR6/1	外面:回転ナデ、底部 回転糸切りのちナデ 内面:回転ナデ	第4型式	内面に黒色付着物
43-2	41		T69 西1区	71号 土坑	埋土	須恵器	高台付壺		(1.8)	8.6	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第3型式	高台内底部に漆付着
43-3	41		T69 西1区	71号 土坑	埋土	土師器	足高高台付坏				密(1～2mmの砂粒を少量含む)	良好	外面:橙色5YR6/8 内面:橙色7.5YR7/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第8型式	
43-4	41		T69 西1区	71号 土坑	埋土	須恵器	風字硯				密(1mm程度の砂粒を含む)	良好	外面:灰色N5/0 内面:灰色10Y5/1	外面:ナデ、一部ヘラ切り 内面:ナデ、一部ヘラ切り		
45-1	41		T69 西2区	72号 土坑	埋土	須恵器	坏	(10.0)			密(1mm程度の砂粒を多く含む)	良好	外面:灰白色5Y7/1 内面:灰白色10YR7/1	外・内面:回転ナデ	出雲6a	
45-2	30	19- 土器5	T69 西2区	72号 土坑	埋土	土師器	甕	22.8			密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:にぶい黄橙色 10YR7/4 内面:浅黄橙色10YR8/4	外面:ハケ、ナデ 内面:ケズリ、ナデ	第2型式	底部焼成後穿孔
45-3	30	19- 土器4	T69 西2区	72号 土坑	埋土	土師器	甕	21.2	24.4		密(1mm大の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 10YR8/4	外面:ハケメ 内面:ケズリ、(胴部下半)ナデ・指押さえ	第2型式	口縁端部・胴部に赤色顔料付着
47-1	41	20-95	T70 東2区	73号 土坑	埋土	土師器	甕				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:橙色7.5YR7/6 内面:にぶい橙色 7.5YR6/4	外面:ハケ、ナデ 内面:ナデ、ケズリ		
47-2	41	20-76 82・ 83・90 他	T70 東2区	73号 土坑	埋土	土師器	甕				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:橙色5YR7/6 内面:灰黄褐色10YR6/2	外面:ハケ 内面:ケズリ		
47-3	41	20- 128他	T70 東2区	73号 土坑	埋土	土師器	甕				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:橙色7.5YR7/6 内面:橙色7.5YR6/6	外面:ハケ 内面:ケズリ		
47-4	31	20- 土器3	T70 東2区	73号 土坑	埋土	土師器	甕				密(1～2mmの砂粒を多く含む)	良好	外面:黄灰色2.5Y5/1 内面:灰黄色2.5Y7/2	外面:ハケメ後ナデ? (摩滅のため調整不明) 内面:ケズリ		
47-5	31	20- 土器2	T70 東2区	73号 土坑	埋土	土師器	甕				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 7.5YR8/4	外面:ハケメ 内面:ケズリ		一部外面に赤彩
47-6	41	20- 130	T70 東2区	73号 土坑	埋土	縄文土器	深鉢				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:にぶい黄橙色 10YR6/3 内面:褐灰色10YR4/1	外面:ナデ 内面:条痕ナデ		
48-1	32	20- 土器6	T70 東2区	74号 土坑	埋土	土師器	甕	17.1	18.7		やや密(2mm大の石英を含む)	良好	外面:浅黄橙色7.5YR8/4 内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外面:ハケメのちナデ 内面:ケズリ、ナデ、指押さえ	第3型式	
48-2	32	20- 土器9	T70 東2区	74号 土坑	埋土	土師器	甕	18.8	18.5		やや密(1mm大の石英を含む)	良好	外・内面:淡黄色 2.5YR8/4	外面:頸部～胴部ナデ、ハケメ、底部ナデ 内面:ケズリ、ナデ	第3型式	
50-1	42		T70 西1区	1号石 敷遺構	検出面	灰釉陶器	段皿	(16.6)			蜜	良好	外・内面:灰白色2.5Y7/1	外・内面:回転ナデ		透明釉
51-1	42		T60	17号 井戸		土師器	無高台皿		(1.5)	(5.7)	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 7.5YR8/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第8型式	
51-2	42		T60	17号 井戸		土師器	足高高台付坏	(17.0)	(5.5)		密(1mm大の砂粒を含む)	良好	外・内面:黄橙色 7.5YR7/8	外・内面:回転ナデ	第8型式	
51-3	42		T60	17号 井戸		土師器	足高高台付坏		(2.6)	5.6	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:にぶい黄橙色 10YR7/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第8型式	
51-4	42		T60	17号 井戸		土師器	柱状高台付皿か坏			5.0	密(1mmの砂粒を少量含む)	良好	外・内面:橙色5YR6/6	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
51-5	42		T60	17号 井戸		黒色土器	碗				やや粗(1mmの砂粒多く含む)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/3 内面:黒色7.5YR2/1	外面:回転ナデ 内面:ヘラミガキ		内面黒色研磨、内面炭素吸着?
51-6	42		T60	17号 井戸		緑釉陶器	碗			(7.6)	緻密	良好	断面:灰黄色2.5Y7/2 釉:浅黄色5Y7/4～浅黄橙色10YR8/4	外・内面:削り出し、施釉	9C前～中	緑釉の発色にムラあり 円盤状・削り出し高台
52-1	42	20- 107	昭和 調査区 (1区)	SD055		土師器	高坏	(17.0)			密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/4 内面:浅黄橙色7.5YR8/4	外面:ナデ 内面:摩滅により不明	古墳中	外面に赤彩あり
53-1	33	18-31	T69 東2区	70号 土坑	埋土	土師器	甕				やや蜜(石英、長石、微砂が多い)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/3 内面:橙色5YR7/6	外面:縦ハケ後横ハケ、斜め方向のハケ、タタキからナデ、底部焼成後穿孔 内面:ケズリ、指圧痕	布留1新	
54-1	27		T69 東2区	P1 (474)	埋土	土師器	無高台坏	(10.3)	2.9	4.4	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 10YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第8型式	
54-2	27		T69 東2区	P1 (474)	埋土	土師器	足高高台付皿	13.4	3.95	8.4	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:7.5YR8/6	外・内面:回転ナデ	第8型式	
54-3	27		T69 東2区	P1 (474)	埋土	土師器	足高高台付皿	(13.1)	3.7	8.2	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:浅黄橙色7.5YR8/6 内面:浅黄橙色10YR8/4	外・内面:回転ナデ	第8型式	

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量( )内復元値			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	型式時期	備考
								口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)						
54-4	27		T69 東2区	P1 (474)	埋土	土師器	足高高台付坏		(3.5)	8.4	密(1mm大の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 7.5YR8/6	外・内面:回転ナデ	第8型式	
55-1	42		T69 西1区	P1 (135)	埋土	灰釉陶器	碗		(1.8)	7.5	密(1mm大の砂粒を多く含む)	良好	外・内面:淡緑	外面:回転ナデ、張り付け高台(底部) 内面:回転ナデ	12C	東濃型、施釉、内面に重ね焼き高台の跡あり
56-1	27		T70 東1区	P2 (072)	埋土	陶器	丸型碗	(11.0)	7.3	4.6	密	良好	外面:鉄釉 内面:鉄釉、砂が少量付着	外・内面:ロクロ形成	九Ⅱ	肥前系
58-1	42		T70 東2区	P1 (053)	埋土	越州窯系青磁	碗	(10.8)			緻密	良好	外・内面:にぶい黄色 2.5Y6/3	外・内面:回転ナデ		青磁釉
60-1	42		T71 1区	P1 (024)	埋土	広東白磁	碗				緻密	良好	外・内面:灰黄色 2.5YR7/2	外・内面:回転ナデ	Ⅱ類C期	透明釉
61-1	42		T69 東1区	P1 (490)	埋土	須恵器	風字硯				密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰色N5/1 内面:灰色7.5Y5/1	外面:ナデ、ヘラ切り 内面:ナデ	第2型式	中世Pit埋土段掘りのみ
61-2	42		T70 東1区	P4 (021)	埋土	越州窯系青磁	碗				緻密	良好	外・内面:灰オリーブ色5Y6/2	外・内面:回転ナデ		青磁釉
61-3	42		T70 東1区	P3 (042)	埋土	緑釉陶器	碗			6.7	蜜	良好	外・内面:オリーブ灰色10Y6/2	外・内面:回転ナデ		施釉
62-1	28		T69 東1区		暗褐色土	須恵器	蓋	5.4(つまみ)	2.9	(14.5)	密(黒色砂粒を僅かに含む)	良好	外・内面:褐灰色 10YR6/1	外面:回転ナデ、回転ケズリ 内面:回転ナデ	第2型式	転用硯
62-2	43		T69 西1区		暗褐色土	須恵器	坏蓋	17.6	1.7		密(2mm大の長石を含む)	良好	外・内面:灰色2.5Y7/1	外面:回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ	第4型式	
62-3	43		T69 西1区		暗褐色土	須恵器	蓋				密(黒色砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色7.5Y7/1	外面:回転ナデ、(天井部)回転糸切り 内面:回転ナデ、ナデ	第4型式	
62-4	43		T69 東2区		暗褐色土	須恵器	蓋				密(砂粒を僅かに含む)	良好	外面:灰黄色2.5Y7/2 内面:褐灰色5Y6/1	外・内面:回転ナデ	第4型式	内面研磨 転用硯 墨痕付着
62-5	43		T69 西1区		暗褐色土	須恵器	蓋	13.8	(1.5)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色7.5Y8/1	外・内面:回転ナデ	第4型式	内面朱墨付着
62-6	43		T69 西1区		暗褐色土	須恵器	蓋		1.0		密(1～3mmの砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N4/	外面:回転ナデ、ケズリ 内面:回転ナデ	第2型式	両面転用硯 朱墨付着
62-7	43		T69 西2区		暗褐色土	須恵器	短頸壺蓋	7.8	2.3	4.4	密(1mm以下の長石、石英を含む)	良好	外・内面:灰白7.5Y7/1	外面:回転ナデ、ヘラ切 内面:回転ナデ		
62-8	43		T69 東3区		暗褐色土	須恵器	坏蓋	12.0	3.7		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色7.5Y7/1	外面:回転ヘラケズリのちナデ 内面:回転ナデ		口縁部一条沈線文
62-9	28		T69 東3区		暗褐色土	須恵器	坏身	11.3	4.1	13.9	密(灰白色の砂粒を含む)	良好	外・内面:黄灰色2.5Y6/1	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り 内面:回転ナデ		
62-10	43		T69 西2区		暗褐色土	須恵器	無高台坏	12.0	(4.0)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外・内面:回転ナデ		
62-11	28		T69 西1区		暗褐色土	須恵器	無高台皿	(13.4)	2.4	8.5	密(黒色砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色7.5Y6/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第5型式	
62-12	43		T69 東1区		暗褐色土	須恵器	高台付坏		(2.6)	9.0	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第4型式	
62-13	43		T69 西2区		暗褐色土	須恵器	鉢	18.8	(3.4)		密(1mm以下の長石、石英を含む)	良好	外面:暗灰色N3/ 内面:灰色N6/1	外・内面:回転ナデ	第4型式	
62-14	43		T69 西1区		暗褐色土	須恵器	高坏	(14.3)			密(黒色砂粒を多く含む)	やや良好	外・内面:明褐灰色 7.5YR7/1	外・内面:回転ナデ	第5型式	
62-15	43		T69 西1区		暗褐色土	須恵器	器台				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:灰色10Y4/1 内面:灰オリーブ色 7.5Y5/2	外面:ナデ、波状文 内面:ナデ		
62-16	43		T69 西3区		暗褐色土	須恵器	甕				密(1mm程度の砂粒を含む)	良好	外面:灰色N4/ 内面:灰色N6/	外面:ナデ、波状文 内面:ナデ		
62-17	43		T69 東3区		暗褐色土	須恵器	甕				密(1mm程度の砂粒を含む)	良好	外面:灰色N4/ 内面:灰色N5/	外面:ナデ、ケズリ、二条沈線、刺突文 内面:ナデ		
62-18	28		T69 西2区		暗褐色土	須恵器	直口壺				密(白色砂粒を僅かに含む)	良好	外面:褐灰色10YR5/1 内面:褐灰色5YR6/1	外面:回転ナデ、ヘラ切り 内面:回転ナデ	第2型式	
62-19	43		T69 東2区		暗褐色土	須恵器	小壺か				密(1mm大の石英を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外・内面:回転ナデ		
62-20	43		T69 西1区		暗褐色土	須恵器	提瓶(把手)				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色7.5Y6/1	外面:ナデ 内面:平行タタキ		
62-21	43		T69 西3区		暗褐色土	須恵器	甕	(4.2)			密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色7.5Y7/2	外面:ハケか 内面:回転ナデ		
62-22	43		T69 西1区		暗褐色土	須恵器	甕				密(1mmの黒色粒を含む)	良好	外面:灰色N4/ 内面:灰色N6/	外面:ナデ、波状文、沈線 内面:ナデ		
62-23	43		T69 東2区		暗褐色土	須恵器	甕				密(黒色砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外面:回転ナデ、波状文(5条) 内面:回転ナデ		
63-1	43		T69 東2区		暗褐色土	須恵器	甕				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:暗灰色N3/ 内面:灰色5N/	外面:格子タタキ? 内面:同心円当て具痕		内面研磨 転用硯
63-2	43		T69 東2区		暗褐色土	須恵器	甕				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外・内面:青灰色5PB6/1	外面:平行タタキ 内面:同心円当て具痕		内面研磨 転用硯 内面断面に朱付着
63-3	43		T69 東2区		暗褐色土	須恵器	円面硯				密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外・内面:灰色N4/	外面:ヘラ切り 内面:ナデ		
63-4	43		T69 東2区		暗褐色土	土師器	甑				1mm以下の砂粒を含む	良好	外面:灰白色10Y7/1 内面:灰白色10Y6/1	外・内面:回転ナデ		
63-5	44		T69 東1区		暗褐色土	土師器	かわらけ	9.8	(2.0)	3.0	密(2mm大の石英を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 10YR8/4	外・内面:回転ナデ		
63-6	28		T69 西1区		暗褐色土	土師器	灯明皿	9.4	2	3	密(白色砂粒を僅かに含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 7.5YR8/4	外面:ナデ 内面:ナデあげ	12C	口縁部スス付着
63-7	28		T69 東2区		暗褐色土	土師器	無高台皿		2.65	5.2	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 7.5YR8/4	外・内面:回転ナデ		
63-8	44		T69 西1区		暗褐色土	土師器	無高台皿	8.2			密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 10YR8/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
63-9	28		T69 東2区		暗褐色土	土師器	無高台坏	15.8	4.6	6.6	密(1mm大の長石、石英を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 10YR8/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ		

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量(　)内復元値			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	型式時期	備考
								口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)						
63-10	44		T69 東2区		暗褐色土	土師器	足高高台付坏			(6.3)	やや粗(1mm大の石英を含む)	良好	外・内面:橙色7.5YR7/6	外・内面:摩滅により不明	第8型式	
63-11	44		T69 西1区		暗褐色土	土師器	柱状高台付坏		(13.1)	5.5	密(黒色砂粒を含む)	良好	外・内面:淡橙色5YR8/4	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
63-12	44		T69 西2区		暗褐色土	土師器	柱状高台付皿			5.2	密(砂粒を僅かに含む)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/4 内面:浅黄橙色10YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
63-13	44		T69 西1区		暗褐色土	土師器	柱状高台付坏			4.5	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:橙色5YR6/8	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ		
63-14	44		T69 西1区		暗褐色土	土師器	高坏		(3.5)		やや粗(2mm大の長石を含む)	良好	外・内面:黄橙色7.5YR7/8	外・内面:回転ナデ	TK23～47	
63-15	44		T69 東3区		暗褐色土	土師器	高坏		(5.7)		やや粗(1mm大の石英を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/4	外面:ナデ 内面:脚部ケズリのちナデ		
63-16	44		T69 西1区		暗褐色土	土師器	甕		84.09		やや密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/4	外面:ナデ 内面:ハケのちナデ、(肩部)ケズリ		
63-17	44		T69 西1区		暗褐色土	土師器	甕	23.4	(4.8)		粗(1 mm以下の長石、石英を含む)	良好	外面:にぶい橙色7.5YR7/3 内面:橙色5YR7/6	外・内面:回転ナデ		
63-18	44		T69 東1区		暗褐色土	土師器	甕		(3.9)		やや粗(2mm大の小石を含む)	良好	外面:橙色7.5YR7/6 内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外面:ナデ 内面:ケズリ、ナデ		外面、スス付着
63-19	44		T69 西2区		暗褐色土	土師器	甕				やや粗	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/3	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ケズリ		
63-20	44		T69 東1区		暗褐色土	製塩土器	製塩土器	(10.0)			密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:橙色7.5YR7/8	外・内面:回転ナデ		
63-21	44		T69 西2区		暗褐色土	緑釉陶器	碗		(2.8)		蜜	良好	外・内面:濃緑色	外面:回転ナデ、回転糸切り、有段輪高台(貼り付け) 内面:回転ナデ、圏線	10～11C	近江産
63-22	44		T69 西2区		暗褐色土	緑釉陶器	香炉の蓋		(3.3)		密	良好	外・内面:淡緑色	外面:回転ナデ、2条の沈線 内面:回転ナデ		
63-23	44		T69 西1区		暗褐色土	白磁	玉縁椀		(2.6)		密	良好	外・内面:白色	外・内面:回転ナデ	Ⅳ類	福建
63-24	44		T69 東3区		暗褐色土	青磁	碗		(3.2)	5.3	密	良好	外・内面:淡緑色	外面:回転ナデ、(高台内)露胎 内面:回転ナデ(見込み)印花文	15C	
63-25	44		T69 東3区		暗褐色土	中国青磁	稜花皿		(2.2)		密	良好	外・内面:淡緑色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、口縁部二重の沈線文		龍泉
63-26	44		T69 西1区		暗褐色土	青花	直口碗	(12.8)			密		外面:透明釉、青料 内面:透明釉、青料	外面:二重圏線、草花文 内面:二重圏線、露台に文様?	E群	漳州窯
63-27	44		T69 西1区		暗褐色土	陶器	皿	(10.4)	3.3	4.6	密			外面:回転ナデのちカンナ、ケズリ、露胎、灰釉 内面:回転ナデのちカンナ、灰釉	九Ⅰ-2	肥前系
63-28	44		T69 東3区		暗褐色土	陶器	杉形碗			4.0	密			外面:ケズリ、露胎 外・内面:灰釉	九Ⅰ-2	肥前系
63-29	44		T69 東3区		暗褐色土	陶器	溝縁皿	(13.8)	3.0	6.4	密			外面:口縁部に溝、露胎、回転糸切り痕(底部)	九Ⅱ	肥前系
67-1	46		T69 西1区		黒褐色土	須恵器	蓋		(2.1)		密(1mm程度大の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外面:ケズリのちナデ 内面:回転ナデ	第1型式	
67-2	46		T69 西1区		黒褐色土	須恵器	蓋				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色2.5Y8/1	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、研磨	第4型式	転用硯
67-3	46		T69 西1区		黒褐色土	須恵器	蓋	(18.0)			密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外面:回転ナデ、(天井部)回転糸切り 内面:回転ナデ	第4～5型式	
67-4	46		T69 西1区		黒褐色土	須恵器	高台付坏	12.7	4.2	8.4	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外・内面:回転ナデ	第2型式	
67-5	46		T69 西1区		黒褐色土	須恵器	提瓶		(10.7)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:灰白色N7/内面:灰色N6/1	外面:カキ目、タタキ 内面:同心円あて具痕		
67-6	46		T69 西1区		黒色土	須恵器	長頸壺		(5.4)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:灰色N6/1 内面:灰色N5/	外・内面:回転ナデ		
67-7	46		T69 西1区		黒褐色土	土師器	無高台皿	7.1	2.5	3.0	密(1mm大の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ		
67-8	46		T69 西1区		黒色土	土師器	柱状高台付皿か坏		(2.6)	4.9	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:にぶい黄橙色10YR7/3	外面:回転ナデ、回転糸切り		
67-9	46		T69 西1区		黒褐色土	緑釉陶器	輪花碗		(4.8)		須恵質	良好	外・内面:淡緑	外面:回転ナデ、施釉 内面:回転ナデ	9～10C初	
67-10	46		T69 西1区		黒色土	土製品	移動式竈				粗(2mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色10YR8/4	外面:ナデ、ケズリ 内面:ナデ		
68-1	47		T69 西1区		検出面	須恵器	蓋	(12.29)	3.5		密(1.5mm程度の砂粒を含む)	良好	外・内面:青灰色5B6/1	外面:回転ナデ、ナデ、天井部「×」印ヘラ記号 内面:回転ナデ、ナデ	出雲bc	ヘラ記号「×」
68-2	47	18-30	T69 東1区		検出面	須恵器	坏身	(10.9)	3.9	(13.6)	密(12mm大の小石を含む)	良好	外面:青灰色5B5/1 内面:明オリーブ灰色2.5GY7/1	外面:回転ナデ、ケズリ 内面:回転ナデ	出雲4期	
68-3	28		T69 西1区		検出面	須恵器	坏身	8.2	2.3		密(1mm大の砂粒を多く含む)	良好	外面:褐灰色7.5YR6/ 内面:灰色N6/1	外面:回転ナデ、ヘラ起こしのちナデ 内面:回転ナデ、ナデ	出雲6bc	
68-4	47		T69 西1区		検出面	須恵器	壺		(5.4)		密(1mm程度大の石英を多く含む)	良好	外・内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、ケズリ、胴部突帯 内面:回転ナデ	第4～6型式	
68-5	47		T69 西1区		検出面	弥生土器	高坏(脚部)			(10.0)	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外・内面:灰白色10YR8/2	外面:ヨコナデ、5条以上の凹線文 内面:摩滅激しく不明	Ⅳ-1型式	
68-6	47		T69 西1区		検出面	土師器	甑				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/3 内面:橙色7.5YR7/6	外・内面:回転ナデ?		多孔
68-7	47		T69 西1区		検出面	製塩土器	製塩土器	(8.8)			密(1mm以下の砂粒を多く含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外・内面:回転ナデ?		
68-8	47		T69 西1区		検出面	土製品	土製支脚		(15.1)		粗(2mm大の長石、石英を含む)	良好	外面:浅黄色2.5Y7/3	外面:ケズリ、ナデ、指圧痕		
69-1	47		T69 拡張区		暗褐色土	須恵器	蓋		2.05	8.2	きめ細かい粗粒砂～極粗粒砂混じる	良好	外・内面:灰白色7.5Y7/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第5型式	

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量( )内復元値			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	型式時期	備考
								口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)						
69-2	47		T69 拡張区		暗褐色土	須恵器	坏				密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰色N6/ 内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ、底部ヘラ記号「×」か 内面:回転ナデ、ナデ	出雲4～5期	ヘラ記号「×」
69-3	47		T69 拡張区		暗褐色土	須恵器	甕				密(1mm程度の砂粒を若干含む)	良好	外面:灰色N6/ 内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ、沈線 内面:回転ナデ		自然釉付着
69-4	47		T69 拡張区		暗褐色土	須恵器	突帯付坏				密(1mm程度の砂粒を若干含む)	良好	外・内面:灰色N6/	外・内面:回転ナデ	第6型式	
69-5	47		T69 拡張区		暗褐色土	土師器	柱状高台付皿か坏			4.2	密(1mm程度の砂粒を若干含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 7.5YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
70-1	28		T69 西1区	攪乱4	埋土	須恵器	小型壺		(7.5)	6.2	密(1～2mm大の長石や石英等を含む)	良好	外面:暗灰色N3/ 内面:灰色N5/	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ		
70-2	47		T69 西1区	攪乱4	埋土	陶器	折縁皿			4.8	緻密	良好		外面:ケズリ、渦巻 内面:ロクロ成形、胎土目×4	九1－2	内面灰釉 肥前系
71-1	47		T70 西2区		暗褐色土	須恵器	坏蓋	(14.8)	(5.5)	(15)	きめ細かい、極粗粒砂を含む	良好	外面:灰色10Y6/1 内面:灰色7.5Y6/1	外面:回転ヘラケズリ、回転ナデ、2条沈線 内面:回転ナデ	出雲4期	
71-2	47		T70 東2区		暗褐色土	須恵器	短頸壺蓋	(9.4)	(4.1)	(9.4)	きめ細かい、極粗粒砂を含む	良好	外面:黄灰色2.5Y4/1 内面:灰色5Y4/1 灰白色2.5Y7/1	外面:回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ		
71-3	47		T70 西2区		暗褐色土	須恵器	短頸壺蓋				密(1mm程度の砂粒を多く含む)	良好	外面:7.5Y6/1 内面:灰色N6/1	外・内面:回転ナデ		自然釉付着 内面朱付着
71-4	47		T70 東2区		暗褐色土	須恵器	坏身	(12.4)	(3.5)	(14.8)	きめ細かい、極粗粒砂を含む	良好	外・内面:灰色7.5Y6/1	外面:回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ	出雲4期	
71-5	28		T70 東1区		暗褐色土	須恵器	坏身	(11.5)	3.7	(13.8)	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰白色5Y7/1 内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリのちナデ 内面:回転ナデ、ナデ	出雲5期	工具痕
71-6	47		T70 東2区		暗褐色土	須恵器	無高台坏	(9.6)			密(1mm以下の砂粒を若干含む)	良好	外面:灰色N6/ 内面:灰色7.5Y6/	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第5型式	同心円状の研磨、転用硯
71-7	47		T70 東2区		暗褐色土	須恵器	高台付坏			(9.8)	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外・内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ、ナデ	第5型式	底面墨書「厨」
71-8	47		T70 西2区		暗褐色土	須恵器	器台				密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰色7.5YR4/1 内面:灰色7.5YR6/1	外面:2条沈線、くしがき波状文4段 内面:ナデ		2段の透かし
71-9	47		T70 東1区		黒褐色	須恵器	甕				密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:青灰色5B5/1 内面:灰色7.5Y6/1	外面:回転ナデ、波状文 内面:回転ナデ		
71-10	47		T70 西1区		暗褐色土	須恵器	甕				密(1.5mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰色5Y6/1 内面:灰色N5/	外面:平行タタキ 内面:同心円道具痕		内面黒墨痕付着
71-11	47		T70 東1区		暗褐色土	須恵器	平瓶				密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰白色N7/ 内面:灰白色N5/	外面:ナデ、カキメ 内面:ナデ	第6型式	
71-12	47		T70 東2区		暗褐色土	須恵器	圏足円面硯				密(砂粒はほとんど含まない)	良好	外面:灰色7.5Y6/1 内面:灰白色7.5Y7/1	外面:回転ナデ、透かし孔 内面:回転ナデ		外面自然釉 透かしの数不明
71-13	47		T70 西1区		暗褐色土	須恵器	圏足円面硯			(19.0)	密(1mmの砂粒をわずかに含む)	良好	外面:灰白色7.5Y7/1 内面:灰色N6/	外面:回転ナデ、貼付突帯、透かし孔 内面:回転ナデ		透かしの数不明
71-14	28		T70 西2区		暗褐色土	土師器	無高台坏	(14)	(4.2)	(6.4)	密(粗粒砂が混じる)	良好	外面:にぶい橙色 7.5YR7/4 内面:にぶい橙色 7.5YR6/4	外面:回転ユビナデ、回転糸切り 内面:回転ユビナデ		
71-15	28		T70 西1区		黒褐色土	土師器	無高台皿	9.4	2.8	3.8	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰白色10YR8/2 内面:灰白色7.5YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9型式	
71-16	48		T70 西1区		暗褐色土	土師器	足高高台付坏	(18.8)			密(微砂粒を若干含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 10YR8/3	外・内面:回転ナデ		大型の足高高台付坏か
71-17	29		T70 西2区		暗褐色土 検出面	土師器	碗	(14.4)			密(1mm以下の砂粒を多く含む)	良好	外・内面:橙色5YR6/8	外面:ヨコナデ、他摩滅による調整不明 内面:ヨコナデ、放射状暗文		畿内産
71-18	48		T70 東1区		黒褐色土	土師器	柱状高台付皿か坏			6.0	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 7.5YR8/3	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第9～10型式	
71-19	48		T70 東2区		暗褐色土	土製品	手捏ね土器				密(1mm以下の砂粒を若干含む)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/3 内面:にぶい橙色 7.5YR7/4	外・内面:回転ナデ		
71-20	48		T70 西2区		暗褐色土	土師器	壺				密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外・内面:浅黄橙色 10YR8/3	外面:斜行刺突文 内面:摩滅のため不明		
71-21	48		T70 東1区		暗褐色土	土師器	甑(把手)						外・内面:浅黄橙色 7.5YR8/6	外面:ナデ		
71-22	48		T70 西2区		暗褐色土	土師器	甑(把手)				密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外・内面:灰白色 7.5YR8/2	外面:ナデ 内面:不明		
71-23	48		T70 西1区		暗褐色土	緑釉陶器	輪花皿				緻密	良	外・内面:淡緑色	外・内面:回転ナデ		輪花
71-24	48		T70 東1区		黒褐色土	緑釉陶器	碗					良好	外面:淡黄色 内面:淡黄色～淡緑色	外・内面:回転ナデ		
71-25	48		T70 東1区		暗褐色土	白磁	碗	(14.4)			緻密		外・内面:灰黄色2.5Y7/2	外・内面:回転ナデ	Ⅱ類	広東系、透明釉
71-26	48		T70 西2区		暗褐色土	白磁	皿			(6.6)	緻密		外面:灰白色5Y8/1 内面:灰白色7.5Y8/1	外・内面:回転ナデ	Ⅳ類	福建、透明釉
71-27	48		T70 東1区		暗褐色土	白磁	四耳壺				緻密		外面:灰白色 内面:灰白色(少し黄色が入る)			透明釉
72-1	48		T70 東1区		暗褐色土	土師器	竈				密(1mm以下の砂粒を多く含む)	良好	外面:灰白色10YR8/2 内面:灰白色7.5YR8/2	外面:ナデ 内面:ケズリ		
72-2	48		T70 東1区		暗褐色土	土製品	竈				密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外・内面:にぶい黄橙色 10YR7/3	外・内面:回転ナデ		

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量(　)内復元値			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	型式時期	備考
								口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)						
72-3	48		T70 東1区		黒褐色	土製品	竈				密(1～3mmの砂粒を少量含む)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/3 内面:にぶい橙色7.5YR7/3	外・内面:回転ナデ		
75-1	50		T70 東1区		検出面	須恵器	坏蓋	(12.6)	(3.8)		密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰白色7.5Y7/1内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、ナデ	出雲6bc	
75-2	29		T70 東1区		検出面	須恵器	坏身	(12.0)	3.9	(14.8)	密(1.5mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰白色5Y7/1 重なった部分:灰白色N7/ 内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、ナデ	出雲6a	
75-3	50	19-10	T70 東1区		検出面	須恵器	坏身	(11.6)		(14.0)	密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N5/	外面:回転ナデ、ヘラ切り後ナデ、底部ヘラ描「×」か 内面:回転ナデ	出雲6a	
75-4	50		T70 東2区		検出面	須恵器	甕			(5.0)	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰色N5/ 内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ、刺突文、沈線 内面:回転ナデ		
75-5	50		T70 東2区		検出面	須恵器	甕				密(微砂粒を少量含む)	良好	外面:灰白色N8/ 内面:青灰色5B5/1	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ、沈線、刺突文 内面:回転ナデ、ナデ		
75-6	50		T70 西2区		検出面	須恵器	提瓶				密(2mm以下の砂粒を少量含む)	良好	外面:灰白色7.5Y7/1 内面:灰白色N7/	外・内面:回転ナデ		
75-7	29		T70 東1区		検出面	土師器	無高台坏	(11.4)	(8.2)	(5.2)	細かい極粗粒砂を多く含む	良好	外・内面:明褐色7.5YR7/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第7型式	
76-1	50		T70 西1区		第1整地層	須恵器	蓋				密(1mm以下の砂粒を少し含む)	良好	外面:灰色N5/ 内面:灰白色N7/	外面:ナデ、ケズリ、頂部2条の沈線、ナデのちカキ目? 内面:回転ナデ		
76-2	50		T70 西1区		第1整地層	須恵器	蓋	(18.0)			密(1mm以下の砂粒を含む)	やや不良	外面:灰色N4/ 内面:灰色N5/	外・内面:回転ナデ	第4～5型式	
76-3	50		T70 西1区		第1整地層	須恵器	壺		(19.2)		密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	外面:青灰色5B5/1 内面:青灰色5B6/1	外・内面:回転ナデ		
76-4	50		T70 西1区		第1整地層	須恵器	円面硯				密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N5/	外・内面:ナデ、透かし部ヘラ切り		
76 -5	50		T70 西1区		第1整地層	製塩土器	製塩土器				やや粗(1mm大の小石を含む)	良好	外面:橙色2.5YR6/8 内面:橙色5YR7/8	外面:指圧痕、ナデ 内面:指圧痕、ナデ		
76-6	50		T70 西1区		第1整地層	製塩土器	製塩土器				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:浅黄橙色7.5YR8/6	外面:ナデ 内面:ナデ、指圧痕		
76-7	50		T70 西1区		第1整地層	磁器	蓋?				密(含有物なし)	良好	外面:釉(薄い) 内面:灰白色7.5Y7/1	外面:釉、回転ナデ 内面:回転ナデ		
76-8	50		T70 西1区		第1整地層	土製品	甑(把手)				密(1～5mm大の小石を含む)	良好	外面:浅黄橙色10YR8/3	外面:ケズリ、ナデ		
77-1	51		T70 東3区	攪乱4	埋土	須恵器	蓋	(12.8)			密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:灰色N5/ 内面:灰色7.5YR5/1	外面:ナデ回転ナデ 内面:回転ナデ	第4～5型式	内面墨痕
77-2	51		T70 東3区	攪乱4	埋土	須恵器	蓋				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:青灰色5B5/1	外面:回転ナデ、糸切りのちナデ、ケズリ 内面:研磨		高台内面墨痕 転用硯
77-3	51	20-19	T70 東3区	攪乱4	埋土	須恵器	高台付坏				密(1.5mm程度大の石英を含む)	良好	外・内面:灰白色5Y7/1	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	第5型式	底部墨書 墨書判読不明
77-4	51		T70 東3区	攪乱4	埋土	須恵器	高坏				密(3mm大の小石を含む)	良好	外面:灰色N5/ 内面:暗灰色N3/	外面:ケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ	第5型式	内面研磨 転用硯 隅付着
79-1	52		T71 1区		暗褐色土	須恵器	壺		(6.3)	12.5	密		外面:灰色N5/ 内面:灰白色N7/	外・内面:回転ナデ	第4～5型式	
79-2	52		T71 1区		暗褐色土	須恵器	鉢	(18.7)	(2.5)		密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰白色N7/	外面:回転ナデ、沈線1条 内面:回転ナデ	第5型式	
79-3	52		T71 1区		暗褐色土	須恵器	円面硯				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外面:灰色5Y6/1 内面:灰色N5/	外面:ナデ、透かしヘラ切り 内面:ナデ		
80-1	52		T70 東2区		埋戻土	須恵器	風字硯				密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	外・内面:灰色N6/1	外面:ヘラ切り、ナデ? 内面:ヘラ切りのちナデ		
81-1	52		昭和の調査区		埋戻土	須恵器	蓋				密(1～2mmの砂粒を少し含む)	良好	外面:灰白色7.5Y7/1 内面:灰色7.5Y6/1	外面:ヘラ切り、ナデ 内面:ナデ		頂部外面ヘラ記号あり
81-2	52		昭和の調査区		埋戻土	須恵器	円面硯				密(1mmの砂粒を含む)	良好	外面:青灰色5PB5/1 内面:青灰色5PB6/1	外面:強いナデ 内面:ナデ		内面研磨あり
81-3	52		昭和の調査区		埋戻土	緑釉陶器	碗				密(含有物なし)	良好	外・内面:緑釉(やや濃い)	外・内面:回転ナデ		口縁内面に重ね焼き痕

第 27 表　出雲国府跡出土瓦観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量(　)内復元値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
16-2	35	15-33	T59南			瓦	丸瓦 不明				410	密(2㎜以下の砂粒を多く含む)	やや不良	凹面:灰色N5/ 凸面:灰白色2.5Y8/2	凹面:布目圧痕、ケズリ 凸面:ナデ	軟質
32-1	36		T69 東2区	96号溝	黒褐色土	瓦	軒丸瓦	5.9	5.8	縁1.2 瓦当面2.0～2.1	70	1.0～3.0㎜の砂粒を含む	不良	凹面:橙色5YR7/6 浅黄橙色7.5YR8/4 凸面:橙色5YR7/6 にぶい黄橙色10YR7/2	瓦当面:押型 丸瓦部:差込溝	国分寺2類
32-2	36		T69 東2区	96号溝	黒褐色土	瓦	軒丸瓦	瓦当面20.0		瓦当面2.0	210	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	不良	瓦当面:灰色7.5Y6/1 凹面:灰色7.5Y5/1	瓦当面:風化顕著、押型文 瓦裏面:ナデ仕上げ、端縁ナデ	国分寺3類
32-3	36		T69 東2区	96号溝	黒褐色土	瓦	軒丸瓦				40	1.0㎜以下の砂粒を含む		凹面:灰白色2.5Y7/1 凸面:灰白色2.5Y8/2	凹面:ケズリ 凸面:先端部にケズリ	丸瓦部 軟質
32-4	36		T69 東2区	96号溝	黒褐色土	瓦	軒丸瓦				287	1.0㎜位の砂粒を少し含む	良好	凹面:灰白色2.5Y8/2 凸面:灰白色2.5Y8/2	凹面:布目圧痕、糸切り痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:ケズリ後ナデ 側面ナデ	丸瓦部(差し込み部付近)硬質
32-5	36		T69 東2区	96号溝	黒褐色土	瓦	丸瓦 不明			2.0～2.3	540	1.0～3.0㎜の砂粒を少し含む	良好	凹面:灰白色10YR8/1 凸面:灰白色10YR8/2	凹面:布目圧痕、側縁ケズリ 凸面:縄タタキ後ナデ、糸切り痕	硬質
32-6	36		T69 東2区	96号溝	黒褐色土	瓦	丸瓦 不明			14.0～20.0	420	1.0～2.0㎜の砂粒を少し含む	良好	凹面:灰黄色2.5Y7/2 凸面:灰黄色2.5Y7/2	凹面:布目圧痕、右側縁ケズリ 凸面:縄タタキ後ナデ	硬質
32-7	36		T69 東1区	96号溝	黒褐色土	瓦	熨斗瓦		13.2		430	1.0～4.0㎜の砂粒を多く含む	良好	凹面:浅黄橙色10YR8/3 凸面:にぶい黄橙色10YR6/3	凹面:糸切り痕、ナデ、深さ1.5cmの切割、側縁ケズリ 凸面:格子タタキ、側面ケズリ	切割 熨斗瓦 硬質
32-8	36		T69 東2区	96号溝	黒褐色土	瓦	熨斗瓦		13.8	2.3～2.5	716	1.0～4.0㎜の砂粒を多く含む	不良	凹面:橙色7.5YR7/6 凸面:黄灰色2.5Y4/1	凹面:布目圧痕、深さ0.7mm切割,側縁ケズリ 凸面:格子タタキ、側面・端面ケズリ	切割 熨斗瓦 軟質
35-1	38	20-26	T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	軒丸瓦		16.3	瓦当面2.9～3.1	841	1.0～2.0㎜の砂粒を少し含む	良好	凹面:灰色N5/ 凸面:灰色N5/	瓦当面:押型文、連珠文(16珠？) 瓦当裏面:指圧痕	国分寺3型式 硬質
35-2	38		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	軒丸瓦		(4.1)	(2.2)	24	1.0～4.0㎜の砂粒を多く含む	不良	凹面:欠損の為不明 瓦当面:灰白色10YR8/2	瓦当面:凸線、連珠文 瓦当裏面:欠損の為不明	国分寺3類 軟質
35-3	38		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	軒丸瓦				624	1.0～4.0㎜の砂粒を多く含む	不良	凹・凸面:浅黄橙色10YR8/4 にぶい黄褐色10YR7/2	凹面:布目圧　痕(差込部ケズリ後)、側縁ケズリ 凸面:ナデ、側面ケズリ	丸瓦部 硬質 差込粘土付着
35-4	38		T69 東2区 南壁	96号溝(サブトレ)	褐灰色土	瓦	軒平瓦				90	1.0～3.0㎜の砂粒を少し含む		凹・凸面:灰黄色2.5Y7/2	凹面:丁寧なナデ 凸面:格子タタキ、正面端縁ケズリ	平瓦部 軟質
35-5	38		T69 東2区 南壁	96号溝	褐灰色土	瓦	平瓦 不明				249	1.0㎜位の砂粒を多く含む(最大9㎜の礫を含む)	良好	凹・凸面:灰白色2.5Y8/2	凹面:糸切り痕、側縁ケズリ 凸面:格子タタキ	硬質
35-6	38		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	平瓦				440	1.0～3.0㎜の砂粒を多く含む		凹・凸面:灰白色2.5Y8/1	凹面:布目圧痕、糸切り痕、先端縁ケズリ 凸面:格子タタキ	表面摩耗顕著 硬質
35-7	38		T69 東1区	96号溝	褐灰色土	瓦	平瓦			1.6～2.1	582	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	良好	凹面:灰白色2.5Y8/2 凸面:灰白色2.5Y8/ 1	凹面:布目圧痕、糸切り痕 凸面:格子タタキ、端面・側面ケズリ	切割熨斗瓦用の分割線(刻目)
35-8	38		T69 東1区	96号溝	褐灰色土	瓦	平瓦			2.2～2.7	871	1.0～4.0㎜の砂粒を含む	良好	凹・凸面:灰白色2.5Y7/1 灰白色2.5Y8/2	凹面:布目圧痕、糸切り痕、端縁・側縁ケズリ後ナデ 凸面:格子タタキ	硬質
36-1	38		T69 東1区	96号溝	褐灰色土	瓦	平瓦			2.5～2.7	560	1.0㎜位の砂粒を少し含む	良好	凹面:褐灰色10YR4/1 凸面:灰白色10YR7/ 1 にぶい黄橙色10YR7/2	凹面:布目圧痕、側縁ケズリ 凸面:格子タタキ	
36-2	38		T69 東1区	96号溝	褐灰色土	瓦	平瓦			1.7～2.4	980	1.0～3.0㎜の砂粒を含む	不良	凹面:浅黄橙色10YR8/4 凸面:褐灰色10YR6/1	凹面:布目圧痕、糸切り痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:格子タタキ	
36-3	39		T69 東1区	96号溝	褐灰色土	瓦	平瓦			2.0～2.5	690	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	不良	凹面:灰白色10YR8/1 浅黄橙色10YR8/3 凸面: 淡橙色5YR8/4	凹面:布目圧痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:格子タタキ	格子23 硬質
36-4	38		T69 東1区	96号溝(サブトレ南壁)	褐灰色土	瓦	平瓦			2.8	200	1.0～6.0㎜の砂粒を多く含む	良好	凹面:黄灰色2.5Y6/1 凸面:黄灰色2.5Y4/1	凹面:布目圧痕、糸切り痕 凸面:格子タタキ	軟質
36-5	39		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	丸瓦				300	1.0～3.0㎜の砂粒を含む	不良	凹面:灰色N5/ 凸面:灰白色2.5Y7/1、灰色N5/	凹面:布目圧痕、ハケ目？側縁ケズリ 凸面:側端面ケズリ	無段式丸瓦 硬質
36-6	39		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	丸瓦 不明			1.5～2.4	433	1.0～3.0㎜の砂粒を含む	不良	凹・凸面:淡橙色5YR8/4 浅黄橙色10YR8/3	凹面:布目圧痕、側縁ケズリ 凸面:ナデ仕上げ	硬質
37-1	39		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	丸瓦 不明			1.6～1.9	300	1.0～5.0㎜の砂粒を多く含む	不良	凹面:にぶい黄褐色10YR5/3 凸面:にぶい黄褐色10Y5/3	凹面:布目圧痕、側縁ケズリ 凸面:風化のため不明	硬質
37-2	39		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	丸瓦			1.4～2.1	360	1.0～2.0㎜の砂粒を少し含む		凹面:灰白色2.5Y7/1 凸面:灰色N5/	凹面:布目圧痕、糸切り痕、端縁ケズリ 凸面:縄タタキ後ナデ	硬質
37-3	39		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	丸瓦			1.6～2.2	300	1.0～2.0㎜の砂粒を含む		凹面:灰色N4/ 凸面:灰色N6/	凹面:布目圧痕、側端縁ケズリ 凸面:ナデ	硬質
37-4	39		T69 東2区	96号溝(南壁)	褐灰色土	瓦	丸瓦	17.5		1.9～2.3	553	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	良好	凹・凸面:灰白色2.5Y8/1	凹面:布目圧痕、側縁ケズリ 凸面:縄タタキ後ナデ、端面・側面ケズリ	無段式丸瓦 硬質
37-5	39		T69 東1区	96号溝	褐灰色土	瓦	丸瓦			1.8～2.4	675	1.0㎜位の砂粒を少し含む	良好	凹・凸面:灰白色2.5Y7/1	凹面:布目圧痕、側縁ケズリ 凸面:縄タタキ後ナデ、端縁指圧？	無段式 硬質
37-6	39		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	瓦	熨斗瓦			1.4～2.0	180	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む		凹面:黄灰色2.5Y4/1 凸面:黄灰色2.5Y5/1	凹面:布目圧痕、糸切り痕、先端縁ケズリ 凸面:格子タタキ	切割 熨斗瓦 軟質
37-7	39		T69 東1区	96号溝	褐灰色土	瓦	熨斗瓦		14.1	2.0～2.3	358	1.0～5.0㎜の砂粒を多く含む	良好	凹・凸面:灰色.5Y6/1 灰白色2.5Y8/2	凹面:布目圧痕、深さ6㎜の切り込み 凸面:縄タタキ、端面・側面ケズリ	切割 熨斗瓦 軟質
40-14	40		T71 1区	98号溝	埋土	瓦	平瓦				440	密(1～3㎜の砂粒を含む)	良好	凹面:にぶい黄橙色10YR7/3 凸面:浅黄橙色10YR8/3	凹面:布目圧痕、　糸切り痕 凸面:格子タタキ	出雲国分寺補修期
40-15	40		T71 1区	98号溝		瓦	平瓦				180	密(1㎜の砂粒を含む)	良好	凹面:灰白色2.5Y8/1 凸面:暗青灰色5B/4/1	凹面:糸切り痕 凸面:格子タタキ	出雲国分寺補修期
40-16	40		T71 1区	98号溝		瓦	丸瓦				70	密(1㎜の砂粒を含む)	良好	凹面:黒褐色10YR3/1 凸面:灰白色2.5Y7/1	凹面:布目圧痕 凸面:縄目タタキのちナデ	出雲国分寺補修期

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量( )内復元値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
43-5	41		T69 西1区	71号土坑	埋土	瓦	軒丸瓦				20	1.0～2.0㎜の砂粒を少し含む	良好	凹面:灰白色10YR8/2 凸面:にぶい黄橙色10YR7/2	瓦当面:押型文、ヨコナデ 瓦当裏面:ヨコナデ、ヨコケズリ	
43-6	41		T69 西1区	71号土坑	埋土	瓦	軒丸瓦				20	1.0～2.0㎜の砂粒を含む		凹面:灰白色10YR8/2 凸面:浅黄橙色10YR8/3	瓦当面:連珠文	国分寺３類 軟質
43-7	41		T69 西1区	71号土坑	埋土	瓦	軒丸瓦				120	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む		凹面:灰色N5/ 凸面:灰色N5/	瓦当面:2ヶ所ケズリ(3ヶ所?) 瓦当裏面:ケズリ	丸瓦部 軟質
43-8	41		T69 西1区	71号土坑	埋土	瓦	軒丸瓦				90	1.0～2.0㎜の砂粒を含む		凹面:灰色N6/ 凸面:灰白色2.5Y8/2	凹面:布目圧痕	丸瓦部 軟質
43-9	41		T69 西1区	71号土坑	埋土	瓦	軒丸瓦		5.4	1.3～2.8	140	1.0～3.0㎜の砂粒を多く含む(最大9.0㎜の砂礫を含む)		凹面:灰白色10YR8/2 凸面:浅黄橙色10YR8/4	凹面:布目圧痕、糸切痕、先端縁ケズ 凸面:指圧痕、ケズリ	丸瓦部 軟質
43-10	41		T69 西1区	71号土坑	埋土	瓦	丸瓦	玉縁部5.1		玉縁部0.8～1.3	105	1.0～4.0㎜の砂粒を少し含む	良好	凹面:灰色N4/1 凸面:灰色N5/1	凹面:布目圧痕、(玉縁部)端縁ナデ 凸面:(筒部・玉縁部)ナデ	有段式 丸瓦A
47-7	41		T70 東2区	73号土坑		瓦	平瓦				190	密(1～2㎜の砂粒を多く含む)	良好	凹面:灰色N4/ 凸面:灰白色N7/	凹面:布目圧痕、糸切り痕 凸面:格子タタキ、離れ砂	国分寺 創建期
47-8	41		T70 東2区	73号土坑		瓦	平瓦				200	密(1㎜以下の砂粒を多く含む)	良好	凹面:灰白色5Y8/1 凸面:灰白色5Y8/1	凹面:糸切り痕 凸面:格子タタキ	国分寺 補修期
50-2	42	20-109	T71-1区	1号石敷遺構		瓦	軒丸瓦				590	密(1～2㎜の砂粒を含む)	良好	凹面:灰黄褐色10YR6/2 凸面:灰黄色2.5Y7/2	瓦当面:はがれ? 凹面:布目圧痕のちケズリ、キザミ目、側縁ケズリ 凸面:ケズリ	丸瓦部 国分寺 創建期
50-3	42	20-108 20-124	T71-1区	1号石敷遺構		瓦	丸瓦				700	密(1～2㎜の砂粒を含む)	良好	凹面:灰色5Y7/1 凸面:灰色5Y6/1	凹面:布目圧痕、側縁ケズリ 凸面:ナデ	有段式 丸瓦A 硬質
57-1	42		T70 東1区	P1(034)		瓦	平瓦				124	密(1～3㎜の砂粒を含む)	良好	凹面:灰黄色2.5Y7/2 凸面:黄灰色2.5Y6/1	凹面:布目圧痕 凸面:格子タタキ、側面ケズリ	側面、凸面に朱付着 硬質
59-1	42		T70 西1区	P1(T70-13)		瓦	熨斗瓦				490	密(1～2㎜の砂粒を含む)	良好	凹面:灰黄色2.5Y7/2 凸面:褐灰色10YR4/1	凹面:布目圧痕 凸面:格子タタキ、側面ケズリ、離れ砂	国分寺 補修期
64-1	44		T69 西1区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦			瓦当面1.4	20	1.0～3.0㎜の砂粒を多く含む		瓦当面:浅黄橙色10YR8/3 瓦当裏面:浅黄橙色10YR8/3	瓦当面:文様不明	軟質
64-2	44		T69 西2区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦			1.3～2.2	90	2.0～4.0㎜の砂粒を含む		凹面:淡黄色2.5Y8/3 凸面:浅黄橙色7.5YR8/4	凹面:布目圧痕、先端縁ケズリ 凸面:差込部ケズリ	丸瓦部 軟質
64-3	44		T69 西1区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦			1.5～2.1	100	1.0～2.0㎜の砂粒を含む		凹・凹面:にぶい黄橙色10YR7/2	凹面:布目圧痕、刻目1本 凸面:ナデ、刻目2本、広端側面ケズリ	丸瓦部 硬質
64-4	44		T69 東2区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦			1.5～2.7	430	1.0～5.0㎜の砂粒を含む	不良	凹面:にぶい黄橙色10YR6/3 凸面:にぶい黄色2.5YR6/3	凹面:ナデ、差込部ケズリ 凸面:縄タタキ?、ナデ仕上げ、差込部ケズリ	丸瓦部
64-5	45		T69 東2区		暗褐色土	瓦	軒平瓦			2.6～4.2	798	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	不良	凹面:にぶい黄橙色10YR6/4 凸面:にぶい黄橙色10YR7/4	凹面:布目圧痕 凸面:格子タタキ	平瓦部 軟質
64-6	45		T69 東2区		暗褐色土	瓦	平瓦			1.4～2.4	600	1.0㎜位の砂粒を少し含む	良好	凹面:灰白色2.5Y8/2 凸面:灰黄色2.5Y6/2	凹面:布目圧痕、糸切り痕、側縁・端縁ケズリ 凸面:格子タタキ	硬質
64-7	45		T69 西1区		暗褐色土	瓦	平瓦			2.2～2.8	710	最大7㎜の砂礫を含む	良好	凹面:灰白色10YR8/2 灰白色10YR7/1 凸面:にぶい黄橙色10YR7/3 褐灰色10YR6/1	凹面:布目圧痕、糸切り痕、端角ケズリ凸面:格子タタキ、(正面)広端面ケズリ	硬質
65-1	45		T69 東1区		暗褐色土	瓦	平瓦				660	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	良好	凹面:灰色7.5Y5/1 凸面:灰黄色2.5Y7/2	凹面:布目圧痕、糸切り痕、側縁・端縁ケズリ 凸面:格子タタキ	硬質
65-2	45		T69 西1区		暗褐色土	瓦	平瓦				460	1.0～2.0㎜の砂粒を含む		凹・凹面:にぶい黄橙色10YR7/2	凹面:布目圧痕、糸切り痕、中央に分割線、先端縁ケズリ 凸面:格子タタキ、先端縁分割線通し凹み	軟質
65-3	45		T69 西1区		暗褐色土	瓦	丸瓦不明				190	1.0～3.0㎜の砂粒を多く含む	不良	凹・凹面:黄灰色2.5Y6/1、灰白色2.5Y8・2	凹面:糸切り痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:縄タタキ後ナデ	硬質
65-4	45		T69 西1区		暗褐色土	瓦	丸瓦不明			2.4～2.7	670	1.0～2.0㎜の砂粒を少し含む	良好	凹・凸面:灰白色10YR8/1 にぶい黄橙色10YR7/2	凹面:布目圧痕、糸切り痕、側縁ケズリ 凸面:縄タタキ後ナデ	硬質
65-5	45		T69 東2区		暗褐色土	瓦	丸瓦玉縁部				90	1.0～2.0㎜の砂粒を含む		凹面:灰白色2.5Y8/2 凸面:灰黄色2.5Y 7/2	凹面:糸切り痕 凸面:広端側面ケズリ、筒部との接部にケズリ	有段式 丸瓦B 軟質
65-6	45		T69 西1区		暗褐色土	瓦	丸瓦	玉縁6.0		玉縁0.8～1.5	79	1.0～2.0㎜の砂粒を少量含む	良好	凹・凹面:灰白色10YR8/2	凹面:布目圧痕、側縁ケズリ 凸面:丁寧なナデ	有段式 丸瓦A 硬質
65-7	45		T69 東2区		暗褐色土	瓦	熨斗瓦				350	1.0～4.0㎜の砂粒を多く含む	不良	凹面:浅黄橙色10YR8/4 橙色7.5YR7/6 凸面:にぶい橙色7.5YR7/4 浅橙色7.5YR8/4	凹面:布目圧痕、深さ0.7㎜の切り込み 凸面:格子タタキ	切割 熨斗瓦 軟質
66-1	46		T69 西3区		暗褐色土	瓦	鬼瓦				710	1.0～3.0㎜の砂粒を多く含む	不良	凹面:浅黄橙色10YR8/3 黄灰色2.5Y6/1～5/1 凸面:浅黄橙色10YR8/3	凹面:布目圧痕 凸面:格子タタキ	軟質
66-2	46		T69 東2区		暗褐色土	瓦	熨斗瓦		7.8		370	最大1.8cm、2.0㎜～6.0㎜の砂粒を多く含む	良好	凹面:灰白色2.5Y8/2 狭端面一部黄灰色2.5Y6/1 凸面:灰白色2.5Y8/2	凹面:布目圧痕、端縁・側縁ケズリ、深さ0.5㎜の切割 凸面:縄タタキ、端面ケズリ	切割 熨斗瓦 硬質
66-3	46		T69 東2区		暗褐色土	瓦	熨斗瓦			1.6～2.3	719	1.0-3.0㎜の砂粒を多く含む	良好	凹面:淡黄色2.5Y8/3 凸面:淡黄色2.5Y8/3	凹面:布目、糸切り痕、端縁ケズリ後ナデ 凸面:格子タタキ、端面ケズリ	軟質
67-11	46		T69 西1区		黒褐色土	瓦	丸瓦不明		14.8	2.2	916	2.0㎜位の砂粒含む	良好	凹面:灰白色2.5Y8/2 凸面:灰白色2.5Y8/2	凹面:布目圧痕、両側縁ケズリ 凸面:縄タタキ、タテ方向に縄目後ナデ仕上げ	硬質
73-1	48		T70 東1区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦				131	やや粗(1㎜の砂粒を含む)	不良	瓦当面:笵キズあり、圏線、珠文、ナデ 瓦当裏面:ナデ	瓦当面:笵キズあり、圏線、珠文、ナデ 瓦当裏面:ナデ	国分寺3類
73-2	48		T70 東3区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦					密(1㎜以下の砂粒を少量含む)	良好	瓦当面:灰白色2.5Y7/1 瓦当裏面:灰白色2.5Y8/2	瓦当面:圏線 瓦当裏面:ナデ	国分寺 補修期
73-3	48		T70 東3区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦				2713	密(1㎜以下の砂粒を少量含む)	良好	瓦当面:暗灰色N3/1 瓦当裏面:灰白色2.5Y8/1	瓦当面:圏線	国分寺 補修期
73-4	48		T70 東3区		暗褐色土	瓦	平瓦				202	密(1～最大10㎜の砂(石)を含む)	良好	凹・凸面:灰色5Y6/1	凹面:布目圧痕 凸面:縄タタキ	縄目１ 硬質

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量( )内復元値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
73-5	48		T70 東3区		暗褐色土	瓦	平瓦			2.5	345	密(1~3mmの砂粒を多く含む)	良好	凹・凸面:橙色5YR7/6	凹面:布目圧痕か? 凸面:格子タタキ、端面ケズリ	格子2 軟質
73-6	48		T70 東3区		暗褐色土	瓦	平瓦			2.0	176	密(1mmの砂粒を少量含む)		凹・凸面:灰白色N7/1	凹面:布目圧痕 端縁・側縁ケズリ 凸面:格子タタキ	格子5 硬質
73-7	48		T70 東3区		暗褐色土	瓦	平瓦				470	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	凹・凸面:灰白色2.5Y8/1	凹面:布目圧痕 凸面:格子タタキ、ケズリ	格子11 硬質
73-8	48		T70 東3区		暗褐色土	瓦	平瓦			2.2	298	密(1~2mmの砂粒を少量含む)	良好	凹面:橙色7.5YR7/6 凸面:にぶい橙色7.5YR7/3	凹面:布目圧痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:格子タタキ	格子15 軟質
73-9	49		T70 西1区		暗褐色土	瓦	平瓦				281	密(1mmの砂粒を含む)	良好	凹・凸面:灰色7.5Y6/1	凹面:布目圧痕、糸切り痕、側縁ケズリ 凸面:格子タタキ	格子18 硬質
73-10	49		T70 西1区		暗褐色土	瓦	平瓦			3.0	327	密(1mm以下の砂粒を多く含む)	良好	凹面:灰白色10YR8/2 凸面:浅黄橙色10RY8/3	凹面:糸切り痕、端縁ケズリ 凸面:格子タタキ	格子不明 軟質
73-11	49		T70 東3区		暗褐色土	瓦	平瓦			12.6	497	密(1~2mmの砂粒を多く含む)	良好	凹面:灰白色2.5Y8/1 凸面:灰色N5Y/	凹面:布目圧痕 凸面:ケズリ、ナデ、端面ケズリ	軟質
74-1	49	20-49	T70 東3区	攪乱4	暗褐色土	瓦	丸瓦				790	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	凹・凸面:灰色2.5Y8/1	凹面:布目圧痕、端縁・側縁ケズリ、糸切り痕 凸面:ナデ	無段式 丸瓦 軟質
74-2	49		T70 東1区		暗褐色土	瓦	丸瓦				170	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	凹・凸面:灰色N6/	凹面:布目圧痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:ナデ	無段式 丸瓦 軟質
74-3	49		T70 東2区		暗褐色土	瓦	丸瓦			2.1	221	密(1~2mmの砂粒を多く含む)	良好	凹面:灰色N4/ 凸面:褐灰色10YR5/1	凹面:布目圧痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:ナデ	無段式 丸瓦 軟質
74-4	49		T70 東1区		暗褐色土	瓦	丸瓦			1.6	54	密(1~2mmの砂粒を少量含む)	良好	凹面:灰色N5/ 凸面:灰色7.5Y6/1	凹面:布目圧痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:ナデ	有段式玉縁部　丸瓦A 硬質
74-5	49		T70 東2区		暗褐色土	瓦	丸瓦 不明			1.5	83	密(1mmの砂粒を多く含む)	良好	凹面:灰色N6/ 凸面:灰色N5/	凹面:布目圧痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:ナデ	硬質
74-6	49		T70 東3区		暗褐色土	瓦	丸瓦 不明			2.5	149	密(1mm以下の砂粒を多く含む)	良	凹面:浅黄橙色7.5YR8/4 凸面:浅黄橙色10YR8/4	凹面:布目圧痕 凸面:ナデ、竹管文	軟質
74-7	49		T70 東3区		暗褐色土	瓦	丸瓦 不明				154	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	良好	凹・凸面:灰白色10YR8/2	凹面:布目圧痕、ケズリ 凸面:ナデ	
74-8	49		T70 東3区		暗褐色土	瓦	熨斗瓦				429	密(1~3mmの砂粒を含む)	やや不良	凹・凸面:灰色5Y4/1	凹面:布目圧痕、端縁ケズリ 凸面:格子タタキ、離れ砂	切割 熨斗瓦
74-9	49		T70 西1区		暗褐色土	瓦	熨斗瓦			2.5	79	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	軟	凹・凸面:にぶい橙色5YR7/4	凹面:布目圧痕、側縁ケズリ 凸面:縄タタキ	軟質
75-8	50		T70 東2区		検出面	瓦	軒丸瓦				16	密(1～2mmの砂粒を少量含む)		瓦当面:浅黄橙色10YR8/3 瓦当裏面:浅黄橙色10YR8/2	瓦当面:圏線、珠文	国分寺3類 軟質
75-9	50		T70 東2区		検出面	瓦	平瓦			2.8	242	密(微砂粒を多く含む)	良	凹面:灰白色2.5Y8/1 凸面:灰白色2.5Y8/1	凹面:布目圧痕 凸面:平行タタキ	切割 熨斗瓦 格子7
75-10	50	19-6	T70 東2区		検出面	瓦	平瓦				260	密(1～1.5mmの砂粒を少量含む)	良	凹面:灰白色2.5Y8/1 凸面:灰白色2.5Y8/1	凹面:布目圧痕、ケズリ 凸面:摩滅で不明	軟質
75-11	50	19-4	T70 東2区		検出面	瓦	平瓦			2.7	851	密(1mm以下の砂粒を多く含む)	良好	凹面:灰白色10YR8/1 凸面:灰白色10YR8/1	凹面:布目圧痕、糸切り痕、端縁・側縁ケズリ 凸面:格子タタキ	軟質 格子不明
76-9	50		T70 西1区		第1整地層	瓦	平瓦				150	密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	凹面:灰白色5Y8/1 凸面:灰白色5Y8/	凹面:布目圧痕、切り込み 凸面:格子タタキ、離れ砂	国分寺 補修期
76-10	50		T70 西1区		第1整地層	瓦	丸瓦				50	密(1mmの砂粒を含む)	やや不良	凹面:灰白色2.5Y8/1 凸面:灰白色2.5Y8/1	凹面:摩滅激しく不明 凸面:摩滅激しく不明	隅落とし 国分寺 補修期
77-5	51		T70 東3区	攪乱4		瓦	軒丸瓦				20	密(1～3mmの砂粒を含む)	良好	凹面:浅黄橙色10YR8/3 凸面:浅黄橙色10YR8/3	瓦当面:圏線 凸面:ナデ	国分寺 3類
77-6	51		T70 東3区	攪乱4		瓦	軒丸瓦				20	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	凹面:灰白色2.5Y7/1 凸面:黄灰色2.5Y4/1	瓦当面:圏線、珠文 凹面:不明 凸面:ナデorケズリ	国分寺 3類 軟質
77-7	51	20-34	T70 東3区	攪乱4		瓦	軒丸瓦				300	密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	凹面:浅黄橙色10YR8/3 凸面:浅黄橙色7.5YR8/6	瓦当面:剥離 凹面:布目圧痕 凸面:ナデかケズリ、摩滅	丸瓦部 国分寺 補修期
77-8	51	20-33	T70 東3区	攪乱4		瓦	平瓦				380	密(1～3mmの砂粒を含む)	良好	凹面:浅黄橙色10YR8/3 凸面:灰白色2.5YR8/2	凹面:布目圧痕、ケズリ 凸面:格子タタキ	格子8 軟質
77-9	51	20-42	T70 東3区	攪乱4		瓦	平瓦				1,430	密(1mm程度の砂粒、5～15mmの小石を含む)	良好	凹面:淡黄色2.5Y8/3 凸面:浅黄橙色7.5YR8/6	凹面:布目圧痕、、側縁ケズリ 凸面:格子タタキ、離れ砂	格子8 軟質
78-1	51	20-52	T70 東3区	攪乱4		瓦	平瓦				780	密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	凹面:灰黄色2.5Y6/2 凸面:にぶい黄橙色10YR7/4	凹面:布目圧痕、 側縁ケズリ 凸面:格子タタキ、離れ砂	軟質 格子8
78-2	51		T70 東3区	攪乱4		瓦	平瓦				920	密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	凹面:灰白色10YR8/1 凸面:灰白色10YR8/1	凹面:布目圧痕、 凸面:格子タタキ、側面ケズリ、離れ砂	軟質 格子2
78-3	52	20-51	T70 東3区	攪乱4		瓦	丸瓦 不明				210	密(1～3mmの砂粒を含む)	良好	凹面:灰色5Y6/1 凸面:灰色5Y6/1	凹面:布目圧痕、ケズリ 凸面:縄タタキ	硬質
78-4	52	20-47	T70 東3区	攪乱4		瓦	丸瓦				310	密(1～3mmの砂粒を含む)	良好	凹面:橙色5YR7/6 凸面:浅黄橙色10YR8/4	凹面:布目圧痕?側縁ケズリ 凸面:ナデ	無段式 丸瓦 軟質
78-5	52		T70 東3区	攪乱4		瓦	丸瓦				190	密(1～2mmの砂粒を含む)	良好	凹面:淡黄色2.5Y8/3 凸面:淡黄色2.5Y8/3	凹面:布目圧痕、ケズリ 凸面:ナデ	有段式 丸瓦B 軟質
79-4	52		T71 1区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦				10	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	凹面:にぶい橙色2.5YR6/4 凸面:にぶい橙色7.5YR7/4	凹面:割れで不明 凸面:ナデ?	瓦当部 国分寺3類
79-5	52		T71 2区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦				30	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	凹面:橙色7.5YR7/6 凸面:褐灰色10YR4/1	凹面:欠で不明 凸面:ナデ	瓦当部 国分寺3類
79-6	52		T71 1区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦				50	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	凹面:橙色7.5Y6/6 凸面:灰色7.5Y5/1	凹面:ナデ 凸面:ケズリ	瓦当部 国分寺1類
79-7	52		T71 1区		暗褐色土	瓦	軒丸瓦				280	密(1mmの砂粒を含む)	良好	凹面:褐灰色10YR4/1 凸面:灰白色2.5Y8/1	凹面:キザミ目、布目圧痕? 凸面:キザミ目、ナデ	丸瓦部 軟質
79-8	52		T71 2区		暗褐色土	瓦	丸瓦				250	密(1mmの砂粒を含む)	良好	凹面:灰黄褐色10YR5/2 凸面:浅黄橙色10YR8/3	凹面:布目圧痕、模骨痕? 凸面:縄タタキのちナデ	軟質
79-9	52		T71 2区		暗褐色土	瓦	隅切平瓦				90	密(1mm以下の砂粒を含む)	良好	凹面:灰白色5Y8/1 凸面:敗白色2.5Y8/1	凹面:布目圧痕? 凸面:格子タタキ	軟質
80-2	52		T69 西1区		埋戻土	瓦	軒丸瓦				21	密(1mm程度の砂粒を若干含む)	良	瓦当面:灰白色2.5Y8/1 瓦当裏面:灰白色2.5Y8/2	瓦当面:外区ケズリ?凸面:ケズリ?、縄タタキのちナデ	軟質

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量( )内復元値				胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)					
80-3	52		T69 西1区		埋戻土	瓦	丸瓦				280	密(1～2㎜の砂粒を多く含む)	良好	凹面:褐灰色10YR6/1 凸面:褐灰色10YR6/1	凹面:布目圧痕 凸面:ナデ	
80-4	52		T69 西1区		埋戻土	瓦	丸瓦				150	密(1㎜の砂粒を含む)	良好	凹面:灰白色2.5Y7/1 凸面:灰白色2.5Y7/1	凹面:布目圧痕、ケズリ 凸面:ナデ	
81-4	52		昭和調査区(II区)		埋戻土	瓦	軒丸瓦				60	密(1～3㎜の砂粒を含む)	やや不良	凹面:灰白色5Y8/1 凸面:黄灰色2.5Y4/1	瓦当面:二重の圏線 凹面:摩滅激しく調整不明	国分寺3類
81-5	52		昭和調査区(II区)		埋戻土	瓦	軒丸瓦				90	密(1～9㎜の砂、石を含む)	良好	凹面:淡黄色2.5Y8/3 凸面:淡黄色2.5Y8/3	凹面:布目圧痕 凸面:ケズリ	国分寺補修期　丸瓦部軟質

第 28 表　出雲国府跡出土石・石製品観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量( )内復元値				石材	色調	調整・手法の特徴	備考
								長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)				
24-9	35	19-2	T69 西1区	35号-10掘方or抜きとり	検出面	石		4.3	2.9	2.7	39	水晶	透明		一部剥離面あり
24-10	35	19-3	T69 西1区	35号-10	検出面	石		5.4	4.0	3.3	76	水晶	透明		
37-8	40		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	石製品		3.4	2.2	1.6	14	水晶	透明		
37-9	40		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	石製品		3.7	2.5	2.3	12	水晶	透明		
38-1	40		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	石製品	石核	6.0	7.8	2.7	138	碧玉	オリーブ灰色2.5GY5/1		
38-2	40		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	石製品	石核	7.1	5.8	3.8	212	碧玉	濃緑色		打点1ヶ所
38-3	40		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	石製品	石核	5.1	4.1	2.6	66	碧玉	濃緑色		
38-4	24		T69 東2区	96号溝	黒褐色土	石製品	礎石	74.8	53.3	19.3(最大)	77,219	安山岩or流紋岩			一部被熱痕
45-4	41		T69 西2区	72号土坑	土器内充填土	石製品	白玉	0.51	0.5	0.13	0.1	滑石	暗青灰色10BG3/1		
66-4	46		T69 西1区		暗褐色土	石製品	管玉(未成品)	2.2	0.7	0.6	1.7	碧玉or緑色凝灰岩	オリーブ灰色5GY6/1		
74-10	49		T70 西1区		暗褐色土	石製品	碁石？平玉？	1.53	1.56	0.63	2.2	水晶	透明		
75-12	50	19-9	T70 西2区		検出面	石製品	碁石？平玉？	2.43	2.13	0.53	3.9	流紋岩	赤褐色2.5YR4/6		
75-13	50	19-8	T70 東2区		検出面	石製品	切子玉	1.45	1.15	1.05	2.3	水晶	透明	使用痕が少ない	6c前～中葉
79-10	52		T71 2区		暗褐色土	石製品	碁石	1.68	1.69	1.605	2.5		黒N1.5/	ケズリ、面取り後未調整	
80-5	52		T69 西1区		層位不明	石製品	碁石？平玉？	2.04	1.94	0.87	4.7		黒N2/		
80-6	52		T69		埋戻土	石製品	板石硯？	5.8	4.1	0.24～0.78	28.3		オリーブ黄色5Y6/3	表面:剥離後研磨？使用痕か 裏面:剥離未調整 側面:打ち割り後研磨	中世の研石の可能性もあり

第 29 表　出雲国府跡出土鉄製品

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量( )内復元値				備考
								長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
38-7	53		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	鉄製品	小札	(6.3)	2.0	0.1～0.2	30.6	3枚の板が重なる孔は見えない
43-11	53		T69 西1区	71号土坑		鉄製品	小札		2.0	0.1	4.0	２枚の小札が重なる
66-5	53		T69 西2区		暗褐色土	鉄製品	小札	6.8	2.7～2.8	0.1㎜内外	25.4	斜めの板が重なるいずれも孔あり
66-6	46		T69 西2区		暗褐色土	鉄滓		5.8	4.4	3.5	139.3	
68-9	53		T69 東1区		検出面	鉄製品	小札	7.7	2.3	0.106～0.154	16.8	3枚の板が有機物で繋がる？階段状に重なる、多孔
68-10	53		T69 東2区		検出面	鉄製品	小札	(8.4)	3.4	0.2～0.1	28.2	外面木質付着
78-6	53		T69 東3区	攪乱4		鉄製品	小札	(2.8)	(2.1)	0.136	2.2	孔4つあり
78-7	53		T69 東3区	攪乱4		鉄製品	小札	(2.2)	1.9	0.116	2.1	孔なし

第 30 表　出雲国府跡出土製鉄関連遺物観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種	法量( )内復元値				胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								長(cm)	幅(cm)	厚(mm)	重量(g)					
32-10	36		T69 東1区	96号溝	黒褐色土	製鉄関連遺物	坩堝	口径:10.2	器高:(4.0)		54.2	やや粗(1㎜以下の砂粒を含む)	良好	外面:浅黄色2.5Y7/3 内面:黄灰色2.5Y6/1	外面:摩滅し不明 内面:滓付着	
38-5	40		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	製鉄関連遺物	羽口				89.0	1～3㎜の砂粒を含む	良好	外面:橙色5YR7/6 内面:浅黄橙色10YR8/4	外面:指頭圧痕が周回	
38-6	40		T69 東2区	96号溝	褐灰色土	製鉄関連遺物	羽口				64.7	粗(1～2㎜大の砂粒を多く含む)	良好	外面:明青灰色7/1	外面:ナデ	

図版

T70　全景（南東から）

T71　全景・37 号建物検出状況（南東から）

T59　段下げ状況（西から）

T60　段下げ状況（西から）

T59　大型掘方検出状況（北から）

T60　17 号井戸検出状況（南から）

T69　全景（北から）

T70　全景（北から）

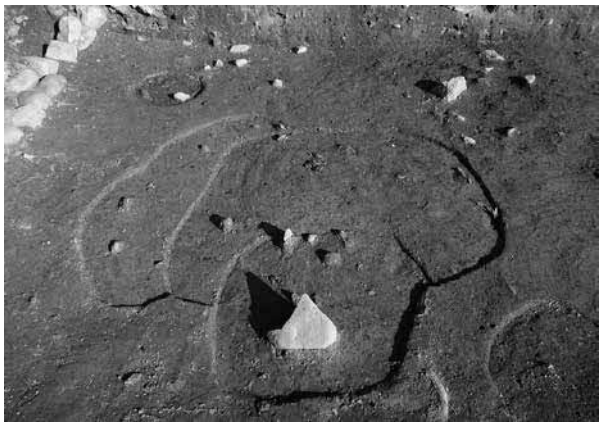
T71　全景（南から）

T69　拡張区全景（北から）

図版 6

35 号建物（南東から）

36 号建物（南東から）



35 号建物　P6（南から）

35 号建物　P9（北から）

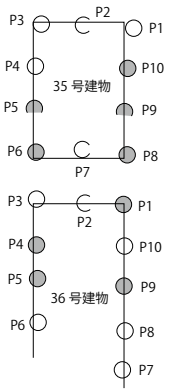
35 号建物　P10（南東から）

35 号建物　P10 遺物出土状況（東から）

35 号建物　P8 調査状況（南から）

35 号建物　P8 土層断面（南から）

35 号建物　P8 攪乱内土層断面（南から）



図版 8

35 号建物　P5（北から）

35 号建物　P5 調査状況（北から）

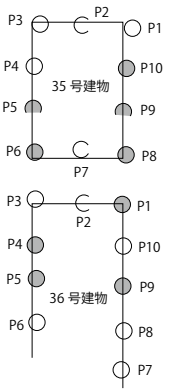
35 号建物　P5 土層断面（北から）

35 号建物　P5 土層断面（北東から）

35 号建物　P5 土層断面（北西から）

36 号建物　P5（南から）

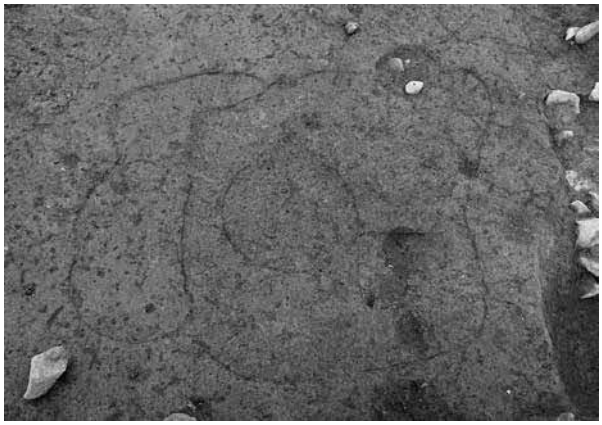
36 号建物　P9（南から）



36 号建物　P1（南から）

36 号建物　P1 掘削状況（南から）

36 号建物　P1 攪乱内土層断面（南西から）

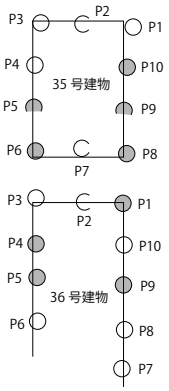


36 号建物　P4（南から）

36 号建物　P4 掘削状況（南から）

36 号建物　P4 土層断面（南から）

36 号建物　P4 土層断面（西から）



37 号建物検出状況（北から）

37 号建物（南東から）

37 号建物　P1（南から）

37 号建物　P2（南から）

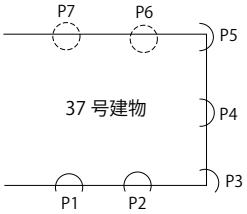
37 号建物　P3（南から）

37 号建物　P4（南から）

37 号建物　P5（西から）

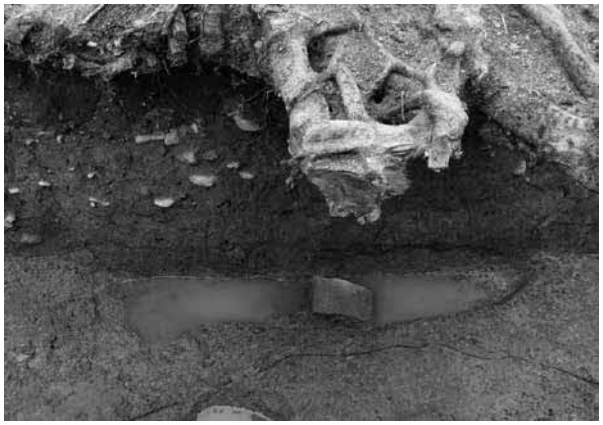
37 号建物　P6（東から）

37 号建物　P7（南東から）



38 号建物・SD055（北東から）

38 号建物　P1（北から）



38 号建物　P2（北から）

38 号建物　P2（北西から）

38 号建物　P3（北から）

96 号溝検出状況（北から）

96 号溝調査状況（北から）

96 号溝調査状況（南から）

96 号溝土層断面（T69 東 2 区）（南から）

96 号溝土層断面（T69 東 1 区）（南から）

96 号溝礎石出土状況（南東から）

97 号溝調査状況（東から）

98 号溝調査状況（西から）

98 号溝検出状況（南東から）

98 号溝遺物出土状況（西から）

98 号溝土層断面（東から）（1）

98 号溝土層断面（東から）（2）

72 号土坑検出状況（南から）

72 号土坑調査状況（南から）

T70 東 2 区　土坑群検出状況（西から）

T70 東 2 区　土坑群検出状況（北から）

73 号土坑土師器検出状況（南から）

73 号土坑土師器調査状況（北から）

73 号土坑西側土師器掘削状況（北から）

73 号土坑西側土師器掘削状況（石除去後・北から）

73 号土坑東側土師器掘削状況

73 号土坑土層断面

75 号土坑（北西から）

76 号土坑（北から）

77 号土坑（西から）

71 号土坑（南から）

74 号土坑検出状況（南から）

74 号土坑南側土師器掘削状況（南から）

74 号土坑南側土師器掘削状況（西から）

74 号土坑北側土師器掘削状況（南から）

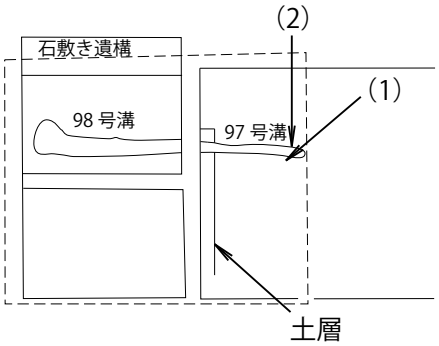
74 号土坑北側土師器掘削状況（東から）

1 号石敷遺構検出状況（南から）

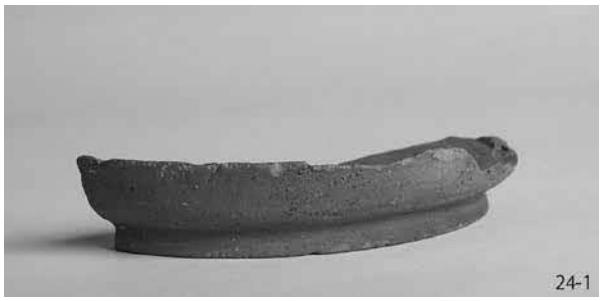
1 号石敷遺構検出状況土層断面（南東から）

1 号石敷遺構石検出状況（1）

1 号石敷遺構石検出状況（2）



図版 22


24-1

31-1

31-5

31-11

33-2

33-11

33-19

34-1

34-2

34-3

34-4

34-5

34-6

34-7

34-9

39-1

40-1

40-2

40-3

図版 24

38-4

40-4

40-5

40-6

40-7

40-9

42-10

42-1

42-2

42-3

42-4

42-5

42-6

42-7

42-8

42-9

42-10

42-11

42-12

42-13

42-14

42-15

42-16

42-17

42-18

42-19

42-20

42-21

42-22

42-23

42-24

42-25

42-26

42-27

42-28

42-29

42-30

42-32

54-1

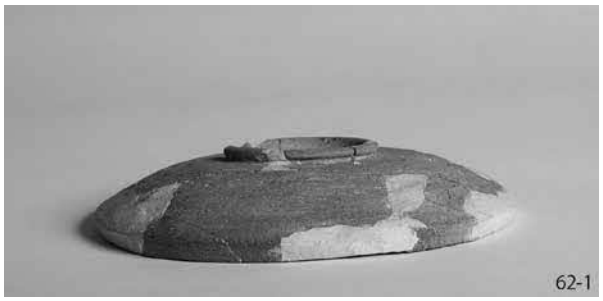
54-2

54-3

54-4

56-1

図版 28


62-1

62-9

62-11

62-18

63-6

63-7

63-9

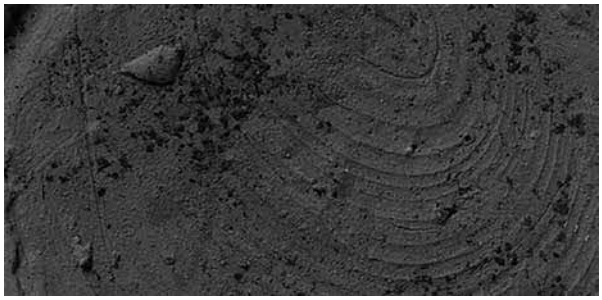
68-3

70-1

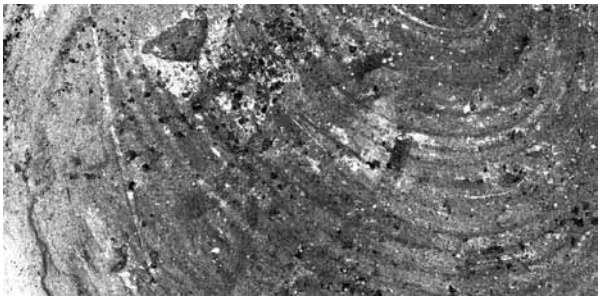
71-5

71-14

71-15



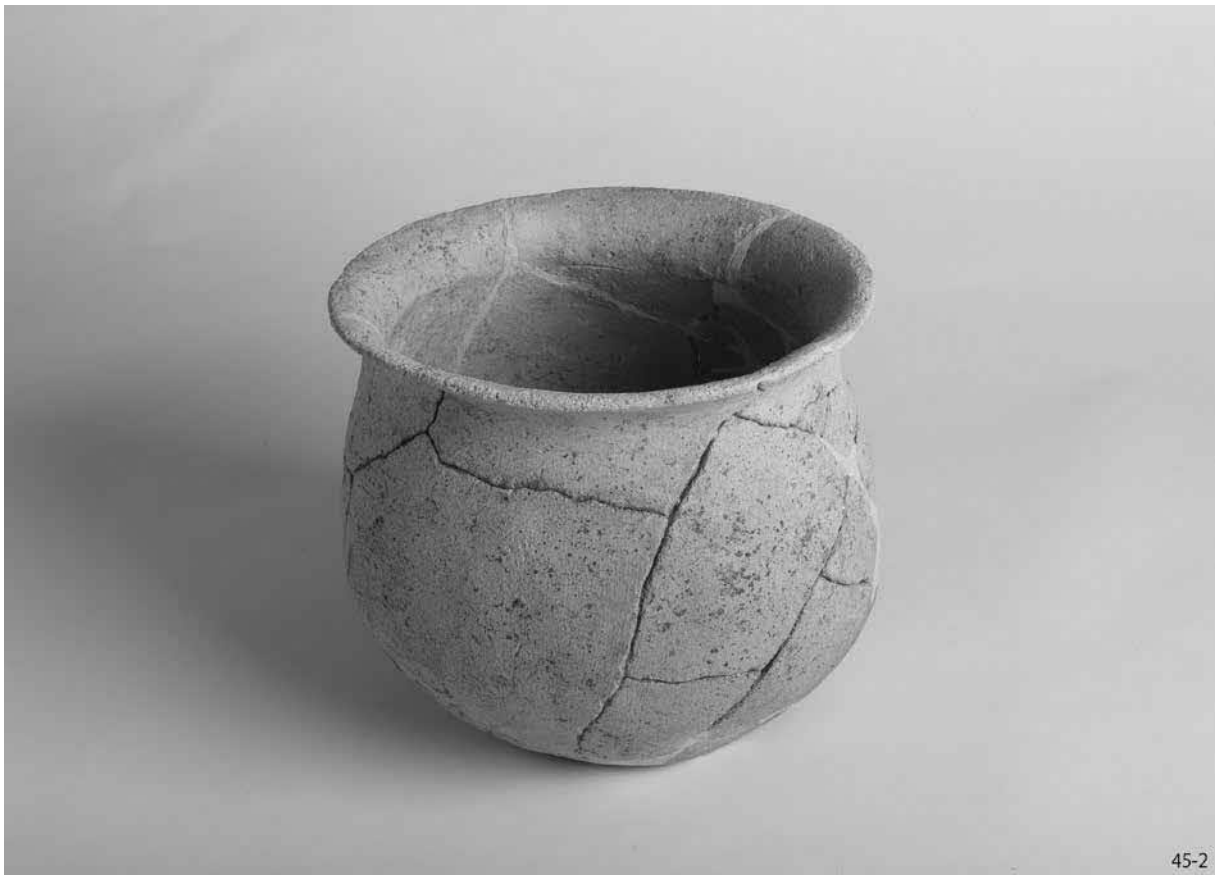
77-3 底部墨書



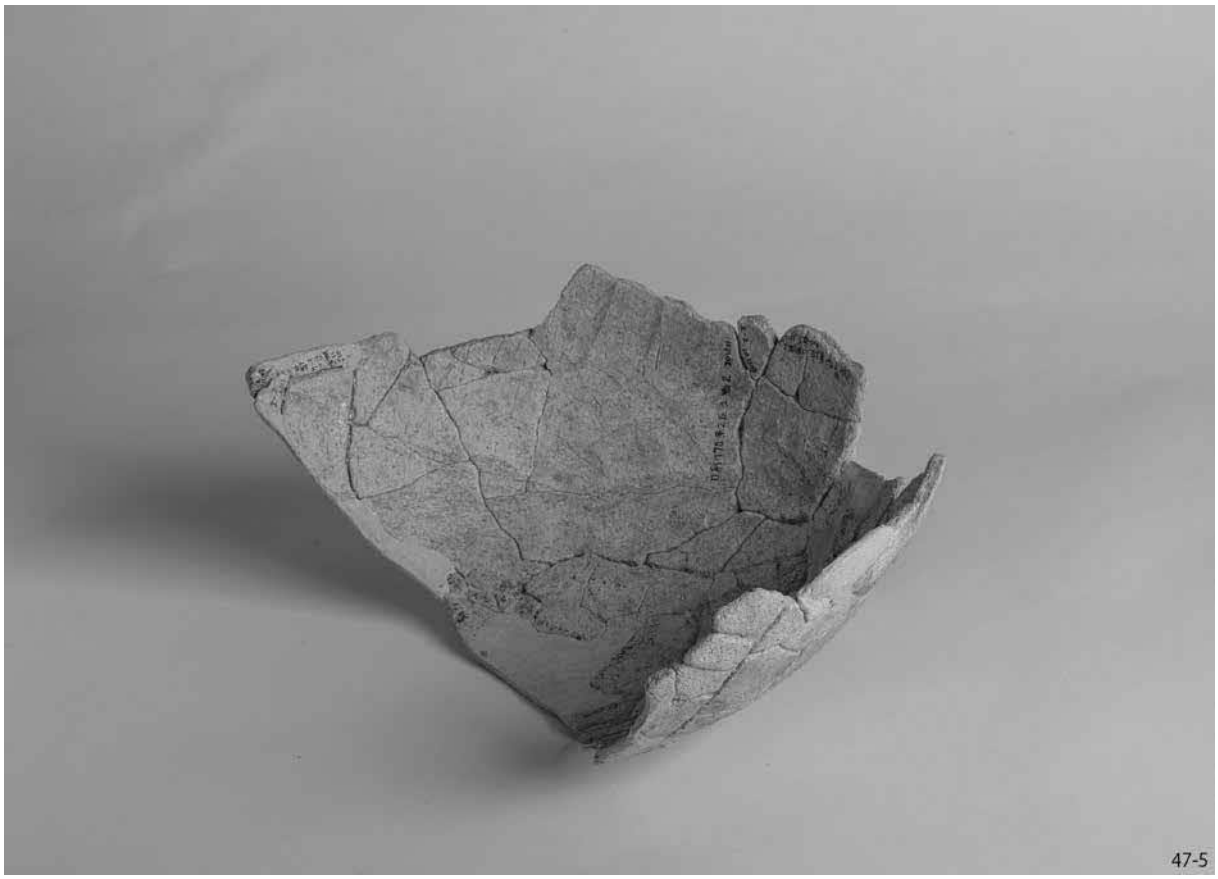
77-3 底部墨書赤外線写真

土師器集合写真

図版 30



47-4



47-5

48-1

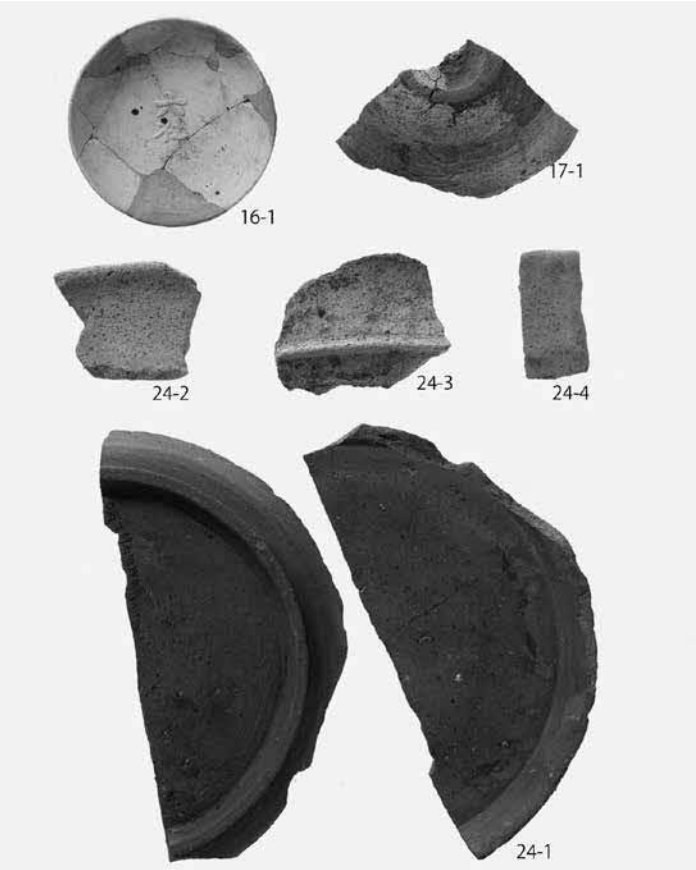
48-2

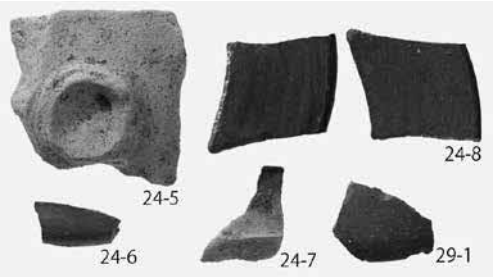
53-1正面

53-1底部

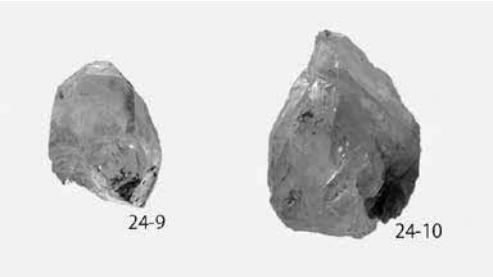
六所脇地区出土硯集合写真

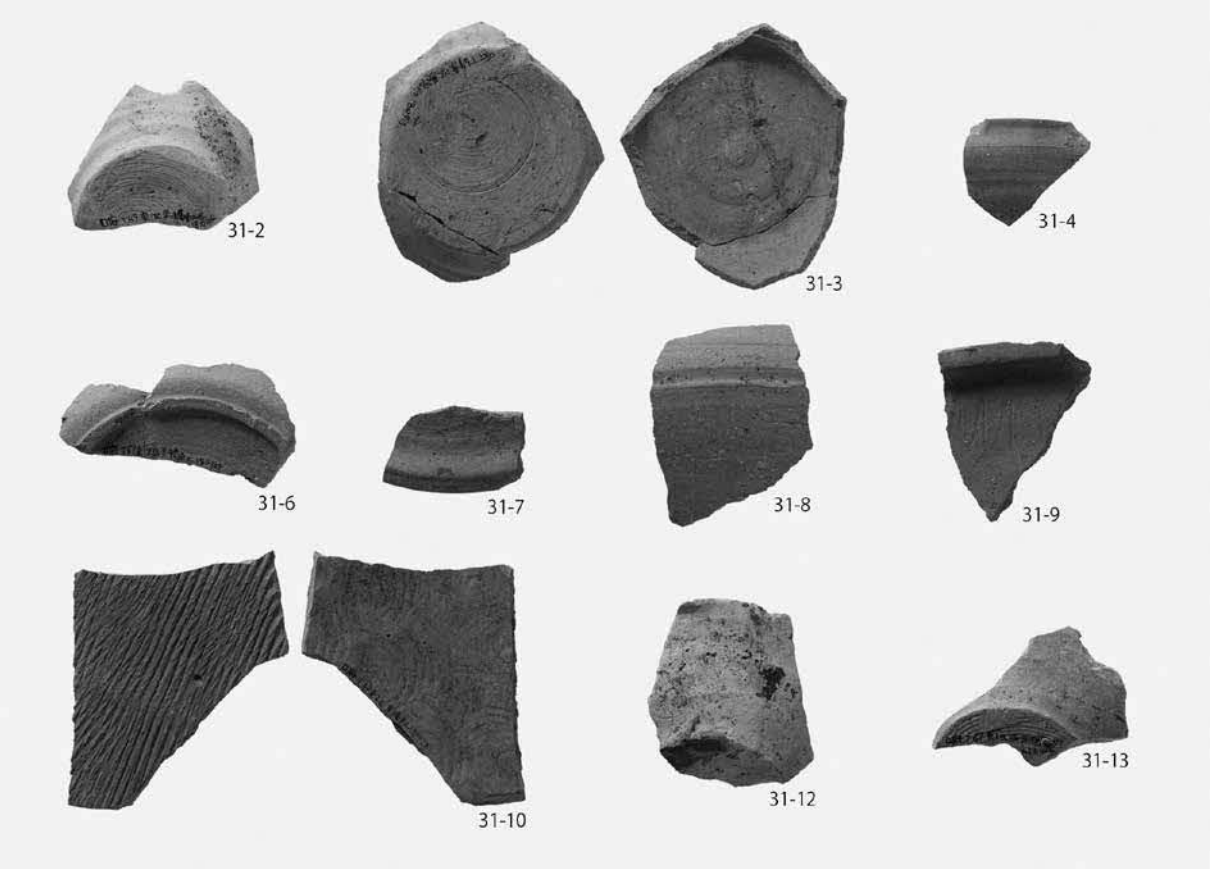
六所脇地区出土小札集合写真


16-1
17-1
24-2
24-3
24-4
24-1

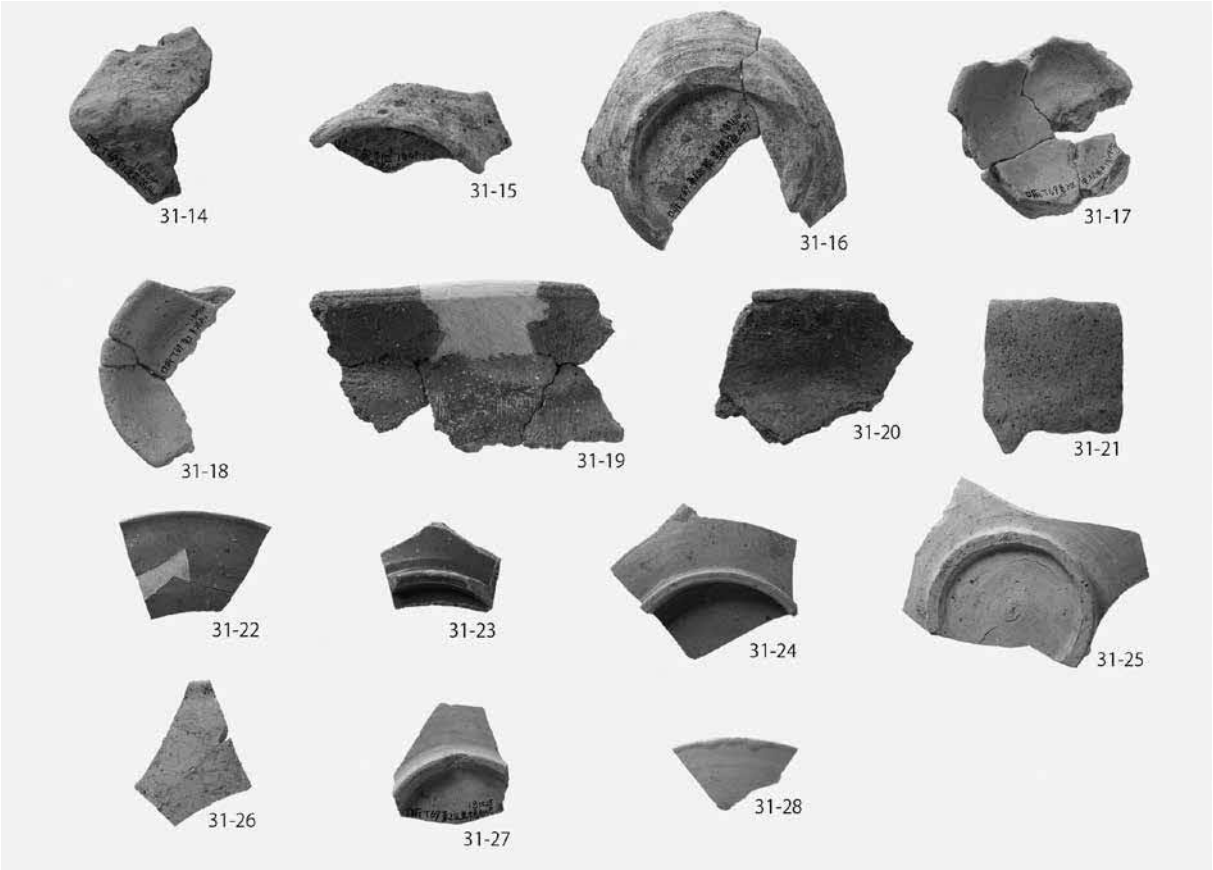

24-5
24-8
24-6
24-7
29-1

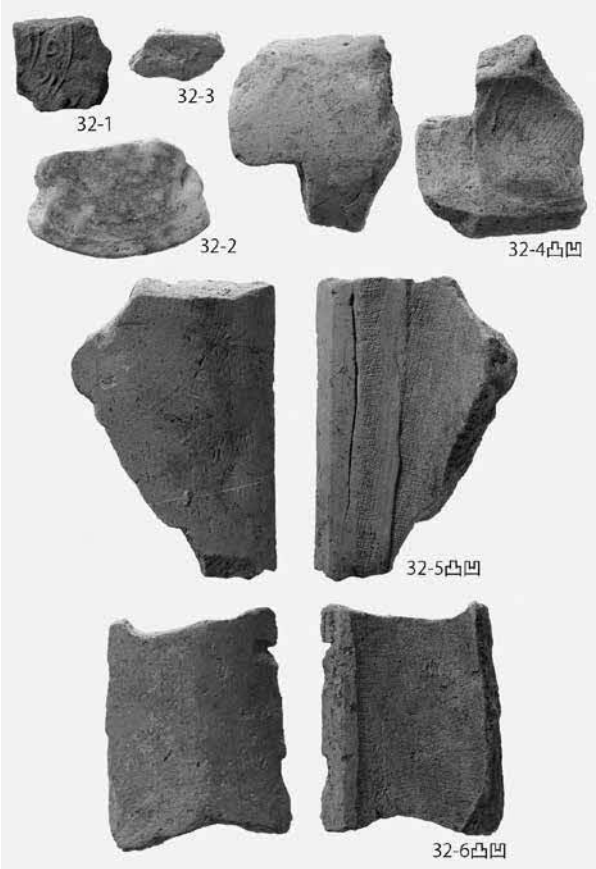
16-2凸凹

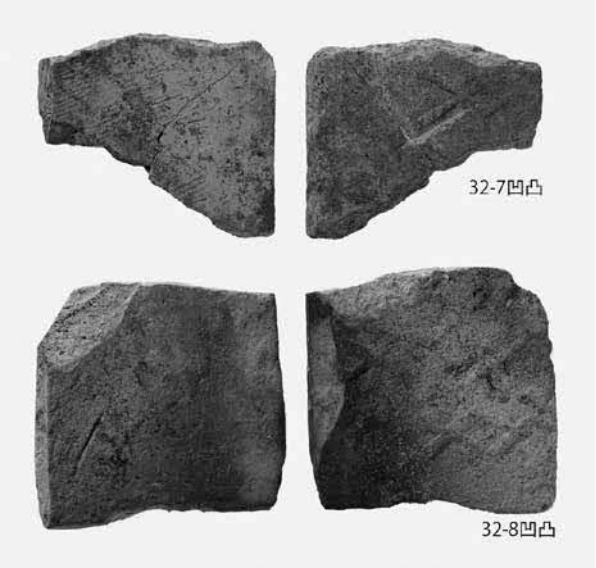

24-9
24-10

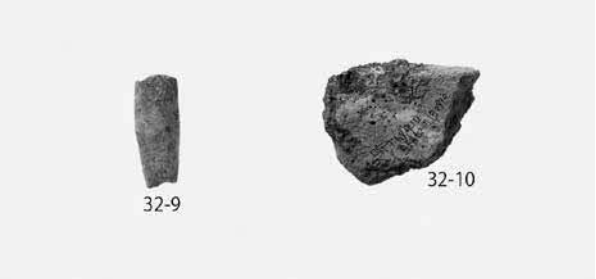

31-2
31-3
31-4
31-6
31-7
31-8
31-9
31-10
31-12
31-13

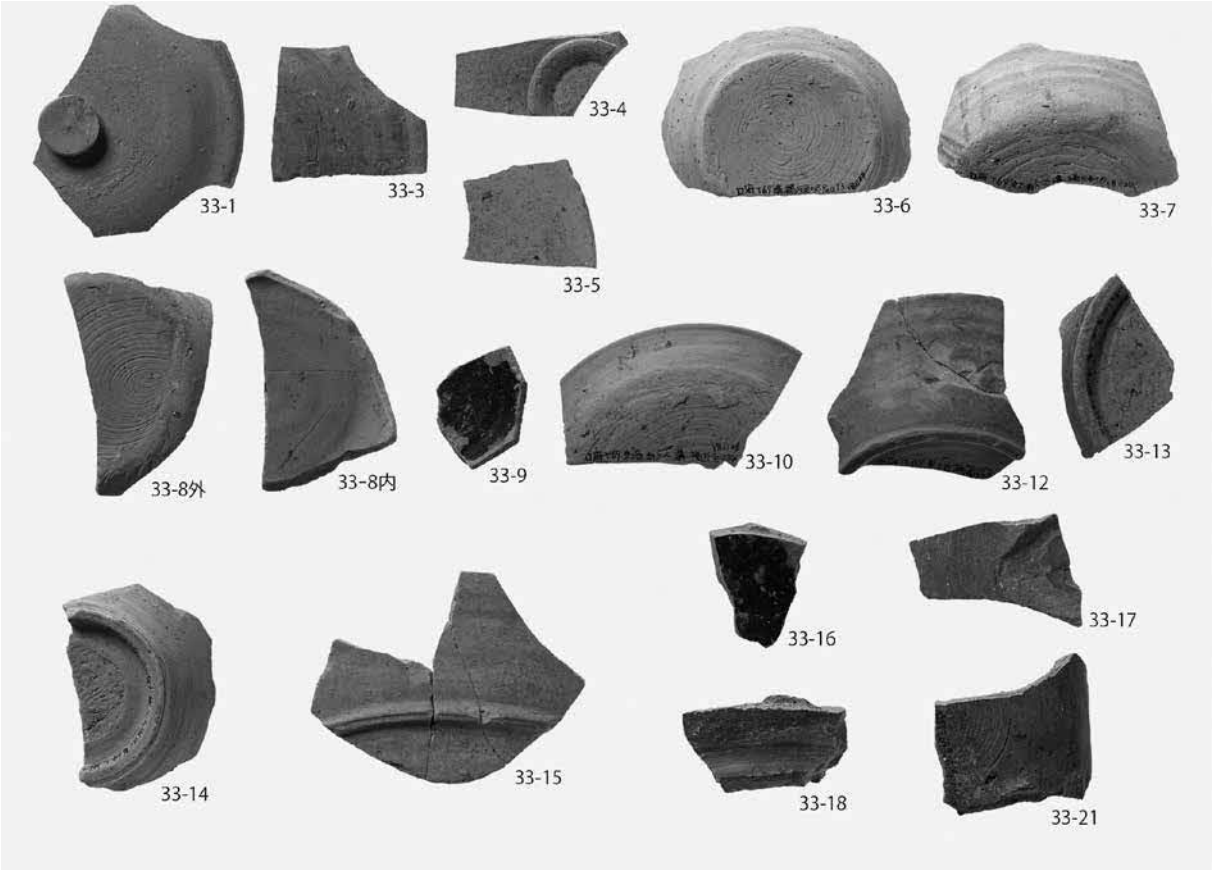
図版 36

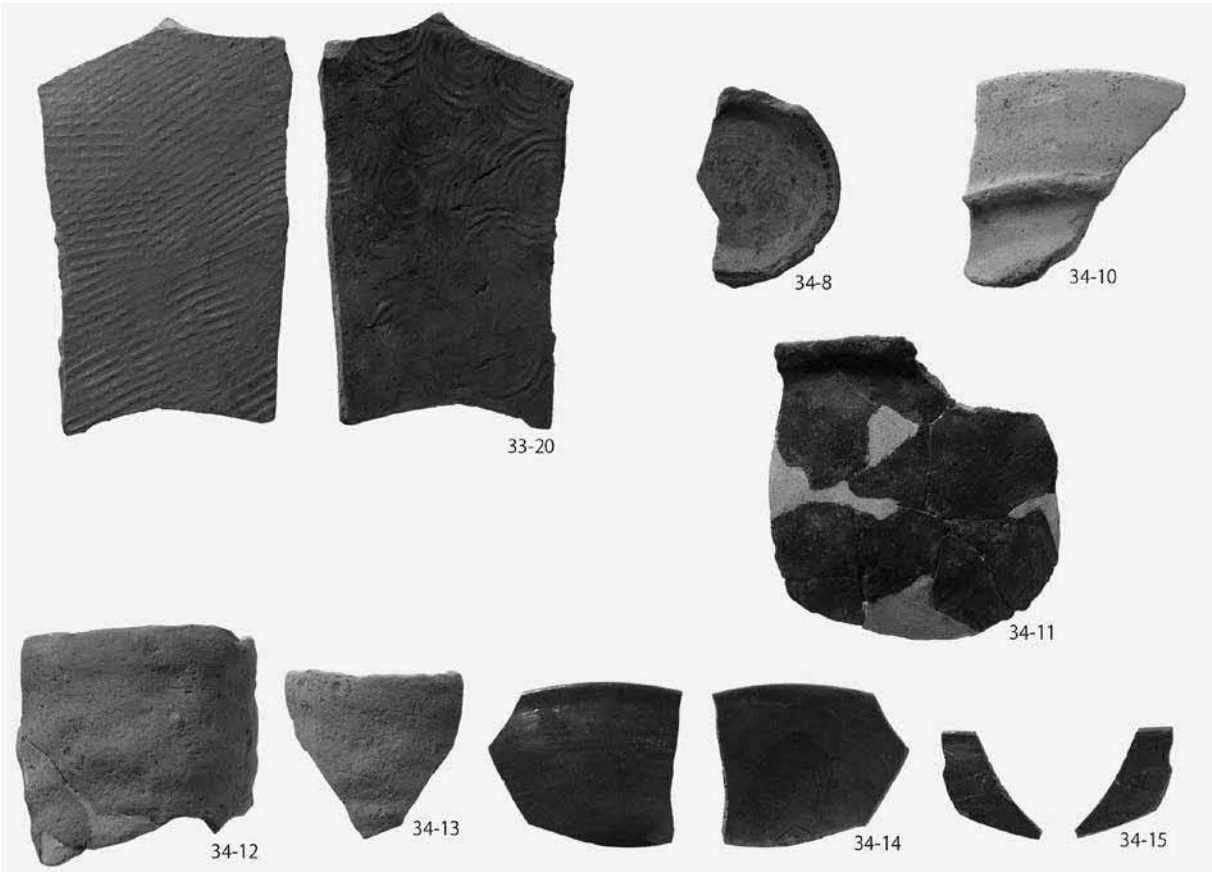

31-14
31-15
31-16
31-17
31-18
31-19
31-20
31-21
31-22
31-23
31-24
31-25
31-26
31-27
31-28


32-1
32-3
32-2
32-4凸凹
32-5凸凹
32-6凸凹

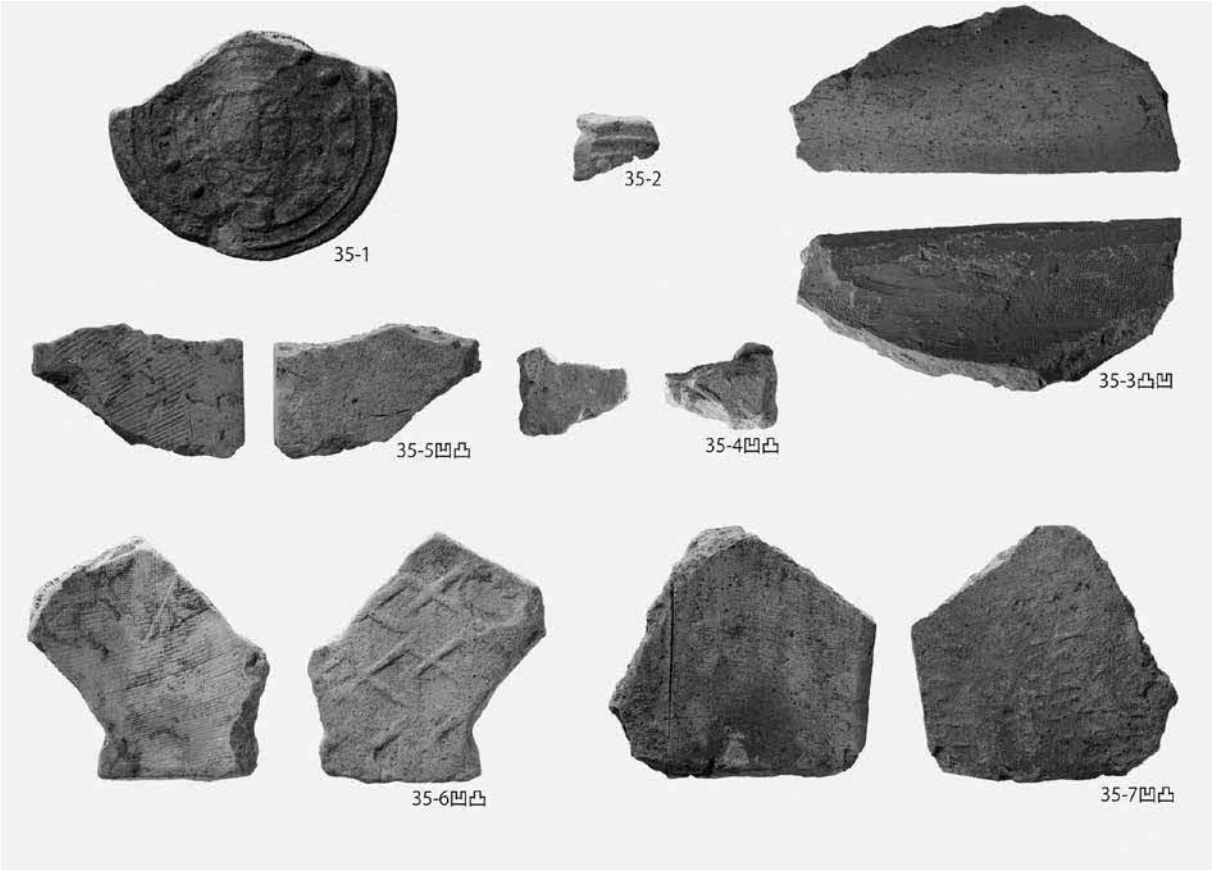

32-7凹凸
32-8凹凸

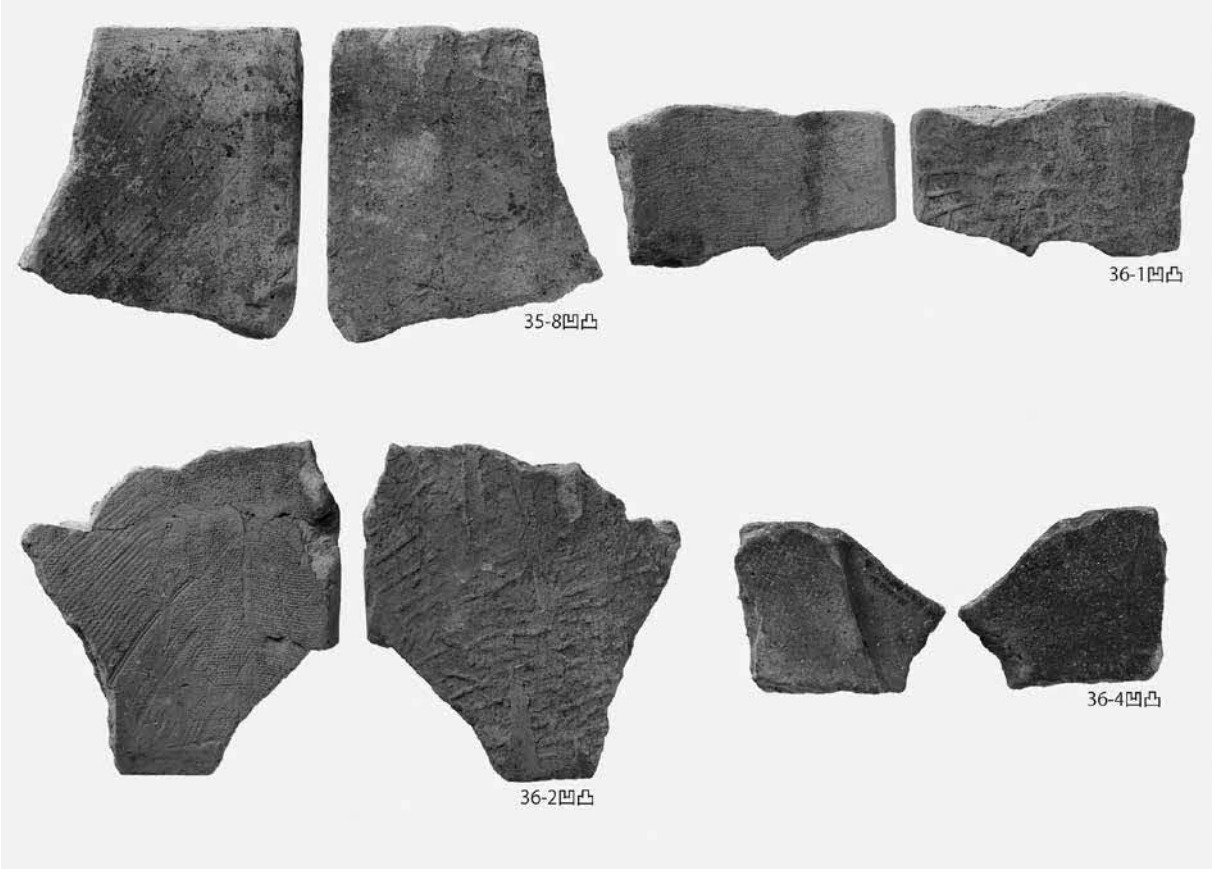

32-9
32-10

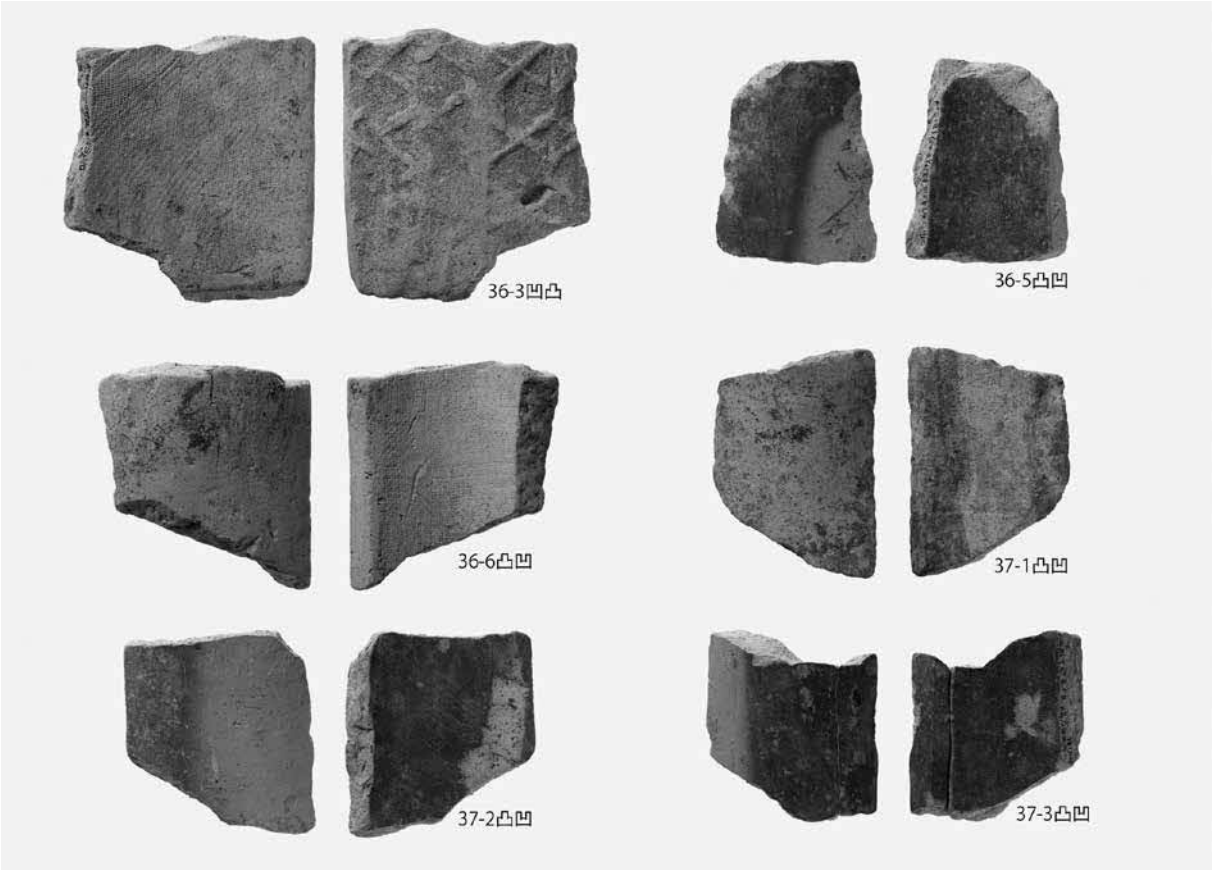

33-1
33-3
33-4
33-5
33-6
33-7
33-8外
33-8内
33-9
33-10
33-12
33-13
33-14
33-15
33-16
33-17
33-18
33-21

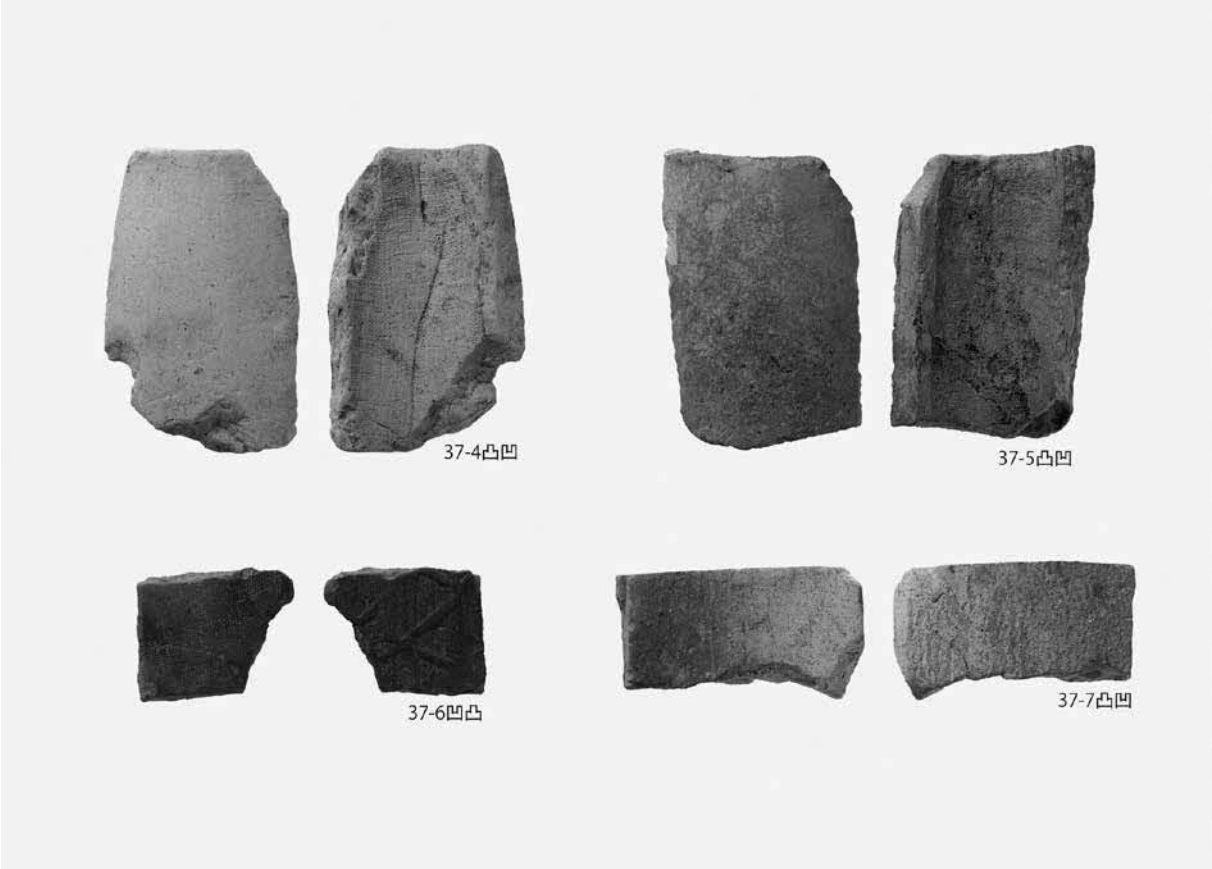

33-20
34-8
34-10
34-11
34-12
34-13
34-14
34-15

図版 38

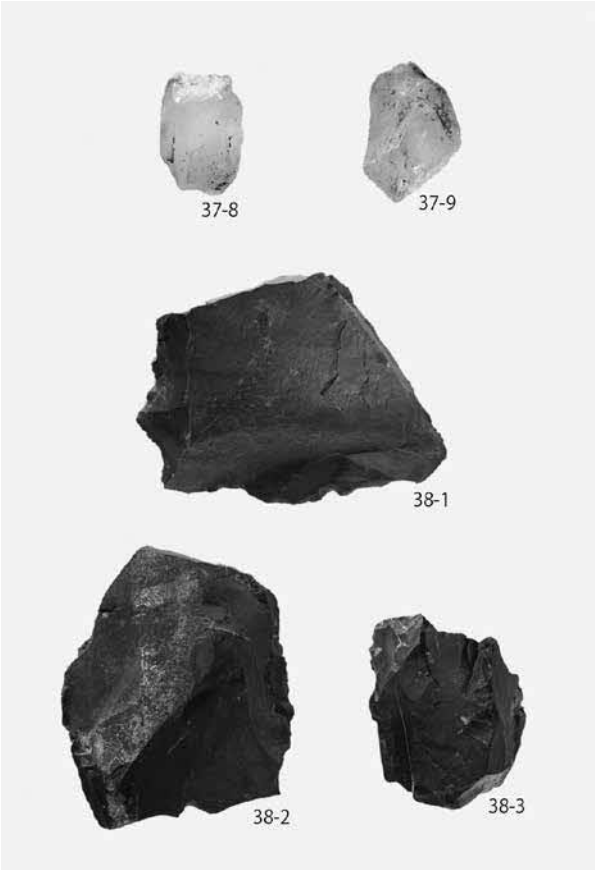

35-1
35-2
35-3凸凹
35-5凹凸
35-4凹凸
35-6凹凸
35-7凹凸

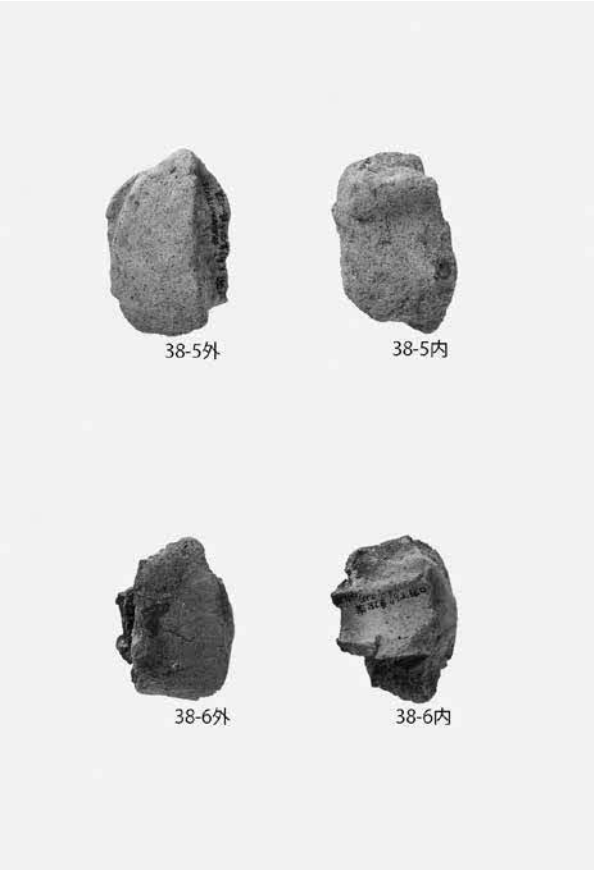

35-8凹凸
36-1凹凸
36-4凹凸
36-2凹凸

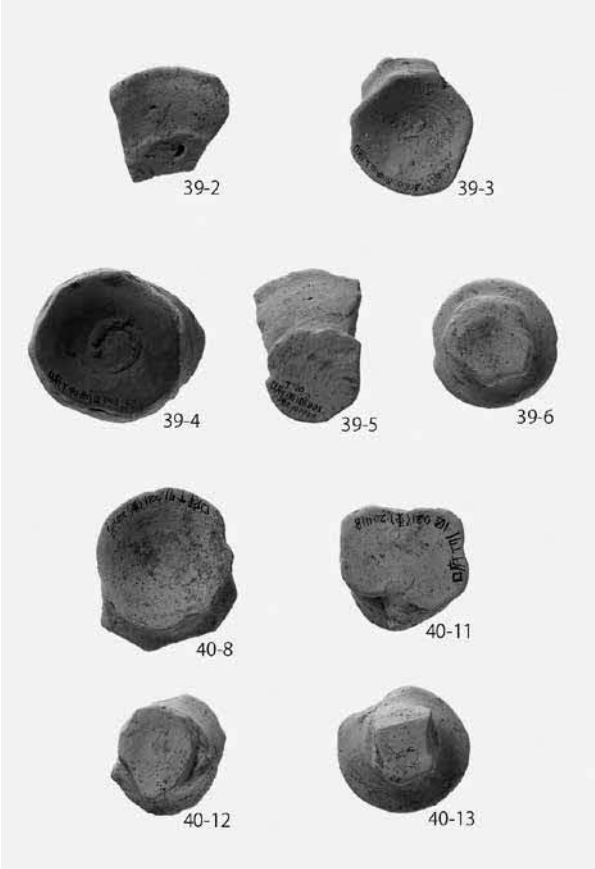

36-3凹凸
36-5凸凹
36-6凸凹
37-1凸凹
37-2凸凹
37-3凸凹

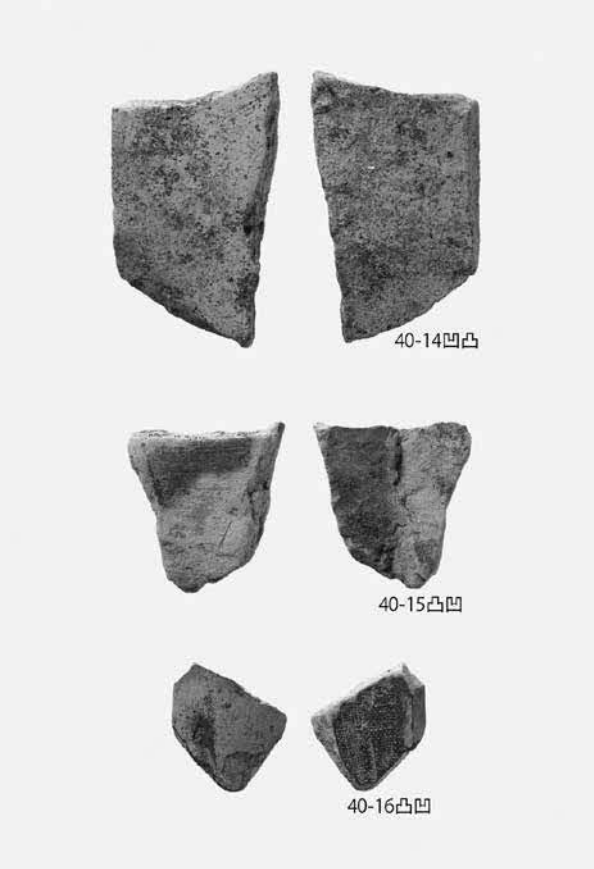

37-4凸凹
37-5凸凹
37-6凹凸
37-7凸凹

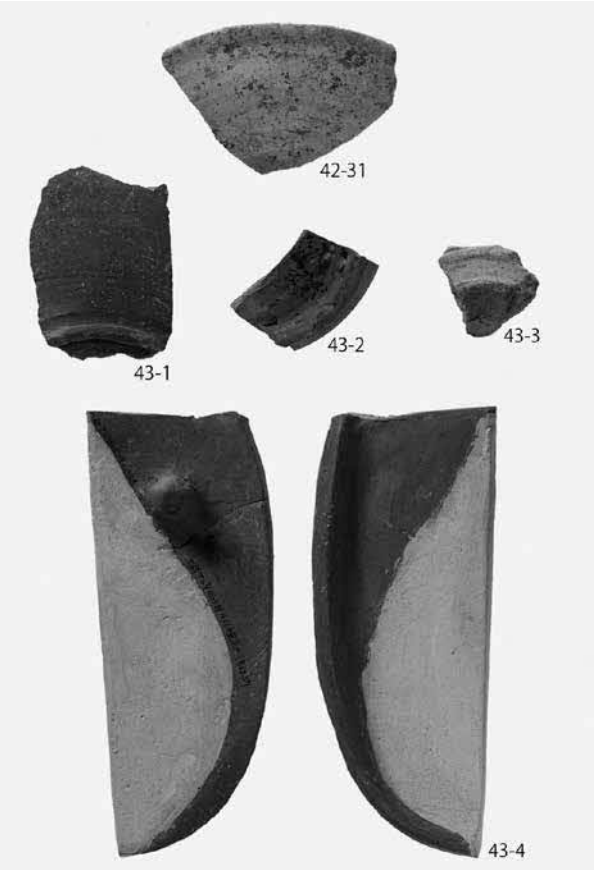
図版 40

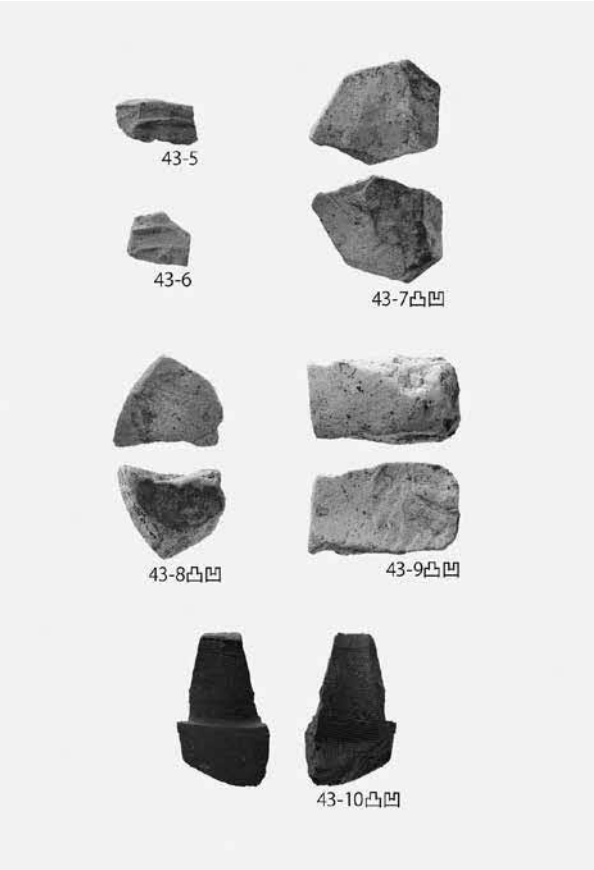

37-8
37-9
38-1
38-2
38-3

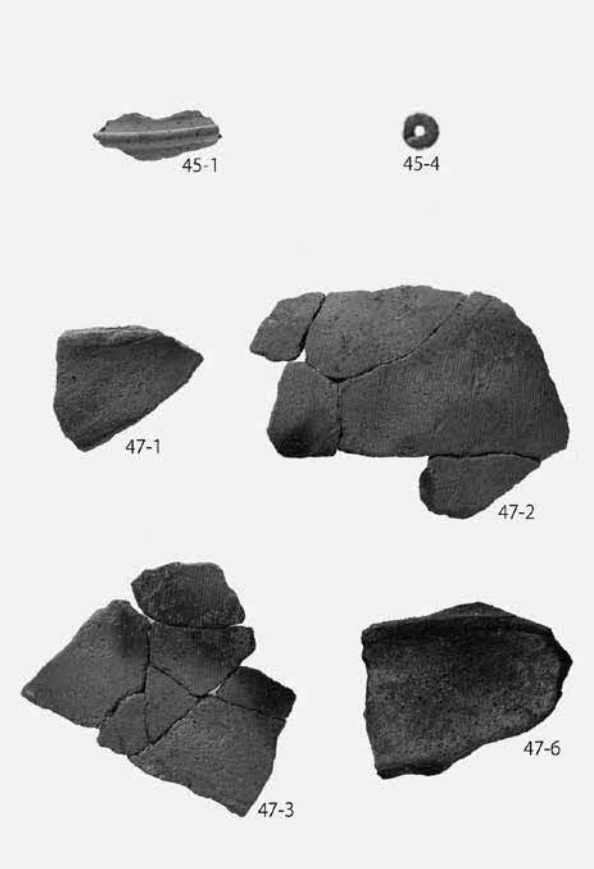

38-5外
38-5内
38-6外
38-6内

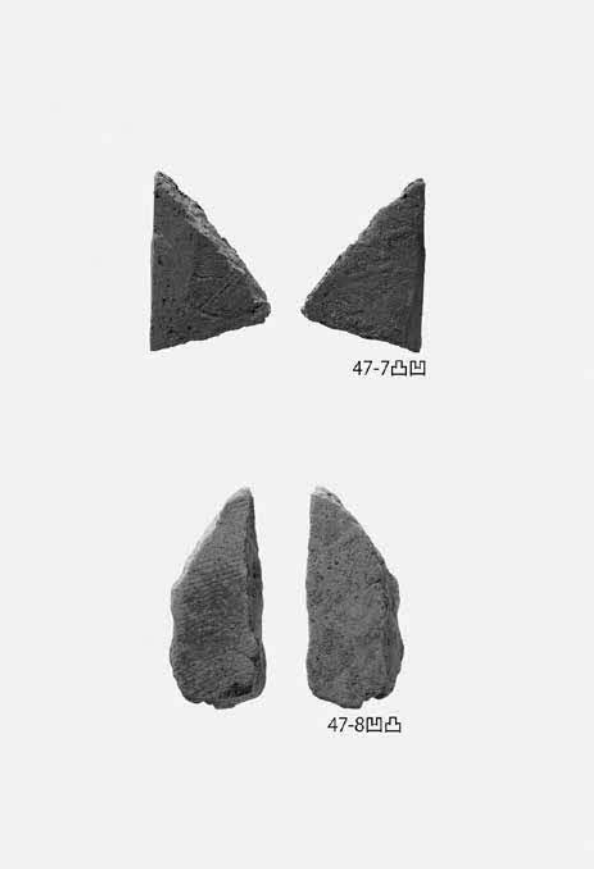

39-2
39-3
39-4
39-5
39-6
40-8
40-11
40-12
40-13


40-14凹凸
40-15凸凹
40-16凸凹

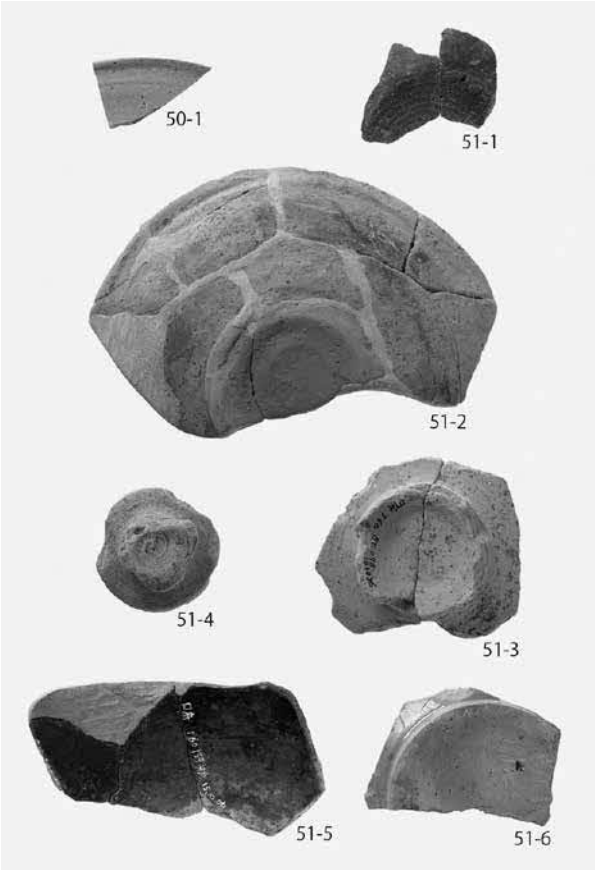

42-31
43-1
43-2
43-3
43-4

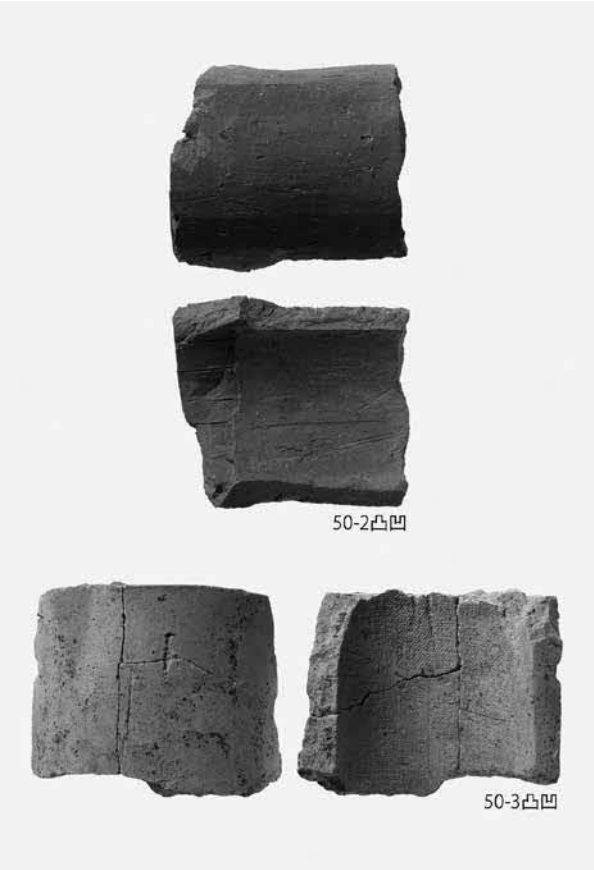

43-5
43-6
43-7凸凹
43-8凸凹
43-9凸凹
43-10凸凹

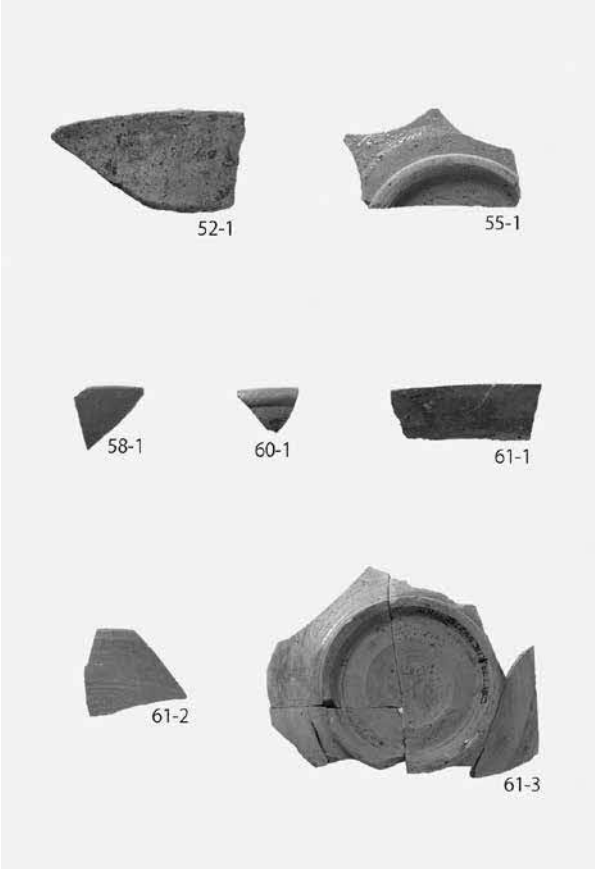

45-1
45-4
47-1
47-2
47-3
47-6

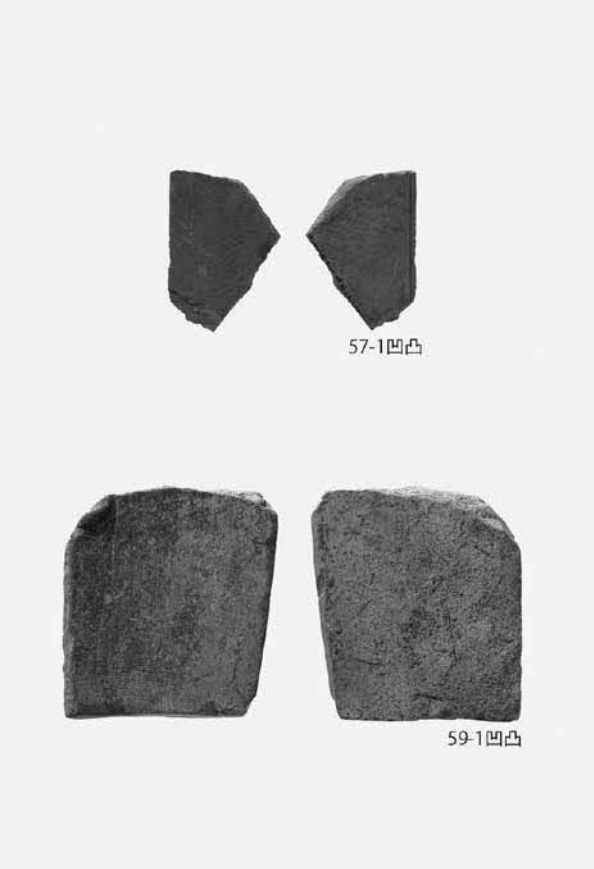

47-7凸凹
47-8凹凸

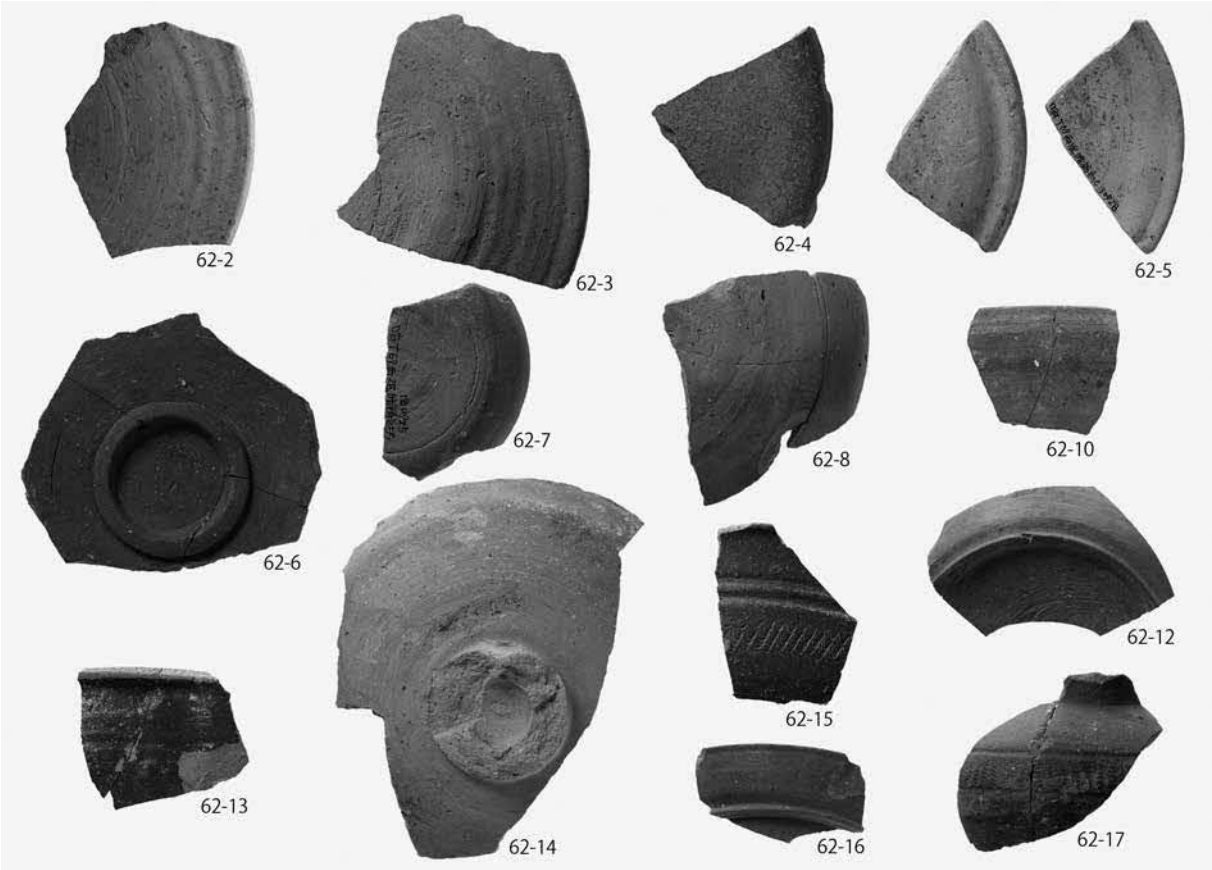
図版 42

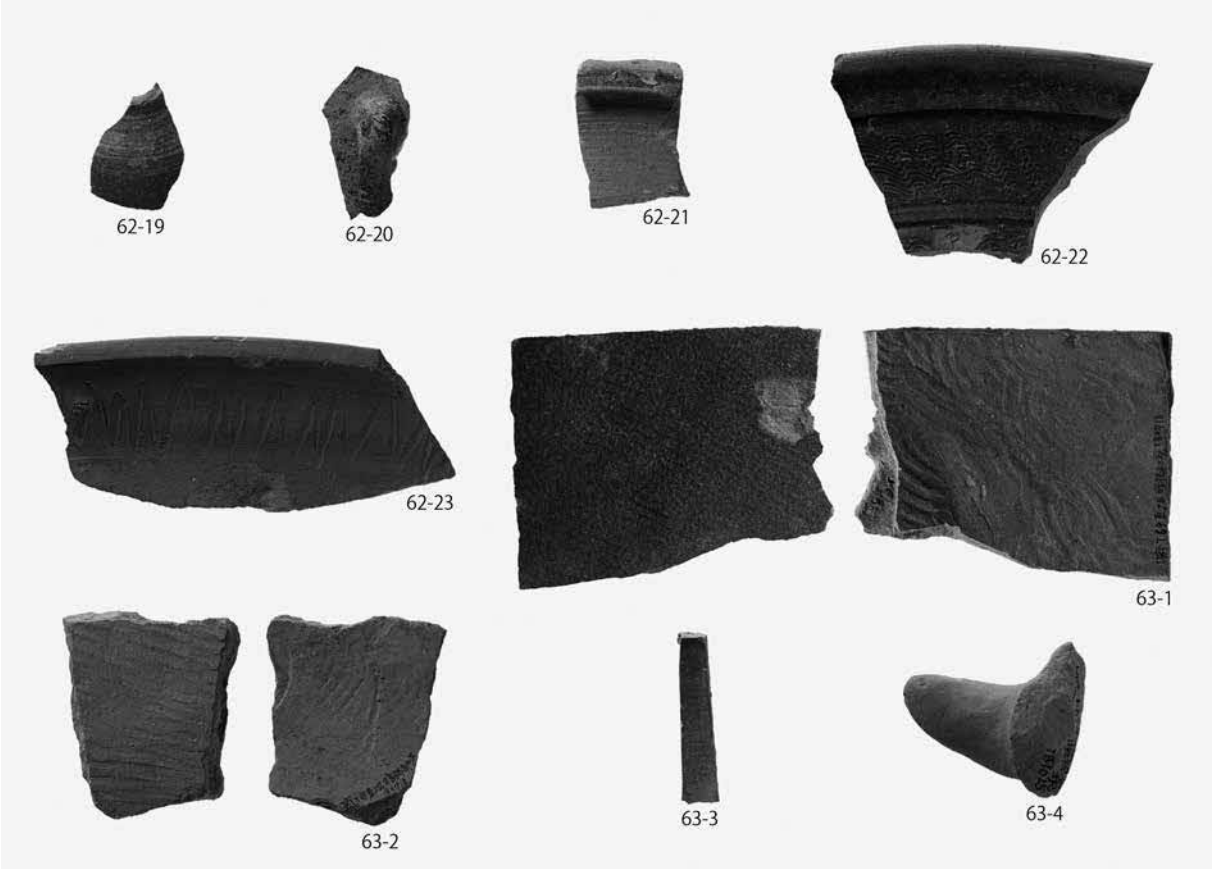

50-1
51-1
51-2
51-4
51-3
51-5
51-6


50-2凸凹
50-3凸凹

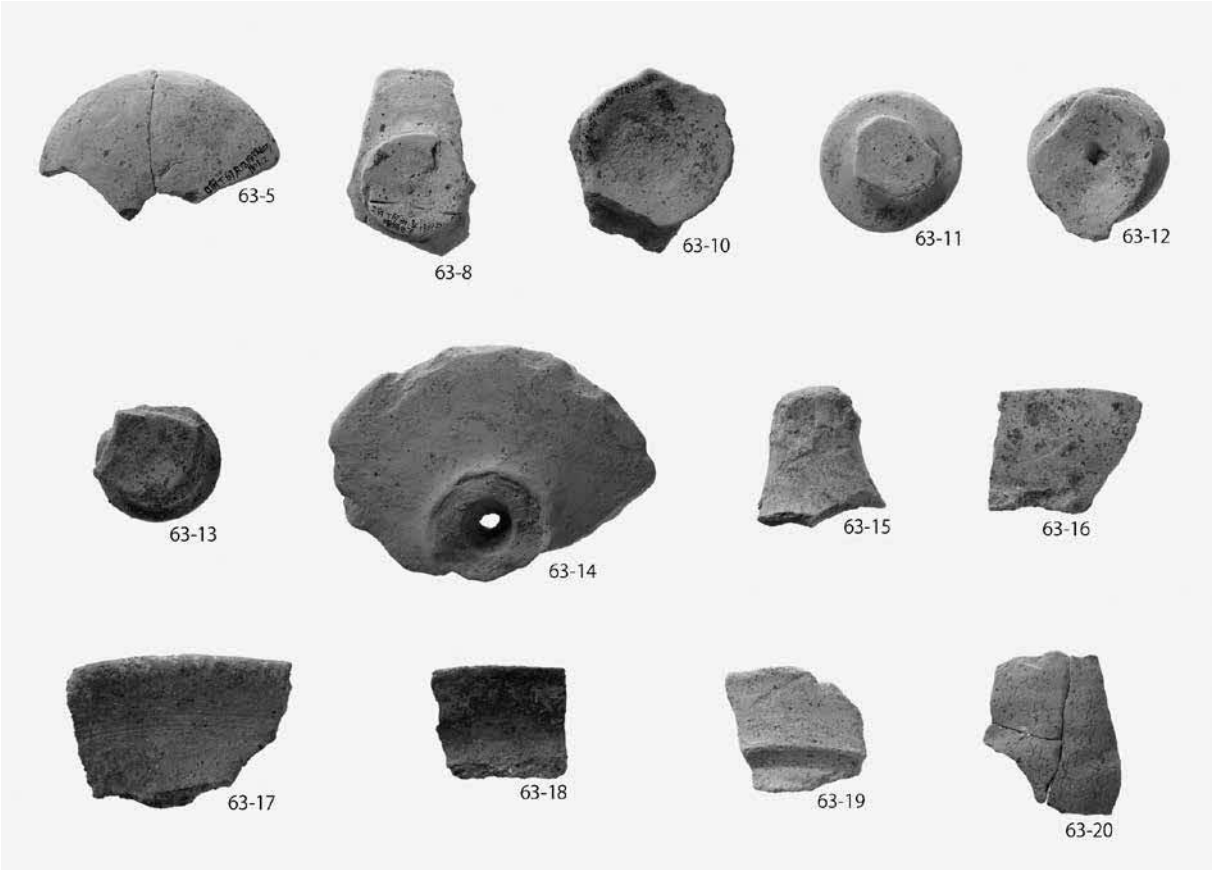

52-1
55-1
58-1
60-1
61-1
61-2
61-3


57-1凹凸
59-1凹凸

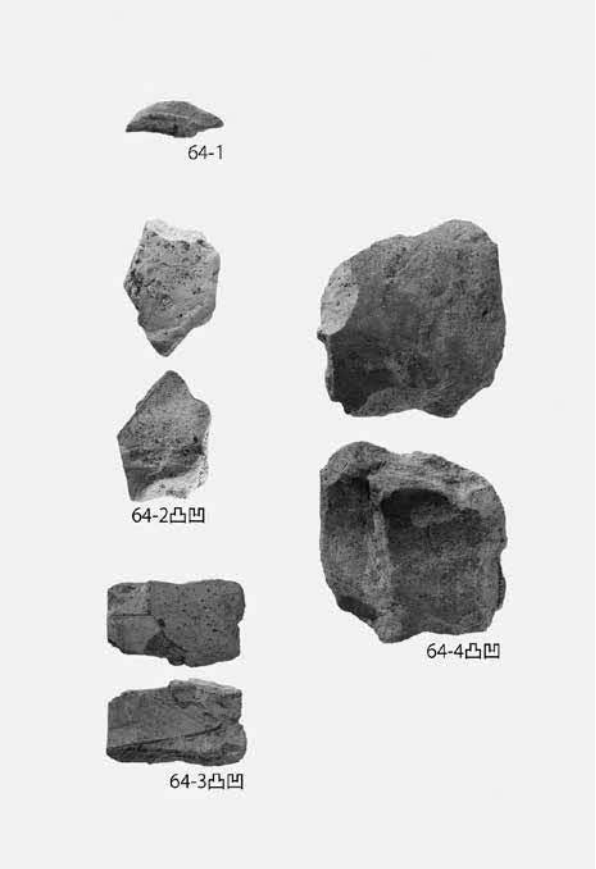

62-2
62-3
62-4
62-5
62-6
62-7
62-8
62-10
62-12
62-13
62-14
62-15
62-16
62-17


62-19
62-20
62-21
62-22
62-23
63-1
63-2
63-3
63-4

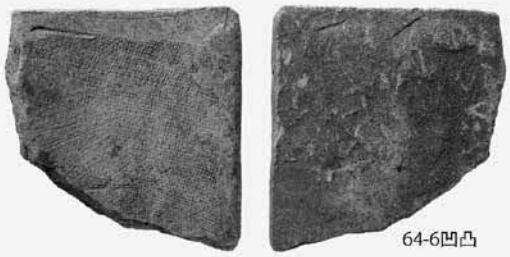
図版 44


63-5
63-8
63-10
63-11
63-12
63-13
63-14
63-15
63-16
63-17
63-18
63-19
63-20

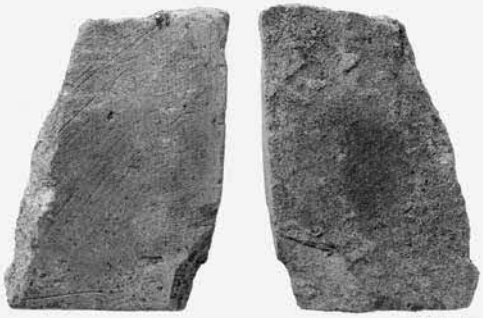
63-21
63-22
63-23
63-24
63-25
63-26
63-27
63-28
63-29


64-1
64-2凸凹
64-4凸凹
64-3凸凹

64-5凹凸



64-6凹凸



64-7凹凸

65-1凹凸

65-2凹凸

65-5凸凹

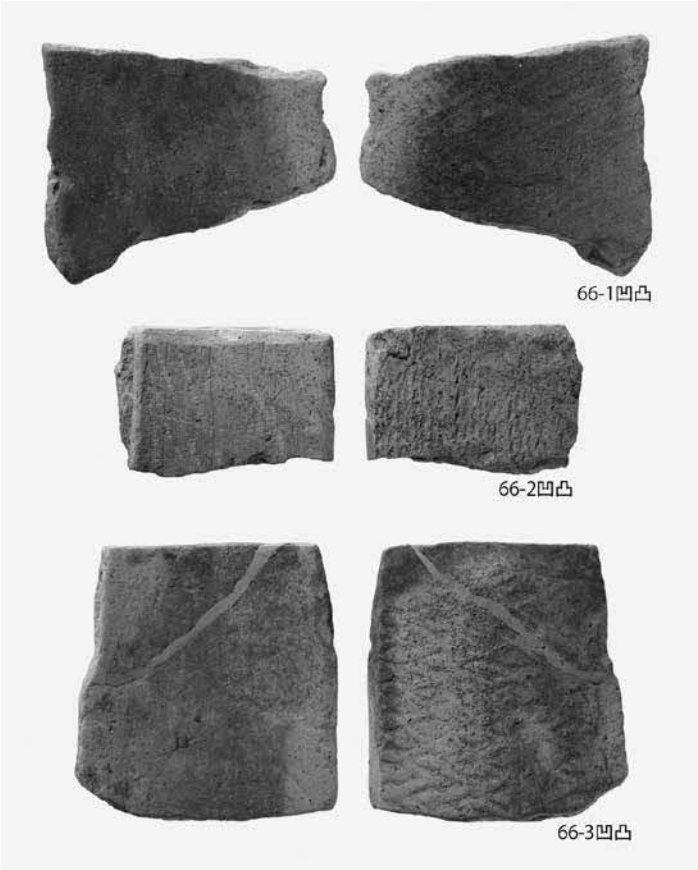
65-3凸凹

65-6凸凹

65-4凸凹

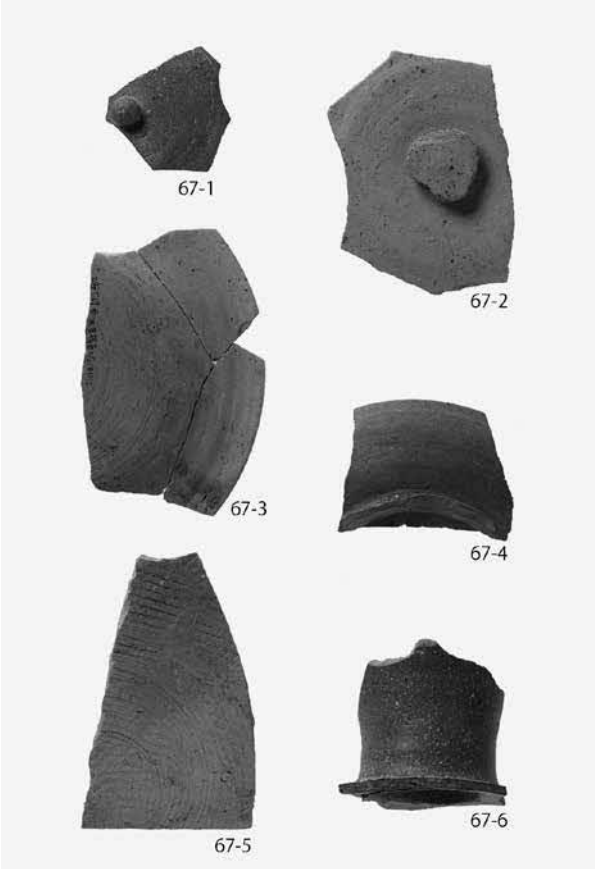
65-7凹凸

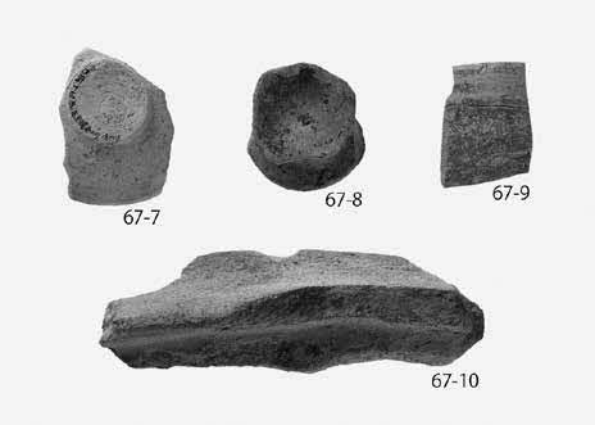
図版 46


66-1凹凸
66-2凹凸
66-3凹凸

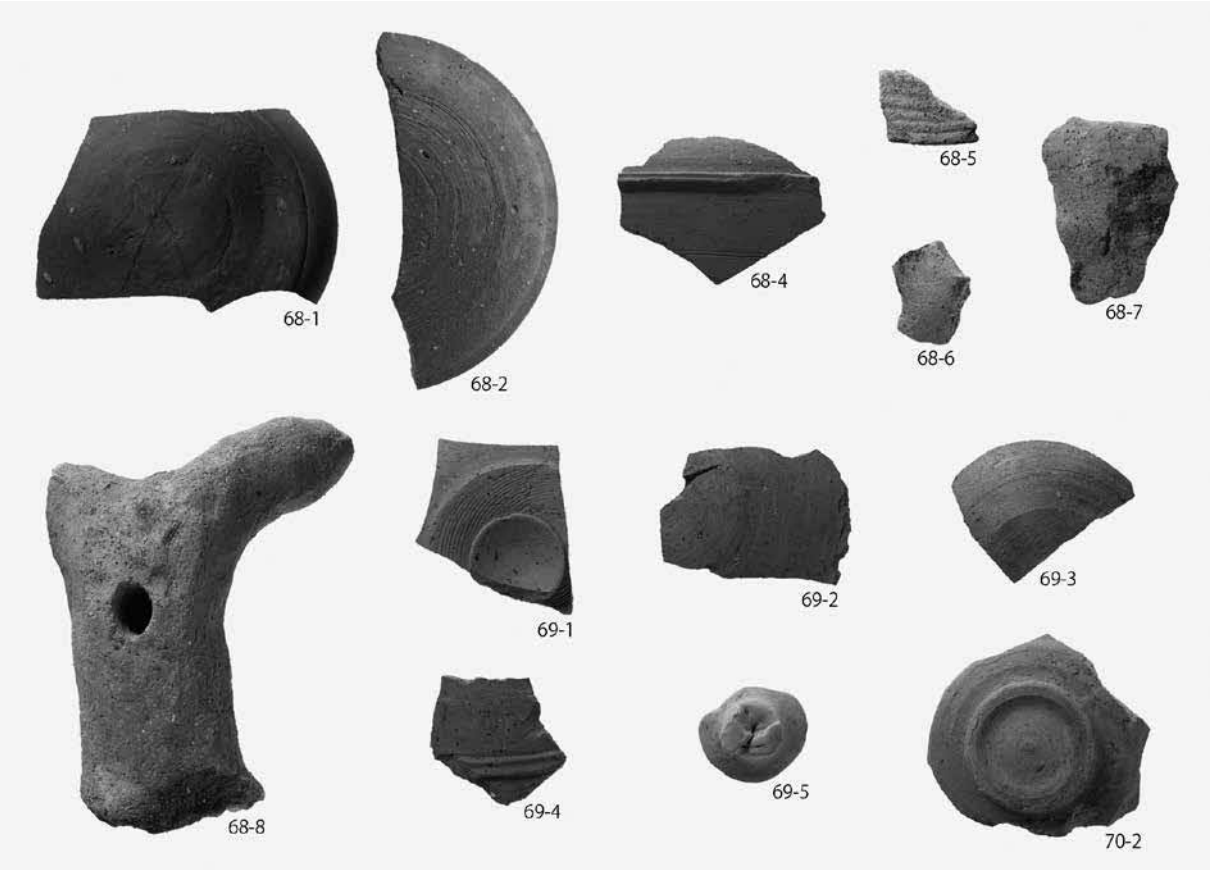
66-4

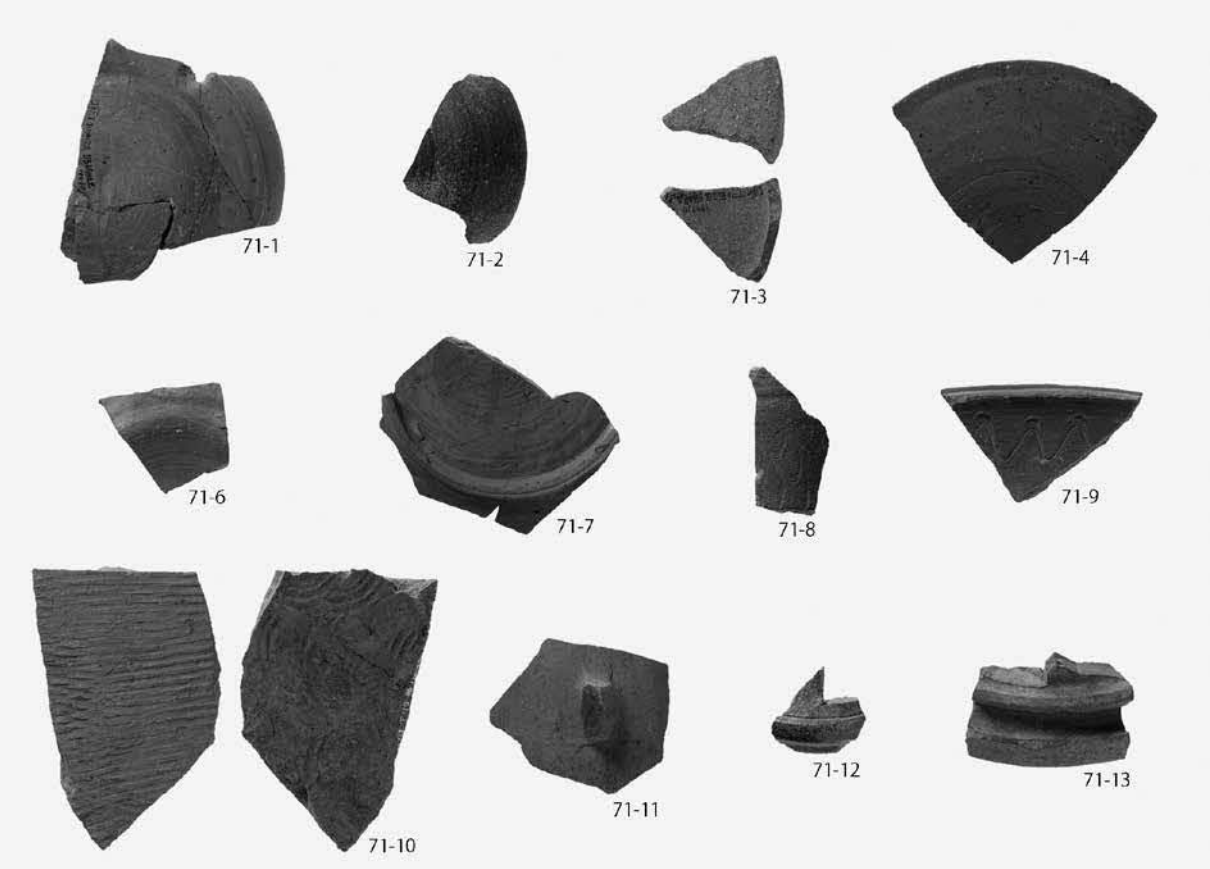
66-6


67-1
67-2
67-3
67-4
67-5
67-6

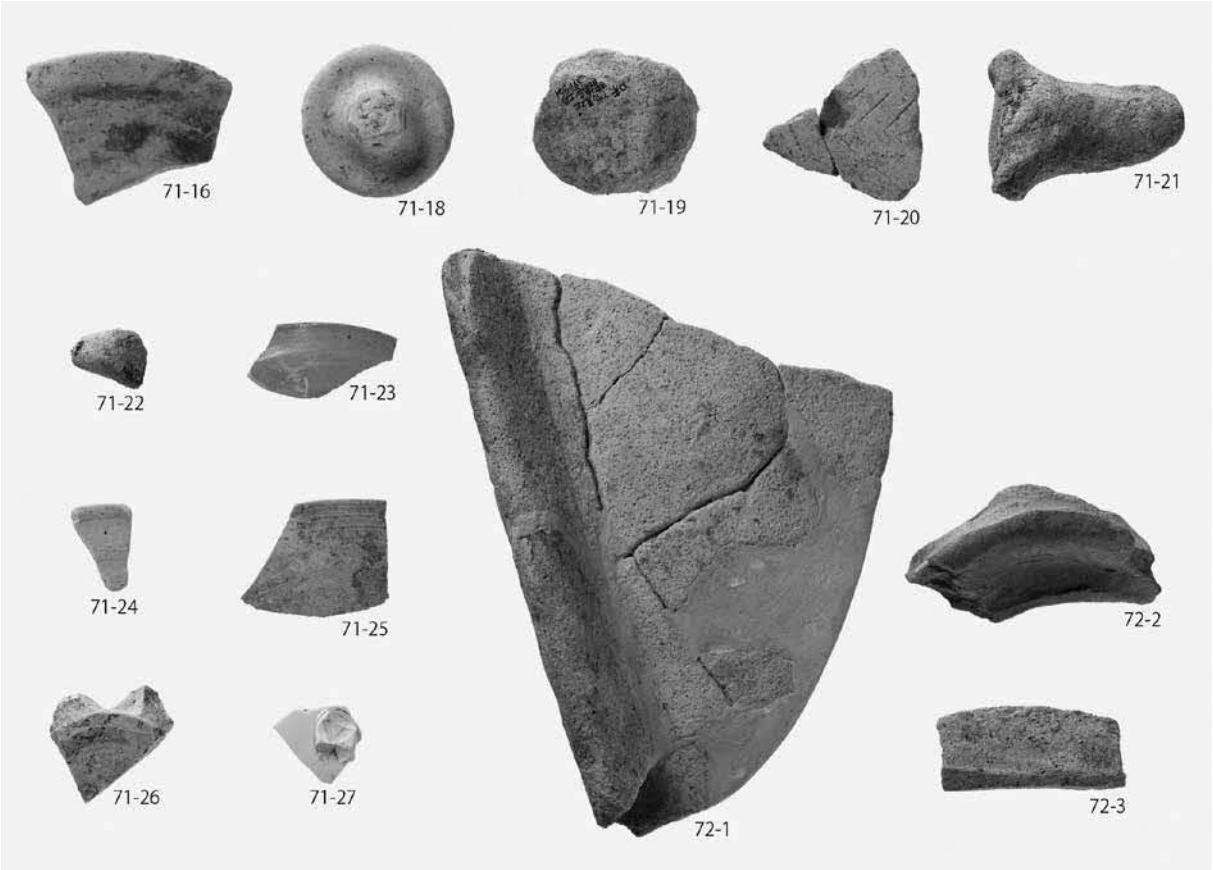

67-7
67-8
67-9
67-10

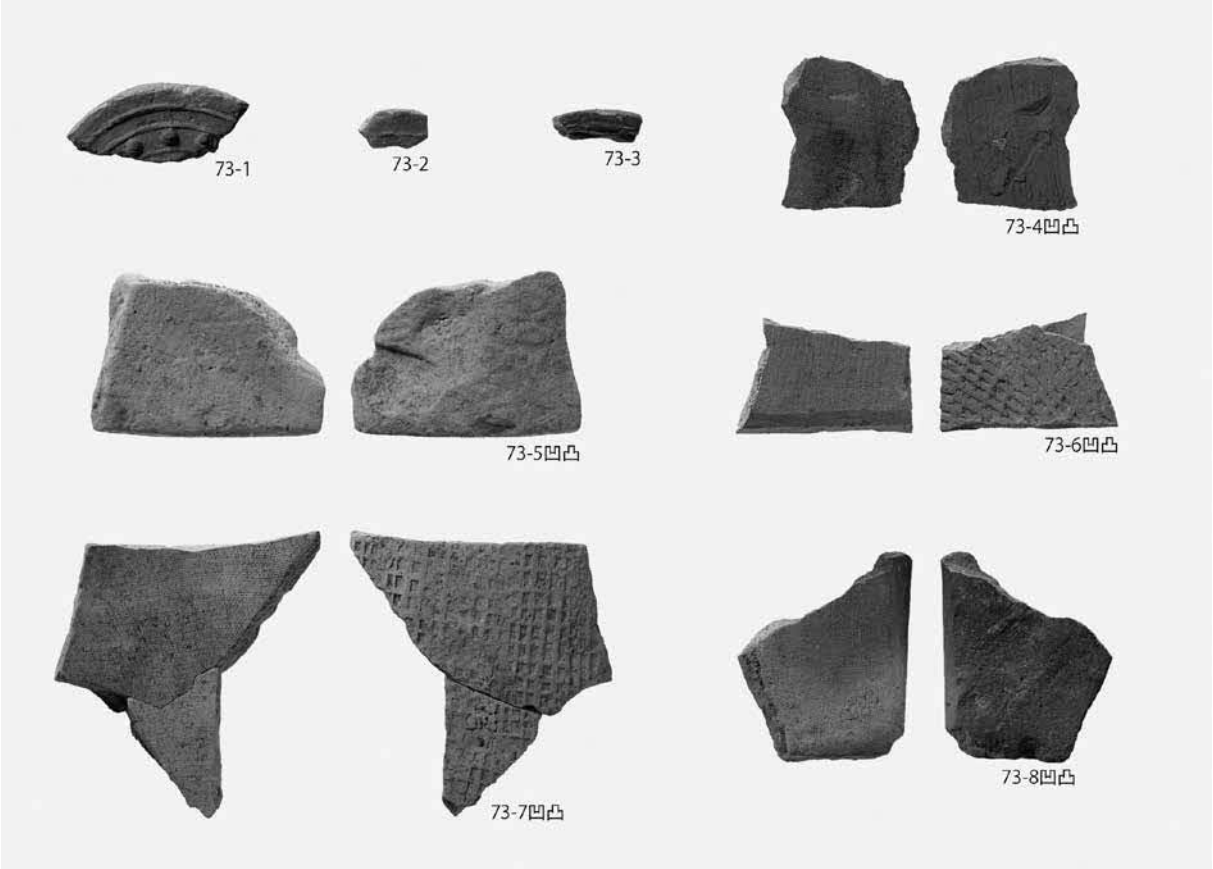
67-11凸凹


68-1
68-2
68-4
68-5
68-6
68-7
68-8
69-1
69-2
69-3
69-4
69-5
70-2

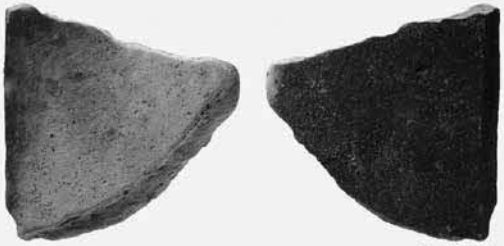

71-1
71-2
71-3
71-4
71-6
71-7
71-8
71-9
71-10
71-11
71-12
71-13

図版 48


71-16
71-18
71-19
71-20
71-21
71-22
71-23
71-24
71-25
71-26
71-27
72-1
72-2
72-3


73-1
73-2
73-3
73-4凹凸
73-5凹凸
73-6凹凸
73-7凹凸
73-8凹凸

73-9凹凸



73-11凹凸

73-10凹凸

74-1凸凹

74-2凸凹

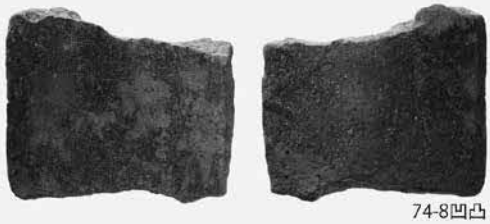
74-3凸凹

74-4凸凹

74-5凸凹

74-6凸凹

74-7凸凹

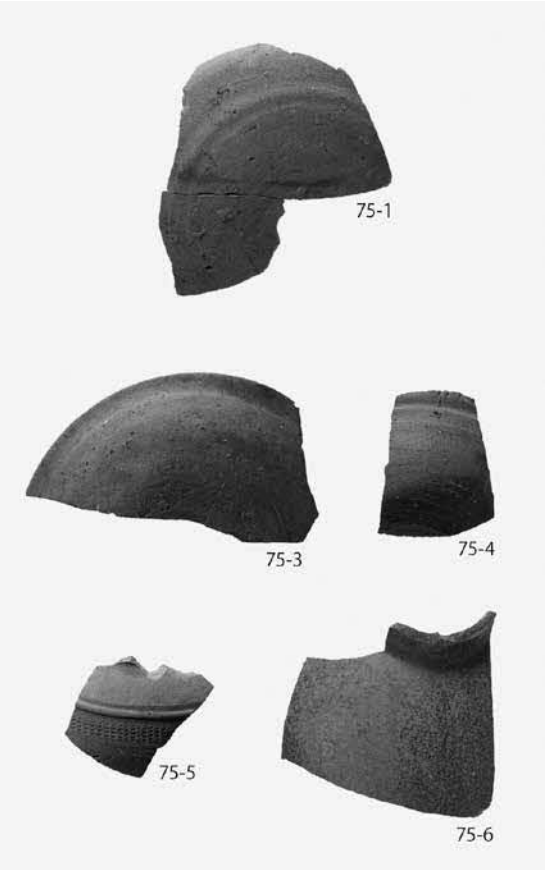


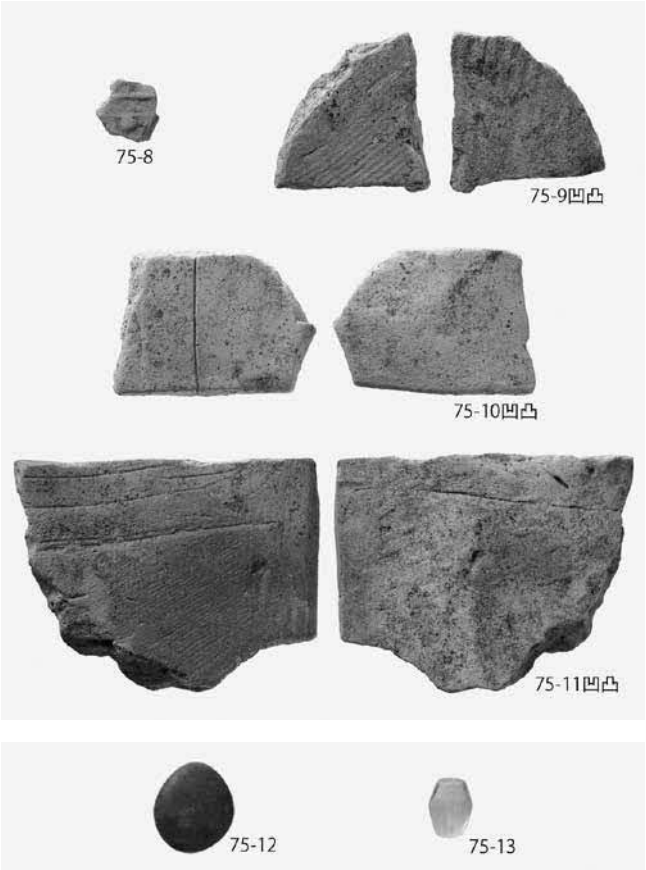
74-8凹凸

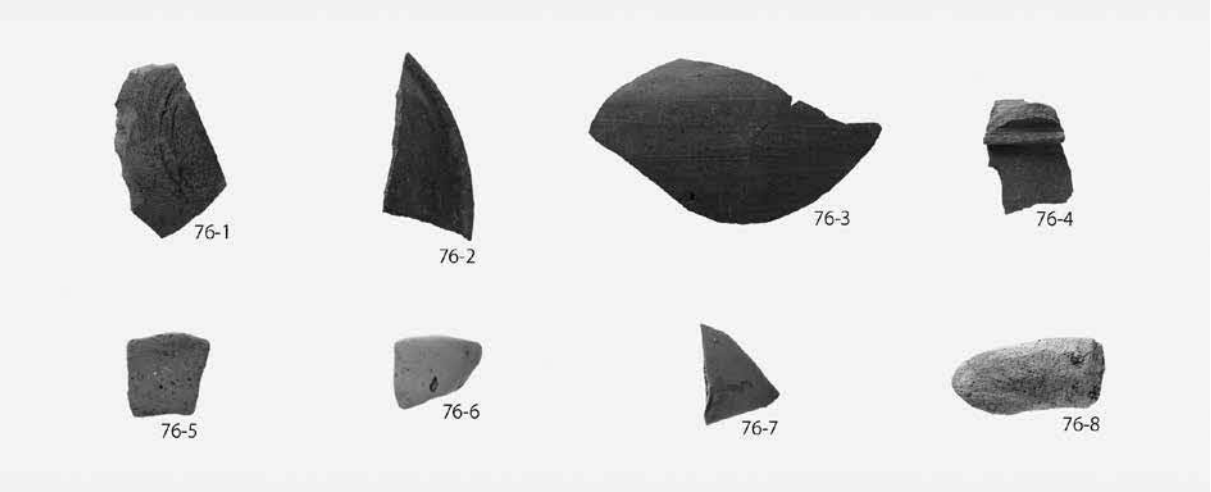
74-9凹凸

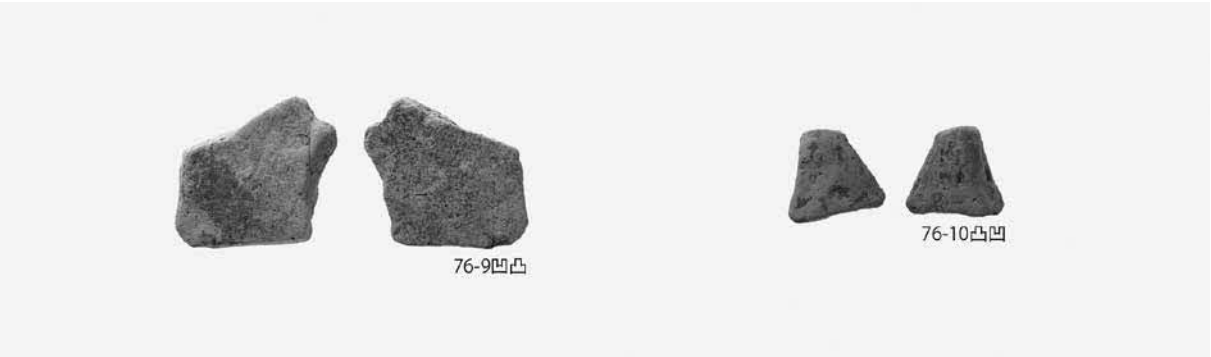
74-10

図版 50

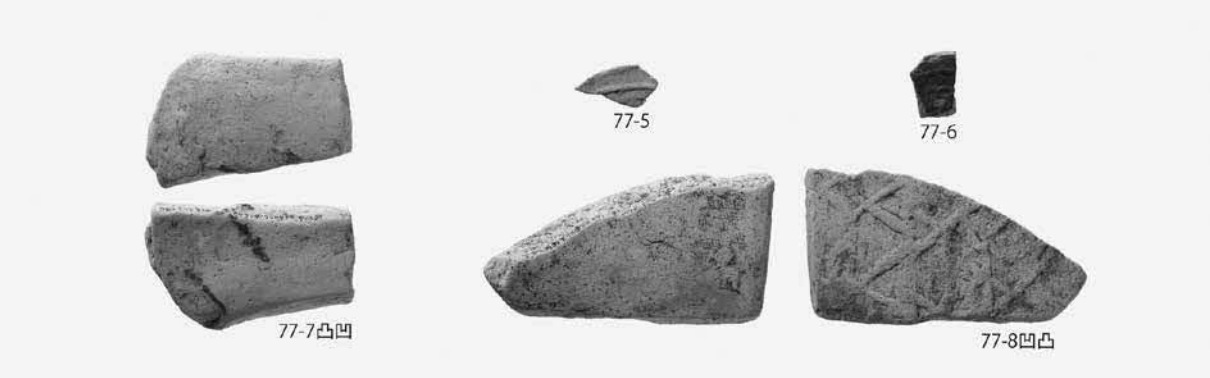

75-1
75-3
75-4
75-5
75-6

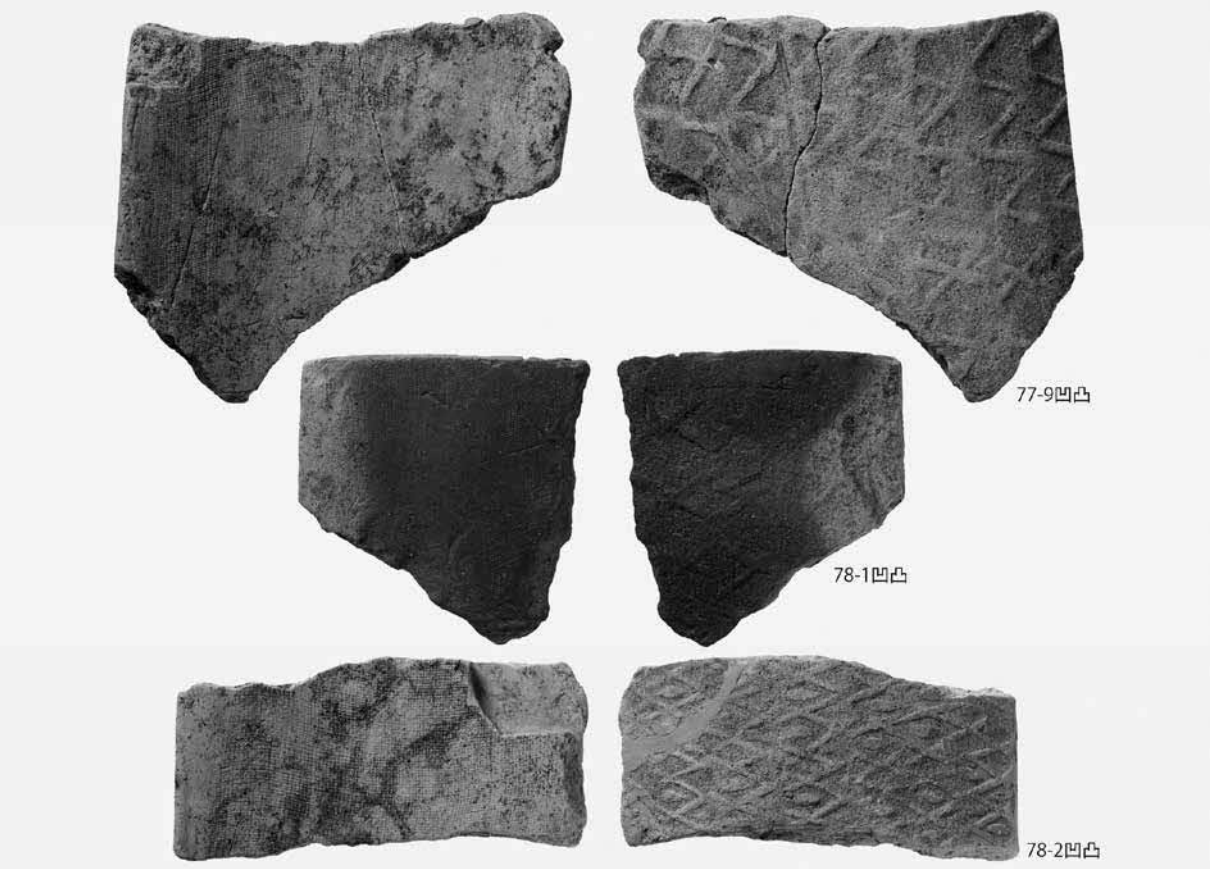

75-8
75-9凹凸
75-10凹凸
75-11凹凸
75-12
75-13


76-1
76-2
76-3
76-4
76-5
76-6
76-7
76-8

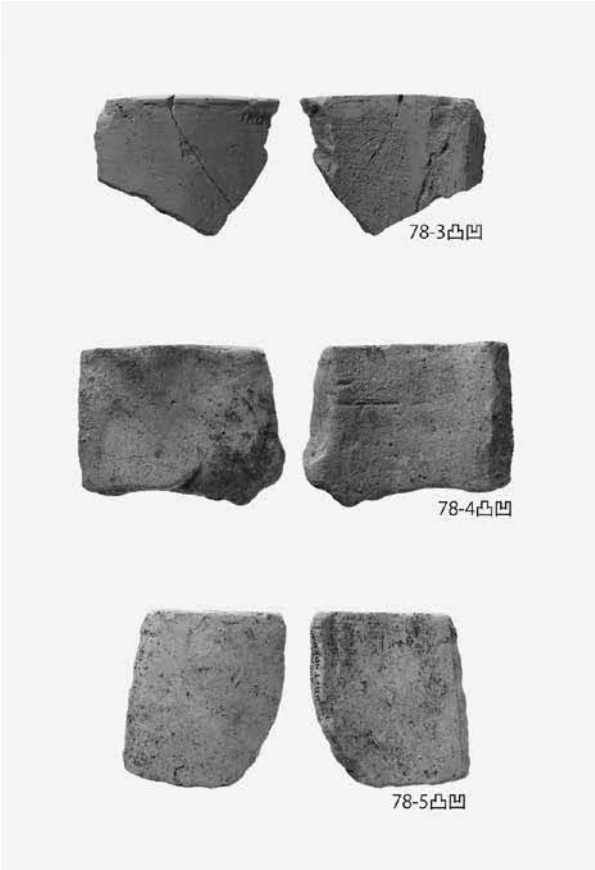

76-9凹凸
76-10凸凹

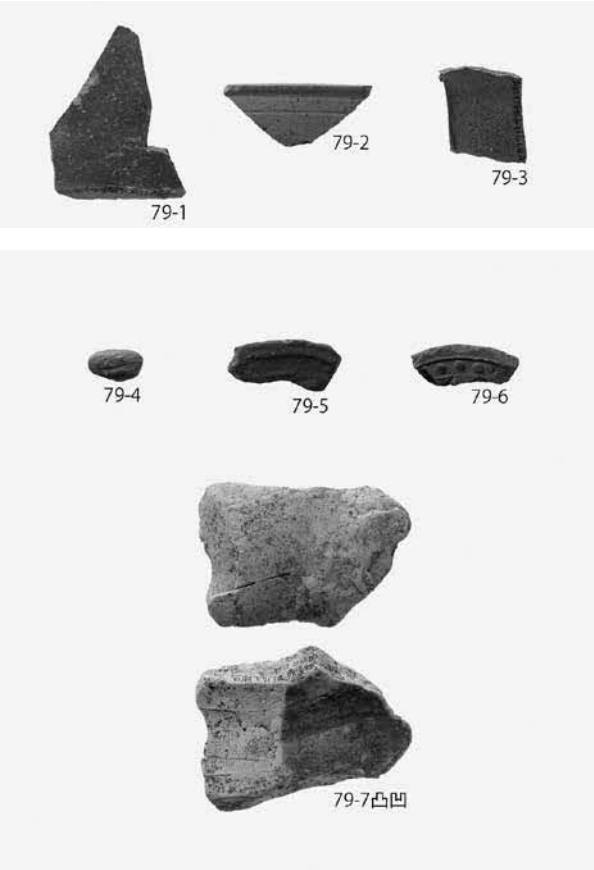
77-1
77-2
77-3
77-4

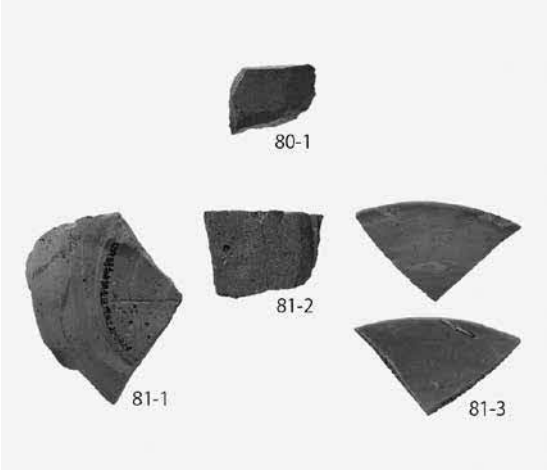

77-5
77-6
77-7凸凹
77-8凹凸

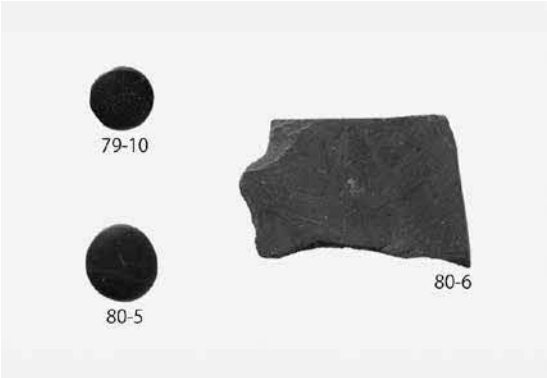

77-9凹凸
78-1凹凸
78-2凹凸

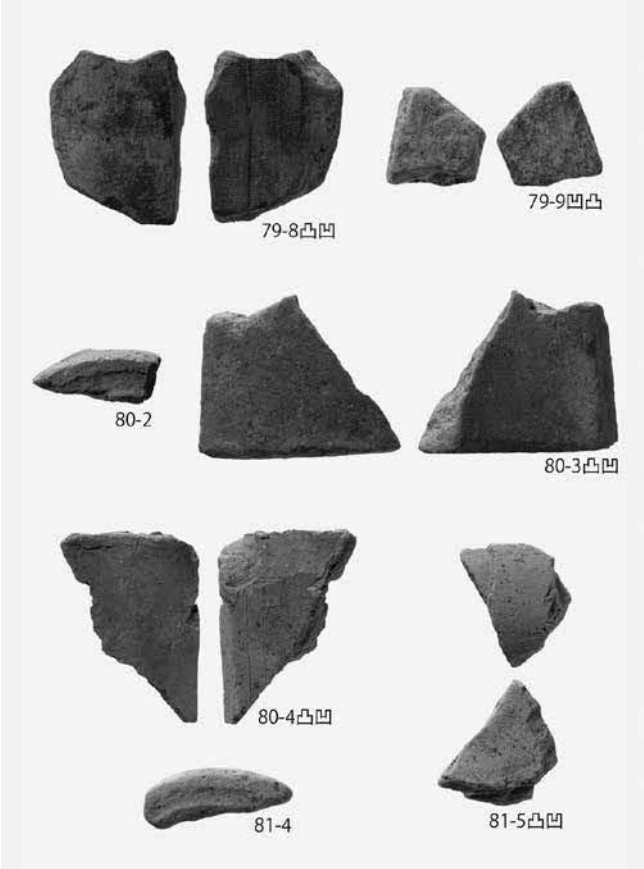
図版 52

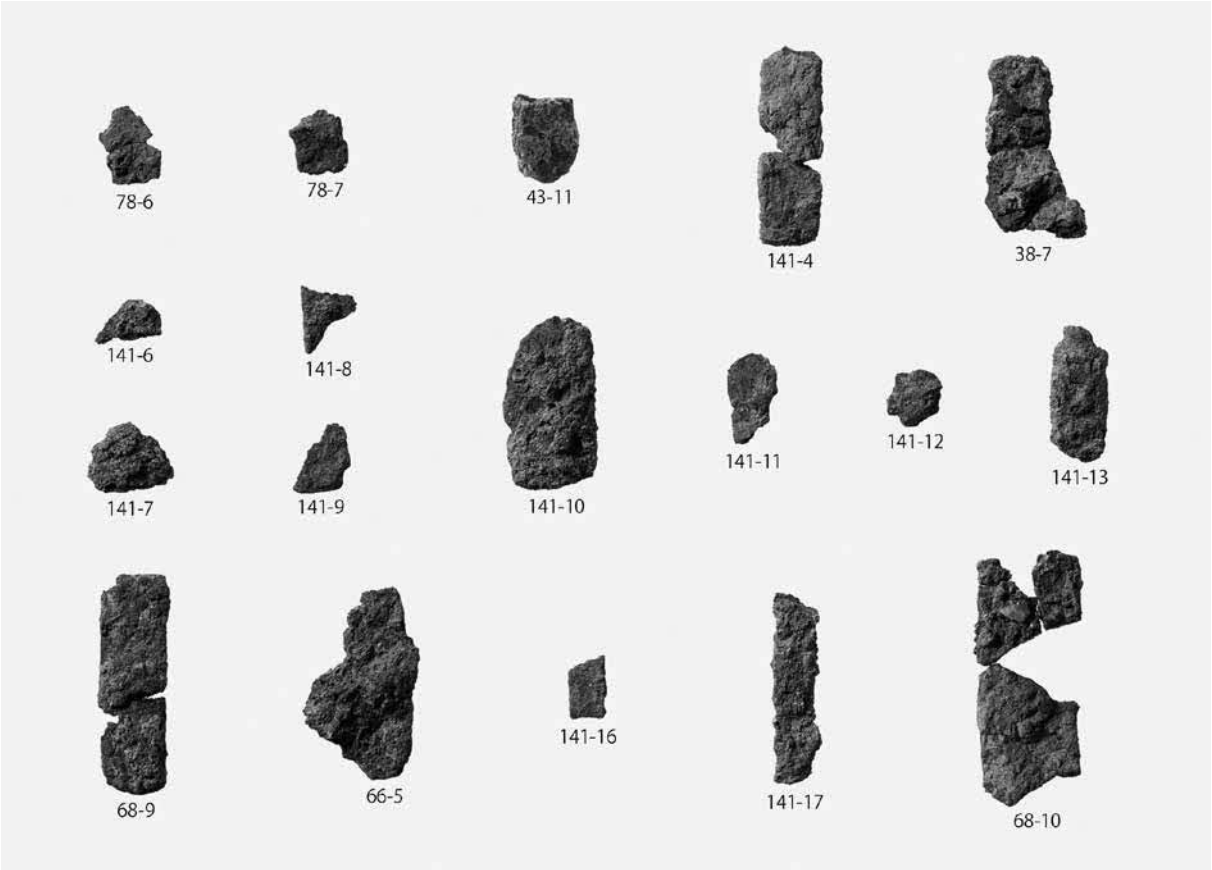

78-3凸凹
78-4凸凹
78-5凸凹

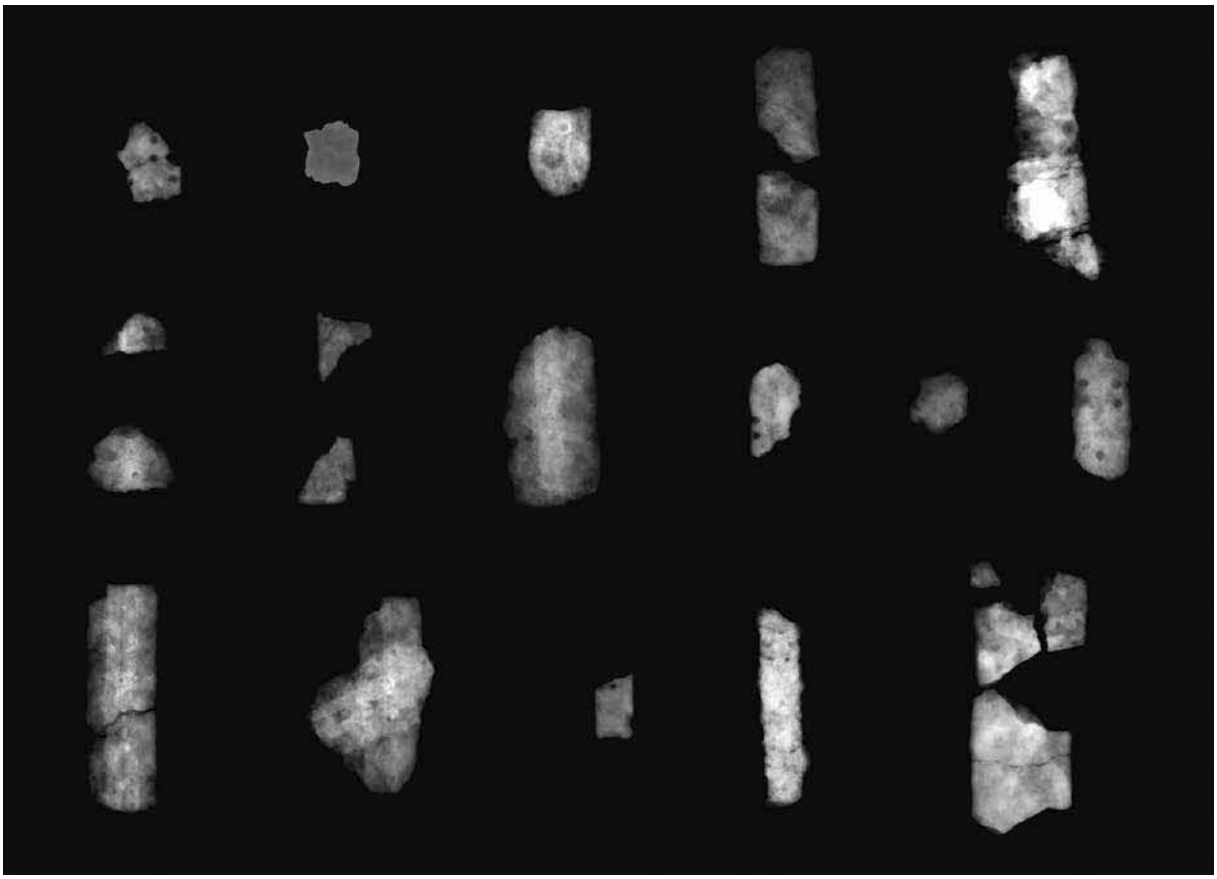

79-1
79-2
79-3
79-4
79-5
79-6
79-7凸凹


80-1
81-1
81-2
81-3


79-10
80-5
80-6


79-8凸凹
79-9凹凸
80-2
80-3凸凹
80-4凸凹
81-4
81-5凸凹


78-6
78-7
43-11
141-4
38-7
141-6
141-8
141-7
141-9
141-10
141-11
141-12
141-13
68-9
66-5
141-16
141-17
68-10



報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきいずもこくふあと
書　　名	史跡出雲国府跡 11
シリーズ名	風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書
シリーズ番号	27
編著者名	吉松優希・渡辺正巳・上山晶子・奥中亮太・高須晃
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター https://www.pref.shimane.jp/maizobunkazai
所　在　地	〒690-0131　島根県松江市打出町 33 番地　TEL 0852-36-8608　FAX0852-36-8025 E-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp　https:/www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
発行年月日	2023（令和５）年３月 24 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
出雲国府跡（いずもこくふあと）	島根県松江市大草町（しまねけんまつえしおおくさちょう）	32201	D285	35°25′35″	133°06′25″	20180704～20181227	375㎡	重要遺跡内容確認
						20190610～20191217	400㎡	
						20200727～20201218	450㎡	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出雲国府跡	官衙	古墳時代 奈良時代 平安時代	掘立柱建物、礎石建物、溝、土坑、石敷遺構	須恵器、土師器、瓦	政庁域で東脇殿、前殿などの大型建物を検出

要　　約	島根県松江市大草町他に所在する史跡出雲国府跡の発掘調査。本書は 2018 ～ 2020（平成 30 ～令和２）年度にかけて実施した発掘調査成果を報告したものである。政庁域を調査し、政殿南東に東脇殿と考えられる南北長舎の建物を２棟検出した。これらの建物は掘立柱建物から礎石建物へと建て替えられている。また、政庁南側では前殿と考えられる掘立柱建物を検出したほか、前殿の上層では石敷遺構を確認した。政庁域の建物配置や遺構の変遷などを検討するうえで重要な資料を得ることができた。

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 27

史跡出雲国府跡

— 11 —

発　行　　2023（令和５）年３月
発行者　　島根県教育委員会
編　集　　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒 690-0131　島根県松江市打出町 33 番地
電話 0852-36-8608
印　刷　　有限会社　古浦印刷
島根県松江市中原町 91